ISSN 1881−445X

日本語用論学会

■

第8回
大会発表論文集

創刊号

Proceedings of the 8th
Conference of the Pragmatics Society
of Japan

2005年12月10日(土)

■

於 京都大学

PSJ

The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
2005

日本語用論学会
(The Pragmatics Society of Japan)
略称：PSJ

日本語用論学会役員

会長：	澤田治美
副会長：	山梨正明
事務局長：	林　宅男
事務局補佐：	山本英一
会計：	山本英一
編集委員長：	山梨正明
編集副委員長：	林　礼子、東森　勲
編集委員：	金水　敏、小泉　保、児玉徳美、久保　進、澤田治美、
：	杉本孝司、高原　脩、田中廣明、西光義弘、西山佑司
大会運営委員長：	西光義弘
大会運営副委員長(企画)：	杉本孝司
大会運営副委員長(実行)：	田中廣明
企画担当委員：	内田聖二、西山佑司、山口治彦
実行担当委員：	彭国　躍、山口治彦
事業委員長：	高原　脩
事業副委員長：	林　礼子
事業委員：	余　維
広報委員長：	久保　進
広報副委員長：	金水　敏
広報委員：	田代直也

(2006年 4月1日現在)

学会連絡先

日本語用論学会　事務局 (The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198
大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202
E-mail：psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp

学会ホームページ：http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/index.html
郵便振替口座　00900-3-130378　口座名：日本語用論学会
年会費　(一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円)

ISSN 1881−445X

日本語用論学会

■

第8回
大会発表論文集

創刊号

Proceedings of the 8th
Conference of the Pragmatics Society
of Japan

2005年12月10日(土)

■

於 京都大学

The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
2005

日本語用論学会
(The Pragmatics Society of Japan)
略称：PSJ

日本語用論学会役員

会長	：	澤田治美
副会長	：	山梨正明
事務局長	：	林　宅男
事務局補佐	：	山本英一
会計	：	山本英一
編集委員長	：	山梨正明
編集副委員長	：	林　礼子、東森　勲
編集委員	：	金水　敏、小泉　保、児玉徳美、久保　進、澤田治美、
	：	杉本孝司、高原　脩、田中廣明、西光義弘、西山佑司
大会運営委員長	：	西光義弘
大会運営副委員長(企画)	：	杉本孝司
大会運営副委員長(実行)	：	田中廣明
企画担当委員	：	内田聖二、西山佑司、山口治彦
実行担当委員	：	彭国　躍、山口治彦
事業委員長	：	高原　脩
事業副委員長	：	林　礼子
事業委員	：	余　維
広報委員長	：	久保　進
広報副委員長	：	金水　敏
広報委員	：	田代直也

(2006年 4月1日現在)

学会連絡先

日本語用論学会　事務局 (The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198
大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202
E-mail：psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp

学会ホームページ：http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/index.html
郵便振替口座　00900-3-130378　口座名：日本語用論学会
年会費　(一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円)

目 次

研究発表

■ 対話における「文頭の『は(wa)』」の機能について …… 有田 節子 1

■ 絵画の特徴を述べる共感覚表現とその効果 …… 岩橋 一樹 9

■ 接尾辞ポイのモダリティ化 …… 尾谷 昌則 17

■ Sarcasmと「隠された」話者の態度について …… 唐住 結子 25

■ oppositeの意味論と語用論 — *do the opposite*を中心に …… 黒川 尚彦 33

■ ニュージーランド英語の談話標識*eh*と
日本語助詞「ネ」「ヨ」「ヨネ」の多義構造について …… 斎藤 里香 41

■ 意味論的・語用論的観点から見た
日本語の他動詞構文のヴァリエーションについて —非行為者性を中心に— …… 澤田 淳 49

■ *It*-Cleft構文 —型と文脈— …… 篠原 弘樹 57

■ 「ろくな/大した…ない」表現と非対称性」 …… 高見 健一 65

■ 省略の復元プロセス …… 永井 典子 73

■ 日本語とドイツ語における誉めへの返答ストラテジー
—その傾向とドイツ人日本語学習者の中間言語の分析— …… 中村香代子 81

■ 形態論と語用論==指小辞(diminutives)の場合== …… 西川 盛雄 89

■ 助数詞の選択と対象の捉え方について …… 濱野 寛子 97

■ 「認知語用論と心の理論の接点—命題態度理解の発達研究」 …… 松井 智子 105

■ 「のに」 —メタ心理的用法の観点から— …… 松尾 貴哲 113

■ A Corpus-Based Analysis of "*Go and* VERB"
and "*Go to* VERB" Constructions …… 松本 知子 121

■ 「だって」の意味論 …… 山田 大介 129

■ 逆接表現の拡張用法とその語用論的効果に関する構文文法的考察
—ケドの終助詞的用法を例に— …… 横森 大輔 137

■ ポライトネスに関わるプロソディの役割 …… 吉成 祐子 145

■ 名詞の概念的役割解釈における類型化の試み …… 李在鎬・黒田航・井佐原均 153

ワークショップ

■ 感情的モダリティ(Emotive Modality)を表す文副詞Surelyの意味機能をめぐって
—語用論的アプローチ— …… 岡本　芳和　161

■ 基礎化粧品広告におけるメタファーの特徴と解釈 …… 笠貫　葉子　165

■ 英語における法助動詞と助動詞HAVEの「作用域の反転」現象について …… 片岡　宏仁　169

■ なぜ観客は納得するのか —映画の誤解修復方法— …… 木津久美子　173

■ 所有動詞のhaveおよび獲得動詞の定性効果と既存性 …… 小深田祐子　177

■ 依頼の談話に見られる中国語の感謝表現：日本語との対照 …… 谷口　龍子　181

■ 英語法助動詞の否定と話し手の捉え方 —need notとmay notを中心として— …… 長友俊一郎　185

■ 同時通訳における訳出の妥当性の基準：定名詞句を手がかりに …… 南津　佳広　189

■ 「学生を元気にさせる大学」はなぜ変に響くか? …… 森　貞　193

■ 英語の前置詞の意味拡張の背後にある推論のパターン
—文法化、認知語用論的アプローチに基づく分析— …… 山口　和之　197

■ 断りの慣用的表現「せっかくですが」に関する考察 …… 山嵜　章裕　201

■ 対話における日本語名詞句の連鎖パターンについての認知的考察 …… 吉田　悦子　205

付録

■ 入会案内 …… 209

■ 日本語用論学会規約 …… 211

■ 『大会研究発表論文集』(Proceedings)執筆規定 …… 214

対話における「文頭の『は（wa）』」の機能について[i]

有田節子
(arita.setsuko@osaka-shoin.ac.jp)
大阪樟蔭女子大学

１　問題の現象

３年ほど前からだと思われるが、テレビのトーク番組、街角インタビューあるいは日常生活の場面で次のような現象に遭遇することが多くなった。

(1) 紳助：　ポジションどこ？
　野球少年：は–、ショートですね。

これは、『キスだけじゃいや』というよみうりテレビの視聴者参加番組で、司会の島田紳助と素人の野球少年との対話に現れた例だが、野球少年の発話の頭に現れる「は（wa）–」[ii]が、問題の現象である。

「は–」を提題助詞「は」と捉えると、提題句から名詞句部分だけが省略されて残った部分というふうに分析できる。

(1)' 野球少年：　［ポジション］は–、ショートですね。
　　省略

この場合、「ポジション」は、対話相手によって導入されているので、「旧情報」と見なすことができ、それゆえ省略されると一応分析できるが、以下のように提題句全体を省略せず、なぜ「は」だけを残すのかという点が問題として残る。

(1)" 野球少年：ショートですね。

(1)と(1)"の違いは何か。感覚的には、(1)と比べると(1)"はやや「そっけない印象」を受ける。他の例も見てみよう。

(2)　Ａ：この服のＬサイズはありますか？
　　Ｂ：は–、ないですね。

文頭に「は」が残る現象は、このような接客場面で見られるが、次のように提題句そのものを省略すると、やはり、そっけない印象を受ける。

(2)'　Ａ：この服のＬサイズはありますか？
　　Ｂ：ないですね。

言うまでもないことだが、提題句の省略がただちにそっけなさにつながるわけではない。

(3) サザエでございまーす。

(4)　A：ここは、結構おいしいよね。
　　B：安いし。
　　A：駅からも近いし。

(3)は、「わたしは」という提題句が省略されているとみなすことができるが、特にそっけなさは感じられない。(4)のBやAの二番目の発話は、「ここは」という提題句が省略されたまま続けられているが、やはり、そっけない印象は受けない。(1)",(2)'と(3),(4)の違いは何か。

この研究は、発話の文頭[iii]に現れる「は-」が対話において果たす機能を明らかにする試みである。[iv]

2　文頭の「は-」の三類型

対話において文頭に現れる「は-」は、その出現環境によって三つに分類できる。ひとつめは、目線や指さし等と共に用いられる次のようなものである。

(5)　A：このペンわたしのやろ。（別のペンをさして）は(-)？
(6)　A：（先生が言ったことについて）今のどういう意味？
　　B：（ノートの一部分を指して）ここは次の授業で言うけど、（別の部分を指して）は(-)、自分で調べてかくんやって。
(7)　A：誰か好きな子いてるん？
　　B：いてないですね。（Aに視線をやって）は(-)？は(-)？は(-)？

これらの例の「は」は、長めに伸ばすというより、むしろ、プロミネンスが置かれており、必ずしも長くなくてよいので、(-)という記号で示している。プロミネンスは言うまでもなく対話相手に伝えたい情報を担う部分におかれるので、冒頭の例とはちがって、「は」を削除してしまうと対話が成り立たない。このような例を「タイプ１」と呼ぶことにする。

ふたつめにあげられるのは、以下のように対話者がコンテクストを作り上げていくような協調型ともいうべき対話に現れる「は-」である。

(8)　A：ウチの大学、表向きはよさそうに見えるけど、そろそろ危ないねん。留学生の質もさがってるし・・・
　　B：は-、どこの大学にもあるけどね。

(8)のBの発話の冒頭の「は-」は、「そういうことは」のように補うことができ、Aの発話内容全体を承けていると見なすことができ、「それは」と言い換えることが可能である。

(8)' B：それは、どこの大学にもあるけどね。

また、「は-」を削除することもできるが、そっけない印象は受けない。

(8)" B：どこの大学にもあるけどね。

協調型対話に現れるこのような文頭の「は-」を「タイプ２」と呼ぶことにする。

三つめにあげられるのが、対話相手からの質問等の働きかけに対する応答の冒頭に現れる

ものである。先の協調型と区別して、働きかけ型対話と呼ぶことにする。

(9)　Ａ：お酒売り場はないの？
　　Ｂ：は–、なくなったんですよ。
(10)　Ａ：申し込み用紙はもらった？
　　Ｂ：は–、まだです。

このタイプの「は–」は、削除するとややそっけない印象を与える。働きかけ型対話の応答の文頭に現れる「は–」を「タイプ３」と呼ぶことにする。

三つのタイプの「は(-)」を見たが、このうち、タイプ１は、あとの二つとは違って、「は–」を省略できないこと、必ずしも伸ばさないこと、さらに、目線や指さしのような非言語的要素が深く関わっていることという特徴があり、現段階では別扱いにしなければならない。タイプ２の「は–」は削除してもそっけない印象を与えないなど、提題句全体の省略との違いが見えにくい。本稿では、提題句全体の省略との違いが比較的はっきり出てきそうなタイプ３の「は–」を特にとりあげて、その対話における機能を分析することにする。

3　分析

この節では、タイプ３の「は–」を三つの観点から分析する。3.1 では、「は–」の提題助詞としての機能を明らかにするために、何を主題として取り上げているのかという観点から分析する。3.2 では、質問–応答という働きかけ型対話の特性を明らかにするために、どのような応答に現れるかという観点から分析する。さらに 3.3 では、「は–」の応答詞としての働きについて考察する。

3.1　何を承けているのか

冒頭でも述べたように、文頭の「は–」は提題助詞「は」とみなすことができるが、その場合、この「は–」は何を承けているのだろうか。

まず、以下の例は、対話相手の発話に現れる提題句を承けているとみなすことができる。

(11)　Ａ：<u>ご飯は</u>どうですか？
　　Ｂ：は、いいです。
(12)　Ａ：<u>こしあんは</u>売り切れ？
　　Ｂ：はー、今日は売り切れましたね。
(13)　Ａ：<u>子供は</u>好きですか？
　　Ｂ：は、好きですね。

(11)〜(13)は、対話相手の発話の「名詞句＋は」を承けて、「名詞句」の部分を省略しているとみなされるが、「は」による提題句に限らない。

(14)　Ａ：<u>あの店って</u>どーなん？
　　Ｂ：は–、微妙。
(15)　Ａ：朝から<u>菓子パンって</u>食べれる？
　　Ｂ：は–、ちょっと辛いなー
(16)　Ａ：<u>ボケの方の名前って</u>なんやっけ？
　　Ｂ：は–、カウスやでー。

(17) A：ちっちゃいプロレスラーみたいな人って、なんやっけ？
　　B：は–、たぶん長州小力ちゃう？
(18) A：テスト勉強した？
　　B：は–、全然してないー、ヤバイわー
(19) A：料理、家で手伝ってるの？
　　B：は–、手伝いますよ。
(20) A：高校のとき、部活何に入ってたん？
　　B：は–、サッカー部でしたね。

(14)ー(17)のように、対話相手の「名詞句＋って」を承けているようにみなされる例もあれば、(18)ー(20)のように、いわゆるゼロ形式による提題句を承けているようにみなされる例もある。
　次にあげられるのが、対話相手の発話内容の一部を取り上げているように見なされるものである。

(21) A：○○さんから連絡はないですかね。
　　B：は–、連絡ないですね。
(22) A：あの店に、いつか行くことあるん？
　　B：は–、私はないですね。
(23) A：何年ぐらい書道をしてるんですか？
　　B：は–、10年以上ですね。

(21)、(22)、(23)は、表層的には、それぞれ、対話相手の発話の「○○さんから」「あの店に」「書道を」を承けて、「（○○さんから）は」「（あの店）は」「（書道）は」のように名詞句部分を省略したものとみなすことはできる。しかしながら、厳密には、(22)で取り上げられているのは、「あの店に行くこと」があるかどうかであり、(23)は「書道歴」がどれくらいかである。そのように考えると、単に発話内容の一部の名詞句を承けているとも言い難い。
　このような例と連続的に捉えられるのが次のようなものである。

(24) A：これどうしたらいいか知ってる？
　　B：は–、知らんなあ。
(25) A：明日の飲み会どうするん？
　　B：は–、まだ考えてない。
(26) A：このレシートは、お客さんに渡すんかな？
　　B：は–、どうやろ。わからんな。
(27) A：その服どこで買った？
　　B：は–、言えんな。
(28) A：食パン半斤で売ってもらえます？
　　B：は–、無理なんですよ。

(24)の「は–」は、「（これをどうしたらいいか）は」のように質問の前提部分を補うことができる。Bの「は–」をのぞいた部分は焦点である。(25)から(27)は、質問という情報提供の依頼に対し、それに応じられないという応答の冒頭に「は–」が現れている。補うとすれば、「（明日の飲み会をどうするか）は」「（レシートをお客さんに渡すかどうか）は」「（服をどこで買

ったか）は」ということになる。さらに、(28)は、質問形式をとった相手からの依頼に対する断りの冒頭に現れており、「(食パンを半斤で売るの）は」のように補うことができる。

(11)〜(28)まで、さまざまな要素を承ける文頭の「は–」を見てきた。補足しておくと、後半の(25)〜(28)の「は–」が、「それは」に置き換えることができるのに対し、(11)〜(24)の「は–」は置き換えられない。「それは」に置き換えが可能な例は、否定的な応答の例ばかりだが、それは単なる偶然ではない。

3.2　質問　－　応答

ここでは、質問文の種類によって、文頭の「は–」の現れ方に違いがあるかどうかを確認しておきたい。収集した例の中には、いわゆる真偽疑問文の応答にも疑問語疑問文の応答にも文頭に「は–」が現れている。

真偽疑問文による質問の応答には、肯定の応答と否定の応答があり、そのどちらの文頭にも「は–」が現れる。

(29)　A：料理はするんですか？
　　B：は–、しますよ
(30)　A：タバコは吸うん？
　　B：は–、吸えへんよー

しかしながら、否定の応答と肯定の応答がほぼ4対1の割合で、否定の応答の文頭に現れる傾向がある。

また、これも傾向にすぎないが、肯定の応答に現れる場合も、以下のような、控えめな肯定や質問者の予測に反する肯定の応答が目立つ。

(31)　A：お酒は飲める方？
　　B：は–、人並み程度かな。
(32)　A：駐車料金は大丈夫なん？
　　B：は–、大丈夫。

疑問語疑問文に対する応答の冒頭にも、以下のような不確実さを示すような言語形式とともに現れる。

(33)　A：得意科目何なん？
　　B：は–、国語ですかね。

さらに、真偽疑問文による質問の応答においても、疑問語疑問文による質問の応答においても、文末に「〜ですね」のような丁寧表現を伴う傾向がある。

以上の観察から明らかなように、文頭に現れる「は–」は、決して、仲間内で用いられるようなぞんざいな表現ではなく、むしろ、紋切り型の応答や否定的な応答によって相手の気持ちを傷つけないよう、対話相手に配慮していることを明示する言語形式として捉えることができる。

3.3　応答詞としての「は」の機能

先に、肯定の応答の冒頭にも否定の応答の冒頭にも「は–」が出現すると述べたが、応答詞

とは共起しない。

(34) A：料理はするんですか？
　　B：*はい、は–、しますよ
(35) A：タバコは吸うん？
　　B：*いや、は–、吸えへんよー。
(36) A：料理はするんですか？
　　B：??は–、はい、しますよ
(37) A：タバコは吸うん？
　　B：??は–、いや、吸えへんよー

このことから、本稿は、文頭の「は–」が「はい」「いいえ」と同様、一種の応答詞としての機能を果たしているという仮説を提示する。

それでは、応答詞としてどのような機能を果たしているのだろうか。その手がかりになるのが、すでに何度となく指摘してきた「そっけなさの解消」という働きである。真偽疑問文の形をとる質問に対する否定の応答の場合、応答詞を省いて述語部分を繰り返して応答すると、ややそっけない印象を与える。

(38) 甲：この近くに食堂ありますか。
　　乙１：いいえ、ありません。
　　乙２：ありませんね。

上記乙２の冒頭に「は–」を挿入することにより、そっけなさが解消されるように思われる。

(38)' 乙３：は–、ありませんね。

一方、肯定の応答の場合は、応答詞を省いて述語部分を繰り返して応答してもそっけない印象は与えない。

(39) 甲：この階に男性用トイレありますか。
　　乙１：はい、ありますよ。
　　乙２：ありますよ。
　　乙３：は–、ありますよ。

「は–」によって解消されるべきそっけなさがないので、肯定の応答の冒頭に「は–」が現れることは否定の応答よりも少なく、たとえ現れた場合でも、「そっけなさの解消」のような対話相手への配慮は感じられない。

この点を理解するのに助けになるのが、定延・田窪(1995)、定延(2005)、田窪(2005)等における感動詞の分析である。田窪(2005)では感動詞を「入出力制御系」と「いいよどみ系」に分けており、前者に応答詞が、後者には「ええと」のような間投詞が該当すると述べられている。「入出力制御系」は、「基本的に対話相手が言った内容を自分がどのように処理したかを示すもの」と見なされている。一方、「いいよどみ系」は、「検索、演算、編集などに関する作業バッファの管理に関する心的モニター」として捉えられている。

いいよどみ系の一つ「ええと」は、「話し手の心内において検索処理の最中である」ことを

示すものとして分析されている。たしかに、乙３の「は–」のかわりに「ええと」を用いた場合、検索処理中であることが明示される。「は–」には、「検索中」のような心内作業が伴っているとは見なしがたく、入出力制御系の一つとして、単に応答しているということを表明しているにすぎないと言える。肯定でも否定でもない単なる応答のための応答詞を文頭におくことにより、即答を一瞬回避しているように考えられる。

否定の応答の冒頭に現れた場合にそっけなさを解消するような効果があるように感じられるのは、肯定よりも否定の応答をすることの方に躊躇を感じることが多いからだと考えられる。

疑問語疑問文に対する応答も同様で、適切な回答を与えられないような応答の場合、その冒頭の「は–」は、「そっけなさの解消」の効果がある。

(40) 甲：　何が見えますか。
　　乙１：　わかんないですね。
　　乙２：　は–、わかんないですね。

ただ、効果があるといっても、たとえば「さー」、「そうですねえ」、「んー」のような表現の方が、話し手の心内作業の過程を対話者に伝えることができ、そっけなさの解消のためには、こちらの方が有効であるのは言うまでもない。上述したように、「は–」は、即答することを瞬間的に回避しているにすぎず、対話相手への配慮はきわめて希薄である。

4 おわりに　–焦点提示機能との関連–

文頭の「は–」が応答していることを表明する「応答詞」としての機能を果たすということを主張してきた。それでは、なぜ「は–」なのだろうか。興味深い現象を指摘しておく。

疑問語疑問文のうち、疑問語が句や節の一部を成す場合は、その句・節全体を繰り返すことによって応答するのが普通で、焦点に対する定表現を与えるだけでは不自然（益岡・田窪 1992）である。だが、次の乙３のように文頭に「は–」を挿入するとその不自然さが緩和される。

(41) 甲：誰の本がなくなったんですか。
　　乙１：　田中さんの本ですね。
　　乙２：　?田中さんですね。
　　乙３：　は–、田中さんですね。

乙３においては、甲の質問に対する過不足ない情報（「田中さんです」）が提供されている。これは、次のようなハ分裂文の「焦点提示機能（砂川 2005）」と深く関わると考えられる。

(42) 本がなくなったのは田中さんです。

砂川(2005)は、「焦点提示機能」を「前提命題に欠けている情報を提示する機能で、前提命題に欠けている情報『X』は何かという問いに対して『X』は『Y』であると同定することによって、その問いに答えを与える」（砂川 2005:242）と説明している。このような談話機能を持つ「は」が、対話相手が言った内容を自分がどのように処理したかを示す入出力制御系の感動詞、すなわち応答詞の機能を担うに至ったと考えられる。

主な参照文献
林　誠（2005）「『文』内におけるインターアクション−日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって−」　串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』ひつじ書房　1-26
岩崎勝一・大野剛（1999）「『文』再考−会話における『文』の特徴と日本語教育への提案」『言語学と日本語教育−実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版　129-144 頁
丸山直子（1996）「話しことばにおける文」『日本語学』15 巻　明治書院　50-59 頁
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法　−改訂版−』くろしお出版
定延利之（2005）『ささやく恋人、りきむリポーター　−口の中の文化−』岩波書店
定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構−心的操作標識「ええと」と「あの（—）」『言語研究』108 号　日本言語学会　74-93 頁
砂川有里子（2005）『文法と談話の接点−日本語の談話における主題展開機能の研究』　くろしお出版
田窪行則（2005）「感動詞の言語学的位置づけ」『月刊言語』Vol. 34 No.1　大修館書店　14-21 頁

---

[i]本発表は、京都大学２１世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」研究班「言語と論理における普遍性と個別性」主催のワークショップ Phylogeny and Ontogeny of Written Language（京都大学文学部）において口頭発表した内容に一部修正を加えたものである。

[ii] ここで「は」ではなく「は−」と表記しているのは、「は」が文頭に現れる場合には、やや伸ばす傾向があるからである。もちろん、名詞句のあとに現れる提題助詞の「は」も「わたしは-」のように伸ばすこともあるが、常に伸ばすわけではない。「は」の長さも対話における機能と関係が深いと考えられる。この点は、口頭発表の際、会場からのコメントにおいて、「え−」や「ま−」等との共通性が指摘された。

[iii] 対話における「文」の認定はきわめて難しい問題であることは承知している。詳細は、岩崎・大野(1999)、丸山(1999)、林(2005)などを参照していただきたいが、本稿では、あとで見るように、質問応答型対話を主にとりあげているので、あまり認定上の問題はない。

[iv] ここで分析の対象とするのは、大阪樟蔭女子大学国文学科学生の協力を得て、テレビ番組および日常生活の会話の中から集めた 100 例程度の実例で、量的には十分なものではない。

[v] 定延(2005)に詳しい分析がある。

絵画の特徴を述べる共感覚表現とその効果*

岩橋一樹
（大阪大学大学院）

１．　はじめに

絵画の特徴を述べる際には表１のように、他の視覚経験の特徴を述べる場合と比べて多様な共感覚表現が使われる。

	cold	soft	velvety	harsh	sweet	loud	muted
figure	#	#	#	OK	OK	#	#
sight	#	#	#	OK	OK	#	#
portrait	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK

表１　視覚経験の種類と共感覚表現

本論文では、このような「形容詞＋名詞」という形の共感覚表現により何が伝達され、それによりどのような表現上の効果が生じるのかを明らかにする。

２．　先行研究

2.1　一方向性仮説

共感覚表現については、これまで、Ullmann(1951)の通時的分析や、Williams(1976)の通言語的分析、日本語を対象とした山梨(1982, 1988)などにより、原初的な感覚を本来表す語が高次の感覚に対して転用されるということが指摘されてきた。そのため、普通は(1)のような共感覚表現が使われ、(2)のような共感覚表現は不自然な表現であると見なされる。

(1) 暖かな色、甘い色調、？かぐわしい色調　(山梨 1988: 58)
(2) *高鳴る色、*響く色　(ibid.: 59)

一方、Shen(1997)は、共感覚表現について、特別な器官を用いないで直接知覚することが可能な感覚からそうでない感覚に対して転用が起きると指摘している。

(3) a. sweet silence　(ibid.: 52)
　b.?lighted coldness（明るい冷たさ）　(ibid.: 53)

そして、これらの研究により共感覚表現においては、触覚から味覚、味覚から嗅覚、嗅覚から視覚、視覚から聴覚へと転用が行われるという一方向性仮説が提案された。

しかし、実際には、文脈によっては例外となる表現も許容される。例えば、ワインや料理の味を詳しく述べる文脈では、話者や書き手の経験を聞き手や読者と共有するという目的で一方向性仮説に反する表現も許容される(Lehrer 1975, 森 1995)。

(4) a. perfumed　(Lehrer 1975: 916)

b. 鮮やかな味、淡い味 (森 1995: 253)
c. 騒々しくない味 (ibid.: 260)

さらに、瀬戸(2003)が指摘しているように、実際のコンテクストでは一方向性仮説に従わない共感覚表現が多数用いられる。

(5) a. うるさい絵、うるさい色、騒々しい色、やかましい柄、静かな色 (ibid.: 71)
b. 静かな香り、静かな吟醸香、にぎやかな香り (ibid.)
c. うるさい味、静かな味、にぎやかな味 (ibid.)

そのため、実際のコンテクストにおける共感覚表現の使用は一方向性仮説よりもコンテクストの影響を強く受けることがわかる。しかし、これらの表現が使われることで具体的に何が伝達されるのかは明らかでない。そのことは絵画の特徴を述べる表１の共感覚表現にも当てはまる。

2.2 意味変化のメカニズム

Taylor(1989)によると、共感覚表現はある感覚領域から別の感覚領域へのメタファー的写像により成立し、メトニミーによって異なる領域間で属性が結び付けられるかどうかは疑わしい。例えば、loud color という表現では聴覚の領域から視覚の領域への写像が行われる。

一方、小森(1993, 2000)によると、刺激を出している対象の属性や、その対象が属する空間の情報を刺激の表現に転移させるというメトニミー的な認識により共感覚表現が成立する。そのため、冷たいところでできるカビの臭いが冷たいと表現されたり、フライパンの上で何かが焼ける音が hot sound と表現されたりする。

このような意味変化のメカニズムの観点から絵画の特徴を述べる共感覚表現を見てみると、共感覚表現により伝達される鑑賞者としての書き手の印象に、他の感覚との類似性や近接性が見られない場合があることが説明できない。例えば、warm から描写が活き活きしていることが伝達されるということが説明できない。そのため、個々の作品に関する情報は意味変化のこれらの一般的メカニズムでは捉えられない。一方、関連性理論ではそれぞれのコンテクストに応じて言語表現の意味が解釈されるので、個々の作品に関する情報を扱うことができる。また、関連性理論において発話には推意(implicature)と呼ばれる言外の意味があると考えられ、絵画を鑑賞した書き手の様々な印象は推意として扱うことができる。そこで本論文では絵画の特徴を述べる共感覚表現を関連性理論の観点から分析し、個々の作品に対する書き手の様々な印象が読み手に推意として解釈される余地が生じると主張する。

3. 理論的前提：関連性理論

関連性理論において発話解釈は以下の手順に沿って行われる。

(6) a. Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses(disambiguations, reference resolutions, enrichments, implicatures, etc.) in order of accessibility.
b. Stop when your expectations of relevance are satisfied. (Wilson 2002: 4)

すなわち、発話解釈に必要な処理労力がより少なくなるような解釈の仕方で、単語の意味を１つ

に絞ったり、指示対象を決めたり、省略された要素を補ったりして表意が解釈される。また、発話解釈に必要な処理労力が少なくなるような解釈の仕方で推意も解釈される。このようにして聞き手に関連性のある解釈が行われる。また、この手順に沿って、発話の明示的内容である表意(explicature), コンテクスト、発話の非明示的内容である推意(implicature)は互いに調整される(Sperber and Wilson 1998, Carston 2002a, 2002b, Vega Moreno 2004)。なお、発話の推意は聞き手が演繹的推論を行うことで解釈されるので(Sperber and Wilson 1986/1995: Ch.2)、聞き手は、発話で述べられている事柄や、百科事典的想定のような聞き手がすでに持っている想定を前提(premise)として用いることで推論を行い、推論の結果として生じる結論をある発話の推意として解釈する。また、このような結論は文脈含意と呼ばれ、世界のあり方に関する表示を修正する。そして、このような結論が生じることで聞き手に認知効果がもたらされる。また、ある発話の解釈からより大きな認知効果がもたらされると、その発話は関連性の度合いが大きなものとなる。

さらに、ある推意が得られるようにするために、聞き手は(7)のように表意の内容も調整する。

(7) Getting married and settling down will kill her.　She is a *butterfly.*
(Vega-Moreno 2004: 305)

She is a butterfly という発話を解釈するには、聞き手は、彼女は蝶(BUTTERFLY*)であるという表意と、蝶は美しくて繊細であるという蝶についての百科事典的想定を推論の際に前提として用いる。それにより、彼女は美しくて繊細であるという推意が解釈される。また、聞き手は、彼女は蝶であるという表意からこの推意を得られるようにするために、表意において BUTTERFLY* を、昆虫であるという特性を欠き、美しくて繊細な物全般を指すものとして解釈する。[1]

さらに、メタファー表現のような字義通りでない表現、すなわちルーストークを解釈することで、字義通りの表現を解釈した場合には得られない表現上の効果が得られる。

(8) a. This room is a pigsty.
b. This room is filthy and untidy.　(Sperber and Wilson 1986/1995: 236)

(8a)では、部屋が並外れて汚いことや部屋が並外れて散らかっているということが伝達される。これらの事柄は(8b)のような字義通りの表現からは伝達されない。このように字義通りでない表現によってより多くの事柄が聞き手に推意として伝達される。

さらに、このメタファー表現を解釈する際には、豚小屋についてのステレオタイプ的な知識を読み手が用いることで、これらの事柄が強い推意として解釈される。このような解釈は、解釈の仕方が人によって異なることはなく、(9)と比べて聞き手や読み手にゆだねられる側面が小さい。

この他、より多岐に渡る知識を用いて、字義通りでない表現から聞き手や読み手が様々な弱い推意を解釈することもある。

(9) His ink is pale.　(Leconte de Lisle の詩に対する Flaubert のコメント)　(ibid.: 237)

この比喩表現の解釈では、字をしっかり書いていないのであれば文体もしっかりしていないという知識が用いられる。それにより、Leconte de Lisle の詩にはどこか弱いところがあるということや、彼の作品は忘れられていくだろうといった弱い推意が解釈される可能性が生じる。また、Leconte de Lisle に詳しい人であればより詳しく的確に弱い推意を解釈する可能性が生じる。こ

のように、(9)では、聞き手の責任で様々な弱い推意が解釈されることで表現上の効果が得られる。

4. 分析

絵画の特徴を共感覚表現によって述べることで視覚表現と比べて多様な事柄が読み手に伝達される。例えば、色の使い方に対する評価が読み手に解釈される余地が生じる。まず、そのことについて見ることにする。

(10) a. It is a chromatically *muted painting* – very different from the erotic, visual banquets of Titian's other poesie.
(http://www.guardian.co.uk/arts/critic/feature/0,1169,931792,00.html)
b. It is a *pale painting* – very different from the erotic, visual banquets of Titian's other poesie.

(10a)の muted painting を共感覚表現として解釈するには読み手は以下の表意や百科事典的想定を前提として用いて推論し、そこから得られる結論をこの表現から得られる推意として解釈する。

その絵は色が静かな(MUTED*)絵である(表意・前提)
静かであれば本来よりも抑えられている（百科事典的想定・前提）
―――――――――――――――――――――――――――――
その絵は色が本来よりも抑えられている絵である（結論・推意①）

その絵は色が本来よりも抑えられている絵である（推意①・前提）
色が本来よりも抑えられれば色が地味である（百科事典的想定・前提）
―――――――――――――――――――――――――――――
その絵は色が地味な絵である（結論・推意②）

また、読み手は、これらの推意が解釈されるように表意を調整し、MUTED*を、音に関する特性を欠き、色が本来よりも抑えられていて地味であることを指すものとして解釈する。このようにして絵画の色が本来よりも抑えられていて地味であるという、絵を見た書き手の印象が読み手に推意として解釈されることで、絵画の特徴についてより多くのことを理解できる。それにより読み手に認知効果がもたらされることが表現上の効果となる。またここでは、副詞 chromatically が使われていることから色の評価について解釈することで読み手に必要な処理労力が少なくなる。さらに painting という色の重要性が大きい絵が評価されているので、色の性質についての詳細な情報は、絵についての読み手が知りたい新しくて重要な情報となるので読み手に関連性がある。よって(10a)で、muted をこのように解釈することで文脈含意が生じ、読み手に認知効果がもたらされる。また、形容詞は物に備わっている様々な特性の一部を述べるので、絵画の様々な特性の中で特に色について述べることができる。形容詞のこのような働きと、共感覚表現の、絵の色とそれに付随する印象を述べるという働きが相俟って、読み手は絵画の具体的な特徴を理解することができるという効果が生じる。一方(10b)の視覚表現 pale painting ではその絵は色が薄い絵であるという表意を、推論を行う際に前提として用いる。また、色が薄ければ色が地味であるという百科事典的想定も前提として用いて推論し、その絵は色が地味であるということを推意として解釈する。しかし、色が地味であれば本来よりも抑えられているという想定にはアクセスしにくいので、その絵は色が本来よりも抑えられているという結論を引き出しにくくなる。このように、(10b)では、書き手が絵を見て抱いた印象についてあまり多くのことを理解できない。このような

違いが出るのは、(10b)の視覚表現から絵の色が薄くて地味であるという、見てわかる事柄が解釈され、それに伴い読み手の得る認知効果が少なくなるためである。一方、(10a)の共感覚表現では、muted がコード化する音が静かであることにしかない性質、つまり音が抑えられているという性質が想起され、絵を鑑賞した書き手の印象と色が結び付けられて捉えられることで、色が本来より抑えられているという、視覚表現で本来捉えられない事柄を読み手が理解できるからである。[2]

次に、読み手が絵の色を見て、絵の色を念頭に置いたうえで色に関する事柄が理解される共感覚表現を見ることにする。

(11) a. A lovely, *warm picture* in tones of yellow ochre's and warm browns.
(http://smartgifts.co.uk/product_info.php/cPath/22_30/products_id/62?osCsid=caaaa0cb2b3b08f9367oe5510ea84cc)
b. A lovely, *bright picture* in tones of yellow ochre's and warm browns.

この例では、読み手が以下のように表意や百科事典的想定を前提として用いて推論することで得られる結論を推意として解釈することで、warm picture が色に関する情報を伝達する共感覚表現として理解される。

その絵はきれいで暖かい(WARM*)絵である（表意・前提）
暖かければ色が明るくて落ち着いている（百科事典的想定・前提）
―――――――――――――――――――――――――――――
その絵はきれいで色が明るくて落ち着いている絵である（結論・推意）

また、読み手はこの推意が得られるように表意を調整することで、WARM*を、温度に関する特性を欠き、色にも当てはまるような明るくて落ち着いた性質を指すものとして解釈する。このようにして、絵画の視覚的特徴だけでなく、絵の色が落ち着いているという絵を見た書き手の印象も推意として解釈されることが表現上の効果につながる。また、ここでは、全体的に暖かい色を用いていて色の重要性が大きい絵が評価されているので、色の性質に関するこのような詳しい情報は読み手がこの表現を解釈する際に少ない労力で処理でき、読み手に関連性のあるものとなる。そのうえ、このような解釈を行うことで絵について読み手が知りたい新しくて重要な情報が文脈含意としてもたらされるため、このような解釈を通して読み手に認知効果がもたらされる。さらに、ここでも、形容詞が事物に備わっている様々な特性の一部を述べるという性質を持っているため、絵画の様々な特性のうち、特に色について述べることができる。そのような形容詞の性質と、絵の色とそれを見た書き手の印象の両方を述べるという共感覚表現の働きとが相俟って絵画の具体的な特徴が解釈されるという効果が生じる。一方(11b)の視覚表現 bright picture では、読み手は絵の色が明るいことを理解する。しかし、明るいと気分が落ち着くという想定にアクセスしにくいため、絵が気分を落ち着かせるという結論、つまり推意を引き出しにくくなる。[3]

これまで見たように絵画の特徴について共感覚表現を用いた場合、読み手は絵を見た書き手の印象を理解しやすくなり、(12)のように、題材の性質のような視覚表現で捉えられない書き手の印象がより大きく関わる事柄が解釈される余地が生じることもある。

(12) ...this *warm 'Portrait* of Sinatra' is typical of his lively character. Sinatra's face is affectionately reproduced through skillful brushwork and the myriad of colours used in his jackets clearly indicate Delaney's long training as a textile designer and his

interest in the use of colour. (http://www.art-house.co.uk/body_arthur_delaney.html)

この例において warm portrait を共感覚表現として解釈するには、以下の表意と百科事典的想定を前提として用いて推論し、読み手はそこから得られる結論を推意として解釈する。

この温かい(WARM*)シナトラの肖像画は彼の陽気な性格をよく表している（表意・前提）
温かいと人間の生命が感じられる（百科事典的想定・前提）

この人間の生命が感じられるシナトラの肖像画は彼の陽気な性格をよく表している（結論・推意①）

この人間の生命が感じられるシナトラの肖像画は彼の陽気な性格をよく表している（推意①・前提）
人間の生命が感じられる肖像画は題材から人間の生命が感じられる（百科事典的想定・前提）

この題材から人間の生命が感じられるシナトラの肖像画は彼の陽気な性格をよく表している（結論・推意②）

この題材から人間の生命が感じられるシナトラの肖像画は彼の陽気な性格をよく表している（推意②・前提）
題材から人間の生命が感じられると描写が活き活きしている（百科事典的想定・前提）

この描写が活き活きしているシナトラの肖像画は彼の陽気な性格をよく表している（結論・推意③）

また、読み手は、これらの推意が得られるように表意を調整し、WARM*を温度に関する特性を欠き、人間の生命が感じられることや、描写が活き活きしているという絵の特徴を指すものとして理解する。このようにして推意が解釈されることが(12)を解釈することで得られる表現上の効果につながる。また、ここでは人という題材の性質が重視される肖像画が評価されているので、warm を人という題材の性質に関する表現として解釈することで読み手はこの表現を少ない処理労力で解釈することができる。さらに、このような解釈により絵についての読み手が知りたい新しくて重要な情報が文脈含意としてもたらされるので、このような解釈は読み手により多くの認知効果をもたらし、読み手に関連性のあるものとなる。さらに、ここでも形容詞が、事物に備わっている様々な特性の一部を述べるという性質を持っているため、絵画の様々な特徴のうち特に題材について述べることができる。それに加えて、共感覚表現には上に挙げたように題材の性質を具体的に思い起こさせる働きがある。形容詞を用いた共感覚表現にこのような働きがあるため、ここでも絵画の具体的な特徴が読み手に理解されるという効果が生じる。

さらに、絵画の特徴に対して共感覚表現を用いた場合には、絵画を見た書き手の印象を読み手が理解しやすくなるので、絵で描かれている状況に対する書き手の印象という、視覚表現で捉えられない事柄も共感覚表現により伝達される。そのことを示す例が(13)である。

(13) A *harsh picture* shows a car vs. nature, tearing a road into a desert, but the use of a green shade gives the picture aesthetic qualities.
(http://historyproject.ucdavis.edu/imageapp.php?Major=AD&Minor=N&SlideNum=7.00)

この例において harsh picture を共感覚表現として解釈するには、読み手は以下のような表意や百科事典的想定を前提として用いて推論し、そこから得られる結論を推意として解釈する。

粗い(HARSH*)絵が車と自然の対立を示している（表意・前提）
粗いと手が加えられていない（百科事典的想定・前提）
手が加えられていない絵が車と自然の対立を示している（結論・推意①）

手が加えられていない絵が車と自然の対立を示している（推意①・前提）
手が加えられていなければ絵に描かれている状況が荒々しい（百科事典的想定・前提）
絵に描かれている状況が荒々しい絵が車と自然の対立を示している（結論・推意②）

また、読み手は、これらの推意が得られるように表意を調整し、HARSH*を、手触りに関する特性を欠き、絵に手が加えられていないことや、絵に描かれている状況が荒々しいことを指すものとして解釈する。このようにして推意が解釈されることが harsh picture を解釈することで得られる表現上の効果につながる。また、(13)で言及されている絵は状況を描いているので、harsh を絵で描かれている状況に関する表現として解釈すると、この表現を読み手は少ない処理労力で解釈できる。また、この作品にとってはこのような状況の性質が重要であるため、この状況についての詳しい情報は読み手に関連性がある。従って、このような解釈により絵についての読み手が知りたい重要で新しい情報が文脈含意としてもたらされ、読み手に認知効果がもたらされる。ここでも形容詞が事物に備わっている様々な特性の一部を述べるという性質を持っているため、絵画の様々な特性のうち特に絵で描かれている状況が述べられる。それに加えて、共感覚表現には状況の性質を具体的に思い起こさせる働きがある。これらのことが相俟って、絵に描かれている状況が具体的に述べられるという効果が生じる。

5.　結語

本論文では、絵画の特徴を述べる共感覚表現により何が伝達されるのかを関連性理論の観点から分析した。それによると、このような表現は他の感覚を想起させることで、絵画の色遣いという視覚的特徴のみならず、絵を見た書き手のこのような特徴に対する様々な印象を読み手に伝達する。さらに、視覚表現で述べることのできない、題材の特徴や絵で描かれている状況に関する書き手の様々な印象が共感覚表現によって読み手に伝達される。そのため、共感覚表現によって絵画の特徴を述べることで視覚を述べる表現と比べてより多くの事柄が伝達される。これらのことが表現上の効果につながる。

注

* 本論文は日本語用論学会第8回大会(2005年12月10日於京都大学)における研究発表を加筆修正したものである。構想の段階から河上誓作先生、大庭幸男先生、岡田禎之先生、鄭聖汝先生、町田章氏、黒川尚彦氏、南佑亮氏、篠原弘樹氏、大森万紗子氏、平川公子氏には様々ご指導いただいた。発表会場において、堀素子先生には貴重なご意見を頂戴した。記して感謝の意を表したい。なお、本論文における誤りおよび問題点等は全て筆者に帰されるものである。

[1] 実際には彼女(she)が誰を指すのかについても(6)に挙げた手順に沿って解釈されるが、そのことについては本論文の対象外なので説明を割愛する。

[2] ここに挙げた推論プロセスに沿って muted painting や pale painting を解釈するとどちらの表現からも絵の色が書き手の印象に残りにくいことが弱い推意として解釈されるが、そのことについては説明を割愛する。

[3] ここに挙げた推論プロセスに沿って warm picture や bright picture を解釈するとどちらの表

現からも書き手、すなわち鑑賞者が明るい気分になったということが読み手に弱い推意として解釈されるがそのことについては説明を割愛する。

参考文献

Carston, R. 2002a. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell.

Carston, R. 2002b. "Metaphor, Ad Hoc Concepts and Word Meaning—More Questions than Answers." *UCL Working Papers in Linguistics* 14, 83-105.

小森　道彦. 1993.「共感覚表現のなかの換喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』(第 29 号) 49-65.

小森　道彦. 2000. 「共感覚表現にみられるメトニミー的基盤について」『英語語法文法研究』(第 7 号) 123-134.

Lehrer, A. 1975. "Talking about Wine." *Language* 51, 901-923.

森　貞. 1995.「共感覚的比喩に関する一考察」『福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学』(第 29 号) 251-267.

瀬戸　賢一. 2003.「五感で味わう」 瀬戸　賢一(編)『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』62-76. 東京：海鳴社.

Shen, Y. 1997. "Cognitive Constraints on Poetic Figures." *Cognitive Linguistics* 8, 33-71.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

Sperber, D. and D. Wilson. 1998. "The Mapping between the Mental and the Public Lexicon." In P. Carruthers and J. Boucher eds. *Language and Thought,* 184-200. Cambridge: Cambridge University Press.

Taylor, J. R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory,* Oxford: Clarendon Press.

Ullmann, S. 1951. *The Principles of Semantics.* Oxford: Basil Blackwell.

Vega-Moreno, R. E. 2004. "Metaphor Interpretation and Emergence." *UCL Working Papers in Linguistics* 16, 297-322.

Williams, J. M. 1976. "Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change." *Language* 52, 461-478.

Wilson, D. 2002. "Relevance Theory: From the Basics to the Cutting Edge." Text for ICU Open Lectures on Cognitive Pragmatics.

山梨　正明. 1982. 「比喩の理解」佐伯　胖(編)『推論と理解』199-213. 東京：東京大学出版会.

山梨　正明. 1988. 『比喩と理解』東京：東京大学出版会.

接尾辞ポイのモダリティ化

尾谷昌則
東北学院大学

1. はじめに

本発表では、形容詞を作る接尾辞ポイが近年モダリティを表す助動詞としての用法を確立したことを指摘し、そのような文法化が起こった背景として、属性認知からカテゴリー認知へと向かう推論活動の語用論的強化があったと主張する。

2. ポイの助動詞用法

広辞苑には、ポイに関して「[接尾] 体言、動詞の連用形に付いて形容詞を作る。…の傾きがある。…しやすい。「男っ―」「忘れっ―」など、上の語が促音化する。」と記述されている。つまり(1)のような名詞に接続する用法と、(2)のような動詞の連用形に接続する用法の2種類が認められている。

(1) 彼はとても子供っぽい。　[名詞＋ポイ]
(2) 彼は｛怒りっぽい／忘れっぽい／飽きっぽい｝。　[連用形＋ポイ]

しかし近年これらとは異なる用法が目立つようになってきた。次の(3)はインターネット上のある掲示板から採取したものであるが、単なる接尾辞というよりは推量の助動詞といった趣がある。[1,2]

(3) a. うん、まー確かに学校の授業で習うぽいことだし……
b. アップデートできてないっぽいです。
c. MIDIがちゃんと通信できてなかったぽい。
d. レスが少なくてすべったっぽいよね。

これらが広辞苑に記載されている接尾辞用法と異なると断ずるにはそれなりの理由がある。まず統語的な観点から見ると、(1)や(2)のような接尾辞用法では、ポイは名詞や動詞の連用形に接続するが、(3)のポイは動詞の終止形に接続していることが分かる。

さらに重要なのは介在要素の存在である。接尾辞用法は動詞の連用形に直結しているが、助動詞用法は動詞に必ずしも直結していない。(3b～d)を見れば分かるように、動詞の語幹とポイの間にはアスペクト要素（テイル形）、テンス要素（タ形）、否定のナイなどが介在している。日本語の動詞句に見られる文法カテゴリーの階層を考えれば、(3)に見られるポイはモダリティ要素の位置にあるということになる。[3] モダリティ要素は、さらに対事的モダリティと対人的モダリティに分類されるが、ポイは他の推量表現（ラシイ、ミタイダ）と共起できないことから（(4)参照）、推量表現と同じ対事的モダリティに属することになる。

(4) a. *横浜にはないっぽい｛らしい／みたいだ｝。
b. *LIVEはできないっぽい｛らしい／みたいだ｝。
c. *う～ん、バグってるっぽい｛らしい／みたいだ｝。
d. *うん、まー確かに学校の授業で習うぽい｛らしい／みたいな｝ことだし……

また、動詞の連用形に接続する接尾辞用法は「～と断言できる」という表現と共起できる（(5)参照）が、問題のポイは共起できない（(6)参照）。

(5) 太郎は｛怒りっぽい／忘れっぽい／飽きっぽい｝と断言できる。
(6) a. *横浜にはないっぽいと断言できる。
b. *LIVEはできないっぽいと断言できる。
c. *う～ん、バグってるっぽいと断言できるね。
d. *うん、まー確かに学校の授業で習うぽいことだと断言できるし、

接尾辞用法は「すぐに～する傾向がある」「～しやすい性質である」という意味であり、描写対象の性質や特徴を表しているという点において意味的にも形容詞と認められるが((7)参照)、問題のポイは「～だろう」「～らしい」「～ようだ」といった推量の意味になっている((8)参照)。

(7) a. 彼は怒りっぽい。 ≒ すぐに怒ってしまう。
b. 彼は忘れっぽい。 ≒ すぐに忘れてしまう。
c. 彼は飽きっぽい。 ≒ すぐに飽きてしまう。
(8) a. 信号送受信が出来てないっぽい。≒ 出来てない {らしい／ようだ／みたいだ}。
b. レスが少なくてすべったっぽい。≒ すべった {らしい／ようだ／みたいだ}。

以上のような事実から、(3)のポイは接尾辞用法とは違い、推量の助動詞としての用法を確立していると考えられる。[4] 次節では、なぜ接尾辞としてのポイが助動詞へと拡張したのかについて論じる。

3. モダリティ表現への拡張

3.1. ポイの拡張：意味的側面から

ポイが接尾辞から助動詞へと変化した背景には、ポイの意味が当然関与している。そこで、まずポイの意味について見ておく必要がある。例えば(9)の「水っぽい」や「子供っぽい」は、一見すると「水に似ている」や「子供に似ている」とパラフレーズできそうなので、ポイの意味が「似ている」や「共通点がある」といったものではないかと考えたくなるが、それでは(10)のポイを説明できない。

(9) a. このジュースは水っぽい。 ≒ 水に似ている。
b. 彼の言動は子供っぽい。 ≒ 子供に似ている。
(10) a. この畳は湿っぽい。 ≠ ??湿っているのに似ている。
b. この部屋は埃っぽい。 ≠ *?埃に似ている

上記の例はどれも形容詞として語彙化・慣習化された表現ではあるが、(10)には問題がある。そもそも(10a)の「湿」は体言とは言い難いし、(10b)は「この部屋は埃に似ている」とパラフレーズできない。これを踏まえて尾谷(2000)では、接尾辞用法の「Xポイ」には<物理的な含有量>と<属性の含有量>の二つの意味があるとした。

ポイの意味①：「Xが基準値以上に多く含まれている」という<物理的な含有量>
ポイの意味②：「Xの持つ属性が多く含まれている」という<属性の含有量>

例えば(9a)は、氷が溶けたことでジュース中の水分の含有量が標準値以上に増えたことを意味する。(10a, b)も大気中に標準値以上の埃や湿気（水蒸気）が含有されていることを意味する。一方(9b)は、子供が含有されているわけではなく、例えば「稚拙である」や「後先を考えない」というような<子供の持つ特徴>が当該人物の言動の中に多く含まれていることを示している。[5]

このような意味がポイの根底にあると考えれば、ポイが推量のモダリティ標識へと変化したことも自然に説明できる。「ある対象Yが、Xの持つ属性を多く含んでいる」（<属性の含有量>）というのであれば、そこから誘導推論として導き出されるのは、「ある対象YがXの属性を多く持っているというのであれば、YはXカテゴリーの成員である可能性が高い」という含意であろう。例えば(11a)はコートの色について断言しているが、(11b)は「白色の特徴が基準値以上に多く含まれている」と述べるに止まっており、白色だとは断言していない。しかし「白っぽいコート」と言われれば、少なくとも「白色カテゴリーに属する可能性が最も高い」と推論するのは人間の自然な認知活動である。

(11) a. 白いコート
b. 白っぽいコート

そのような含意と伴に繰り返し使用されたことで、ポイが可能性の高さを表す推量の意味を持つようになったと考えられる。つまり、推論によって得られる含意が慣習化するという語用論的強化によっ

て接尾辞のポイが推量化（つまり助動詞化）したと考えられる。ただし、語用論的に強化された含意には2種類あると考えられる。1つは「「Xポイ」というのであれば、それはXカテゴリーに属する可能性が高い」という＜推量＞の推論であり、もう1つは「「Xポイ」というのであれば、それは「Xデアル」という断言を避けている」という＜非断定＞の推論である。この両者は、全く異なる性質のものというよりは、むしろ表裏一体を成すものと考えられる。というのも、そもそも＜推量＞というものは必然的に＜非断定＞になるからである。結局のところ、推量と非断定の違いは積極的／消極的な判断ということになるであろうが、どちらもポイの根底にあると考えられる。

推論の結果としての含意でしかなかったものが、その語の意味として定着した例は英語にも見られる。例えば知覚動詞の"look"や"appear"は、視覚情報を表すものであったが、取り込んだ外界情報に基づいて推論を行うという人間の認知活動により、いつしか視覚情報を越えた内容を補部にとり、「～そうだ／ようだ」といった推論の意味が強くなった。（例文(12a)(13a,c)は深田(2001)より）

(12) a. She looks pretty.
　　 b. She looks smart.
　　 c. It looks like Warner Brother's gamble is paying off.
(13) a. The ghost appeared to him again.
　　 b. She appears smart.
　　 c. It appears unlikely that the UN would consider making such a move.

(12a)は視覚情報に基づく"look"の表現であるが、(12b)では主に視覚情報に基づいた推論が行われている。さらに(12c)でも推論が行われているが、ここまでくるとその推論が視覚情報に基づいているとは言い難くなる。(13a)は視覚の中に現れたという意味であるが、(13b)では(12b)と同じく視覚情報に基づいた推論の意味で使用されており、(13c)になると必ずしも視覚情報に基づいているとは限らない推論の場合に使用されている。ここで挙げた例に限らず、"smell"や"sound"のような五感に深く根ざした知覚動詞は、話者の判断を含む認識的な用法へと拡張することが多いようである（Taniguchi 1997、深田 2001 参照）。これはポイの意味拡張にとっても示唆的な事実である。勿論、ポイは知覚動詞ではないのだが、語彙化されたといっても過言ではないポイの接尾辞用法には、五感に基づく認識を反映していると考えられる表現が多い。例えば「埃っぽい」「水っぽい」「白っぽい」「黒っぽい」「色っぽい」「熱っぽい」「いがらっぽい」「湿っぽい」などがそれである。ゆえにポイが英語の知覚動詞と同じく話者の判断を表す認識的な表現へと意味が拡張していったのも至極妥当であると考えられる。

3.2.　ポイの拡張：形式的側面から

前節では、主に意味の面からポイの拡張を見たが、本節では形式の面から見ることにする。ポイは、接尾辞用法では名詞や動詞の連用形に接続するが、新しく確立されつつある助動詞用法では、動詞の終止形や名詞に接続する。この両者に共通するのは、名詞の後にはどちらのポイも出現可能だという事実であるが、この[名詞＋ポイ]という形式が拡張の際の橋渡し的な存在であったと考えられる。

そこでまず接尾辞用法について整理しておく。CD-ROM 版の『広辞苑』（第五版）で「ぽい」というキーワードで後方一致検索をかけると 29 項目がヒットするが、擬態語の「ぽい」「ぽいぽい」と接尾辞として「ぽい」を除くと、ポイの具体事例は 26 項目であった（下表参照）。[6]

[名詞＋ポイ]	婀娜(あだ)っぽい、いがらっぽい、えがらっぽい、色っぽい、大人っぽい、黒っぽい、子供っぽい、白っぽい、艶っぽい、熱っぽい、埃っぽい、骨っぽい、水っぽい、理屈っぽい、気障っぽい、愚痴っぽい
[連用形＋ポイ]	飽きっぽい、怒りっぽい、惚れっぽい、忘れっぽい
[イ形＋ポイ]	荒っぽい、安っぽい
[ナ形＋ポイ]	哀れっぽい、俗っぽい
[その他＋ポイ]	湿っぽい、とっぽい

表 1

名詞に接続していると考えられるのが 16 項目、動詞の連用形は 4 項目、それ以外は 6 項目であった。ただし、動詞の連用形は実質的には名詞と考えられる（例えば「ナリタブライアンは天皇賞で素晴らしい走りを見せてくれた。」の「走り」は「素晴らしい」というイ形容詞に修飾されており、ヲ格によって表示されている）ので、これも合わせると実に 8 割近くが名詞に接続していることになる。この

ことから、[名詞＋ポイ]がポイの典型的な構文スキーマと考えて差し支えないであろう。

さらにWebサイトでもポイの用例を採取した。無作為に採取したポイの用例のうち3件以上ヒットしたものがどの品詞に接続しているかを調べた結果が下の表である。[7]

Type	Number
[名詞＋ポイ]	808
[ナ形容詞＋ポイ]	35
[V 終止形＋ポイ]	53
[V 連用形＋ポイ]	17
[品詞不明＋ポイ]	37

表 2

こちらも名詞に接続している場合が808例と圧倒的に多いのは一目瞭然である。ただしこの808例の中には、語彙化された形容詞として『広辞苑』に記載されている接尾辞用法も当然見られたが、それよりも以下に挙げるような推量の助動詞として用いられている用例の方が圧倒的に多かった（具体的な用例については末尾資料参照)。

(14) a. 東芝RD-X5はAmazonが最安値っぽい。
b. ありゃ、風邪っぽい....
c. 自民単独過半数っぽいね。
d. ディメンジョンって必殺技っぽいね。

推量の助動詞用法には、名詞以外にも動詞(V)の終止形に接続する場合もあるが、こちらは意外にも53例しか見られなかった。このことから、接尾辞用法のみならず推量の助動詞用法においても[名詞＋ポイ]の方が圧倒的に多いことが分かる。

これまでの議論をまとめると、ポイの用法には大きく分けて接尾辞用法と助動詞用法の二つがあることになる。前者は形式面で[名詞＋ポイ]という共通点があるが、それに対応する意味面において＜物理的な含有量＞と＜属性の含有量＞の二つに分かれる。一方、後者の助動詞用法では、推量という意味面での共通性はあるものの、形式面では[名詞＋ポイ]と[動詞の終止形＋ポイ]の二つに分かれる。これら四者の有機的な関係をまとめたものが以下である。

	用例	形式	品詞	意味
1-a	水っぽい、油っぽい、粉っぽい	[名詞＋ぽい]	接尾辞	物理的な含有量
1-b	子供っぽい、大人っぽい	[名詞＋ぽい]	接尾辞	属性の含有量
2-1	単独過半数っぽい／必殺技っぽい	[名詞＋ぽい]	助動詞	推量
2-2	もう終わってるっぽい。	[V(終)＋ポイ]	助動詞	推量

表 3

歴史的な発達を考えれば、ポイの基本用法は助動詞用法ではなく接尾辞用法である。ゆえに接尾辞用法を上段に記した。これには＜物理的な含有量＞と＜属性の含有量＞の意味があるが、それらはどちらが先とは言えないので、それぞれ[1-a]、[1-b]としておく。接尾辞用法から転じて発生してきた助動詞用法は、その形式から二つに分けられるが、[名詞＋ポイ]の方がおそらくは先であろうから[2-1]とし、[終止形＋ポイ]を[2-2]とした。その理由は二つある。一つは、派生元である接尾辞用法の構文スキーマが[名詞＋ポイ]であるという事実である。何らかの拡張が起こる際には、意味と形式の両方が一度に拡張するということは考えにくく、必ず何かしらの橋渡し的な存在があるはずである。それが[2-1]であると考えられる（表3の網掛部分を参照)。もう一つの理由は頻度である。表2や(14)でも示したように、Web上から採取した[名詞＋ポイ]は808例あったが、その大多数が推量用法であった。しかし同じ推量用法でも[V(終)＋ポイ]の事例は53例しかなかった。これは、同じ推量用法でも[名詞＋ポイ]がかなり定着しているのに対し、まだ[V(終)＋ポイ]という形式はそれほど定着してはいないということを示している。言語知識がある一定の慣習化された知識の体系であると考えるならば、使用（出現）頻度の差は無視できない証拠となる。

4. 類推とポイの拡張

前節の表 3 で示した流れは、あくまでも一方向的な拡張のプロセスである。ある一定の方向へ「押し出す」ことについて論じたのが前節であるとするならば、本節ではある一定の方向から「引っ張る」という正反対の視点から論じることにする。つまり、ポイが何に引っ張られて拡張したのかという問題であるが、これは一般的に類推と呼ばれている現象である。この視点は、言語の拡張に関する Langacker(1999)のモデルにも欠けているものである。そこでまず Langacker の提唱している二つのモデルについて外観しておく。

一つめは、言語システムは具体的な言語使用によって支えられているという動的使用依拠モデル(Dynamic Usage-based Model)であり、以下のように簡略化される(Langacker 1999: 101)。

図 1

上の図の L は言語システム(Linguistic system)、U は実際の言語使用場面(Usage vent)を表しており、[A]と(B)はどちらも実際の言語表現に相当する言語ユニット(Linguistic unit)を表している。四角（および角括弧）は十分な使用頻度に裏付けられ、言語知識として定着(Entrenchment)の度合いが高いことを表し、円（および円括弧）は定着の度合いが低く、また正式に言語システムとして確立されていないことを表す。破線の矢印は拡張関係にあることを表す。図 1 の左側は、その場限りの言語使用場面において使用された(B)がまだ十分に確立されたユニットにはなっていないが、安定した知識である L の中にある[A]というユニットから拡張したものであると認識されたことを表している。そのような認識が何度も繰り返されると、B も A と同じカテゴリーに属するユニットとして十分に確立されるため[B]となる。それを示しているのが図 1 の右側である。要するに、新しく生まれた表現が言語システムの中に定着するには、何かしら既に確立されているユニットと同じカテゴリーの中に組み込まれる（カテゴリー化される）必要があるということであり、これは短期記憶が長期記憶へと組み込まれてゆくメカニズムとほぼ同じものである。ポイの拡張をこのモデルに当てはめるなら、[A]が接尾辞用法、(B)が助動詞用法ということになる。

二つめは、スキーマとプロトタイプに基づくカテゴリー化であるが、こちらは以下のように示されている(Langacker 1999: 102)。

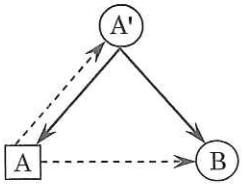


図 2

この図でも四角は十分に定着したユニットを表し、円は定着の度合いが低いことを表す。言語ユニット[A]から(B)へと伸びる破線は、(B)が[A]というプロトタイプ事例からの拡張事例であることを表している。拡張事例の(B)を[A]カテゴリーの成員として取り込んだことで、[A]のスキーマも若干拡張するため[A']ではなく(A')として表記されている。スキーマ(A')から[A]と(B)に伸びる実線の矢印は、これらがスキーマ(A')から具現化された事例であることを表している。ポイの拡張をこのモデルに当てはめるなら、[A]が接尾辞用法、(B)が助動詞用法であり、両者の共通点を抽出したスキーマ(A')に相当するのは「対象に対する話者の判断」といったものになるだろうか。

しかし、これらのモデルには一つ欠点がある。というよりは、不足しているものがあると言った方が適切かもしれない。それは類推という視点である。Langacker のモデルはどちらも拡張事例 B が典

型事例 A に端を発するものであることは記述されているが、それはあくまでも意味の拡張に関するものであり、どちらも形式は共有されているという暗黙の前提があるように思われる。ポイの事例で具体的に考えてみよう。ポイの助動詞用法には[名詞＋ポイ]と[V(終)＋ポイ]という二つの形式が存在する。このうち、[名詞＋ポイ]の方であれば接尾辞用法と同じ形式を保持しているため、拡張するのは意味だけで済む。これならば一つの形式に複数の意味が対応するという多義現象でしかないため、さほど問題にはならない。しかし推量用法のもう一方である[V(終)＋ポイ]は、名詞ではなく動詞の終止形に接続しており、そもそも形式（統語構造）が変わってしまっているのである。このような形式の組み替えを伴う拡張の場合、意味だけの問題では済まされない。名詞にしか接続しなかったポイが、何故動詞の終止形にも接続できるようになったのか。どうしてそのような形式が可能になったのかを別に論じる必要がある。ポイの意味拡張ではなく、形式拡張を論じる必要があるのである。

そこで必要になるのが類推という視点である。類推とは、既に存在している表現や用法を手本（モデル）とし、それと同じものであろうという認識によって新しい表現が生じる過程のことである。例えば最近の若者は、「ピンクい」や「みどりい」と表現することがあるが、これは既に存在する形容詞形「赤い」「白い」「青い」などからの類推である。また、「違う」の過去形として「違っていた」ではなく「違かった」を用いる若者も急増しているが、これも「楽しかった」や「嬉しかった」といったイ形容詞の活用形からの類推と考えられる。認知言語学でよく論じられるメタファーや主体化(subjectification)といった現象は、どちらかというと意味拡張に関与する要因であって、形式（統語構造）の拡張に関与する要因ではないのである。

この類推という視点を統語構造の研究にいち早く取り入れたのは、実は生成文法の側に属するKajita(1977)であった。梶田の動的文法理論(Dynamic Theory of Syntax)は、幼児が自分の構築した文法をダイナミックに組み替えながら言語を獲得する過程を、大人の言語知識に対する研究にも積極的に応用したものであり、今日の認知言語学から見ても非常に先駆的な研究であったと言える。

(15) a. The city is [$_{AP}$ [$_{A}$ far] [$_{PP}$ from the airport]].
↓
b. Those men are [$_{AP}$ [$_{A}$ far] [$_{PP}$ from [$_{A}$ innocent]]]. --- 基体(base)
↓ ↓
c. Those men are [$_{AP}$ [$_{Adv}$ far from] innocent]. --- 派生体(derivative)
↑ ↑
d. Those men are [$_{AP}$ [$_{Adv}$ hardly] innocent]. --- モデル(model)

動的文法理論では、例えば(15a,b)のような構造をしていた[far [from…]]"が、結果的に(15c)のような[far from […]]という構造になったのは、(15d)の[hardly […]]という構造をモデルとして拡張したからだと考える。ただし、モデルは何でも自由に設定できるわけではなく、同じ（命題的）意味を有するものだけに限るという制約があるとされる。

さて、それではポイの場合はどうかというと、類推の対象（つまりモデル）となったのは同じ推量の意味を持つ「ようだ」「らしい」「みたいだ」といった既に確立されている他の助動詞であったと考えられる。

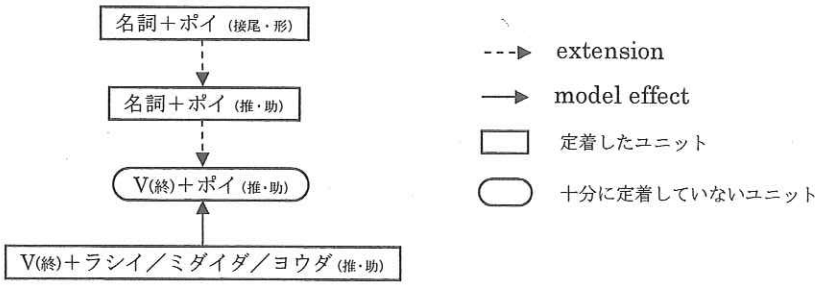


図 3

接尾辞用法の[名詞＋ポイ]は一種のイ形容詞であるため、文末で言い切りの表現としてポイがそのまま

終止形として使用できる。そのため接尾辞としてのポイが推量の意味へと転化すると同時に、名詞に接続して文の述語を形成する助動詞として再分析される。そして次の段階で、既に確立された推量表現であるラシイ／ヨウダ／ミタイダといった助動詞をモデルとし、それらが動詞の終止形にも接続することからの類推によってポイも同様に動詞の終止形に接続する用法が生み出されたと考えられる。Goldberg(1995)の構文文法では、構文のネットワークにおいて動機付けの関係と見なされるのは形式が同じものだけに限られるとされているが、少なくともネットワークに新しいノードが加わる際には、形式が異なっていても命題的な意味が等しい表現であれば、類推という認知活動に不可欠なモデルとして構文ネットワークの構築に大きな役割を果たすことは明かであろう。

5. おわりに

本論ではポイの意味拡張と形式拡張について見てきたが、ここで主張したことは次の六つに集約される。

① ポイはモダリティ標識としての助動詞用法を確立している。
② その根拠は、意味／形式の両側面において接尾辞用法とは異なるからである。
③ 意味が拡張する際に、その橋渡し的な役割を果たしたのが「ぽい」の含有量の意味であり、それが語用論的強化によって推量へと変化した。
④ [名詞＋ポイ]という形式が接尾辞用法／助動詞用法に共通するものであり、頻度も圧倒的に高いことから、これがポイのプロトタイプ形式として推量への意味拡張にも大きく貢献した。
⑤ 形式が拡張する際に類推のモデルとして大きな役割を果たしたのが、既に確立した助動詞として存在していた「ようだ」「らしい」「みたいだ」である。
⑥ Langackerが示しているモデルは、意味拡張には有効であっても、形式の拡張という事実までを捉えるに至っていない。言語知識を意味と形式の結びつき（＝構文）という側面から包括的に記述するためには、Kajitaの動的文法理論のように類推も考慮に入れる必要がある。

注

---

1 掲示板のテキストデータは http://podxt.hp.infoseek.co.jp/index.html に過去ログとして保存されている。

2 日本語文法において、助動詞という品詞を設定することには様々な問題があることは承知しているが、ここでは便宜的に利用する。

3 日本語における文法カテゴリーの語順については、一般的に＜ヴォイスーアスペクトーテンスー対事的モダリティー対人的モダリティ＞となることが知られている。詳細は南(1974)や庵(2001)を参照。

4 ポイが推量の意で用いられることは、すでに福安(1995)でも指摘されているが、推量であるという論拠が示されていない。

5 形容詞の意味をある一定の基準値を超えるかどうかというスケール認知に還元して分析することは、認知文法(Langacker1987, 1991)の考え方とも矛盾しない。

6 『広辞苑』に記載されているものだけが接尾辞用法というわけではないのであろうが、明確に語彙化されているものだけを客観的にリストアップするために、便宜的に『広辞苑』を調べた。

7 データ採取と加工は古牧久典氏に協力して頂いた。記してここに感謝の意を表したい。尚、この採取した用例のうちヒット件数が多かった用例の上位50例については末尾に資料として付しておく。

参考文献

深田　智　2001.「"Subjectification"とは何か：言語表現の意味の根源を探る」『言語科学論集』第7号、61-89.
福安勝則. 1995.『恋と愛からの言語学―言葉の重箱のすみ』東京：朝日出版社
庵　功雄. 2001.『新しい日本語学入門―ことばのしくみを考える』東京：スリーエーネットワーク.
Kajita, M. (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax". *Studies in English Linguistics* 5, 44-66.
Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.
Langacker, R. W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar.* Berlin: Mouton de Gruyter.
Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application.* Stanford:

Stanford University Press.
Langacker, R. W. 1999. Grammar and Conceptualization. Berlin: Mouton de Gruyter.
Langacker, R. W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." in Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-Based Models of Language*, 1-63, Stanford: CSLI Publications.
南 不二夫. 1974. 『現代日本語の構造』大修館, 1974.
尾谷 昌則. 2000. 「接尾辞「ぽい」に潜むカテゴリー化のメカニズム—「女っぽい人」は女ですか？」『日本言語学会第 120 回大会予稿集』168-173.
Taniguchi, K. 1997. "On the Semantics and Development of Copulative Verbs in English: A Cognitive Perspective." *English Linguistics* 14, 270-299.

参考資料

『広辞苑』（第五版）on CD-ROM
http://podxt.hp.infoseek.co.jp/index.html に収録されている掲示板の過去ログ

APPENDIX
ネット上で採取したポイの用例 Top50　（データ採取は古牧久典氏）

件数	ヒットした表現
86	名前っぽい
80	日記っぽい
25	技の名前っぽい
22	秋っぽい
21	ヲタっぽい
20	ポイっぽい仙人（固有名）
19	フレイズ検索っぽい
18	おもちゃっぽい
17	風邪っぽい
16	日記帳っぽい
16	書くっぽい
16	Copland っぽい
15	夏っぽい
14	IT 系っぽい
13	検索っぽい
12	パンクっぽい
11	春っぽい
11	Wiki っぽい
9	駄目っぽい
9	女の子っぽい
8	日本っぽい
8	数学っぽい
8	ブログっぽい
8	ダメっぽい
8	コラムっぽい
7	鬱っぽい
7	無理っぽい
7	場 log っぽい
7	女っぽい
7	犬っぽい
7	jpg っぽい
6	油っぽい
6	師走っぽい
6	休日っぽい
6	欝っぽい
6	ヨガっぽい
6	ビーマニオンラインっぽい
6	オブジェクト指向っぽい
6	エッチっぽい
6	ないっぽい
6	Python っぽい
6	Mac っぽい
6	Gmail っぽい
5	飽きっぽい
5	鉄道っぽい
5	哲学っぽい
5	中国っぽい
5	仕事っぽい
5	マリアっぽい
5	ヒガミっぽい

＊用例採取に使用したウェブサイトは無作為に抽出したものですが、一部のサイトでポイ表現が何度も繰り返して記載されている場合（例えばブログのタイトルとその記事の本文に重複している場合など）もあるため、必ずしも日常会話に出現するポイ表現の頻度を正確に反映しているとは限りません。

Sarcasm と「隠された」話者の態度について

唐住結子（関西大学・非）

1．はじめに

ヴァーバル・アイロニー(verbal irony)とは、sentence meaning と speaker meaning の間に不一致が認められるようなアイロニカルな効果を持つタイプの発話と考えることができる。Barbe(1995:89)はアイロニーについて、"[i]rony gives speakers the chance to be aggressive in a seemingly unaggressive way."と述べている。Barbe(1995), Culpeper(1996), Myers Roy(1977)では、ヴァーバル・アイロニーについて、一種の滑稽さを伝えるものから sarcasm に至るまでその範囲に幅を認めている。これにより、アイロニカルな発話が必ずしも聞き手を不快にさせるものとは限らないと考えることができる。しかし、もし発話が sarcastic なものであれば、それは意図的に聞き手に不快感を与えるために発せられたと言えるであろう。

本稿では、sarcasm をアイロニーの下位区分として位置づける。Leech(1969:172) は sarcasm を a type of everyday irony と見なし、"(s)arcasm consists in saying the opposite of what is intended: saying something nice with the intention that your hearer should understand something nasty."と説明している。Leech は後にも、Irony Principle(IP)について、以下のように述べている。

> "If you must cause offence, at least do so in a way which doesn't overtly conflict with the PP [Politeness Principle], but allows the hearer to arrive at the offensive point of your remark indirectly, by way of implicature."(1983:82)

本稿では、Leech が言うような sarcastic な「とげ」を持つアイロニーの一種を sarcasm と位置づけ、分析対象とする。Myers Roy(1977:180)も sarcasm を "a use of irony for the particular purpose of causing hurt"と見なしている。

また、アイロニーを分析した Barbe(1995)は、アイロニーの発話者の目的は、第一義的には聞き手に対しての criticism だとし、さらに副次的な目的として power, belittle, fake praise, faint praise, reprimand, complaint を挙げている。上で見たように、sarcasm がその性質上、聞き手に対して不快な思いをさせるものならば、その悪意に満ちた発話は聞き手に対しての criticism をその第一の目的としたものだと考え、本稿では Barbe の見解を sarcasm にも適用できるととらえる。その際、Grice(1978)の言うように、アイロニーは話者の態度を伝達するものであるという見解を踏まえ、発話者の目的を、発話者の態度ともとらえ、分析を行うことにする。このように、英語の様々な sarcastic な発話を検討し、発話の構造と Brown and Levinson(1987[1978])が提唱する politeness の概念も考慮に入れながら、これらの発話の目的、つまり発話者の態度について考察することを本稿の目的とする。その際、sarcasm における話者の第一義的な目的・態度を criticism と考え、副次的な態度について Barbe の見解との比較を行う。

2．非字義的な sarcasm

非字義的な sarcasm(non-literal sarcasm)は、発話を文字通りの意味で、つまり sentence meaning では受け取られないことが意図されている発話である。以下の例文は、Grice(1975)の「会話の公理」の中の「質の公理」の無視と考えることができる。（以下、各引用における下線は、引用者による。）

(1)…'Is there a good fish-and-chip shop near here? I'm starving. Haven't been able to eat a thing since I arrived.'

'There's a Chinese take away at the second traffic lights on the London Road,' said Bob Busby. 'I'm sorry that you're not enjoying the food. Still, there's always tomorrow night to look forward to.'

'What happens tomorrow night?'
'A medieval banquet!' said Busby, beaming with pride.
'I can hardly wait,' said the young man, as he left. (*Small World*)

ここでは、英国で行われている学会の食事について不満を漏らしている学会員が、下線のように、文字通りに解釈することができない sarcastic な発言をしている。この発話の推意(implicature)は "I have no interest in it at all." のようなものであり、この sarcasm が伝える話者の態度は一義的には、criticism と考えられるが、副次的に見ると聞き手である主催者側の男性への不平(complaint)または、偽りの賞賛(fake praise)と見なすことができる。聞き手にとって好都合なことは、発話の speaker meaning を受け取り、それに応えることもできるが、逃げ道としては、発話を額面どおりに受け取り、sarcastic な「とげ」の部分は敢えて無視することもできることにある。

以下の例(2),(3)にあるように、sarcastic な意味で使用される不誠実な"Thanks"の使用は、英語では珍しいものではない。

(2) "Bridge," said Shaz, looking up at me drunkenly. "God, d'you know? When I look at you from this angle, you've got a real double chin."
"Thanks," I said wryly, pouring myself another glass of wine and...
(*Bridget Jones, The Edge of Reason*)

(3) (早朝、旅行にトイレットペーパーを持って行こうとしている夫が、妻にその在処を聞くと妻は現在ストックがなくなっていると言う。)
'We're out of it.'
'*What?*
'I was going to get some today.'
Philip throws his arms into the air. 'Marvellous! Bloody marvellous!'
'You could buy some yourself.'
'At six o'clock in the morning?'
'The airport might ---'
'And the airport might not. Or I might not have time.'
'You can take what's left in the downstairs loo, if you like.'
'Thanks very much,' says Philip sarcastically.
(*Small World*)

例(2)では、容姿について有り難くないことを言われて face を威嚇された聞き手が、その威嚇行為に対して不平(complaint)を伝えている"Thanks"と言えるであろう。また(3)では、旅先に持参しようと探していたトイレットペーパーのストックがないとわかった上で不誠実に使用されている "Marvellous! Bloody marvellous!" "Thanks very much"は額面どおりに受け取ることができない例である。ここで見られる sarcastic な発話は、妻への不平(complaint)または、叱責(reprimand)の態度表明と言えるであろう。

次の例はどうであろうか。

(4) (結婚式会場に Charles は遅刻してくる。)
Fiona: There's a sort of greatness to your lateness.
Charles: Thanks. It's not achieved without real suffering.
(*Four Weddings and a Funeral*)

ここで見られる Fiona の"greatness"は、遅刻常習犯の友人 Charles に sarcastic に投げかけられており、偽りの賞賛(fake praise) または、気のない賞賛(faint praise)の意を伝えていると考えられる。この sarcasm により Fiona は直接 Charles を非難することは免れており、このことにより両者の face は一応保持されていると言うことができる。続く Charles の "Thanks"は(2)(3)と同様

に、不誠実なものである。ここに見られるような sarcastic な発話が sarcastic な発話で返される例は 4.3.にて詳しく考察する。[1)]

3. 字義的な sarcasm

ここでは、「質の公理」は遵守されている字義的な発話であるものの、コンテクストにおいて発話の理解にさらなる解釈が必要とされる字義的な sarcasm(literal sarcasm)の例を考察する。(5)-(8)は「会話の公理」の中の「様態の公理」の無視と考えることが可能である。

(5) The woman raised her head, lifted her sunglasses and looked at me with one eye closed. I heard Daniel coming up the stairs behind me.
"Honey," said the woman, in an American accent, looking over my head at him. "I thought you said she was *thin*." (*Bridget Jones's Diary*)

(6) "I mean, she doesn't smile as much as you do. That's probably why she hasn't got so many lines."
I grasped the table for support, trying to get my breath. (*Bridget Jones's Diary*)

(7) "Oh! A celebrity, eh? And"－he leaned forward in a concerned manner－"are you getting the rest of your life sorted out?"
Unfortunately at that moment Sharon happened to be passing. She stared at Cosmo, looking like Clint Eastwood when he thinks somebody is trying to double-cross him.
"What kind of question is that?" she growled.
"What?" said Cosmo, looking round at her, startled.
"'Are you getting the rest of your life sorted out?' What do you mean by that exactly?"
"Well, ah, you know...when is she going to get...you know..."
"Married? So basically....." (*Bridget Jones, The Edge of Reason*)

(8) "...Auntie Una was just saying the other day: if you'd had something a bit more bright and cheerful on at the Turkey Curry Buffet Mark Darcy might have shown a bit more interest. Nobody wants a girlfriend who wanders round looking like someone from Auschwitz, darling." (*Bridget Jones's Diary*)

(5)では、下線の"she"は語り手である Bridget を指し、この発話が生み出す推意は、"In fact, she (Bridget) is fat."といったようなものである。ここで、推意は間接的に Bridget に伝わり、発話自体も Bridget にではなく Daniel に向けられているので、聞き手の Bridget においては、二重の意味で間接的な発話である。この発話により伝達される話者の態度は、見くびり（belittling）や自己の権力(power)の見せつけといったものであろう。(6)においても、嘘をついているわけではないが、持って回った言い回しをし、"You've got many lines."といった推意により、聞き手の Bridget を見くびった(belittle)発話となっている。(7)の既婚男性より独身女性である Bridget に向けられた下線の発話からは、"Do you finally have a plan to get married?"や"When are you going to get married?"といった推意が伝達される。このような間接的な言い方により、聞き手、話し手両者の face を保持することが一応達成されると考えることができる。しかし、その一方で男性の発話が否定的な響きを持って聞き手に伝わることも事実であり、その証拠に第三者である Sharon に "What kind of question is that?" "What do you mean by that exactly?"と厳しく詰問されている。この詰問は、Bridget を見くびった(belittle)態度を示した男性に対して、その発話の真意を正面切って問い質している行為と言えるだろう。下線の発話は結局、既婚男性としての強み・権力（power）を持ち、独身の Bridget を見くびる(belittle)態度を示している。(8)は一般化表現に由来する sarcasm の例と言えるが、これらの例は英語では珍しくなく、"I love children who keep their rooms clean."(Gibbs and O'Brien 1991:525),"I love people with good manners." (Haverkate 1990:92)といった同様の例を見つけることができる。ここに見られる発話のあいまいさは reference(指示内容)をぼかすことから生じており、(8)では発話の中で娘が言及されていない

が、話者である母親が意味するところは、"Nobody wants a girlfriend like *you* who wanders round..."であることは明白である。母としての権力(power)を示しながら、娘を叱責(reprimand)している発話であろう。

次に見る(9)(10)の下線の発話は、「質の公理」や「様態の公理」の無視といった観点では、説明が困難と思われるものである。一見するとそれまでの会話の流れと関連のない発話のように思われ、「会話の公理」の一つである「関連性の公理」の無視と考えられる。Sperber and Wilson(1995)の関連性理論からの説明を試みることにする。

(9) "You really ought to hurry up and get sprogged up, you know, old girl," said Cosmo, pouring a quarter of a pint of '82 Pauillac straight down his throat. "Time's running out."
By this time I'd had a good half-pint of '82 Pauillac myself. "Is it one in three marriages that end in divorce now or one in two?" I slurred with a pointless attempt at sarcasm.
"Seriously, old girl," he said, ignoring me. "Office is full of them, single girls over thirty. Fine physical specimens. Can't get a chap." (*Bridget Jones's Diary*)

(10) (Daniel and Bridget are in the foyer of a posh hotel, discussing Bosnia. Daniel pretends to be well-informed in Bosnia's political situation.)
At this point the commissionaire, who was dressed in knicker-bockers, white socks, patent leather buckled shoes, a frock coat and powdered wig, leaned over and said, "I think you'll find the former inhabitants of Srebrenica and of Sarajevo are Bosnian Muslims, sir." Adding pointedly, "Will you be requiring a newspaper in the morning at all, sir?"
I thought Daniel was going to hit him. I found myself stroking his arm murmuring, "OK now, easy, easy,"... (*Bridget Jones's Diary*)

(9)では、既婚男性が独身の Bridget に早く結婚をすべきだと非難めいた口調で述べている場面において、Bridget がイノセントを装いながら下線の sarcastic な発話をしている。関連性理論によれば、下線の発話の推意的前提(implicated premises)は"Married men may divorce." "Cosmo is a married man."となり、これらの想定を含むコンテクストで下線の発話を処理すると、推意的結論(implicated conclusion)は、"Since the divorce rate is quite high in these days, Cosmo also has a risk of getting divorced."といったようなものになるであろう。しかし、男性は当該の Bridget の発話を無視しているので、表面上両者ともにその face は守られていると言える。Bridget が示そうとしたのは、彼女の弱点をついて face を脅かした男性に対しての叱責(reprimand)や不平(complaint)の態度であろう。(10)では、Daniel がボスニアの政情に精通しているふりをしているのを傍で聞いていたホテルの係員が Daniel に向けて下線の発話をしている。関連性理論によると、この発話の推意的前提は、"People can learn things such as political situations from the newspaper." "Daniel is ill-informed about the situation in Bosnia." となり、これらの想定のもとで下線の発話を処理すると、推意的結論"Daniel should learn more from the newspapers."が得られる。そして下線の発話と推意的前提の一つである"Daniel is ill-informed about the situation in Bosnia."という想定の間にある隔たりゆえに、sarcastic な「とげ」のある発話として成立していると言える。つまり、下線の発話は文字通り解釈したときの発話の内容も、"sir"を用いるなどしたその言い回しも polite なものであるのに対し、"Daniel is ill-informed about the situation in Bosnia."という想定は impolite であるという不一致感が生み出す sarcasm により、係員の Daniel に対する、見くびり(belittling)の態度が示されている。

4. その他の sarcastic な発話

4.1. 行き過ぎた politeness

(11)William: Really Larry, you should try and concentrate a bit more.
It's not good enough.
Larry: Well, now calm down, Willy.

William: My name's William, not Willy.
Larry: Oh, yes. I'm so sorry, my Lordship. Tell me Bill,
what can I do to make up for my appalling familiarity?
William: Get me the right figures for a start.
Larry: Yes, Mr William, sir! At once! (*Cousin William*)

(11)は、同僚同士である二人の職場でのやり取りであるが、Larry の怠慢ぶりに腹を立てた William が本人に注意をしている。普段はファーストネームで呼び合う仲であるだけに、ここに観察される呼称の変化は注意を引くであろう。叱責を受けている Larry が "Well, now calm down, Willy"と愛称を用いて positive politeness にかなった呼びかけをするが、William はそれが気に入らない様子である。そこで、Larry は今度は negative politeness を示す"my Lordship"の呼びかけに切り替えて"I'm so sorry, my Lordship"と謝罪している。しかし、この呼びかけは明らかにこのコンテクストにおいては、丁寧すぎる感がある。そしてここに見られる Larry の不誠実さは、次の"Tell me Bill, what can I do to make up for my appalling familiarity?"という発話からも明白である。なぜならここでは、自らの馴れ馴れしさを謝罪しながらも、愛称 Bill を用いて呼びかけるという、一貫性のない言動を行っているからであり、これにより sarcasm が成立している。最後に Larry は謙虚を装い、"Yes, Mr William, sir!" と呼びかけているが、この普通ではない呼びかけの"Mr William"や"Sir"が示すようにこの見え透いた不誠実さは故意的であり、それゆえ悪意あるふざけた態度を相手に示す。この例で観察できるように、過度に polite な表現は、表面的な politeness を装うがために、偽の賞賛(fake praise)の態度と同時に、見くびり(belittling)の態度をも相手に示すことになる。

4.2. 不誠実な質問

(12)"Excuse me, does the word 'queue' mean anything to you?" I said in a hoity-toity voice, turning around to look at him. (*Bridget Jones's Diary*)

上の発話は列に割り込もうとした男性に向けられたものであり、ここで明白であるのは、話者はその答えを知りながら敢えて質問を投げかけていることである。つまり queue に平気で割り込む男性にとって"queue"という単語は何の意味もなさないという回答を言わば、自分で先に持っていながら敢えて質問行為を行っている。ここでは、「質問」の発話行為に固有の誠実性条件である「話者が当該の情報を欲する」という条件を満たしていないと考えることができる。このような speaker meaning と sentence meaning の不一致が sarcastic な効果を生み出し、ここでは列を守らない聞き手に対する話者の叱責(reprimand)の態度が伝えられる。

4.3. 応酬

(13) The smug witch smirked at Mark and blatantly looked me up and down in a most impolite manner. "Have you come from another party?" she breathed.
"Actually, I'm just on my way to work," I said, at which Mark Darcy half smiled and looked away. (*Bridget Jones's Diary*)

(14) Just then Natasha appeared in the doorway. "Oh hi," she said, seeing me. "Not in your bunny girl outfit today, then," and then gave a little laugh to disguise her bitchy comment as an amusing joke.
"Actually we bunnies wear these in the winter for warmth," I said.
(*Bridget Jones's Diary*)

(13)は仮装パーティだと予告されバニーガールの格好でパーティに参加した Bridget が、実は通常のパーティに変更されていたことに気づき気まずくしている状況である。その状況下で、Natasha は Bridget に"Have you come from another party?"と不誠実な質問を投げかけている。

ここでは(12)と同様に、相手からの回答を望んでいるわけではない。このsarcasmによりNatashaのBridgetに対する見くびり(belittling)の態度が伺える。そしてBridgetはそれに対しsarcasticな「とげ」を無視しながら、"Actually, I'm just on my way to work"と明らかに嘘だとわかる不誠実でsarcasticな返答をしている。このBridgetの発話は、自分を見下した態度を伝えたNatashaへの叱責(reprimand)であり、侮辱に対する仕返し(revenge)の態度を伝えるものであると言えるであろう。

(14)は、(13)の出来事より何日か後の場面であり、Natashaが"Not in your bunny girl outfit today, then"と何気ないフレンドリーな様子でBridgetにことばをかけているが、先に(13)の一件があったためBridgetはNatashaのことばに前回同様、自分に対する見くびり(belittling)の態度を感じている。そこでBridgetは、"Actually we bunnies wear these in the winter for warmth"と明らかに嘘だとわかる不誠実な発話で応酬しているが、これはNatashaに対する仕返し(revenge)の意図を持ったsarcasticな表現であり、彼女への叱責(reprimand)の態度を表している。

ここで(13)(14)について言えることは、Bridgetの不誠実な発話が、辛らつなsarcasmとして機能していることである。それはBridgetがNatashaのsarcasticな「とげ」のある発話の「とげ」の部分には気づかない素振りで発話の文字通りの意味だけを理解したふりをしているからである。1節で見たように、sarcasticな発話は表面的には非攻撃的(unaggressive)であるので、もし辛らつな「とげ」の部分に聞き手が気づかないままであれば、それは単にフレンドリーな会話に終わってしまい、フレンドリーな発話を装いながら悪意ある態度を伝えるという話者の意図は未達成に終わってしまう。(13)(14)におけるBridgetの復讐のsarcasmはまさにこの点を利用している。つまり、NatashaのsarcasmにBridgetは発話の真髄であるspeaker meaningを平然と受け流し、文字通りの意味だけに反応し、返答を行っている。そしてその行為によりNatashaのsarcasmを不成功に終わらせ、その事実がNatashaにとってsarcasmの仕返しとして機能しているわけである。

5．まとめ

ここまで、sarcasticな発話の話者がそれによって伝える第一義的な態度はcriticismであると考えた上で、その副次的な意図について例文の分析を通して考察した。その結果、Barbe(1995)の挙げているアイロニーにおける発話者の副次的な目的（power, belittle, fake praise, faint praise, reprimand, complaint）と重なる結果となったが、本稿ではBarbeのリストに含まれないものとして他に仕返し(revenge)の例が観察された。

4.3.のsarcasmの仕返しの例でも考察したように、sarcasticにふるまうためには表面的には非攻撃的でフレンドリーなふりをしながら、同時に攻撃的で非友好的な話者の態度を伝える必要がある。つまり、非攻撃的でフレンドリーな装いはまさに「装い」であり、演技であり、本意でないことを聞き手に悟らせなければならない。上で見た(13)(14)では、このような演技がかった、言わば、見せかけと本意の二重性を逆手にとり、本意の部分に気づかない素振りで、フレンドリーな見せかけの側面に対してのみに返答していた。言わば、会話参与者の双方がともに演技をして、フレンドリーな会話を行っているふりをしていると言える。彼らのうわべの友好的な見せかけの下には、悪意ある態度が存在しているが、このようにsarcasmの本質は、上部、下部の二重構造から成るコミュニケーションだと考えることができる。つまり、一般にsarcasticな発話の場において、聞き手はある発話をsarcasticな発話だと理解し、その二重構造に気づいていたとしても、非攻撃的でフレンドリーな上部レベル、または攻撃的でアンフレンドリーな下部レベルのどちらも応答の対象としては選択可能となる。Politenessの観点から言えば、非攻撃的でフレンドリーな上部レベルが選択された場合、会話参与者である双方は互いのfaceを守ることが可能となる。そしてこの理由により、sarcasticな発話はその攻撃的な本質にもかかわらず、face-saving機能を備えていると言うことができるであろう。

このような観点で、最後に再度(11)の例を振り返る。Sarcasmにおける二重構造の上部レベルで行き過ぎた過度のpolitenessが実現されているが、これがあまりに過度であるために、聞き手は、話者がpoliteなふりを装っているというその演技性に気づかされる。そして、聞き手がこの演技を見せかけにすぎないと理解すれば、その下部レベルにある話者の本意はimpoliteであると

いうことも見抜くであろう。この場合、皮肉にも、上部レベルで過度に polite であればあるほど、その下部レベルでは impolite さの度合いが増すことになる。そして、本稿で見た sarcasm における話者の態度との関連で見れば、この内在する下部レベルにおいて話者の悪意ある態度—(11)では偽の賞賛(fake praise)や見くびり(belittling)—は伝達される。

以上、様々なタイプの sarcastic な発話と話者の態度について、Barbe のアイロニーの分析と比較しながら、考察を行った。Politeness の概念も考慮に入れながら、sarcasm の二重構造性を明らかにし、話者の意図された悪意ある態度がどのように聞き手に伝達されるのかという点について検討を加えた。

注

＊本稿は、日本語用論学会第８回大会の口頭発表に加筆修正したものである。発表に際し、貴重なご意見を下さった諸先生方に心よりお礼を申し上げます。

１）sarcasm の例として（４）を挙げたが、この例は Leech(1983)の言う banter と見なすことも可能であろう。Banter と sarcasm の関係の具体的な考察については、別稿に譲りたい。

参照文献

Barbe, K. 1995. *Irony in Context.* Amsterdam: John Benjamins.

Brown, P. and S. C. Levinson. 1987[1978]. *Politeness: Some Universals in Language Usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

Culpeper, J. 1996. "Towards an Anatomy of Impoliteness." *Journal of Pragmatics* 25, 349-367.

Gibbs, R. W., Jr. and J. O'Brien. 1991. "Psychological Aspects of Irony Understanding." *Journal of Pragmatics* 16, 523-530.

Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. L. Morgand eds. *Syntax and Semantics* 3: *Speech Acts,* 41-58. New York: Academic Press.

Grice, H. P. 1978. "Further Notes on Logic and Conversation." In P. Cole ed. *Syntax and Semantics* 9: *Pragmatics,* 113-127. New York: Academic Press.

Haverkate, H. 1990. "A Speech Act Analysis of Irony." *Journal of Pragmatics* 14, 77-109.

Leech, G. N. 1969. *A Linguistic Guide to English Poetry.* London: Longman.

Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics.* London: Longman.

Myers Roy, A. 1977. "Toward a Definition of Irony." In. R. W. Fasold and R. W. Shuy eds. *Studies in Language Variation: Semantics, Syntax, Phonology, Pragmatics, Social Situations, Ethnographic Approaches,* 171-183. Washington, DC: Georgetown University Press.

Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication & Cognition,* Second Edition. Oxford: Blackwell.

Texts

Curtis, Richard .1999. *Four Weddings and a Funeral.* Shohakusha.

Fielding, Helen. 1996. *Bridget Jones's Diary: A Novel.* Penguin Books.

Fielding, Helen. 1999. *Bridget Jones, The Edge of Reason.* Penguin Books.

Lodge, David. *Small World.* Penguin Books. (First published in 1984 by Martin Secker & Warburg)

NHK Television Eikaiwa, "Cousin William." Feb. 2000.

opposite の意味論と語用論 — *do the opposite* を中心に

黒川　尚彦（naokurokawa96@ybb.ne.jp）
（大阪大学大学院）

1. はじめに

「反対のことをする」とはいったいどうすることを意味するのだろうか。

(1) Tom regretted that he told the truth but *Mary did the opposite*.

(2) A witness says that the burglar was then ascending the tower, but another witness claims that *he was doing the opposite*. (Kageyama 1975)

(3) Typically he reconstructs the faces of the dead from their bones. With Washington [=a dead body], *he has done the opposite*. (†http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2005/08/29/AR2005082902099.html)[1]

例えば、(1)の Mary did the opposite は「メアリーは後悔しなかった」と解釈されうる。つまり、メアリーは「後悔した」の反対のことをしたのである。(2)の he was doing the opposite は、「泥棒は塔を降りていた」と解釈される。これは「登っている」の反対のことをしていたという解釈である。(3)の he has done the opposite が表す内容は、「顔から骨を復元した」であり、これは「骨から顔を復元した」とは反対のことをしたことになる。

このように do the opposite は少なくとも 3 種類の「反対」の解釈が可能と言える。(1)の「反対」は命題（の一部である述部）の否定を表す。(2)の「反対」は、述語（動詞）の反意を表す。(3)の「反対」は、「骨から顔」と反対の「顔から骨」という関係の向きが逆であることを表す。

このことから「反対」の理解が一筋縄でないことは明らかである。さらに the opposite が主語として生起する場合は目的語として生起する場合と事情が異なる。(4)は(5)に示されるように 2 通りに曖昧である。

(4) Tom loves Mary; I believe *the opposite is true*.

(5) a. I believe Tom doesn't love Mary.

b. I believe Mary loves Tom.

(5a)の解釈は(1)の場合と似ているかもしれないが、(5b)のような解釈は do the opposite では起こりえない。このような差異は the opposite の生起位置の違いから来ると思われる。Kageyama (1975)は、Saito (1972)が the opposite is true という表現しか扱わなかったことに対し、opposite のあらゆる用法について、それが生起する統語環境・意味的条件に対する統一的な説明が必要であると訴えた。このような意味で、do the opposite の分析には十分意義がある。

do the opposite の解釈の違いはどのようにして生じるのだろうか。この問題に答えるためには次の 2 点を明らかにする必要がある。第 1 に、opposite によってコード化された概念はどのようなものか。第 2 に、do the opposite の概念はどのようなものか。つまり、構成する語がどのような意味を持ち、do the opposite 全体でどのように機能するのか。このような意味論と語用論にまたがる問題に対し、本稿では関連性理論の立場から考察を行う。

2. 先行研究

2 節では数少ない先行研究の 1 つである Kageyama (1975)を概観し、問題点を指摘する。

Kageyama (1975)は、Saito (1972)と同様、opposite の生起を否定と関連づけて捉えている。ただし、Kageyama が Saito と異なるのは、語彙分解で捉えている点である。

(6) A witness says that the burglar was then ascending the tower, but another witness claims that *he was doing the opposite*. (=(2))

(7) a. The burglar was descending the tower.

b. #The burglar was not ascending the tower.[2]

(8) a. ascend: [BECOME UP]

b. descend: [BECOME [NOT UP]]

単に反対を否定で捉えれば、(6)の doing the opposite の解釈は(7b)と予測されるかもしれない。しかし、実際は(7a)のように解釈され、そのような単純な捉え方は十分でない。Kageyama は、ascend を(8a)のように語彙分解し、ascend を特徴づける要素 UP が否定され、descend が派生されると分析した。一般化すると、否定されるのは語彙ではなく、語彙分解によって明示される語彙を特徴づける要素である。これは(9)のように表される。

(9) a. [BECOME F]

b. [BECOME [NOT F]][3]

この一般化は(10)にも当てはまる。Kageyama によれば、rent のような motion verb で重要なのはどこからどこに移動したかであり、それを表す to の語彙分解を考えればよい。(12)で示されるように、F に相当する AT が否定されて語彙化された from が派生される。よって、(10)は(11b)ではなく(11a)のように解釈される。(6)と(10)では語彙化のされ方が異なるだけで、派生のプロセス自体は同じである。このようなプロセスの普遍性という点において Kageyama が採る語彙分解分析は妥当なように思われる。

(10) John thinks that Bill_i rented this house to Tom, but actually *he_i did the opposite*. ([‡]Kageyama 1975)

(11) a. Bill rented this house from Tom.

b. #Bill didn't rent this house to Tom.

(12) a. to: [BECOME AT]

b. from: [BECOME [NOT AT]]

しかし Kageyama の分析には３つの問題点が考えられる。第１に、(13)は実際は容認されないが、Kageyama の分析では容認されると誤って予測する可能性がある。

(13) *Tom likes carrots, but *I do the opposite*.

(14) a. like: [BE FOND]

b. dislike (or hate): [BE [NOT FOND]]

Kageyama の分析に従えば、like は(14a)のように表されるだろう。もしこれが正しければ、その反対は like を特徴付ける FOND が否定された(14b)のように表され、それは dislike や hate という語で具現化されるだろう。つまり(13)が容認可能であると誤って予測してしまう。ただし、Kageyama は状態動詞を扱っていない。そのため、(14)の語彙分解自体が妥当かどうかには議論の余地が残るものの、状態動詞の場合に容認されないという事実に何らかの説明を与える必要があるという点においては Kageyama の分析は不十分であると言えるだろう。

第２に、F が複数ある場合、どの F が否定されるのか明確ではない。(15)は、(16)に示されるように、told の反対の hid、truth の反対の lie のように２通りに解釈できる。これは(15)の文に F が２つあることを意味する。

(15) Tom told the truth, but *I did the opposite*.

(16) a. I hid the truth.

b. I told lies.

しかし、どちらのＦが否定されるのかを決めるシステムはKageyamaでは考慮されていない。opposite に統一的な説明を与えるには、複数の解釈可能性における解釈特定のシステムを明らかにすることも必要と思われる。

３つめの問題点は、Ｆが語彙内の要素でない場合にどのような説明を与えるか、である。

(17) [Tom and Bill are swimming across the Strait of Dover.]

Tom is swimming towards England but *Bill is doing the opposite*.

(18) If a page is formatted at 1024 x 768, a user with 640 x 480 would have to scroll a great deal. Or if *the opposite was done*, the page would appear small in 1024 x 768. (http://www.iboost.com/build/programming/html/basic/764.htm)

(17)は百科事典的知識に基づく例である。ドーバー海峡がイギリスとフランスの間にある海峡であるという知識がない限り、(17)を「ビルはフランスに向かって泳いでいる」と解釈することはできない。同様に、(18)では、先行文中から 1024 x 768 と 640 x 480 という２つの場合が対比されていることが理解される。この理解がない限り、(18)を「ページが 640 x 480 でフォーマットされる場合」と解釈するのは困難である。このようにコンテクストから喚起される想定なしに解釈できない例は、語彙分解分析の限界を示すだけでなく、この分析法が、opposite の解釈の統一的説明を行うのに適した方法ではないということも示唆する。

第２、第３の問題点はとりわけ語用論の問題と言える。従って、the opposite（特には do the opposite）の解釈に統一的な説明を与えるには語用論を視野に入れる必要があるのは言うまでもない。

3. *opposite, do, do the opposite* の意味論

3.1 *opposite* の意味論

「反対」は、２つの比較に値する要素間にのみ成立する二項対立的概念である。２つの要素の必要性は、(19)が容認されないことから明らかである。(19)が容認されないのは、何に対して反対かが不明なために、片方の要素しか同定されないためである。もちろん(20)のように、対立する要素が文脈から理解される場合には容認される。要するに、２つの要素のうち１つしか明示されなかったとしても、それが語用論的に特定されれば問題ない。

(19) *My view is opposite.

(20) Your opinion is different from mine. I'll explain why *my view is opposite*.

さらに、反対という概念でもう１つ重要なのは、どのような点において対立するのか、である。例えば、(21)では、sat down から分かるように、座る位置という点において反対関係が成立する。

(21) I sat down opposite to Tom.

つまり、反対の理解には、２つの要素とそれらの対立点が特定されなければならない。このことから、opposite の概念は(22)のように仮定できる。これは、２つの要素 x, y と対立点 wrt が未指定であるような、関連性理論的に言えば、意味論的確定度が不十分な（semantically underdeterminate）概念である。

(22) *opposite*: OPPOSITE $_{<wrt_>}$ (x, y)[4, 5]

この(22)で示された概念の意義を数学とのアナロジーを通して見てみよう。y=ax は一次関数である。しかし a が未指定のため、どのような関係かは不明である。一方、y=2x では、x の値が決まると y の値も自動的に決まる。opposite の場合、wrt は a に相当し、もし wrt が特定されれば、x と y の間に特定的な反対関係が成立することになる。このとき、要求される２つの要素のうち一方が特定されるだけでもう一方の要素も自動的に決定される。

3.2 *do* および *do the opposite* の意味論

do についても the opposite についても、「同じ」と「反対」の違いはあるが、Halliday & Hassan (1976)の do the same の分析が示唆的である。Halliday & Hassan は、do the same の do を広域動詞（general verb）と分析している。広域動詞とは、漠然とした行為を表す動詞である。ただし、代用表現の do とは機能的に異なっている。

代用表現の do は先行する動詞を受ける働きをする。(23)のように、代用の do は状態動詞の代用もできる。これに対し、(24)にあるように do the opposite は反対の理解の基となる命題の動詞が状態動詞のとき、容認されない。このように、do the opposite の do は明らかに代用の do ではない。

(23) Tom lives in the eastern part of the city and *so does Bill*.

(24) *Tom lives in the eastern part of the city but *Bill does the opposite*.

(24)が容認されないのは、live に反対の意味を表す動詞がないからではない。事実、(25)は like に dislike のような反意語があっても容認されない。また、do the opposite が V+NP という他動的形式を取るのに対し、先行する動詞句 lives in the eastern part ... がそうではないためでもない。(26)は自動詞にも関わらず容認される。従って、先行命題の動詞の他動性も容認性に影響しない。(24)(25)では動詞が状態を表すのに対し、(26)では状態を表していない。よって、do the opposite は先行する動詞が状態動詞の場合容認されない。

(25) *Tom likes carrots, but *I do the opposite*. (=(13))

(26) The northern sky cleared up but *the southern sky did the opposite*.

以上のことから、次の２つのことが言える。１つは、do the opposite の do は代用表現ではなく、広域動詞の do である。この特性こそ先行命題の動詞が状態動詞を許さない要因と考えられる。これは Kageyama の１つめの問題点に対する解答と言える。もう１つは、do the opposite は全体で、つまり複合形式で、先行命題の内容とは「反対のことを行う」という内容を表す。よって、先行命題の動詞が他動詞かどうかは問題にならない。

次に、the opposite を議論する前に、Halliday & Hassan (1976)による do the same の the same の分析を見ておきたい。彼らの分析では the same を行為のプロセスを表すものと見なしている[6]。

(27) They all started shouting. So I did the same. (Halliday & Hassan 1976: 108)

例えば(27)の the same は先行命題で表されている「叫び始める」というプロセスを指している。Halliday & Hassan の分析の根拠の１つは、プロセスを名詞化された形式（nominalized form）で表すという一般的傾向が英語にあることである。例えば(28)の a second run-through という名詞句は、リハーサルというプロセスを示している。

(28) We do a second run-through with the producer and director. (=(6))

また、プロセスを表す名詞句は対象化する、つまり受動文にすることが可能である。事実、(28)は(29)のように受動化が可能である。同様に do the opposite も受動化できることから、the opposite はプロセスを表すと考えられる。

(29) A second run-through is done with the producer and director.

(30) In France it is customary to place the fork with the tines facing down, while in England *the opposite is done*. (†http://www.theworldwidegourmet.com/relais/table/couverts.htm)

例えば(30)で、the opposite の表す内容は「フォークの先が下向きに置かれる」であり、これは先行命題の「フォークの先を上向きに置く」というプロセスの反対と見なされる。

これまでの議論は次のようにまとめられる。第１に、do the opposite は全体で、つまり複合形式で機能する。第２に、そのうちの the opposite は先行命題によって表されるプロセスと反対のプロセスを表し、do は広域動詞なので、そのプロセスを「行う」ことを表す。

これを(22)で提案した opposite の概念に適応すると、(31)のように記述することができる。

(31) *opposite* (of *do the opposite*): OPPOSITE $_{<process>}$ (x, y)

do the opposite が先行命題で表される行為の反対のプロセスを表すことから、対立点はプロセスであることが分かり、wrt は process と特定される。その結果 x を満たす要素が同定されることで、y の内容、つまり x の反対の内容が自動的に（関数的に）アウトプットされる。y としてアウトプットされる内容こそ do the opposite の解釈となる。では、x を満たす内容はどのようにして決定されるか、また、y はどのように産出されるのだろうか。

4. *do the opposite* の語用論

4.1 反対の理解の基となるプロセスの同定

本節では do the opposite の解釈において語用論的に解決される次の２点を議論する。１つは、OPPOSITE のスロット x を満たす内容はどのようにして決定されるか。もう１つは、y はどのように産出されるのか。

y は x の反対であることから、y の理解は x を基盤とする。つまり、y の理解に x の同定が必要となるため、反対の理解の基盤となる x は反対を理解する際の前提となる。この前提を Wilson & Sperber (1979)は順序付けられた含意（ordered entailments）で捉え直した。含意を関連性の程度によって順序づけ、前提を関連性の大きい含意と見なしている。反対の理解の前提、つまり x を満たす要素は、関連性の大きい含意であると考えられる。

(32) Tom told the truth, but *I did the opposite*. (=(15))

(33) a. Tom exists.　　b. Someone told the truth.

c. Tom told something.　　d. Someone told something.

e. Someone did something.

例えば(32)の I did the opposite の理解の基盤となるのは、先行命題 Tom told the truth である。この命題からは(33)で示されるような含意が生じうる[7]。それぞれの含意は関連性の程度が異なり、この場合最も関連性の大きい含意は(33b)である。なぜなら、(33b)ではコントラストを成す要素 Tom がスロットとなり、そのスロットをコントラスト要素 I で満たすことが可能だからである。同じことは(33d, e)でも可能だが、コントラスト要素以外の部分（(33d)では told something の部分）からは十分な認知効果が生じない。よって、(33b)は(33d,e)よりも関連性が大きい。

同じことは(34)のような受身文にも当てはまる。

(34) In France it is customary to place the fork with the tines facing down, while in England *the opposite is done*. (=(30))

(35) a. x places the fork with the tines facing down.　　b. x places the fork in some manner.

c. x places something with the tines facing down.　　d. x places something in some manner.

受身文の場合 the opposite は主語として生起しているが、do the opposite の the opposite がプロセスを表すことを考慮すると、x を満たす要素は先行命題内で何らかのプロセスを表す最も関連性の大きい含意であると言える。(35)にある候補となる含意のうち最も関連性が大きいのは(35a)である。なぜなら、(35b-d)は(35a)に比べ、認知効果を産出するには命題内容が空虚（vacuous）であるためである。よって、(35a)が x を満たす要素として同定される。

まとめると、スロット x は先行命題から生じる最も関連性の大きい含意で満たされる。do the opposite の場合、the opposite は先行命題で表されるプロセスの反対のプロセスを表す。従って、スロットを満たす含意も何らかのプロセスを表すようなものに限られる。では、スロットを満たす含意の反対はどのように理解されるのだろうか。

4.2 *do the opposite* の解釈メカニズム

Kageyama (1975)も Saito (1972)も、opposite を否定と関連づけて捉えている。例えば、「トムは泳ぐ」の反対は「トムは泳がなかった」であり、確かに否定が関わっている。ただし、opposite は not とまったく同じではない。２つの決定的な違いは、２節で述べたように、opposite が二項対立であるのに対し、否定はそうではないという点である。例えば、「トムは泳がなかった」という否定文には、泳ぐ以外のすべての行為に論理的な可能性がある。一方、類似点は、否定の解釈が not の取るスコープに依存するのと同じように、opposite のスロット x を満たす含意のどの部分が反対に解釈されるのかは opposite が取るスコープに依存する点である。

最初に、否定について簡単に見ておく。Carston (2002)は関連性理論の立場から not の分析を行っている。Carston によれば、not は意味論的に最も大きいスコープを取り、語用論的にそのスコープが狭められる。(36)を例に挙げて言うと、意味論的には(37a)のようにスコープが最も大きい解釈がなされ、あるコンテクストでは(37b)のようにスコープが狭められた解釈がなされる。

(36) Fred didn't scrub the potatoes with sand-paper in the bath-tub at midnight. (Carston 2002)

(37) a. It is not that Fred scrubbed the potatoes with sand-paper in the bath-tub at midnight.

b. It is not at midnight that Fred scrubbed the potatoes with sand-paper in the bath-tub

これは一種の関数と見なすことができる。つまり、命題全体が否定関数にインプットされ、取られるスコープが関数によって決定され、その結果がアウトプットされる。

opposite もこれと同じような関数として捉えることが可能である。これは(38)のように表される。

(38) a. semantics of *the opposite* (of *do the opposite*): OPPOSITE $_{<process>}$ (x, y)

b. x pragmatically saturated & narrow scope (of OPPOSITE) pragmatically derived

(38a)に示す通り、do the opposite における opposite の意味は、プロセスという点における反対を示す。これにより、反対関係の成立に必要な２つの要素のうち１つが明示されるだけで、明示されていない他方、つまり opposite の内容が理解される。明示された要素、つまり先行命題から生じる最も関連性の大きい含意でスロットが満たされ、どの要素が反対となるのかが opposite 関数で決定され、それがアウトプットされる。

Kageyama の第３の問題点として挙げた例について考えてみる。(39)で、先行命題から生じる含意は(40)で示す通りである。

(39) [Tom and Bill are swimming across the Strait of Dover.]

Tom is swimming towards England but *Bill is doing the opposite*. (=(17))

(40) a. Tom is swimming towards somewhere.　　b. Someone is swimming towards England.
　c. Someone is swimming towards somewhere.　　d. Someone is doing something towards somewhere.
(41) a. Bill is swimming towards France.
　b. #Bill isn't swimming towards England.

最も関連性の大きい含意は(40b)である。というのも、コントラスト要素がスロットで、かつ(40c, d)よりも認知効果を産出するのに十分な情報を有しているからである。では、(40b)のどの要素が反対に解釈されるのだろうか。(39)の解釈において、聞き手は「ドーバー海峡はイギリスとフランスの間にある」という相互に顕在的な（mutually manifest）想定にアクセスする。この想定を基に、「イギリスに向かって泳ぐ」の反対を「フランスに向かって泳ぐ」と推論する。この(41a)の解釈はコンテクストから得られる既存想定（ビルはドーバー海峡を泳いでいる）を強化するという認知効果を産出する。よって、反対となる要素（opposite がスコープに取る要素）は towards England である。また、(41b)のように解釈されないのは、コンテクストと矛盾するためである。換言すると、そのような解釈は、認知効果がほとんど生じないくらい関連性が極めて小さいために、選択されない。

次に Kageyama の２つめの問題として挙げた例に異なるコンテクストを設定した(42a)(42b)を考えてみよう。

(42) a. Tom firmly believes that honesty is the best policy while I don't believe that. So *he told the truth, but I did the opposite.*
　b. I'm definitely a more faithful spy than Tom. So *he told the truth, but I did the opposite.*
(43) a. The speaker is (might be) dishonest.　　b. A dishonest person lies easily.
(44) a. The speaker is a faithful spy.　　b. A faithful spy doesn't tell the truth at all and keeps it a secret.
(45) Someone told the truth.
(46) a. Someone [told the truth].　　b. Someone [told] the truth.

(42a)はトムと話し手が正直かどうかという点で対比されている。(42a)の１文目は(43a)を伝達しうる。そして(43b)のような一般的な想定にアクセスし、この２つの想定から推論によって「話し手は簡単にうそをつく」という帰結が導かれる。反対の基となる先行命題から生じる最も関連性の大きい含意は(45)だろう。先の帰結を考慮すると、(45)は(46a)で示すように told the truth が opposite のスコープとして取られる解釈がなされると結論づけられる。

一方、(42b)では話し手とトムのスパイとしての忠実さが対比されている。聞き手は(42b)の１文目から(44a)を理解し、(44b)のようなスパイに関する一般的な想定を想起し、推論によって「話し手は真実を話すことは決してない」というような推意を得る。この場合もスロットを満たす最も関連性の大きい含意は(54)である。これらのことから、(46b)に示すように told だけが opposite のスコープとして取られることになる。

5. 結語

本稿では do the opposite の解釈に関して次の２つの点に着目した。１つは、opposite によってコード化された概念はどのようなものか。もう１つは、do the opposite の概念はどのようなものか。前者は、(22)で示したような、言語的に要求するスロットを含む意味論的確定度が不十分な概念である。そして後者は、広域動詞 do と、ある（先行命題で表される）プロセスの反対のプロセスを行うことを表す the opposite から構成される。その解釈は、言語的に要求されるスロット x は、先行命題から生じる最も関連性の大きい含意で満たされ、その含意のある要素が反対のスコープとして取られることで得られる。スロットを満たす含意が何か、またその含意のどの要素が opposite のスコープとして取られるかは、語用論的に、つまり関連性の原則に従って決定される。

*本稿は、日本語用論学会第 8 回大会（2005 年 12 月 10 日、於：京都大学）における口頭発表に基づくものである。発表の折に、

司会の久保進先生（松山大学）・有光奈美先生（東洋大学）から貴重なコメントを頂けたことに御礼を申し上げたい。また発表の準備段階から有益なコメントを下さった大庭幸男先生・岡田禎之先生（大阪大学）、ならびに南津佳広君（神戸市外国語大学院生）に心から感謝したい。なお、本稿の不備は執筆者の責任にある。

注

1 †は適宜変更を加えたことを示す。以下同じ。

2 #は解釈として不適切であることを示す。

3 Kageyama (1975: 133)は、F を次のように規定している。1) あるスケールにおける要素で、2) F と NOT F の値はスケールの基準から等しくなければならず、3) Hopper & Thompson (1973)の言う assertion の要素でなければならない。(Hopper & Thompson の assertion は明確に定義されてはいないが、およそ speaker assertion に相当する(*ibid.* 473)。)

4 イタリックは自然言語を表し、小型大文字は概念を表す。

5 未指定な x, y, wrt は語用論的に特定される。x, y は飽和（saturation）、wrt は自由拡充（free enrichment）という語用論的過程による。語用論的過程が異なる理由は、紙幅の都合で簡潔に述べるに留めるが、以下の通りである。x, y は典型的には項として現れるため、opposite が言語的に要求する要素である。一方しか言語化されずとも、他方は語用論的に理解される。つまり両者とも、意味論的であれ語用論的であれ、必ず特定される。これに対し、wrt は言語的に要求されない。事実、言語化されなかったとしても、非文とはならない。このことは(20)から明らかである。

6 Halliday & Hassan は「プロセス」に定義を与えていないので、厳密にはどのような概念かはっきりしない。ここでは、「プロセス」を一連の動作・行為を表すものと考える。ここで注目すべきことは、動作・行為自体が重要であり、その動作主・行為者は重要でないという点である。このことは後述する x を満たす要素としての含意に反映される。

7 (33)で示される含意は網羅的ではない。また、something や someone はスロットあるいは自由変項に相当する。

参考文献

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics.* Oxford: Blackwell.

Carston, R. 1998. "The Semantics/Pragmatics Distinction: A View from Relevance Theory." *UCL Working Papers in Linguistics* 10, 53-80.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell.

Cruse, A. 2004. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics, 2nd Edition.* Oxford: Oxford Univ. Press.

Halliday, M.A.K and R. Hassan. 1976. *Cohesion in English.* London: Longman.

Hopper, J. and S. Thompson. 1973. "On the Applicability of the Root Transformation." *Linguistic Inquiry* 4.4, 465- 497.

Kageyama, T. 1975. "How to Get *the Opposite.*" *Studies in English Linguistics* 3, 110-138.

黒川 尚彦. 2005.「『反対』とは何か？—The opposite is true の場合—」日本英語学会第 23 回大会口頭発表.

黒川 尚彦. 準備中.「*The Opposite is True* vs. *Vice Versa*」

McCawley, J. 1972.「McCawley 博士を囲んで(2) —生成文法研究会報告—」『英語教育』(11 月号) 24-29, 東京: 大修館.

岡田 禎之. 2002.『現代英語の等位構造—その形式と意味機能—』大阪: 大阪大学出版会.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language.* London: Longman.

Saito, S. 1972. "On the Semantic Interpretation of *the Opposite.*" *Studies in English Linguistics* 1, 13-21.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

Wilson, D. and D. Sperber. 1979. "Ordered Entailments: An Alternative to Presuppositional Theories." In C.K. Oh and D. Dineen eds. *Syntax and Semantics 11: Presupposition*, 299-323. London: Academic Press.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90, 1-25.

Wilson, D. and D. Sperber. 2002. "Relevance Theory." *UCL Working Papers in Linguistics* 14, 249-290.

安井 稔・中村 順良. 1984.『代用表現』(現代の英文法 10) 東京: 研究社.

ニュージーランド英語の談話標識 *eh* と日本語助詞「ネ」「ヨ」「ヨネ」の多義構造について

斎藤里香
大阪外国語大学大学院
rikasaitou@aol.com

1. はじめに

本稿では、主に以下の２つの点について考察していく。

1. ニュージーランド英語に特徴的に見られる談話標識 *eh* について、会話コーパスを用いてその様々な機能を明らかにし、それらがプロトタイプ的機能を中心とした多義ネットワークを構成していることを示す。
2. 日本語の助詞「ネ」「ヨ」「ヨネ」を取り上げ、会話コーパスを用いてその機能を調査し、*eh* との類似点や相違点について考察を試みる。

本稿で用いる「談話標識」とは、Schiffrin (1987)の定義に従い、「主に、命題に対する話者の態度・判断・視点を表す言語標識」を意味するものとする。

2．談話標識 *eh* について

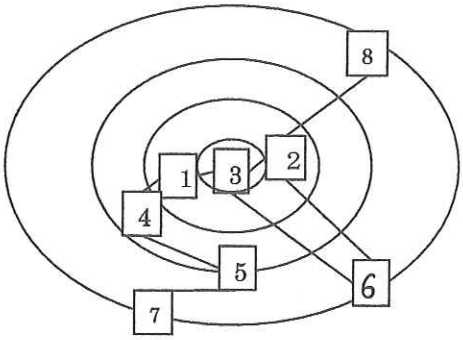
ニュージーランド英語において特徴的に使用される談話標識 *eh* についてのこれまでの研究は、社会言語学からのアプローチが主流となっている。それによると *eh* は、ニュージーランドの先住民族である Maori の男性が、主に仲間意識を強めるために使用することが多いということである。しかし、近年では若年層を中心に、ヨーロッパ系白人である Pakeha にも使用が広がってきているとしている (Bell 2000, Holmes 1995, Meyerhoff 1994, Stubbe and Holmes 1995, 2000)。一方、*eh* の機能については、Meyerhoff (1992)が調査しているが、先行研究はまだ少ないように思われる。

従って本稿では、ニュージーランド英語の会話コーパスを用いて、*eh* の機能について調査した。使用したコーパスは *The Wellington Corpus of Spoken New Zealand English* であり、会話の収録時期は、1988 年～1994 年となっている。発話者は 16~90 歳+の男女であり、全て英語を母国語として話すか、あるいは 10 歳までにニュージーランドに来た人である。彼らの ethnicity は、Pakeha、Maori を中心に、アジア系、太平洋諸島系など多岐にわたっている。本稿では、全データを対象に検索した結果得られた 1302 例の *eh* を分析した。

調査の結果、*eh* の機能は Figure 1 に示すように、③の中核的意味を中心に、「共通の認識」というキーワードを軸として多義性ネットワークを構築していることが明らかになった。(機能と機能

をつなぐリンクは、それらの間に意味的関連があることを示す。)

Figure 1.



以下に、これら一つ一つの機能について、例を挙げながら説明していく。

1 **Confirmation** (130 例)……(1)(2)のような発話で用いられ、話者と聞き手の間で既に確立した共通の認識を再度強調する機能を担う。

(1) Yeah that's right, eh?

(2) Yeah exactly it is, eh?

2 **Emphasis** (326 例)……(3)~(5)のように、話者の言いたいことを *eh* で強調して聞き手に理解してもらおうとする機能である。

(3) Oh I'm really really excited, eh?

(4) There's just MEGA, eh?

(5) I'm doing it this year, eh?

3 **Seeking agreement** (469 例)……この機能で用いられることが最も多いため、プロトタイプ 的機能だと思われる。相手に同意を求めたり、自分も相手に理解を示していることを表したりする機能、つまり、互いに共通の認識を築こうとする機能である。

(6) Yeah it's amazing, eh?

(7) You know what I mean, eh?

4 **Making sure** (162 例)……自分の認識が間違っていないかどうか確認する機能であり、(8)(9)のように、発話内容に関して話者の確信度が高いときに用いられる。

(8) He's born in December, eh?

(9) That's the youngest brother, eh?

5 Seeking verification (87 例)……発話内容に関して話者の確信度が低いときに聞き手に確認する機能であり、疑問文に近い。(10)の例の Whakapapa とは、ニュージーランドにある山の名である。

(10) Which is supposed to be best, Whakapapa is, eh?

6 Negative politeness strategy (10 例)……聞き手へのアドバイスや非難を伝える際、そのままでは Face Threatening Act (Brown and Levinson 1987) になり得るため、*eh* を付加することでそれを和らげ、相手に理解してもらおうとする機能である。(11)の例では、話者が何度もどもりながら発話していることから、聞き手の心情に配慮していることが伺える。

(11) That you you know you you'll have to ring matt too and and confirm that, eh?

7 Asking for repetition (96 例)……単独で用いられる聞き返しの機能である。

(12) Eh?

8 Getting the interlocutor's attention (9 例)……単独又は文頭で用いられ、呼びかけまたは相手の注意を引く機能である。実際の場面では、(13)の発話後に話者の本題が続くことになる。

(13) Eh, I tell you what....

3. 「ネ」「ヨ」「ヨネ」について

一方、日本語助詞の「ネ」「ヨ」「ヨネ」に関しては、主要機能の特定(陳 1987、益岡 1991、金水 1993、片桐 1995、田窪・金水 2000)、縄張り理論の観点から(神尾 1990)、機能分類(橋本 1992、伊豆原 1993、宇佐美 1997)、関連性理論の観点から(井谷 1996、1998)など、様々なアプローチで研究がなされてきた。そこで本稿では、実際の会話データに基づいた機能の特定に重点を置き、機能分類にとどまるのではなく、プロトタイプを中心とする多義性ネットワークという観点からの説明を試みたい。

今回の調査で使用したデータは、『女性のことば・職場編』より抜粋した朝(5 分)、会議(13 分)、休憩(11 分)の 3 つの談話(計 29 分)と、『男性のことば・職場編』より抜粋した朝(10 分)、会議(10 分)、休憩(10 分)の 3 つの談話(計 30 分)である。このコーパスの収録年は、『女性のことば・職場編』が 1993 年 9 月～11 月、『男性のことば・職場編』が 1999 年 10 月～2000 年 12 月となっている。発話者は、『女性のことば・職場編』では首都圏に在住する 20 代～50 代の有職女性、『男性のことば・職場

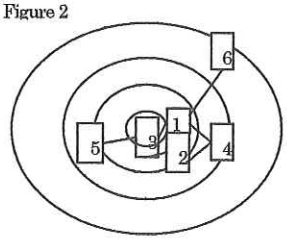
編』では首都圏に在住する20代〜50代の有職男性ということである。

以下に、「ネ」「ヨ」「ヨネ」のそれぞれについての調査結果をまとめる。

3.1 「ネ」

「ネ」の機能に関しては、分類が細かく、コーパスに基づいている宇佐美(1997)の分類を参照した。その結果、「ネ」の機能も *eh* と同様、プロトタイプを中心とした多義性ネットワークを構築していることが分かった(Figure 2)。以下に、これら一つ一つの機能について、例を挙げながら説明していく。

Figure 2



1 会話促進……宇佐美(1997)で「相互作用的用法」と名付けられているもので、同意を求めたり同意を表示したりする、ポジティブポライトネス的機能である。この用法は28例見られた。

(14) A: あたし今バス酔う。
H: <笑い・複>バスは、★ね。
A: →酔うね。←<間>

2 注意喚起……同様に宇佐美(1997)で「話し手中心用法」と呼ばれるもので、自分の発話を強調、相手の注意を喚起する機能である。27例見られた。

(15) ま、そうすっと、スケジュールの問題がね、あの、係わってくると。
(16) あたしねえ、ピーマンの肉炒め定食。

3 発話緩和……宇佐美(1997)では「聞き手中心用法」と呼ばれ、「ネ」のプロトタイプ的機能である。聞き手が知らない情報や、話し手の考えを述べる時、口調を和らげるもので、ネガティブポライトネスである。48例見られた。

(17) 大阪が1日遅れて、あの、社長さん一のほうに、着くんですね。
(18) →なんか←うちの父親はね、石油資源てゆう、石油資源株式会社って、石油掘る会社があるんですね。

4 発話内容確認……話者が聞き手に発話内容を確認するために用いられるもので、ポライトネス的にはニュートラルな機能である。16例見られた。

(19) →じゃあ、←2通、あればいいと★ゆうことですね。

(20) 英文の長さだけがちょっとよみとれない★とゆうことですね。

5 発話埋め合わせ……専ら「～ですね」という形で用いられ、フィラーの役目を果たす。ネガティブポライトネスであり、19例見られた。

(21) で、これがですね、こ、この部分は、場合（ばわい）によってなんページにもなったりするページなんですが。

(22) えーとですねー、まざっ、★てるんだと思います。

6 感嘆……話者の感嘆を表すもので、2例見られた。

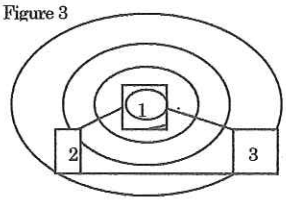
(23) そういう御家族もあるのねー。

(24) なるほどね。<間>

3.2 「ヨ」

次に、「ヨ」の機能に移る。ここでは伊豆原(1993)の分類を参照した。「ヨ」の機能もまたFigure 3のように多義性ネットワークとして表される。各機能について以下に説明する。

Figure 3



1 状況や考えを説明するときに用いられるもので、「ヨ」のプロトタイプ的機能である。41例見られた。

(25) こちらのほうがいいですよ。

(26) きょう来ると思うよ。

2 同意、不同意を表すときに用いられる。8例見られた。

(27) いや、いいですよ、持ってきます。

(28) うん、いいよ。

3 文末で相手へのもちかけを表すときに用いられる。4例見られた。

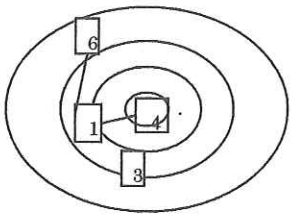
(29) じゃ、キャンセルするよー。

(30) それは、む、向こうに入れちゃおうよ。

3.3 「ヨネ」

最後に「ヨネ」の機能に関しては、再び宇佐美(1997)の分類を参照した。「ヨネ」の機能は Figure 4 のような多義性ネットワークとして表せる。以下に各機能について説明するが、「ネ」の機能と重なっているため、少し簡素化してまとめたい。

Figure 4



1 会話促進……相互作用的用法(同意を求めたり同意を表示したりする。ポジティブポライトネス)9例

(31) でも朝の1時間なんてなにもみんな会話ないですよね。

(32) あ、そーだよねー、★なんか。

3 発話緩和……聞き手中心用法(聞き手が知らない情報や、話し手の考えを述べる時、口調を和らげるもの。ネガティブポライトネス)6例

(33) また同じことなんですよね↑、これ。

4発話内容確認……「ヨネ」の機能のプロトタイプである。(ニュートラル)20例

(34) で、えーとー、版下ーもいっしょにやっていただけるんですよね↑

6 感嘆……2例

(35) すごいですよね。

(36) バスで通うのって、大変ですよねー、バス乗って、電車乗ってだと。

4. *eh*と「ネ」「ヨ」「ヨネ」の類似点と相違点

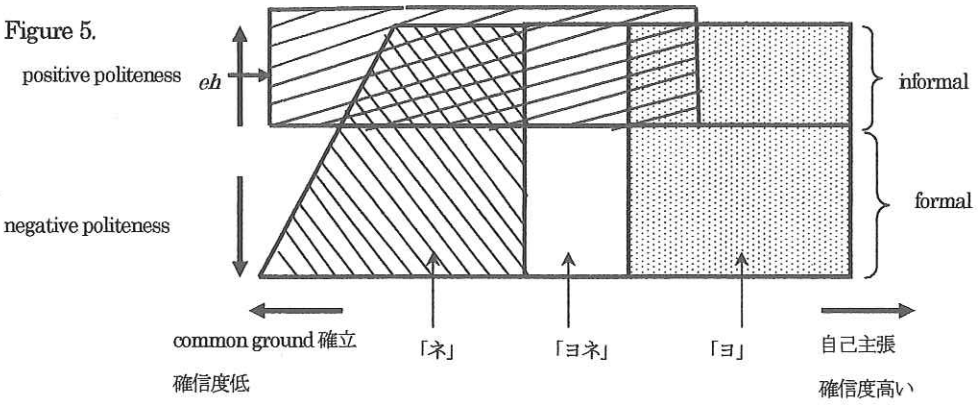
最後に、これまで見てきた *eh* と「ネ」「ヨ」「ヨネ」の類似点と相違点について考察したい。まず、

それぞれの使用場面であるが、*eh* は informal な場合のみで使われるのに対し、「ネ」「ヨ」「ヨネ」は formal でも informal でも使用可能である。特に *eh* は若者や Maori の男性が主に用いるという特殊性がある。また、井谷(1998)でも指摘されていることだが、英語の場合、談話標識がなくても発話として機能するが、日本語の会話では発話として機能しないという大きな違いがある。これらのことから、日本語の助詞の方が、会話での必須要素として文法の一部に組み込まれており、必要性も高いということが言える。

次に、「ネ」「ヨ」「ヨネ」の内最も使用頻度が高かった「ネ」はネガティブポライトネスとして用いられる傾向が高く、一方 *eh* はポジティブポライトネスとして用いられるのが典型的である。英語がポジティブポライトネス言語、日本語がネガティブポライトネス言語とされていることから、談話標識にもそのような傾向が反映されているのではないだろうか。このことは、以下の仮説につながる。つまり、英語、日本語にかかわらず、その言語がポジティブポライトネス言語であるかネガティブポライトネス言語であるかによって、談話標識もどちらか一方が優勢になるように現れるのではないか、というものである。

最後に、*eh*、「ネ」「ヨ」「ヨネ」に関するこれらの点は、以下のような図にまとめられる。

Figure 5.



<主要参考文献>

伊豆原英子 (1993)「「ね」と「よ」再考―「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から―」『日本語教育』80 号 103-114

井谷玲子 (1996)「伝達意図と日本語終助詞―関連性理論の立場から―」『神奈川大学人文研究』126　35－53　神奈川大学人文学会

_____ (1998)「日本語終助詞‘ネ’についての考察」『神奈川大学人文研究』133　19－46　神奈川大学人文学会

宇佐美まゆみ (1997)「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』241-268 ひつじ書房

片桐恭弘 (1995)「終助詞による対話調整」『言語』24 巻 11 号 38-45

神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店

金水敏（1993）「終助詞ヨ・ネ」『言語』22巻4号 118-121

現代日本語研究会編（1999）『女性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会編（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房

田窪行則・金水敏（2000）「複数の心的領域による談話管理」坂原茂編『認知言語学の発展』251-280 ひつじ書房

陳常好（1987）「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6巻10号 93-109

橋本修（1992）「終助詞「ね」の、意味の型とイントネーションの型—長く急激な下降イントネーションの解釈を中心に—」『日本語学』11巻11号 89-97

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

Bell, Allan 2000. Maori and Pakeha English: A case study. In Allan Bell and Koenraad Kuiper (eds.), *New Zealand English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Brown, Penelope and Stephen Levinson 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Holmes, Janet 1995. *Women, Men and Politeness*. London and New York: Longman.

Holmes, Janet, Bernadette Vine, and Gary Johnson 1998. *The Wellington Corpus of Spoken New Zealand English*. Wellington: School of Linguistics and Applied Language Studies, Victoria University of Wellington.

Meyerhoff, Miriam 1992. "We've all got to go one day, eh?": Powerlessness and solidarity in the functions of a New Zealand tag. In Kira Hall, Mary Bucholtz and Birch Moonwomon (eds.), *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*. Berkeley: Berkeley Women and Language Group, 409-419.

Meyerhoff, Miriam 1994. Sounds pretty ethnic, eh?: A pragmatic particle in New Zealand English. *Language in Society* 23, 367-388.

Schiffrin, Deborah 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Stubbe, Maria and Janet Holmes 1995. *You know, eh* and other 'exasperating expressions': An analysis of social and stylistic variation in the use of pragmatic devices in a sample of New Zealand English. *Language and Communication* 15 (1), 63-88.

Stubbe, Maria and Janet Holmes 2000. Talking Maori or Pakeha in English: Signaling identity in discourse. In Allan Bell and Koenraad Kuiper (eds.), *New Zealand English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

意味論的·語用論的観点から見た日本語の他動詞構文のヴァリエーションについて—非行為者性を中心に—

澤田　淳
（京都大学大学院）

1. はじめに

一般に、典型的な他動詞構文では、主語、目的語が、それぞれ、動作主（agent）、被動作主（patient）であり、目的語が主語の行為によって何らかの影響を被ることが表される（Langacker 2002[2]: 211）。以下の他動詞構文の主語は、（客の）髪を切ったり、（他者の）足を折ったりした動作主である。

（1）髪を切った後で、お客さんによろこんでもらえることが一番うれしい。
（『朝日新聞』2005.1.14）

（2）原さんを転倒させ右足の骨を折って全治2カ月のけがを負わせて逃げた疑い。
（『朝日新聞』2004.9.28）

しかしながら、以下の他動詞構文は、上の他動詞構文と同一の統語形式を有するものの、いずれも、主語は実際に行為を行った動作主とは言えない。

（3）親子揃って近所の床屋で髪を切ったあと、靴屋へ寄って子供たちがほしがっていたナイキのマイケル・ジョーダン・モデルを買った。（『朝日新聞』1999.4.12）

（4）女性は現金約1万3千円が入った手提げ袋を奪われた際に転び、右足の骨を折って、約1カ月の重傷。（『朝日新聞』2003.8.3）

（3）の主語は「髪を切る」という行為を依頼した主体であり、（4）の主語は「骨を折る」という事態を経験した主体である。（3）のような他動詞構文は、佐藤（1994、2005）、須賀（2000）、澤田（2005）等で、（4）のような他動詞構文は、井上（1974）、天野（1987、2002）、西村（1998）等で論じられてきたが、それぞれ別個に論じられる傾向にあった。

本稿では、（3）、（4）を他動詞構文のバリエーションと位置づけた上で（以下、（3）のタイプを「他動詞構文α」、（4）のタイプを「他動詞構文β」と称する）、（ⅰ）動詞の意味構造、（ⅱ）主語の意志性の2つの観点から、両タイプの他動詞構文を比較し、それぞれのタイプの他動詞構文の特性を明らかにしてみたい。

2. 動詞の意味構造の観点から見た他動詞構文αと他動詞構文βの相違点

2.1. 達成動詞か到達動詞か

はじめに、両他動詞構文の動詞の意味構造に着目してみよう。ここでは、次の一般化を提出する。

(5)他動詞構文αは、他動詞構文βと異なり、行為過程が(潜在的に)含意されている。

すなわち、他動詞構文αに生起する動詞は「行為過程」(process)と「状態変化」(change of state)から成る「達成動詞」(accomplishment verbs)であり、他動詞構文βに生起する動詞は「状態変化」のみから成る瞬間的な事象を有した「到達動詞」(achievement verbs)なのである(Vendler 1967, Smith 1997)。

以下、(5)の一般化を3つの観点から論証してみよう。

第1に、「〜するのをやめる」の補文として成立するか否かの違いがある(Mani et al. 2005: 6)。「〜するのをやめる」は、(一定の幅を有した)行為過程を表す補文をとる表現である。それゆえ、行為過程を含意する他動詞構文αは適格となるのに対し、それを含意しない他動詞構文βは不適格となると予測されるが、次の例はその予測を裏づけている。

(6)a. 太郎は肘を手術するのをやめた。(他動詞構文α)
b.*太郎は肘を痛めるのをやめた。(他動詞構文β)

第2に、行為過程の幅を問題とする疑問文の中に生起可能であるか否かの違いがある。

(7)a. 歯を抜くのにどのくらいの時間がかかったの？ (他動詞構文α)
b.*歯を折るのにどのくらいの時間がかかったの？ (他動詞構文β)

(7a)と異なり(7b)が不適格なのは、後者の動詞は行為過程を含まないからである。

第3に、アスペクト形式「ている」の解釈の違いがある。

(8)a. 山田さんは目白の一等地に家を建てている。(他動詞構文α)
b. 山田さんは震災で家を焼いている。(他動詞構文β)

(8a)の「ている」は「進行」と「結果状態」の両方の解釈が可能であるが、(8b)の「ている」は「結果状態」の解釈しかない。この違いは、金田一(1976)が提示した「現在〜ている最中だ」のテストからより明確となる。「現在〜ている最中だ」の中の「ている」は、進行の解釈のみを許すからである(金田一 1976: 8)。

(9) a. 現在、山田さんは目白の一等地に家を建てている最中だ。　(他動詞構文α)
b.*現在、山田さんは震災で家を焼いている最中だ。　(他動詞構文β)

(8b)の「ている」が「進行」に解釈できないのは、他動詞構文βに生起する動詞(=「(家を)焼く」)が行為過程を含んでいないからである。

さて、興味深いことに、他動詞構文α、βの両方に生起可能な動詞(句)がある。例えば、次の(10)の「(納屋を)壊す」は、潜在的には、(11a)、(11b)両方の解釈が可能である(むろん、通常の他動詞構文(主語=動作主)の解釈も可能である)。

(10) 山田さんは納屋を壊した。
(11) a. 山田さんは(解体業者に頼んで)納屋を壊した。(他動詞構文α)
b. 山田さんは(地震で)納屋を壊した。　(他動詞構文β)

ここで重要なことは、「(納屋を)壊す」は、他動詞構文α(=11a)の場合には達成動詞、他動詞構文β(=11b)の場合には到達動詞と解釈されるということである。この解釈の違いは、次の適格性の違いからより明らかとなる((8)参照)。

(12) a. 現在、山田さんは(解体業者に頼んで)納屋を壊している最中だ。(他動詞構文α)
b. *現在、山田さんは(地震で)納屋を壊している最中だ。　(他動詞構文β)

この事実は、動詞の意味構造は、生起するコンテキストによって多分に左右されることを示している(c.f. Smith 1997、Mani et al. 2005)。ここに意味論と語用論の接点がある。(10)では、主語が意志性を持った主体(依頼者)であるのか(=11a)、そうでない主体であるのか(=11b)というコンテキストの違いによって、そこに生起する動詞(句)(=「(納屋を)壊す」)の意味構造が決定されている(主語の意志性の問題については、第3節で再び取り上げる)。

2.2. 行為過程の潜在化

前節で論じたように、他動詞構文αでは行為過程が含意されているが、この行為過程は潜在化していなければならない(佐藤 1994、2005、澤田 2005)。なぜなら、他動詞構文αの実際の動作主は「潜在的動作主」(implicit agent)であり、それにより、その動作主による行為過程も潜在化することになるからである(澤田 2005: 95)。

はじめに、他動詞構文αの動作主が潜在化しているとする主張を「てもらう」構文との比較の中で確認しておきたい。まず次の例を比較してみよう。

(13) (床屋で)
a. 太郎は髪を切ってもらった。(「てもらう」構文)
b. 太郎は髪を切った。　(他動詞構文α)

(13)の両文は、主語が「髪を切る」という行為を依頼した主体である点では共通している。しかしながら、次のように、「てもらう」構文と異なり、他動詞構文αは、実際の動作主を文の構成要素として明示することができない。

(14)a. 太郎は床屋の主人に髪を切ってもらった。(「てもらう」構文)
b.*太郎は床屋の主人に髪を切った。　(他動詞構文α)

他動詞構文αと異なり「てもらう」構文は、動作主を顕在化することができる点で、両構文は本質的に異なる動機づけを持った構文形式と言える[注1]。さらに次の例を比較してみよう。

(15)(花子が占いの館で手相を見てもらった場合)
a. 花子は手相を占ってもらった。　(「てもらう」構文)
b.*花子は手相を占った。　(他動詞構文α)
(16)(太郎が骨董品屋で鑑定してもらった場合)
a. 太郎は骨董品を鑑定してもらった。(「てもらう」構文)
b.*太郎は骨董品を鑑定した。　(他動詞構文α)

興味深いことに、「(手相を)占う」、「(骨董品を)鑑定する」は、「てもらう」構文では成立するが、他動詞構文αでは成立しない。これは、「(手相を)占う」、「(骨董品を)鑑定する」という行為は、判断する主体が極めて重要な役割を果たす行為であり、その判断主体(=動作主)を潜在化させる他動詞構文αの特性とは相容れないのだと考えられる。

以上の議論を踏まえ、以下では、他動詞構文αの行為過程が潜在化しているとする主張を、澤田(2005)に沿って、2つの観点から論証してみたい(なお、他動詞構文βも合わせて考察することにする)。

第1に、副詞との共起可能性がある。他動詞構文α、他動詞構文β共に、「結果副詞」と異なり「様態副詞」とは共起できない。なぜなら、「様態副詞」は、「動きの展開過程の局面を取り上げる(仁田 2002: 49)」機能を有しており、行為過程に焦点が当てられてしまうからである。

(17)(床屋で髪を切ってもらった場合)
a. 太郎は髪を短く切った。
b.*太郎は髪を丁寧に切った。　(他動詞構文α)
(18)(火事で髪を焼いてしまった場合)
a. 太郎は髪をちりちりに焼いた。
b.*太郎は髪を急いで焼いた。　(他動詞構文β)

第2に、複合動詞の観点から見てみよう。他動詞構文α、他動詞構文β共に、複合動詞(V_1

V_2)において、V_1が V_2の「様態」(又は「手段」)(c.f. 松本 1998: 58) を表す場合は不適格となる。

(19)(歯医者さんに抜いてもらった場合)
a. 太郎は山田歯科で歯を抜いた。
b.*太郎は山田歯科で歯を引き抜いた。　(他動詞構文α)
(20)(うっかり骨を折ってしまった場合)
a. 太郎は電信柱にぶつかって鼻の骨を折った。
b.*太郎は電信柱にぶつかって鼻の骨をへし折った。(他動詞構文β)

(19b)、(20b)が不適格となるのは、V_1によって V_2の行為過程が詳述化され、それゆえ、その行為過程に焦点が当てられてしまうからである[注2]。

3. 主語の意志性の観点から見た他動詞構文αとβの相違点

3.1.主語の意志性の有無

次に、主語の意志性の観点から両他動詞構文を比較してみよう。はじめに次の一般化を想定しておきたい。

(21)他動詞構文αの主語は、他動詞構文βの主語と異なり、意志性を有していない。

他動詞構文βの主語には意志性がないとする議論は、これまでの研究でもなされている(井上1976、西村 1998 等参照)。本節では、この主張を、他動詞構文αとの比較の中で、具体的な言語事実を基に裏づけてみたい。

第1に、他動詞構文αと異なり、他動詞構文βでは、動詞句を代用表現「そうする」で置き換えられない。「そうする」は、意志性を有した動詞句とのみ置き換え可能だからである。

(22)a. 太郎は山田歯科で歯を抜いた。次郎もそうした。　(他動詞構文α)
b.*太郎は交通事故で歯を折った。次郎もそうした。　(他動詞構文β)

第2に、他動詞構文αと異なり、他動詞構文βは命令文にすることができない。

(23)a. 都内で家を建てろ！　(他動詞構文α)
b.*雷で家を焼け！　(他動詞構文β)

一見すると、次の例は適格であるため他動詞構文βが命令文で成立すると思われるかもしれない。しかしながら、(24)は命令ではなく、祈願(ないしは呪い)を表す文であると解釈しなければ

ならない。

(24) 雷で家を焼いてしまえ！（他動詞構文β）

なぜなら、(24)の文は、「～と命令する」という述語の補文としては成立しないからである。

(25) 雷で家を焼いてしまえと{*命令した/祈った(呪った)}。

第3に、補助動詞「てしまう」の解釈の違いがある。一般に、「てしまう」には、動作の完了を表す「アスペクト的意味」と、表される事態が望ましくないという感情を表す「モダリティー的意味」とがあるとされる(杉本 1991 等)。通常、「モダリティー的意味」は、話し手による意志的な動作の場合は薄く、他者の行為や無意志的運動の場合には濃く現れやすい(杉本 1991: 124、金水 2000: 67)。この考察を踏まえて、次の例を比較してみよう。

(26) a. 海外では医療費が高いので、出発する前に親知らずを抜いてしまった。
（他動詞構文α）
b. うっかり転んで、歯を折ってしまった。（他動詞構文β）

「てしまう」は、(26a)では「アスペクト的意味」、(26b)では「モダリティー的意味」が優勢である。両文に見られるこの意味の違いは、次の完了性を示す副詞「もう」との共起性からもわかる。

(27) a. 出発する前に、もう親知らずは抜いてしまったよ。
b.*うっかり転んで、もう歯を折ってしまったよ。

このように、(26a)と(26b)の「てしまう」の意味の違いは、主語が意志性を有するか否かによって決定されているのである。

他動詞構文αにおける主語が意志性を有しているのは、それが行為を依頼する主体であるからである。例えば、次の例を比較してみよう。

(28) a. (写真屋のカメラマンに撮ってもらった場合)
花子は顔写真を撮った。
b. (突然、フライデーのカメラマンに撮られた場合)
*花子は顔写真を撮った。

(28a)と比べ、(28b)が極めて不自然なのは、主語の「花子」が潜在的動作主(＝カメラマン)に行為を依頼したというコンテキストが成立しないからである[注3]。

4. まとめと今後の課題

本稿では、主語が動作主とは解釈されない日本語における2つの他動詞構文を、主として（ｉ）動詞の意味構造、（ii）主語の意志性の2つの観点から比較し、それぞれ、次の一般化を提示した。

（ｉ）他動詞構文αは、他動詞構文βと異なり、行為過程が（潜在的に）含意されている。
（ii）他動詞構文αの主語は、他動詞構文βの主語と異なり、意志性を有していない。

本稿では、主に他動詞構文αとβの相違点について論じたが、今後は両構文が如何なる共通点を有しているのかを意味論的、語用論的な観点から探ってみたい。

注

注1 「てもらう」構文における与格名詞句が動作主であるとする議論に関しては、高見・久野（2002）、澤田（印刷中）を参照していただきたい。

注2 この点に関しては、佐藤（2005）も次の興味深い例を比較している。

（ｉ）a. 花子がセーターをつくった。（母にお願いしてセーターをつくってもらった場合）
b.*花子がセーターを編んだ。（母にお願いしてセーターを編んでもらった場合）

佐藤（2005: 97）によれば、「「作る」という動詞は、どのような動作過程を経るかという点には関心がなく、結果として当該の生産物が生み出されているという点にのみ関心がある」のに対し、「「編む」という動詞は動作過程のあり方がどのようなものであるかという点を特定するもの」であるという。

注3 須賀（1999）が提示した次の他動詞構文αの例も本稿の分析をサポートしてくれる好例である。

（ｉ）（一郎は買ってもらった野球帽を祖父に被せてもらった）
一郎が野球帽を被った。
（ii）（人形に帽子を被せた）
??人形が帽子を被った。　　（須賀 1999: 26）

（ｉ）と異なり（ii）が他動詞構文αとして成立しないのは、須賀（1999: 26）が指摘するように、「人形」は意志性を持った主体ではないからである。

参考文献

天野みどり. 1987.「状態変化主体の他動詞構文」『国語学』151.

天野みどり. 2002.『文の理解と意味の創造』東京: 笠間書院.

井上和子. 1976.『変形文法と日本語(下)』東京: 大修館書店.

金田一春彦. 1976.「国語動詞の一分類」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』東京: むぎ書房.

金水敏. 2000.「時の表現」仁田義雄・益岡隆志(編)『時・否定と取り立て』東京: 岩波書店.

Langacker, Ronald W. 2002[2]. *Concept, Image and Symbol.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Mani, Inderjeet et al. 2005. *The Language of Time.* Oxford: Oxford University Press.

松本曜. 1998.「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114.

西村義樹. 1998.「行為者と使役構文」中右実(編)『日英語比較選書9 構文と事象構造』東京: 研究社出版.

仁田義雄. 2002.『副詞的表現の諸相』東京: くろしお出版.

パルデシ、プラシャント・堀江薫. 2005.「「非意図的な出来事」の認知類型—言語理論と言語教育の融合を目指して—」南雅彦(編)『言語学と日本語教育IV』東京: くろしお出版.

佐藤琢三. 1994.「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84.

佐藤琢三. 2005.『自動詞文と他動詞文の意味論』東京: 笠間書院.

澤田淳. 2005.「受身的・使役的特性を有する他動詞構文について—認知的・語用論的アプローチ—」『日本語学会 2005 年度秋季大会予稿集』

澤田淳. 印刷中.「日本語の授受構文のヴォイス的特性:「X が Y に V てもらう」構文が有する「受動性」と「使役性」を中心に」『日本認知言語学会論文集』6.

須賀一好. 2000.「行為の主体に関する認識と表現」『山形大学日本語教育論集』3.

杉本武. 1991.「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティー」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会科学編』4.

Smith, Carlota S. 1997. *The Parameter of Aspect.* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

鈴木容子. 2003.「「美容院で髪を切る」のような言い方が成立する条件」『日本語文法学会第4回大会発表論文集』43-51.

高見健一・久野暲. 2002.『日英語の自動詞構文』研究社.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy.* Itbaca: Cornell University Press.

It-Cleft 構文—型と文脈—*

篠原弘樹
（大阪大学大学院）

１．序

本稿は、英語の *It*-Cleft 構文[It be X that Y]の型と文脈について考察を行う。型とは、*It*-Cleft 構文の下位タイプを示す。先行研究によると、この型には、少なくとも三種類が存在するとされている（Prince (1978), Declerck (1988), Hedberg　(1990, to appear)）。(1)は、その三種類の型とそれらの機能をまとめている。以後、それらを話題(Topic)と叙述(Comment)の頭文字をとり、ＣＴ型、ＴＣ型、ＣＣ型とする。叙述と話題については、(2)の定義を用いる。

(1) 3 種類の *It*-Cleft 構文[1]

a. [It be 叙述 that 話題]　→ＣＴ型 (3)
b. [It be 話題 that 叙述]　→ＴＣ型 (4)
c. [It be 叙述 that 叙述]　→ＣＣ型 (5)　　(Hedberg (1990, to appear))

(2)Gundel (1988)

a. 話題(Topic); An entity, E, is the topic of a sentence, S, iff, in using S, the speaker intends to increase the addressee's knowledge about, request information about or otherwise get the addressee to act with respect to E
b. 叙述(Comment); A predication, P, is the comment of a sentence, S, iff, in using S the speaker intends P to be assessed relative to the topic of S.

話題と叙述を簡潔に述べると、話題は、その文脈にて命題が何について述べているかを示す要素であり、叙述はそれについて言及している要素である。具体的に例文を通して話題と叙述を確認する。(3)-(5)は、各型の例文である。(3)は、ＣＴ型、(4)はＴＣ型、(5)はＣＣ型である。

(3) I've heard that Mary is in love with someone. It's John that Mary loves.
[叙述]　[話題_____]

(4) I've heard John proposed to Mary in Paris. It's there that she was born and grew up.
[話題]　[叙述_____]

(5) ## It was in 1979 that Margaret Thatcher became the first female Prime Minister of
[叙述__]　[叙述_____
the United Kingdom.[2]
_____]

(3)は、「メアリーは誰かが好きだ」について言及しているため、Ｙが話題を示し、「誰か」について言及しているＸが叙述となる。一方、(4)では、パリの出来事について言及されているためにＸ

が話題を示し、それについて言及しているＹが叙述を示す。そして、(5)では、ＸとＹの両方が叙述となる。その理由は、##が示すように(5)が談話の初頭に使用されているために(5)の命題が何について言及しているかがその時点で決定できないためである。

次に、本稿で扱う *It*-Cleft 構文の型と文脈の問題にについて取り上げる。上記では、*It*-Cleft 構文の三種類の型を紹介した。この型の生起に関して、Quirk et al.(1985: 1384)では、それは文脈に依存すると指摘している。(6)から(8)は、その文脈依存の関係を具体的に示している。各(-a)の *It*-Cleft は、ＣＴ型を示し各(-b)の *It*-Cleft は、ＴＣ型である。そして、各(A)にて、*It*-Cleft の先行文、即ち文脈を様々な形にて提示している。表１は、それらの容認性をまとめている。ＣＣ型については、後に取り上げる。

(6) a. A: I hear Tom took a trip to Paris. B: ??It was Mary that John met there.
b. A: I hear Tom took a trip to Paris. B: It was there that John met Mary.
(7) a. A: I hear John met someone in Paris. B: It was Mary that John met there.
b. A: I hear John met someone in Paris. B: It was there that John met Mary.
(8) a. A: Who did John meet in Paris? B: It was Mary that John met there.
b. A: Who did John meet in Paris? B: ??It was there that John met Mary.

	a.(CT 型) [It be 叙述 that 話題]	b.(TC 型) [It be 話題 that 叙述]
(6)	×	○
(7)	○	○
(8)	○	×

表１

上記から、文脈、即ち(A)に依存してＣＴ型とＴＣ型の生起が決定されているために、各型の生起は、文脈に依存して決定されていることがわかる。そして同時に、ある型を好む文脈の存在が示唆されている。即ち、ＣＴ型を好む文脈（8A）がある一方で、それを許容しない文脈（6A）が存在する。また、ＴＣ型についても同様である。従って、Quirk et al.（1985）の指摘には、不十分な点が生じる。つまり、型は確かに文脈に依存するが、同時にある型を好む文脈が存在するので、その傾向までをも考察する必要がある。本稿は、これを問題とする。

２節では、提案の前提となる考えを紹介し、３節にて提案を行う。４節と５節では、提案にもとづき分析を行う。６節は、結語である。

２．図と地

２節では、提案の前提となる考えを紹介する。本稿では、認知言語学の考えを基にし、知覚心理学で用いられている図と地の分化を言語に応用する。図と地の分化とは、人間がある客観的に同じ何かしらの事物、例えば図形をみている際に、何に注目してみるかによって、その事物の見え方が異なるといった知覚上の現象に関して、提案された考えである。図と地の規定に関しては、これまでに様々な特徴が示されてきたが、本稿では、簡潔に図とは、注意を引きやすい

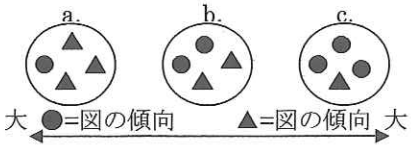
もの、地は注意の対象となりにくいものとする。図と地の分化を応用した代表的言語研究としては、Talmy(2000)があげられる。(9)の F は図(Figure)、Gは、地(Ground)を示す。

(9) a. The bike (F) is near the house (G).
　　b. ?The house (F) is near the bike (G).　　Talmy (2000: 314)

(9)の問題は、(9a)と(9b)が同じ状況を言語化しているにもかかわらず、なぜ二種類の言及の方法があるのかということである。Talmy(2000)は、その解としてバイクが図になるか家が図になるのかという人間の主体の対象の捉え方に帰すると説明している。

本稿でも、Talmy(2000)と同様に図と地の分化を用いるが、これまでに指摘されていないある特徴を言語に応用する。まず、基本的な図と地の分化現象を紹介し、その後に、その特徴を紹介する。

(10)

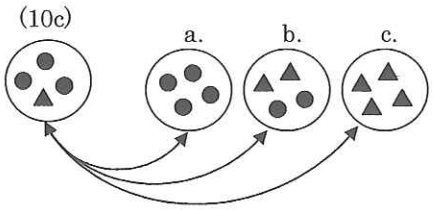


(10a)→●が図となりやすい。
(10c)→▲が図となりやすい。
(10b)→●と▲が共に図となりやすい。
(図と地の反転の状態)

(10a)から(10c)の円に囲まれた図形において、図を考えると、(10a)では●が、(10c)では▲が図となりやすい。そして、(10b)では、●と▲が共に図となりやすい、所謂、図と地の反転の状態といえるだろう。また、(10a)-(10c)のように並べることによって、図や地の成りやすさには、傾向があることもわかる。

しかし、これを他の図形と比べるとある特徴が得られる。(11)は、(10c)を再度提示し、他の図形と比べている。

(11)



(11)の(10c)を単独でみると▲が、図となりやすい。しかし、(10c)と(11a)を対比すると、(10c)には、(11a)の●と異なる▲がひとつあり、(10c)と(11c)を対比すると、(10c)には、(11c)の▲と同じ▲がひとつあるといえる。さらには、(10c)と(11b)を対比すると、(10c)には、(11b)の▲と同じ▲がひとつある、もしくは、(11b)の●と異なる▲がひとつあるといえる。従って、(10c)の図形単独では、▲が図になるが、それを何かと比較することによって、二種類の図が生じる。即ち、何かと相違する図と共通する図である。これは、人間の経験という点にも置き換えることができる。

(12) a. 見知らぬ人の中に、知り合いが一人だけいる場合
　　b. 知り合いの中に、見知らぬ人が一人だけいる場合　　(大山 (2000))

(12)の状況を考えた場合、(12a)では知り合いに、(12b)では見知らぬ人に目がいくだろう。よって、(10c)と同様に、ある集団のなかで他とは異なるという点で、ある１人が図となりやすい。しかし、それには、(10c)と同様に知人としての図と見知らぬ人としての図、即ち、主体の記憶と共通する図と相違する図の二種類の状態がある。本稿では、このような何かと対比させることによって、図の状態に違いがでるという特徴を応用し、次節にて提案を行う。

３．提案

前節の図と地の特徴を応用し、(13)を提案する。

(13) *It*-Cleft 構文のＸは常に図を示す。
ただし、図には二種類あり、その傾向は、制約(14)にて決定される。

(14)制約：先行命題と *It*-Cleft 命題を相対的にみた場合、共通点が多い場合は、相違点が図となりやすく、ＣＴ型が好まれる。一方、相違点が多い場合は、共通点が図となりやすく、ＴＣ型が好まれる。両命題が同程度にあたる場合は、共通点と相違点の両方が図になりやすく、ＴＣ型ＣＴ型、共に生起可能となる。図１は、この関係を示す。

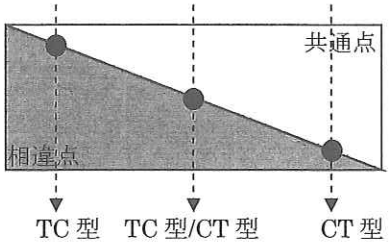
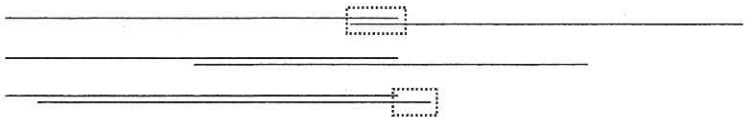


図１

具体的に前節の図と地の特徴が、*It*-Cleft 構文にどのように応用されているかを述べると、提案(13)は、前節の(11)の(10c)と対応し、(14)は(10c)と(11)の他の図形との関係に対応している。(10c)の▲が図であるように *It*-Cleft 構文のＸは図を示す。そして、(11)の(10c)と他の図形を比べることで図の状態に違いが生じるように、*It*-Cleft 構文においても先行する文と *It*-Cleft 文を比較することによって、二種類の図が生じる。

さらに、この二種類の図は、談話の必然性という観点でも考えられる。(15)の線は、命題を示す。

(15) a.
b.
c.



(15a)では、先行する命題と後続の命題との間に多少の共通する部分がある。この共通する部分が談話で最も重要な図となる。その理由は、もしこの共通する部分がなければ、先行文と後続文との間にて談話が繋がらないためである。具体的には、(16a)のような例があげられる。(16a)の後続文では、先行文との共通がないため、容認性が低くなっている。

(16) a. A: I hear Tom took a trip to Paris.　B: ?? John met Mary.
　　b. A: I hear Tom took a trip to Paris.　B: There, John met Mary.

一方、(15c)では、先行文と後続文との共通点が多く、相違する部分が多少ある。この場合は、その多少の相違点が図となる。その理由は、もし、その相違する部分がなければ、先行文と後続文との間にて差異がなく、情報価値がなくなるためである。具体的には、(17a)のような例があげられる。(17a)の後続文では、*someone* が先行文の *who* によって含意されているために両方の文の間で相違点がないために、情報価値がなく容認性が低くなる。

(17) a. A: Who kissed Mary?　B ??It's someone that kissed Mary.
　　b. A: Who kissed Mary?　B: It's John that kissed Mary.

３節では、(13)にて提案を行い、それに伴う制約(14)を提示した。これらは、前節の図と地の分化の特徴を *It*-Cleft 構文に応用している。そして、その提案や制約は、談話の必然性という点においても妥当である。次節では、これをもとに分析を行う。

４．分析

提案と制約を用い分析を行う。(18)から(20)は、１節の(6)から(8)である。(21)は、(18)から(20)の共通点と相違点の要素をまとめている。

(18) a. A: I hear Tom took a trip to Paris.　B: ??It was Mary that John met there.
　　b. A: I hear Tom took a trip to Paris.　B: It was there that John met Mary.
(19) a. A: I hear John met someone in Paris. B: It was Mary that John met there.
　　b. A: I hear John met someone in Paris. B: It was there that John met Mary.
(20) a. A: Who did John meet in Paris?　B: It was Mary that John met there.
　　b. A: Who did John meet in Paris?　B: ??It was there that John met Mary.

(21)

	共通する要素(共通点)	差異の要素(相違点)
(18)	Paris	I, hear, Tom, took a trip, John, met, Mary
(19)	Paris, John, met	I, hear, Mary
(20)	Paris, John, met	Mary

(21)より、(18)では、相違点が共通点より多いために共通点が図となるＴＣ型を *It*-Cleft に要請

し、(18)では、共通点が相違点より多いために相違点が図となるＣＴ型を *It*-Cleft に要請する。そして、(16)では、共通点と相違点が同程度のためにＴＣ型かＣＴ型を *It*-Cleft に要請すると提案と制約より導くことができる。この予測を容認性をまとめた表１と比較すると、予測と事実が一致するので、提案と制約の妥当性が認められる。

次にＸに *in my opinion* が生起する場合を考察する。Takami (1988, 1991)は、*in my opinion* は、情報価値が低いため(less important information)焦点(叙述)としてはＸに生起不可と指摘している。しかし、(22b)のように適切な文脈が与えられると、容認される。

(22) a. *It is *in my opinion* that "*Last Samurai*" is not a great movie, both for its story line and character development.

b. "*Last Samurai*" touched many people. But it is *in my opinion* that this is not a great movie, both for its story line and character development.

(22ｂ)の *It*-Cleft の共通点と相違点の要素をみると、相違点が多い。よってＴＣ型の *It*-Cleft である。ここで、*in my opinion* の使用状況を考えると、それは、ある意見に対して異なる意見を述べる場合に用いられると考えられる。よって、*in my opinion* は、暗黙的に共通点となり、ある意見(先行命題)に対する自分の意見(相違点)を要求すると考えられる。従って、これを考慮すると、Takami の指摘通り、*in my opinion* が相違点になる、即ち焦点を示すようなＣＴ型では生起不可だが、共通点となるようなＴＣ型では、容認される。

５. Further Analysis

前節では、先行文と *It*-Cleft 文との間に言語化された共通点が見出される場合のみを扱ってきた。しかし、実際の文脈では、そういった共通点が明示されていない場合が多々ある。(23)の *the cover* は、先行文にて言語化されていないし、(24)では、談話の初頭使用のため共通点がない。こういった例文を捉えるために、(25)の制約を追加する。

(23) So I learned to sew books. They're really good books. It's just the covers that are rotten.
(Prince (1978:896))

(24) ## It was in 1979 that Margaret Thatcher became the first female Prime Minister of the United Kingdom. =(5)

(25) 制約(追加)：共通点には、一般知識や文脈から得られる情報も含まれる。CC 型は、一般知識と共通点がある場合に容認される。図２は、この関係を示す。

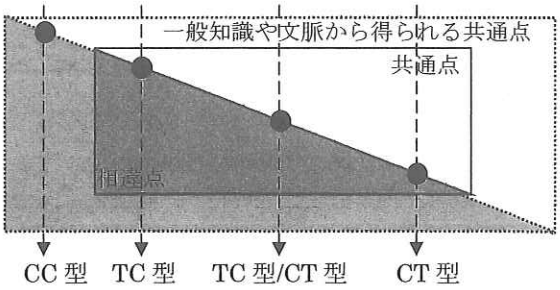


図２

(25)を用いて(23)と(24)を分析すると、(23)では、先行する文に *books* とあるため、*the cover* が文脈から得られる共通点となる。よって、共通点を図とするＴＣ型と考えられる。そして、(24)では、初頭使用のため、比較するものがないために相違点が多い。よって、ＴＣ型もしくは、ＣＣ型と考えられる。両者の違いは、ＴＣ型が先行命題や文脈に関わる共通点が図になる一方で、ＣＣ型は、一般知識に含まれる共通点が図である。(24)の *in 1979* は、*that* 以後の命題を解釈するために一般知識から参照可能という意味での共通点となりえるため CC 型となる。CC 型の X が、一般知識から参照可能な共通点でなければならないという点は、(26)にて示されている。

(26) ##It's George Bush/ ?John/ ??a man that delivered his first speech in 2001.

(26)では、*George Bush*/ ?*John*/ ??*a man* とＸの要素の具体性が減少している。つまり、右にいくにつれて一般知識から参照しにくくなっている。中間にある *John* の指示対象は、聞き手の知識に依存するために容認度が曖昧となっている。

６．結語

本稿では、*It*-Cleft 構文の型と文脈の関係を考察した。本稿の目標は、型がどのような傾向をもって文脈に依存するかであった。これは、提案(13)と制約(14)と(25)にて捉えられている。また、図１や図２から三種類の *It*-Cleft 構文の型は、明確な区別がなく連続体をなしていることが示されている。

* 本稿は、２００５年１２月１０日日本語用論学会、第８回大会の口頭発表に加筆・修正を加えたものである。本稿執筆にあたり、構想の段階から最後まで暖かく見守ってくださった指導教官の大庭幸男先生、岡田禎之先生、ならびに認知言語学研究会の主催であられる河上誓作先生に感謝の意を表したい。また、その認知言語学研究会、さらに HCP(Handai Cognitive Linguistics Project)における議論もまた大変有意義であった。町田章氏をはじめ参加者のみなさまには、この場をかりてお礼申し上げたい。なお、本稿の不備はすべて筆者自身の責任である。

注

[1] 他に Prince (1978), Declerck (1988) などが *It*-Cleft 構文の下位分類を行っている。
Jackendoff (1972)や Chomsky (1957)の[it be 焦点 that 前提]は、本稿の定義では、焦点が叙述、前提が話題

に対応する。

[2] ## 談話の初頭に使用されたことを示す。

参考文献

Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures.* The Hague: Mouton.

Declerck, R. 1988. *Studies on Copular Sentences: Clefts and Pseudo-Clefts.* Dordrecht: Foris.

Gundel, J.K. 1988. "Universals of Topic-Comment Structure." In M. Hammond et al. eds. *Studies in Syntactic Typology,* 209-239. Amsterdam: John Benjamins.

Hedberg, N. 1990. *The Discourse Function of Cleft Sentences in English.* Ph.D Dissertation. University of Minnesota.

Hedberg, N. and L. Fadden. to appear. "The Information Structure of *It*-Clefts, *Wh*-Clefts and Reverse *Wh*-Clefts in English." In N. Hedberg and R. Zacharski eds. *The Grammar-Pragmatics Interface: Essays in Honor of Jeanette K. Gundel.* Amsterdam: John Benjamins.

Jackendoff, R. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar.* Cambridge, MA: MIT Press.

大山 正. 2000 『視覚心理学の招待：見えの世界へのアプローチ』東京：サイエンス社.

Prince, E.F. 1978. "A Comparison of *Wh*-Cleft and *It*-Cleft in Discourse." *Language* 54, 883-906.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Takami, K. 1988. "Preposition Stranding: Arguments against Syntactic Analysis and an Alternative Functional Explanation." *Lingua* 76, 299-335.

Takami, K. 1991. "A Functional Approach to Preposition Stranding in English." In H. Nakajima ed. *Trends in Linguistics-S.A.R.*16, 414-453. New York: Mouton de Gruyter.

Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics,* vol. I. Cambridge, MA: MIT Press.

「ろくな／大した ... ない」表現と非対格性*

高見　健一
学習院大学

1. はじめに ― 西垣内（1993）、Hirakawa (2003) の分析

日本語には、「決して（行かない）」、「何も（知らない）」、「（水）しか（飲まない）」のような「否定対極表現」（Negative Polarity Item）と呼ばれる表現がある。西垣内（1993）、Hirakawa (2003) は、このような否定対極表現のうち、「ろくな／大した ... ない」表現を考察し、次の例を提示して、「ろくな／大した」は、他動詞文の目的語にはつくが、主語にはつかないと述べている。

(1)　a.　学生がろくな論文を書かない。（目的語）
　　b.　*ろくな学生が論文を書かない。（主語）
(2)　この頃、ファーストフードの店が増えています。
　　a.　そのため、学生が大した物を食べません。（目的語）
　　b.　*そのため、大した学生が物を食べません。（主語）

「ろくな／大した」が、目的語の「論文」、「物」についている (1a), (2a) は適格であるが、主語の「学生」についている (1b), (2b) は不適格である。この点から西垣内（1993）、Hirakawa (2003) は、「ろくな／大した ... ない」表現には「主語と目的語の非対称性」（subject-object asymmetry）が存在すると述べている。

西垣内（1993）、Hirakawa (2003) は、さらに次のような自動詞文を提示し、「ろくな／大した」が、主語指示物の非意図的事象を表わす自動詞（「凍る、焼ける、壊れる」等）、すなわち「非対格動詞」の主語につけば適格となるが、主語指示物の意図的行為を表わす自動詞（「走る、泳ぐ、遊ぶ」等）、すなわち「非能格動詞」の主語につけば不適格になると述べている。

(3)　a.　ろくな物が落ちてなかった。（非対格動詞）
　　b.　*ろくなタレントがふざけなかった。（非能格動詞）
(4)　a.　昨日大きな地震がありました。幸い、大した物は壊れませんでした。（非対格動詞）
　　b.　週末、ディズニーランドへ行きました。*大した若者が遊んでいませんでした。（非能格動詞）

「ろくな／大した」が非対格動詞「落ちる」、「壊れる」の主語「物」についている (3a), (4a) は、適格である。一方、「ろくな／大した」が非能格動詞「ふざける」、「遊ぶ」の主語「タレント」、「若者」についている (3b), (4b) は、不適格である。

生成文法や関係文法では、非能格動詞の主語は、基底構造でも表層構造でも主語位置にあるが、非対格動詞の主語は、基底構造で目的語位置にあると仮定されている (Burzio 1986 等を参照)。そうすると、(1)-(4) の事実は、次の仮説として一般化されることになる。

(5) 「ろくな／大した ... ない」構文に課される制約：「ろくな／大した ... ない」構文は、「ろくな／大した」が、基底で目的語の位置にある要素につけば適格となるが、主語の位置にある要素につけば不適格となる。

西垣内 (1993)、Hirakawa (2003) の主張する (5) の制約をより平易に言うと、「ろくな／大した」は、他動詞の目的語と非対格動詞の主語にはつくが、他動詞の主語と非能格動詞の主語にはつかない、ということになる。

本稿は以下で、「ろくな／大した」が他動詞の主語や非能格動詞の主語にもつく事実を示し、(5) の制約が妥当でないことを明らかにする。そして、「ろくな／大した ... ない」構文の適格性は、非対格性に依存する現象ではなく、この構文の表わす意味と我々の語用論的知識に依存する現象であることを示す。

2. (5) の制約の問題点

(5) の制約は、「ろくな／大した」が他動詞の主語や非能格動詞の主語にはつかないと規定しているが、次の例を見てみよう。

(6) a. このままでは、ろくな学生がわが校を受験しない。改革が必要だ。
b. ある大臣が、「日本人が英語ができないのは、ろくな教師が英語を教えないからだ」と言い、多くの反発をかっている。
c. 大した建設会社がこのマンションを造らなかったのか、震度５程度の地震で壁にヒビが入ってしまった。
d. 最近は大した職人がタンスを作らないのか、昔のような逸品がなくなっている。

(7) a. その歌謡番組を見たけれど、ろくな歌手が歌わなかったので、がっかりだった。
b. 魚を捕りに海にもぐったけれど、ろくな魚が泳いでいなかった。
c. 菊花賞レースじゃないので、昨日のレースは大した馬が走らなかった。
d. （海水浴場での水着姿の女性の会話）

A:　ステキな男の人いた？
B:　うぅーん。大した男の人は泳いでないわ。

「ろくな／大した」が、(6a-d) では他動詞の主語に、(7a-d) では非能格動詞の主語についているが、これらの例は、いずれも日本語として自然で、何ら問題のない適格文である。そしてこの事実は、(5) の制約が妥当ではなく、「ろくな／大した . . . ない」構文の適格性が、非対格性に依存する現象ではないことを示している。

3.　「ろくな／大した . . . ない」構文の意味的、機能的分析

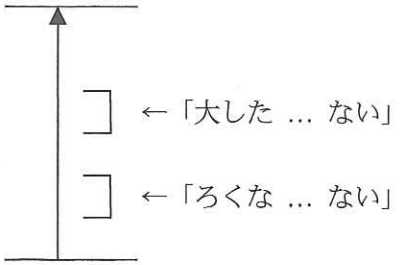
3.1　「ろくな」と「大した」の意味の違い

Hirakawa (2003) では、「ろくな」と「大した」が同じ意味を伝達するとされているが、「ろくな」は、「まともな」、「満足のいく」、「よい（として受け入れられるような）」という意味で、「大した」は、「それほどの」、「取り立てて言うほどの」、「特別な」という意味である（『新選国語辞典』、『新明解国語辞典』等参照）。この点を踏まえて、次の例を見てみよう。

(8)　a.　会議ではろくな（= まともな／満足のいく／いい）意見が出なかった。（→つまらない意見ばかり出た）
　　b.　会議では大した（= 取り立てて言うほどの／特別立派な）意見が出なかった。（→そこそこの意見は出た）
(9)　a.　講演を聞きに行ったが、ろくな話ではなかった。（→つまらない話だった）
　　b.　講演を聞きに行ったが、大した話ではなかった。（→特別いい話ではないが、そこそこの話だった）

(8a) のように、「会議ではろくな意見が出なかった」と言うと、「まともな意見が出ず、つまらない意見ばかり出た」という意味になるが、(8b) のように、「会議では大した意見が出なかった」と言うと、「特別立派な意見は出なかったが、そこそこの意見は出た」という意味になる。同様に、(9a) のように言うと、その講演は随分とつまらない話だったという意味になるが、(9b) のように言うと、その講演は特別いい話ではなかったが、そこそこの話ではあったという意味になる。つまり、「ろくな N . . . ない」と「大した N . . . ない」が、肯定文に置き換えられた場合に、実際に述べようとしている名詞（句）は、その名詞（句）の優秀さ／良さ／重要性などの程度において、後者の方が前者より上で、「ろくな N . . . ない」は、低く評価された名詞（句）（物事や人）を表わす。よって、両者は次のように示される。

(10)　名詞（句）指示物の優秀さ／良さ／重要性などの程度



上記の意味の違いにより、次のような適格性の違いが生じる。

(11)　a.　　大した物ではありませんが、食べて下さい。
　　b.　　??ろくな物ではありませんが、食べて下さい。

(11a) は、「取り立てて言うほど立派な物ではないが（= まずまずの物なので）、食べて下さい」という意味で、人に物をあげる場合の控え目な表現として適切である。しかし (11b) は、相手にあげようとする物が、まともな物ではなく、悪い物だと述べているので、それを「食べて下さい」と勧めることと適合せず、不自然な文となる。

3.2　「ろくな ... ない」構文に課される意味的／機能的制約

まず、(1a)（以下に再録）から考えてみよう。

(12)　学生がろくな論文を書かない。(=1a)

前節の (10) の図から分かるように、(12) の話し手は、学生の書く論文が質の低いものばかりであると「断定」(assert) している。これは逆に言えば、話し手が、学生が質の高い、いい論文を書いてくれるといいと思っていたことを「含意」(imply) する。よって、この点を明示すると次のようになる。

(13)　a.　　含意：学生がいい論文を書くとよい（自然な含意）
　　b.　　断定：学生がいい論文を書かず、悪い論文ばかり書く（あり得る断定）

(12) の話し手（教師等）は、社会常識的に考えて、学生がいい論文を書くといいと思っているので、(13a) の含意は自然な含意である。また、学生がいい論文を書かず、悪い論文ばかり書くというのは、実際にあり得ることなので、(13b) の断定も普通に考えられる断定である。

この点をもとに、次の文を見てみよう。[1]

(14) a.　*大地震があったが、ろくな物は／が壊れなかった。
　　b.　*昨夜、私の店が火事になったが、ろくな物は／が焼けず、ほっとした。

(14a, b) の話し手は、いい物、つまり、貴重で大切な物が壊れたり、焼けたりするといいと思っていることになる。しかし、常識的に考えて、地震で貴重な物が壊れたり、火事で大切な物が焼けたらいいと思っている人は、通例いない。そのため、(14a, b) は、実際にはあり得ない含意を持っているため、不適格であると考えられる。その証拠に、例えば、他人の家が火事になって、貴重な物が焼けてしまえばいいと思っているような話し手を想定すれば、(14) のような文は適格となり、実際、次の文は適格である。

(15) 昨夜、腹いせにあいつの家に火をつけてやったが、ろくな物が焼けず、残念だった。(cf. 14b)

この文では、話し手が腹いせに他人の家に火をつけているので、相手の家の貴重な物が焼ければいいと思っている。よって、この文の含意がこの状況と適合している。

以上の考察から、「ろくな . . . ない」は、「いい N が／を V するとよい」という含意を持つことが分かったが、「大した . . . ない」はどうだろうか。次の例を見てみよう。

(16) a.　昨夜、私の店が火事になったが、大した物は焼けず、ほっとした。
　　b.　昨夜、腹いせにあいつの家に火をつけてやったが、大した物が焼けず、残念だった。

(16a) の話し手は、自分の店が火事になったので、当然、貴重で大切な物が焼けなければいいと思っているはずである。一方、(16b) の話し手は、(15) で見たように、「あいつ」の家に腹いせに火をつけたので、貴重で大切な物が焼ければいいと思っている。(16a, b) の話し手の思い／期待が相反するにもかかわらず、(16a, b) の両方で「大した . . . ない」が用いられるという事実は、この表現が、「ろくな . . . ない」が持つような含意を持っていないことを示している。

次に (1b)（以下に再録）を考えてみよう。

(17)　*ろくな学生が論文を書かない。(=1b)

この文は、優秀でいい（と話し手が見なす）学生が論文を書かず、優れておらず、出来の悪い（と話し手が見なす）学生ばかりが論文を書くと述べている。しかし、私たちの社会では、優秀な学生が論文を書かず、出来の悪い学生だけが論文を書くというような状況は考えられない。(17) が不適格なのは、この文の意味する内容（断定）が、私た

ちの社会習慣からは容易に想起されるものではなく、実際には起こりそうもない状況を描写しようとしているためであると考えられる。

ここで、次のような状況を想定してみよう。大学４年生対象のある授業の最終試験で合格した学生が 25 人、不合格の学生が 5 人いたとしよう。その 5 人の学生は、しかし、就職がすでに内定しており、担当の教師は苦肉の救済策として、その学生に論文を書かせ、論文が提出されたとしよう。教師はその際、次のように言うことができる。

(18)　ろくな学生が論文を書かなかったので、いい内容のものはないだろうが、読んで見よう。

(18) は、上のような状況では、(17) と異なり、適格かほぼ適格と判断される。それは、このような状況では、優秀な学生は（最終試験に受かっているので）論文を書かず、出来の悪い学生だけが論文を書くという状況がすでに設定されているためである。つまり、(18) の表わす意味内容（断定）が、このような状況と何ら矛盾しないためである。

次に (3b)（以下に再録）を見てみよう。

(19)　*ろくなタレントがふざけなかった。(=3b)

この文には、まず、いいタレントがふざければよいという含意がある。そしてこの文は、いい／素晴らしいタレントがふざけず、素晴らしくなく、よくないタレントばかりがふざけたと述べている。しかし、何ら状況が設定されていない状態で、唐突に (19) が発話された場合、私たちは、「いいタレントがふざけたらよい」というようなことを一般に考えてはいない。つまり、(19) の含意は、私たちの語用論的知識や常識に適合していない。さらに (19) の断定に関しても、話し手が（テレビ番組等で登場した）タレントを「いい」タレントと「よくない」タレントに区別していて、その番組を見ると、「いい」タレントは出場していないか、していてもふざけず、「よくない」タレントだけがふざけたというような状況は、よほど特殊な状況がない限り、考えられない。(19) が不適格なのは、この文の含意が私たちの語用論的知識に適合せず、かつ、この文の断定が、私たちの社会習慣から考えて、容易に想起されるものではなく、実際にはありそうもない特殊な状況を描写しようとしているためだと考えられる。

(19) は、次のような状況を設定すれば、適格性が上がる。

(20)　√/?あるテレビ番組で、「有名タレントふざけ大会」というのがあったので見てみたが、ろくなタレントがふざけなかったので、面白くなかった。

(20) では、問題となる文に先立って、話し手が「有名タレントふざけ大会」というテ

レビ番組を見たという状況が設定されている。そのため、話し手が、有名でいいタレントがふざければよい（面白い）と思ってその番組を見たと考えることが可能である。そして、実際にその番組を見てみると、いい（と話し手が考える）タレントはふざけず、よくない（と話し手が考える）タレントばかりがふざけたという状況は、容易に想起されるものである。よって、(20) が（ほぼ）適格になると考えられる。

以上の考察から次の仮説が立てられる。

(21)　「ろくな... ない」構文に課される意味的／機能的制約：「ろくな ... ない」構文は、その文の含意が私たちの社会常識や文脈と適合し、その文の表わす意味内容（断定）が、私たちの社会習慣から考えて容易に想起され得るものであれば、適格となる。

この仮説は、本節で観察した例だけでなく、1節、2節で見た例の適格性も説明できる。

3.3　「大した ... ない」構文に課される意味的／機能的制約

「大した ... ない」は、3.2 節で観察したように、「ろくな ... ない」が持つような含意を持っておらず、話し手が、「取り立てて言うほど立派な N は ... ない」と断定するのみである。この点をもとに、まず、(2a, b)（以下に再録）を見てみよう。

(2)　この頃、ファーストフードの店が増えています。
　a.　そのため、学生が<u>大した</u>物を食べません。（目的語）
　b.　*そのため、<u>大した</u>学生が物を食べません。（主語）

(2a) は、（ファーストフードの店が増えたことにより）学生が、特別立派な食べ物、つまり、栄養価が高くて健康によい（と話し手が考える）食べ物を食べず、栄養価が低くて健康によくない（と話し手が考える）食べ物ばかりを食べると述べている。このような状況は、私たちの社会で容易に想起されるものである。一方 (2b) は、特別いい（と話し手が考える）学生が食べ物を食べず、まずまずである（と話し手が考える）学生ばかりが食べ物を食べると述べている。しかし、学生は特別いい学生であろうが、普通の学生であろうが、食べ物を食べるので、この文はまったく意味をなさず、このような状況は想起され得ない。(2a) と (2b) の適格性の違いは、この違いによるものと考えられる。((2b) は、「そのため」という接続詞で先行文と結ばれているが、両者が原因と結果の関係になっていないため、一層、この文は不適格で、支離滅裂なものとなっている。)

この点から次の仮説を立てることができる。

(22)　「大した ... ない」構文に課される意味的／機能的制約：「大した ... ない」

構文は、その文の表わす意味内容（断定）が、私たちの社会習慣から考えて容易に想起され得るものであれば、適格となる。

この仮説は、Hirakawa (2003) が提示する (4a, b)（以下に再録）も説明できる。

(4) a. 昨日大きな地震がありました。幸い、大した物は壊れませんでした。
b. 週末、ディズニーランドへ行きました。*大した若者が遊んでいませんでした。

地震があっても、貴重な物は壊れず、小物のみが壊れるという状況は、容易に想起される。よって、(4a) は、(22) の制約を満たし、適格となる（(6c, d), (7c, d) の適格性も同様に説明される）。一方 (4b) は、ディズニーランドへ行ったが、特別魅力的な若者が遊んでいなかったと述べている。しかし、我々がディズニーランドへ行くのは、通常、乗り物に乗ったりするためであって、そこで遊んでいる若者が魅力的な若者であるかどうかを判断するためではない。よって、この文の表わす意味内容（断定）が、社会習慣上、容易には想起され得ず、(22) の仮説が満たされないので、この文は不適格となる。

4. 結び

本稿では、日本語の「ろくな／大した . . . ない」表現を考察し、西垣内（1993）と Hirakawa (2003) で提示された非対格性の枠組みでは捉えきれない例があることを示した。そして、(21), (22) の制約を提出して、この表現の適格性が、純粋な統語的現象ではなく、意味的、機能的および語用論的現象であることを明らかにした。

註

* 発表の際、澤田治美先生、杉本孝司先生、山口治彦先生をはじめ、多くの方から貴重な指摘をいただいた。ここに記して感謝したい。なお、本稿のより詳しい考察として、高見・久野（近刊：第２章）を参照されたい。

1. (14a, b) は、「ろくな」が非対格動詞「壊れる」、「焼ける」の主語についているが、不適格であるため、これらの文も (5) の制約の反例となる。

引用文献

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach.* Dordrecht: Reidel.

Hirakawa, Makiko (2003) *Unaccusativity in Second Language Japanese and English.* Hituzi Syobo.

西垣内泰介（1993）「日本語の格付与の文法と言語獲得理論」『上智大学言語学会会報第８号』、160-172.

高見健一・久野 日章（近刊）『日本語構文研究』大修館書店。

省略の復元プロセス

永井典子
茨城大学
(nagai@mx.ibaraki.ac.jp)

1．はじめに

関連性理論（Sperber and Wilson 1986/95）の出現以来、過去20年にわたり発話解釈のメカニズムが解明されてきた。特に、発話解釈はどのようなプロセスからなり、それぞれのプロセスで特化される意味のタイプが明らかになってきた（Sperber and Wilson 1986/95, Carston 2000, 2001, 2002)。しかし、音声価値を持たない要素の復元（以下、省略の復元）プロセスは、飽和と自由拡充という2つ発話解釈プロセスで説明され、必ずしも体系的説明が行われているとは言いがたい。これは、1つには発話解釈プロセスの解明研究が英語のデータを基に行われており、省略をあまり許容しない英語の観察のみでは、省略現象そのものが十分に観察しきれていないことに起因しているように思われる。また、もう1つの原因としては、省略の復元プロセスの説明で、言語知識に関わる部分とその知識にアクセスし運用する部分とが明確に区別されていないことがあげられる。

ヒトの脳内に言語に特化した自律的言語機能が存在すると仮定している生成文法理論では、言語の知識に関する認知システムとその知識アクセスし運用する運用システムを明確に区別している。生成文法理論の出現以来、2つのシステムの相互関係の解明が目指されていたが、生成文法理論の最新モデルである極小プログラム(Minimalist Program）で、Chomsky (1995, 2000a, 2000b)は、以前にも増して一層この2つのシステムの相互依存関係の解明を主張している。というのは、運用システムが、生成文法理論の中心的研究課題であった認知システムそのものを評価する役割を果たすと考えられるからだ。ただし、生成文法理論の枠組みでは、これまでのところ、認知システムの研究が中心的に行われ、運用システムそのものの研究はほとんど行われていない。よって、認知システムと運用システムの相互依存関係を解明するためには、今後言語運用システムの解明が急務である[1]。

関連性理論の枠組みでなされた発話解釈メカニズムの解明は、今後生成文法理論の枠組みでの研究、特に認知システムと言語運用システムの相関関係を解明するために大きく貢献するに違いない。

本論文では、生成文法理論の基本的考え方、特に、言語機能の認知システムと運用システムを明確に区分し、その相互依存関係を考えることを視野に入れ、かつ関連性理論の考え方を参考にし、省略復元のプロセスの体系的な説明を試みる。まず、2節では、省略の復元プロセスがどのようなサブプロセスからなるのかを観察する。3節では、関連性理論の枠組みにおける省略の復元プロセスを概説し、その問題点を指摘する。4節で、日本語の日常会話における省略の復元プロセスを観察する。そして最後に、その観察結果を基に、省略復元のプロセスの体系的な説明を行う。

2．省略復元のプロセス

日本語は、英語と異なり日常会話において発話状況などから復元が可能であれば、かなり自由に省略が可能である。では、聞き手はどのように音声価値のない要素を復元しているのだろうか。本節では、省略の復元プロセスを考察してみたい。聞き手が、(1)のような省略を含む発話を受信した場合、

(1)　分かった？

まず(2)の鍵括弧で示されている部分が省略されていることを察知しなければならない。

(2)　[　　][　　]分かった？

そして次に、(2)の鍵括弧で示された空所の部分に、聞き手の言語知識に基づき、文脈や発話の状況に鑑みて、話者が意図したと思われる要素を補充するという、(3)のような作業を行なわれなければならない。

(3)　[あなたは][先生の言ったことが]わかった？

省略の復元プロセスでは、この空所の察知と空所の補充という 2 つのサブプロセスが、ほぼ同時に行われるので、この２つのサブプロセスを意識することが余りないのかもしれない。実際、次節でみるように関連性理論の枠組みでは、省略の復元プロセスがこれら 2 つのサブプロセスからなることが明示されないまま説明されている。しかし、空所の察知プロセスと空所の補充プロセスは、(4)の発話例が示すように２つの異なる独立した解釈プロセスからなることは、明らかである。

(4)　A1：太ったでしょう?
　　B１：わたし？
　　A２：そうじゃなくて、わたし

上記の会話で、発話 A1 は、主語が省略されている。この発話の聞き手 B１は、A1 の発話には、主語が省略されていることを正しく理解している。その証拠に、B1 の発話で、主語になり得ない「東京から」などという語句を補うのではなく、主語になりうる「わたし」を補っている。この事実から、B１が A1 の発話の主語が空所であることを察知していることは明らかである。

さらに、空所の察知プロセスと空所の補充プロセスを区別することは、発話の誤解釈の原因を正確に説明する上でも不可欠である。会話(4)は、誤解釈例である。誤解釈が生じた原因は、空所の察知ミスではなく、空所の補充ミスである。つまり、空所の補充プロセスにおいて話し手が想定した主語と聞き手が想定した主語が異なっていたため、誤解が生じている。話し手 A1 は、「太ったでしょう」という発話の主語は、話して自身(A1)と考えて発話したが、聞き手 B1 は、A1 の発話の主語を聞き手自身(B1)と理解した。このように、省略の復元プロセスを正確に記述するために、省略の復元プロセスを空所の察知プロセス

と空所の補充プロセスに二分することが必要である。

3．関連性理論の枠組みにおける省略の復元プロセス

関連性理論の枠組みでは、省略の復元プロセスは飽和と自由拡充の2つの異なる解釈プロセスで説明されている。Carston(2000)は、飽和のプロセスにおける省略の復元を、"saturation of a linguistically present but imperceptible constituent"(p. 22)、つまり、「言語的に存在しているが音声価値のない変数に具体的な価値を与えるプロセス」と説明している。Carston(2000)で取り上げられた、飽和のプロセスに含まれる省略の事例を見てみよう。

(5) a. Paracetamol is better [than what?]
b. It's the same [as what?]
c. He is too young [for what?]
d. It's not enough [for what?] (=(18) Carston 2000: p22)

例えば、(5.a)では、"Parcetamol"と比較されている対象は音声価値をもたない（実際に発話されていない）が言語的に存在しており、その対象として最もふさわしい要素を聞き手が解釈時に補充することになる。

一方、Carston (2001)は自由拡充のプロセスを "there is no compelling reason to suppose there is a covert element in the logical form of the utterance, and yet a contextually supplied constituent appears in the explicature "、つまり、「音声価値を持たない要素は命題形式には存在していないが、語用論的必要性に応じて自由に要素を補充するプロセス」と説明している。Carston(2001)によって用いられた例(6)を見てみよう。

(6) It's snowing [IN LOCATION X] (=Carston 2001: (6.d))

例文の(6) の"It's snowing"という発話の命題形式には、雪の降っている場所を言語的に保証する空所はないが、語用論的必要性からその場所を特定する必要性がある場合は、自由にその場所を補充することができることを意味している。

関連性理論の枠組みにおける省略の復元の説明では、省略の復元プロセスが空所の察知プロセスと空所の補充プロセスの2つのサブプロセスからなることは、明示的に示されていないが、省略の復元プロセスを、2節で明らかにしたように空所の察知プロセスと空所の補充プロセスに区別して考察する。というのも、飽和と自由拡充における省略の復元プロセスの説明の決定的な相違点は、省略の復元プロセス全体というより、空所の察知プロセスにあるからである。つまり、空所を察知するために必要な空所そのものが言語的に保証されているかどうかという点にある。飽和における省略の復元プロセスでは、言語的に空所の存在が保証されている、つまり言語知識にアクセスし、空所を察知すると考えられる。一方、自由拡充の場合は、空所の存在が命題形式に記述されていない、つまり言語知識として空所の存在は保証されていないが、語用論的必要性に応じて補充できると考えられる。言い換えると、語用論的必要性に応じて空所を創出できることを意味している。こ

の違いが、省略の復元プロセスのサブプロセスである空所の察知プロセスの正確な記述であるかどうかを日本語の省略の復元プロセスを観察しながら考察してみたい。

4. 日本語の省略復元プロセス

日本語の日常会話では、発話状況などから復元が可能であれば、主語、目的語などの項(argument)を省略することができる。

(7) 昨日、渡したよ (私は、それを、先生に)
(8) 置いておいたよ (私は、それを、そこに)

また、付加詞も省略可能である。

(9) 田中のほうがかっこいいよ (山田より)

さらに、日常会話では、述部が省略されることも多い。

(10) おかあさんは？ (いかがお過ごしですか？)

このように日本語の日常会話では文のさまざまな要素を省略できるが、聞き手はどのような要素でも省略可能とみなすのではなく、省略可能な要素と省略不可能な要素を正しく把握している。以下の例文の文法性の対比を観察してみよう。

(11) 昨日、渡したよ
(12) a. 昨日、私は、それを、先生にわたしておいたよ。
b.＊昨日、私は、それを、机の上に渡しておいたよ。

(13) 田中の方がかっこいいよ
(14) a. 田中のほうが山田よりかっこいいよ。
b.＊田中のほうが山田をかっこいいよ

(15) おかあさんは？
(16) a. おかあさんは何をしていますか？
b.＊おかあさんは、仕事が子供を

上記の例文(11)、(13)、(15) は省略を含んだ発話である。これらの発話それぞれに対応する(12)、(14)、(16)の a では、省略可能な要素が示されているのに対し、b の例文では、省略が不可能な要素が示され、その結果非文法的な文になっている。つまり、a と b の文法性の違いは、聞き手は言語的に保証されている空所と、そうではない空所を明確に区別していることを示唆している。

では、空所が言語的に保証されていなくても語用論的に必要な要素であれば、補充する

ことはできるのだろうか。例文(17)を観察してみよう。

(17)　陽子は、(＊子供に) 宿題をした

例文(17)は、宿題をするという行為の恩恵を誰が受けるのかということが会話の中で問題になっていれば、語用論的にその恩恵を受ける対象者を補充することは不可能ではないように思われる。しかし、実際には、例文(17)が示しているように、そのような発話は非文法的になる。つまり、語用論的に必要性が高くても、言語知識としてない空所を創出することはできないのである。

以上の観察結果から、3節で考察した関連性の枠組みで行われた省略の復元プロセスの説明は、空所の察知に関して正確な記述だと言えないことがわかる。つまり、関連性理論の枠組みでは、言語的に保証された空所と語用論的に創出できる2つのタイプの空所を想定しているが、語用論的に必要性が高くても空所は創出できない[2]。

5．省略の復元プロセスの説明

本節では、これまでに観察した結果をもとに、省略の復元プロセスを体系的に説明する。まず、空所の察知プロセスについて説明し、次に空所の補充プロセスについて説明する。

4節の日本語の省略復元プロセスの観察結果から、空所の察知プロセスについて以下のようにまとめことができる。

(18)　a.　日本語の日常会話では文のさまざまな構成要素を省略することができるにもかかわらず、聞き手は省略可能な位置と省略不可能な位置を明確に区別することができる。

　　b.　語用論的に補充の可能性が高いとしても、空所を語用論的必要性から自由に察知することはできない。

(18a)により、聞き手は、空所の可能なすべての位置を言語的知識として知っていると考えることができる。さらに、(18b) により、語用論的可能性が高くても、言語的に保証されている空所しか察知できない、つまり、空所を語用論的必要性から自由に創出することはできないと考えられる。この結果、空所に関して以下のように仮定することができる。

(19)　空所が可能な位置のすべて、及び可能な位置のみが LF に記述されている。

この仮定の妥当性は、Stanley(2000)からも支持される。Stanley(2000)は、例文(20)のような発話において、音声価値を有しない要素も解釈時に数量詞に束縛されうる事実を示し、補充を行うためには、その補充先が LF に記述されていなければならないことを示した。

(20)　Every time John lights a cigarette, it rains

例文(21)は、２つの解釈が可能である。１つは、「ジョンがタバコに火をつけるといつも、（ジョンがタバコに火をつけた場所およびその時）雨が降る」という解釈で、もう１つの解釈は、「「ジョンがタバコに火をつけるといつも、（どこかで、いつか）雨が降る」という解釈である。これら２つの解釈は、LF に空所の位置を変数で示すことにより、次のように説明することができる。１つ目の解釈は、雨が降る場所と時間を表す変数を LF に記述することによって、その変数が、オペレーターである数量詞（every time John lights a cigarette）に束縛されているとして説明がつく。一方、２つ目の解釈は、場所と時間を表す変数は、何にも束縛されず、様々なコンテクストから場所や時間を表す最適な要素を補充できるという説明が成り立つ。ここで重要なのは、１つ目の数量詞に束縛された解釈を行うためには、LF に場所と時間を表す変数が存在していなければならないという点である[3]。このように、Stanley は、１つめの解釈を行うためには、雨が降る場所と時間は発話されていないが、LF には、空所（変数）として存在しなければならないことを示した。

仮定(20)は、LF におびただしい数の変数の存在をみとめることになるという反論が考えられる。事実、Wilson and Sperber (2000)及び Carston(2002)は、Stanley の提案を受け入れると、想定できるさまざまな変数を LF に記述することになり、LF が複雑になると反論している。しかし、この反論に対して、LF に存在する空所の変数は、解釈時にすべてが活性化されるわけではなく、おびただしい数の空所が LF に記述されていることは問題にならないと反駁することができる。実際、発話解釈時に LF に存在する空所がすべて活性化するわけではないことが以下の会話例から分かる。

(21)A1：　録画しながら、テレビ見れるんだ。
　B1：　うん。
　A2：　CD？　ビデオ？
　B2：　え？　ドラマ

上記の会話で、A は、録画しながらテレビを見ている B に対して、(テレビ番組を)CD に録画しているのかビデオに録画しているのかを尋ねている（A2 の発話）。ところが、この発話を聞いた B は、「録画する」という動詞がとる二格の目的語の空所を察知せず、「見る」の目的語、つまり「何をみているのか」を答えている。このように、潜在的な言語知識が発話解釈時にすべて等しく活性化されるわけではなく、聞き手はごく一部の知識にアクセスし、その知識が活性化されると考えられるので、空所の可能な位置が LF にすべて記述してあったとしても、そのことが発話処理上問題（例えば、処理上の過大な負荷）になるとは考えられない。

以上、(19)は妥当性の高い仮定であると判断できる。よって、省略の復元プロセスの空所の察知プロセスは、仮定(19)を用い、次のように説明することができる。

(22)　空所の察知プロセス
　聞き手は、音声刺激により活性された、言語的に保証された空所を察知する。

LF に記述されている空所の活性化の違いを知るためには、どのような刺激がどのような

言語知識をより活性化するのかを調べる実証的研究が必要になる。たとえば、空所を許可(license)する要素によって、空所の察知可能性は異なると考えられる。つまり、主要部とその項のように語彙の項構造情報として辞書部門に記述されている要素の空所の察知は、容易であると考えられる。一方、発話された語彙の語彙情報として辞書部門に記述されていない要素の空所の察知は、語彙情報以外の間接的な情報に頼ることになり、より不確定なものになると考えられる。空所の察知可能性に関しては、今後の実証的研究によって明らかにされることを期待したい。

次に空所の補充プロセスについて説明したい。その前に、空所の補充に関して2節で観察した例を思い出していただきたい。

(23)　A1：太ったでしょう?
　　B1：わたし?
　　A2：そうじゃなくて、わたし

会話(23)のB1とA2は、察知された空所に聞き手が、話し手が意図した内容を補充するとは限らないことを示している。つまり、空所の補充は、複数の可能な候補の中から選好的に行われていることを示している。この選好性は、関連性理論に基づいた発話解釈の手続き((Relevance-theoretic comprehension procedure)(Sperber and Wilson 2002:p.18)に則って説明できる。つまり、複数の可能な候補の中から最もアクセスしやすい候補が選択されると説明できる。ただし、今のところ、Sperber and Wilson(2002)の発話解釈手続きだけでは、どのような要因が、異なる候補へのアクセス可能性を左右するのか明確ではない。空所の選好的補充とその補充プロセスにかかる制約を明確にしなければならない。その際に、構文解析モデルの1つである制約依存モデルが参考になる。

6．まとめ

本論文では、省略の復元プロセスは、空所の察知と空所の補充の2つのサブプロセスからなることを示した。そして、関連性理論の枠組みにおける省略の復元プロセスは、空所の察知プロセスが正確に記述されていないことを示した。さらに、日本語の省略復元プロセスの観察結果を基に、空所の察知プロセスと空所の補充プロセスを生成文法理論の基本的な考え方である言語知識とその運用という点から区別して説明した。空所の察知プロセスは、その前提となる空所の存在が言語的に保証され、LF に記述されていると仮定し、音声刺激がその知識の一部を活性化することにより察知が可能になると説明した。しかし、発話を解釈する際に、言語知識として蓄えられている空所の存在位置がすべて活性化されるわけではないことを示した。空所の補充プロセスは、選好的に行われており、この選好性は、基本的には、関連性の原則に即した“Relevance-theoretic comprehension procedure”に従って説明できる。つまり、複数の可能な候補の中から最もアクセスしやすい候補を選択し空所に補充すると説明できる。しかし、どのような制約が、異なる候補へのアクセス可能性を左右するのかは、明確ではない。この点に関しては、構文解析モデルの制約依存モデルの考え方を援用して今後さらに詳しく考察する必要がある。

注

1) 言語運用システムの研究の中では、構文解析研究が最も盛んに行われ、文理解のメカニズムを説明する様々なモデル（例えば、Frazier and Clifton (1996)の Construal モデルや、Trueswell and Tanenhaus (1994)や Sedivy and Spivey-Knowlton (1994)の制約依存モデル）が提唱されている。

2) このことは、関連性理論の枠組みで説明された自由拡充に含まれる省略復元のプロセスは、飽和のプロセスに属するものであることになる。Stanley(2000)もこの立場である。

3) Carston(2002)では、Stanley の反論として、語用論的必要性から命題形式に変数を創出する可能性を述べているが、この可能性を認めてしまうと、どんなに語用論的に必要性(14)が高くても変数を命題形式に創出できないもの(例えば、例１７)との区別を行うことが不可能になる。よって、語用論的に命題形式に変数を創出するという解決方法は、妥当ではない。

参照文献

Carston, R. 2000. Explicature and Semantics. *UCL Working Papers in Linguistics* 12:1-44.

Carston, R. 2001. Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction. *UCL Working Papers in Linguistics*13: 1-35.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell

Chomsky, N 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass: MIT Press

Chomsky, N 2000a, *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.

Chomsky, N 2000b. "Minimalist Inquiries," In Martin et al., eds. *Step by Step: Essay in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Cambridge, Mass: MIT Press

Frazier, L and Clifton,C. 1996. *Construal*. MIT Press

Sedivy, J and Spivey-Knowlton, M. 1994. The Use of Stuructural, Lexical, and Pragmatic Information in Parsing Attachment Ambiguities. In Frazier and Clifton (eds.) Perspectives on Sentence Processing. Lawrence Erlbaum Associates.

Sperber, D. and Wilson, D. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Sperber, D. and Wilson, D. 2002. Pragmatics, Modularity and Mindreading. *Mind and Language* 17: 3-23

Stanley, J. 2000. Context and Logical Form. *Linguistic and Philosophy* 23: 391-434

Trueswell, J.C. and Tanenhaus, N.J. 1994. Toward a Lexicalist Framework of Constraint-Based Syntactic Ambiguity Resolution. In Frazier and Clifton (eds.) Perspectives on Sentence Processing. Lawrence Erlbaum Associates.

Wilson, D. and Sperber, D. 2000. Truthfulness and Relevance. *UCL Working Papers in Linguistics* 12: 215-54.

日本語とドイツ語における誉めへの返答ストラテジー
－その傾向とドイツ人日本語学習者の中間言語の分析－

中村　香代子（東京大学大学院）

1. はじめに

本稿では誉めへの返答に焦点を当て、自由記述式談話完成テスト（以下 DCT とする）と多肢選択式談話完成テスト（MCT とする）を用いた調査結果から日独語母語話者間の返答パターンの差異やドイツ人日本語学習者の語用論的転移の有無の分析を試みる。さらに DCT 回答に見られた返答ストラテジー[1)]の分類分析によりその質的特徴も併せて考察したい。

2. 先行研究と研究課題

誉めは「話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して“良い”と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的あるいは暗示的に肯定的な評価を与える行為」（小玉 1996:61）と定義されるが、その適切性の基準には文化圏ごとの共通認識や価値観が反映される（Manes 1983; 古川 2003）。例えば日本語ではソト関係の者に対する誉めが多く、ウチ関係の者同士で誉め合うことは少ない。またソトの者に対してはウチ関係にある者を謙遜するのが普通である（牧野 1996）。一方ドイツ人は誉めの内容の明確さを重視し（大滝 1996）、親しくない相手からの誉めや率直さを欠く社交辞令的な誉めを嫌うとされている（Kotthoff 1989）。

また誉められた側は相手の言うことを否定して失礼になるのを避けるため相手を尊重して受け入れるか、はたまた誉めを認めて不遜に見られることを避けるため謙虚に否定するかのジレンマに直面する（Pomerantz 1978）が、この点についても誉めへの返答の分類研究や言語間対照研究が盛んに行われている。例えば横田（1986）の日英対照研究ではアメリカ人は日本人よりも自分と家族両方への誉めを素直に受け入れるが、アメリカ人日本語学習者は家族への誉めは日本人よりも多く受け入れるものの自分自身への誉めは直し過ぎにより日本人以上に否定することが確認された。また寺尾（1996）は日本語だけで見るとむしろ受け入れ型の返答の方が否定よりも多く、その代わりに言葉の置き換えや副詞による和らげなど謙虚さを示す方策が用いられると述べている。またドイツ語の誉めに関し Golato（2002）はドイツ人は非常によく誉めを受け入れると報告していることから、これらの先行研究結果を基に以下の仮説(1)~(3)を立てた。

(1) ドイツ人は日本人より（自身と家族に向けての）誉めを多く受け入れる。
(2) ドイツ人日本語学習者は直し過ぎの結果、自身への誉めを日本人以上に否定する。
(3) ドイツ人学習者は自分の家族への誉めは日本人よりも多く受け入れる。

さらに Takahashi & Beebe (1987)は、学習者の中間言語に見られる語用論的転移に対する学習環境の影響に焦点をあて、第二言語としての英語学習者に比べ外国語としての英語学習者グループにより強い語用論的転移を確認した。この結果に基づき、上の仮説に加え仮説(4)を立てた。

(4) 日本滞在歴の無い学習者は滞在歴のある学習者よりも強い語用論的転移を示す結果、誉めを多く受け入れる。

実際に日独母語話者とドイツ人日本語学習者がどの程度誉めを肯定・否定するか、また先に述べたジレンマ解決のため他にどのような種類のストラテジーを使用するかにつき調査結果を基に見て行きたい。

3. 調査方法

3.1 被験者

表 1 被験者グループ

	JNS 日本語母語話者	GNS ドイツ語母語話者	JFL 滞在歴の(殆ど)無い学習者	JSL 滞在歴のある学習者	計
男 性	32	31	11	25	99
女 性	30	31	23	19	103
計	62	62	34	44	202

JNS は東京大学の大学生・大学院生、GNS は Hamburg·Frankfurt·Berlin 大学の大学生・大学院生である。日本語知識の影響を避けるため GNS は学習者グループの被験者とは別に依頼、収集した。JFL は Hamburg·Frankfurt·Leipzig·Heidelberg 大学で日本語を学ぶドイツ人大学生・大学院生のうち日本滞在歴が無い（又は一ヶ月未満の）者（平均滞在期間 1.5 週間)、JSL は一年以上の滞在歴を持つドイツ人大学生・院生・社会人（44 人中 38 人が 3 年間以内で平均滞在期間は 2 年間、最長は 10 年(1 人)）である。

3.2 調査方法

誉めを受ける 6 場面を設定した自由記述式談話完成テスト（以後 DCT とする）と同じ 6 場面につき肯定・否定・回避・無言の 4 種類の選択肢を配した多肢選択式談話完成テスト（MCT とする）を実施（MCT は GNS を除く 3 グループに実施)。家族に対する誉めへの返答も調べる為、6 場面のうち 1 つは結婚式で花嫁姿の姉が誉められる場面とした。同じ内容の日本語版、ドイツ語版を各母語話者用に作成し、日本語学習者には状況説明はドイツ語、相手の言葉のみを日本語とした。DCT ではとっさに浮かんだ回答を（GNS 以外は日本語で）好きなだけ書くように、また何も言わないと思う場合はその理由を書くよう依頼し、選択肢の影響を避けるため DCT が終わるまで MCT を見ないよう指示した。回答に際して時間制限は無かったが、辞書や教科書の使用は禁止した。

3.3　分析

DCT回答は先述の横田（1986）の分類を参考にはっきり認める回答を肯定、はっきり否定する答えを否定、それ以外を回避の3つに分類（表2）し（ただし感謝と否定の表現が同時に現れる場合は全体の意味から否定に分類した）、各返答選択の度数、割合を求め、それにつきカイ二乗検定を行った。MCT回答についても同様の分析を行った。

表2　はっきりとした肯定や否定の例（今回の回答から抜粋）

肯定	日本語	ありがとう、僕も気に入ってる、そうですね、そう言ってくれると嬉しい
	独語	Danke, Mir gefällt es auch, Ja, Sie haben recht, Schön, dass es dir gefällt
否定	日本語	そんなことないですよ、それはいいすぎだよ、いえ大したことないです
	独語	Das stimmt doch nicht, Du übertreibst, Nein, nicht wirklich!
回避	日本語	え、本当？、そうですか？、どうですかねぇ…、（話題を変えるなど）
	独語	Ach, wirklich?, Findest du?, Na, ich weiß nicht…,（話題を変えるなど）

4. 結果

4.1　日独母語話者の誉めへの返答パターン

DCT回答における各被験者グループの場面ごとの返答選択割合を比較してまとめたものが表3である。

表3　DCT：4被験者グループによる返答選択の場面別割合比較

	誉め手と対象	肯定	否定	回避
1	甥：水泳の腕前	JNS > GNS > JSL > JFL 35 22 16 9 (56%) (37%) (36%) (32%)	JSL > GNS > JFL > JNS 14 12 5 7 (32%) (20%) (18%)(11%)	JFL > GNS > JNS = JSL 14 26 20 14 (50%) (43%) (32%) (32%)
2	友達：新しい髪型	GNS > JNS > JSL > JFL 52 50 27 19 (85%) (81%) (63%) (61%)	JFL > GNS > JNS = JSL 8 3 1 1 (26%) (5%) (2%) (2%)	JSL > JNS > JFL > GNS 15 11 3 6 (35%) (18%) (13%) (10%)
3	上司：字の上手さ	GNS > JNS > JSL > JFL 36 26 7 3 (60%) (43%) (16%) (10%)	JSL > JFL > JNS > GNS 35 23 31 15 (81%) (79%)(51%) (25%)	GNS > JFL > JNS > JSL 9 3 4 1 (15%) (10%) (7%) (2%)
4	妹の友達：スタイル	GNS > JFL > JSL > JNS 14 6 5 4 (27%) (21%) (12%) (7%)	JNS > JSL > JFL > GNS 43 23 13 23 (78%) (55%)(46%) (45%)	JSL > JFL > GNS > JNS 14 9 14 8 (33%) (32%) (27%) (15%)
5	友達の友達：テニスの技	GNS > JNS > JFL > JSL 17 13 4 3 (28%) (21%) (12%) (7%)	JSL > JFL > JNS > GNS 36 25 45 34 (82%) (76%)(73%) (57%)	GNS > JFL > JSL > JNS 9 4 5 4 (15%) (12%) (11%) (6%)
6	中年婦人：姉の花嫁姿	GNS > JSL > JFL > JNS 51 30 18 40 (82%) (73%) (67%) (66%)	JFL > JNS > JSL > GNS 7 11 4 0 (26%) (18%) (10%) (0%)	GNS > JSL > JNS > JFL 11 7 10 2 (18%) (17%) (16%) (7%)
	返答全体	GNS > JNS > JSL = JFL 192 168 88 59 (54%) (46%) (34%) (34%)	JFL > JSL > JNS > GNS 81 113 138 87 (46%) (44%)(38%) (25%)	JSL > GNS > JFL > JNS 56 75 36 57 (22%) (21%) (20%) (16%)

（各グループ名の下の数値はその返答をした実際の被験者数、その下の(%)は各グループの3つの返答の合計被験者数における割合を示したものである）

ここに見られるようにドイツ語母語話者(GNS)は自身への誉め（設定1~5）において、1場面（設定1）を除く全ての場面で日本語母語話者(JNS)よりも多く誉めを受け入れた一方、JNSは否定の使用において5場面中3場面（設定3･4･5）でGNSを上回った。また家族への誉め（場面6）に対してJNSの肯定は66%で

否定が 18%だったのに対し、GNS は 82%が受け入れた一方否定した回答者は一人もおらず、カイ二乗検定でも両グループの肯定、否定の割合には統計的有意差が認められた。返答全体でも GNS の肯定の割合は 54%と JNS の 46%を上回り、GNS の否定は 25%と JNS の 38%よりも低い比率を見せた。よって全般的にドイツ人は自分自身と家族に向けての両方の誉めを日本人よりも素直に受け入れる傾向があるということができ、仮説(1)「ドイツ人は日本人より（自身と家族に向けての）誉めを多く受け入れる」は支持された。

4.2　ドイツ人日本語学習者の返答パターン

次に上の表 3 で JFL、JSL の DCT における返答選択を見てみると、共に自身への誉め 5 場面中 4 場面（設定 1～5 の 4 以外）で日本人よりも受け入れが少なく、そのほぼ全てに統計的有意差があった。また否定については JFL は 4 場面（設定 4 以外）、JSL は 3 場面（設定 1･3･5）で日本人の割合を上回った。返答全体を見ても、JFL、JSL の肯定は共に 34%で JNS の 46%を下回り、否定は逆にそれぞれ 46%、44%で JNS の 38%を上回った。つまりドイツ語からの語用論的転移は見られず、かえって日本人以上に謙虚に否定する傾向が見られた。MCT 回答（表 4）においてはさらに直し過ぎの度合いが強まり、JSL は自身への誉めの 5 場面全てにおいて、JFL も 4 場面で JNS の肯定を下回り、否定は上回った。

表 4　MCT：3 被験者グループによる返答選択の場面別割合比較

	誉め手と対象	肯　定	否　定	回　避
1	甥： 水泳の腕前	JNS > JFL > JSL 17　8　4 (27%) (24%) (9%)	JSL > JNS > JFL 19　20　5 (43%)(32%) (15%)	JFL > JSL > JNS 20　21　25 (61%)(48%) (40%)
2	友達： 新しい髪型	JNS > JFL > JSL 32　8　8 (52%) (24%) (18%)	JFL > JSL > JNS 9　8　3 (26%) (18%) (5%)	JSL > JFL > JNS 28　17　26 (64%)(50%) (43%)
3	上司： 字の上手さ	JNS > JFL > JSL 14　3　2 (23%) (9%) (5%)	JSL = JFL > JNS 36　28　35 (82%)(82%) (56%)	JNS > JSL > JFL 13　6　3 (21%)(14%) (9%)
4	妹の友達： スタイル	JFL > JNS > JSL 6　10　4 (19%) (18%) (9%)	JFL > JSL > JNS 20　24　29 (65%)(55%) (51%)	JSL > JNS > JFL 16　18　5 (36%)(31%) (16%)
5	友達の友達： テニスの技	JNS > JSL > JFL 5　2　1 (8%)　(5%) (3%)	JSL > JFL > JNS 37　28　46 (86%)(82%) (75%)	JNS > JFL > JSL 10　5　4 (16%)(15%) (9%)
6	中年婦人： 姉の花嫁姿	JNS > JSL > JFL 39　20　15 (64%) (49%) (44%)	JSL > JFL > JNS 11　9　12 (27%)(26%) (20%)	JFL > JSL > JNS 10　10　10 (29%)(24%) (16%)
	返答全体	JNS > JFL > JSL 117　41　40 (32%) (20%) (15%)	JSL > JFL > JNS 135　99　145 (52%)(50%) (40%)	JSL > JFL > JNS 85　60　102 (33%)(30%) (28%)

（表 3 と同様に選択した被験者数と 3 返答の合計被験者数内の割合(%)を示した）

大学の日本語クラス用テキストの多くは誉めへの否定返答を日本人の社会規範として紹介しているため（Saito & Beecken 1997）、否定を中心とした教室での会話練習などから学習者の回答に直し過ぎが生じた可能性も考えられる。よって仮説(2)「ドイツ人日本語学習者は直し過ぎの結果、自身への誉めを日本人以上に

否定する」は支持された。

家族に対する誉め（場面6）についてはDCT回答に統計的有意差は無かったものの、JFL（67%）、JSL（73%）共にJNS（66%）よりも肯定が上回った。JSLに関しては否定も10%とJNS（18%）より少なく、ドイツ語からの転移とも見える結果となった。よって仮説(3)「ドイツ人学習者は自分の家族への誉めは日本人よりも多く受け入れる」はDCT回答においては支持された。しかしMCT回答では上記の強い否定傾向の結果、両グループ共肯定はJNSより少なく、否定は多くなり仮説(3)は却下された。MCTで回答を変えた理由として殆どの学習者が「MCTの選択肢を見て自分のDCT回答よりも日本人らしく適切だと思った」と述べており、表現能力を見るDCTと判断能力を測定するMCTの2つの調査手段の性質の違いを反映する結果といえる。つまり自分では思い浮かばない、あるいは使いこなせないが、十分謙虚で丁寧な返答を選択したいという気持ちがMCTでのより強い否定傾向に結びついたのではないだろうか。

4.3　学習環境が返答に与える影響

異なる学習環境の影響を調べる為、全4グループの返答選択の割合を詳細に比較検討した。DCT回答においてJFLはJSLに比べ否定が少なかったものの、同時に肯定もJSLを下回り、2グループの差は仮説(4)「日本滞在歴の無い学習者は滞在歴のある学習者よりも強い語用論的転移を示す結果、誉めを多く受け入れる」を支持するには不十分であった。しかしMCT回答においてはJFLがJSLよりも強い肯定傾向を示した一方、否定傾向の度合いにおいてはわずかにJSLを下回り、返答全体でも同様の結果となった為、仮説(4)は支持された。

4.4　DCT回答中の使用ストラテジー分析

DCT返答の中で先に示したようなはっきりとした感謝や否定以外の表現を使ったり、さらに言葉を続けたりしている場合の発言を先行研究（Pomerantz 1978; 横田 1986; Holmes 1988; Herbert and Straight 1989; Chen, 1993; 寺尾 1996）の分類項目を参考に表5の9種類のストラテジーに分類した。

表5　9つの分類ストラテジーの例（実際のDCT回答から抜粋）

A 誉めの追加	「私、運動神経がいいのよ」「今日は姉、ほんとに綺麗ですね」
B 対象に関する説明	「子供の頃習ってたからね」「今日はたまたま運が良かっただけですよ」
C 情報提供	「その床屋は安くて上手いですよ」
D 誉めの軽減	「モデルなんてもうおばあさんなのに…」「私の字は子供っぽいです」
E 誉めのお返し	「君も泳ぐの上手だね」「あなたの方がよっぽどモデルさんみたいよ」
F 冗談	「うん、実はモデルだよ」「よくプロみたいと言われます」
G 聞き返し	「本当？いいかな？」「ほんとにそう思う？」
H 励ましや申し出	「お前もすぐ上手く泳げるようになるぞ」「教えてあげようか？」
I 話題変え	「そんなことないよ。今何してたの？」「有難う。テニスやってる？」

さらにこれら9種類のストラテジーの各被験者グループによる使用状況を肯定・否定・回避の各返答別に集計したものが表6である。

表6　9つのストラテジーの3返答別割合

	GNS			JNS			JFL			JSL		
肯定	192*1 (54%)	A	39 (32%)	168 (46%)	A	6 (6%)	59 (34%)	A	13 (32%)	88 (34%)	A	14 (23%)
		B	41 (34%)		B	21 (22%)		B	3 (8%)		B	10 (17%)
		C	2 (2%)		C	0		C	0		C	1 (2%)
		D	0		D	3 (3%)		D	0		D	1 (2%)
		E	12(10%)		E	2 (2%)		E	3 (8%)		E	4 (7%)
		F	0		F	0		F	0		F	2 (3%)
		G	19 (16%)		G	53 (54%)		G	21 (52%)		G	21 (35%)
		H	4 (3%)		H	7 (7%)		H	0		H	5 (8%)
		I	4 (3%)		I	6 (6%)		I	0		I	2 (3%)
		*2	121 (63%)			98 (58%)			40 (68%)			60 (68%)
否定	87 (25%)	A	0	138 (38%)	A	0	81 (46%)	A	0	113 (44%)	A	0
		B	12 (26%)		B	7 (17%)		B	2 (6%)		B	6 (8%)
		C	0		C	0		C	0		C	0
		D	13 (28%)		D	21 (50%)		D	28 (80%)		D	49 (69%)
		E	10 (22%)		E	4 (10%)		E	1 (3%)		E	5 (7%)
		F	3 (6%)		F	0		F	0		F	5 (7%)
		G	4 (9%)		G	1 (2%)		G	1 (3%)		G	2 (3%)
		H	0		H	3 (7%)		H	2 (6%)		H	1 (1%)
		I	4 (9%)		I	6 (14%)		I	1 (3%)		I	3 (4%)
			46 (53%)			42 (30%)			35 (43%)			71 (63%)
回避	75 (21%)	A	0	57 (16%)	A	1 (2%)	37 (21%)	A	0	56 (22%)	A	1 (2%)
		B	13 (18%)		B	8 (18%)		B	3 (7%)		B	7 (13%)
		C	2 (3%)		C	1 (2%)		C	0		C	1 (2%)
		D	1 (1%)		D	0		D	3 (7%)		D	3 (5%)
		E	14 (19%)		E	3 (7%)		E	5 (11%)		E	6 (11%)
		F	12 (16%)		F	1 (2%)		F	1 (2%)		F	8 (15%)
		G	15 (21%)		G	14 (31%)		G	20 (44%)		G	23 (42%)
		H	14 (19%)		H	11 (24%)		H	7 (16%)		H	4 (7%)
		I	2 (3%)		I	6 (14%)		I	6 (13%)		I	2 (4%)
			73 (97%)			45 (79%)			45 (121%)			55 (98%)
合計	354			363			177			257		

*1) この数字はグループごとの各返答における回答数を示し、()内の%はこれら回答数の合計に対する割合を表す。

*2) この数字は各返答内で使用された9つのストラテジーの総数であり、()内の%は各返答の回答数(*1)中でストラテジーが用いられた割合を示す。一部回答数中に占めるストラテジー使用割合が100%を超えているのは1回答中に複数種のストラテジーが同時に使用された場合、これらを別々に数えたためである。

表6の結果と回答内容から4つの被験者グループの返答ストラテジー使用に関して以下の点が明らかになった。

1. 全般的にJNSの回答は短く、殆どが感謝・否定表現や聞き返しのみで他のストラテジー使用率が低かった（肯定58%、否定30%、回避79%）のに対し、GNS、JFL、JSLはより高い頻度でストラテジーを用いて会話を長く発展させようとする努力を見せた。
2. 全般的にGNSは他グループに比べ<冗談>や<誉め返し>を多く用い、JNS、JFL、JSLは「そうですか？」「本当に？」など相手の意図を確かめることで自分ではそう思っていなかったことを示し謙虚さを表す<聞き返し>をかなり多く用いた。またJNSは他グループに比べ<話題変え>の使用も割と多い。
3. GNS、JNS共に誉めを肯定する際に<誉められた対象の説明>を加えること

が多かったが、GNSの場合（DCT回答訳は著者）は「綺麗に書こうとすごく頑張りました」や「まあ練習が肝心ですね」など自らの努力を強調する発言が多かったのに対し、JNSは「今日はたまたま上手くいったんです」「一応子供の頃習ってたからね」など控え目に誉めを緩和するような説明が目立った。

4. 姉の花嫁姿への誉めを受け入れて＜誉めの追加＞をする際もJNSは「いつもとは別人です」「いつもはそうでもないけど」などの＜軽減＞を併用して不遜な印象を避けようとする回答が多かったのに対し、GNSは「ええ、本当に。天使みたいですね」、「私も鼻が高いです」、「いつも綺麗な姉ですが、今日は一段と美しいです」など素直に姉を誉めちぎる回答が圧倒的に多かった。JFL、JSLの肯定における＜誉めの追加＞使用率が高いのもこの場面で姉を同様に誉めた結果である。

5. 両学習者グループ共に自分に対する誉めを否定しながら更に対象物を謙遜する発言（「いいえ、まだ全然下手です。」など）が日本人(50%)以上に多かった（D.＜軽減＞JFL 80%、JSL 69%）。これは先述の直し過ぎによる強い否定傾向を質的にも示唆するものである。

5. 考察

以上、日本語母語話者とドイツ語母語話者では誉めへの返答パターンに比較的はっきりとした違いがあることがわかった。ドイツ語母語話者は全般的に日本人よりも自分と家族への誉めを素直に受け入れた。一方、ドイツ人日本語学習者の返答選択には母語からの語用論的転移は見られず、かえって日本滞在の有無に関わらず強い誉めの否定傾向が認められた。これらの傾向は各被験者グループが使用した各種ストラテジーの質的分析でも確認された。学習者のアンケート回答にも「日本語は誉められて嬉しくても素直に感謝してはいけないところが難しい」「家族への誉めは受け入れてもよいのかわからない」といった回答が多く、返答選択に対する自信の無さや文化差に対する強い意識が浮かび上がる結果となり、誉めなど具体的場面での返答の多様な可能性を外国語（第二言語）学習の場でも積極的に教えてゆく必要性を感じた。

本研究は他の発話行為の調査と同時に行ったためテストに盛り込めた誉めの場面数が少なく、相手との社会的距離や力関係、誉めの対象などの変数を十分に統制することが難しかった。今後は家族・自身への誉め両方の場面数をさらに増やし、他変数を一定にするなどして各場面要素の及ぼす影響を細かく調査する必要がある。また返答選択の分類において回答内容を意味的により深く分析する方法を探ることも今後の課題としたい。

註

1)「ストラテジー」は様々なレベルの意味に使用可能な語であるが、本論文にお

いては「誉めのお返し」「冗談」「聞き返し」「話題変え」等、誉められた側がジレンマ解消のため使用する具体的な方策を指すものとし、「肯定」「否定」「回避」などの返答選択とは区別して用いる。

参考文献

大滝敏夫. 1996.「ほめことばの日独比較」『日本語学』(5 月号) 43-49. 東京：明治書院

小玉安恵 1996.「対談インタビューにおけるほめの機能(1)－会話者の役割とほめの談話における位置という観点から－」『日本語学』(5 月号) 59-67.

寺尾留美 1996.「誉め言葉への返答スタイル」『日本語学』(5 月号) 81-88.

古川由理子 2003.「書き言葉データにおける＜対者ほめ＞の特徴 －対人関係から見た『ほめ』の分析－」『日本語教育』(117 号) 33-42.

牧野成一 1996.『ウチとソトの言語文化学 —文法を文化で切る—』東京：アルク

横田淳子 1986.「ほめられたときの返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』(58 号) 203-223.

Chen, R. 1993. "Responding to compliments: A contrastive study of politeness strategies between American English and Chinese speakers." *Journal of Pragmatics*, Vol.20, 1, 49-75.

Golato, A. 2002. "German compliment responses." *Journal of Pragmatics*, 34, 547-571.

Herbert, R., & Straight, H. 1989. "Compliment-rejection versus compliment -avoidance: Listener-based versus speaker-based pragmatic strategies." *Language & Communication*, Vo.9, No.1, 35-47.

Holmes, J. 1988. "Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy." *Journal of Pragmatics*, 12, 445-465.

Kotthoff, H. 1989. „So nah und doch so fern: Deutsch-amerikanische pragmatische Unterschiede im universitären Milieu." *Informationen Deutsch als Fremdsprache*, 16, 448-459.

Manes, J. 1983. "Compliments: A mirror of cultural values." In N. Wolfson & E. Judd eds. *Sociolinguistics and second language acquisition*, 96-102. Rowley, Mass.: Newbury House.

Pomerantz, A. 1978. "Compliment responses: Notes on the co-operation of multiple constraints." In J. Schenkein ed. *Studies in the organization of conversational interaction*, 79-112. New York: Academic Press.

Saito, H. & Beecken, M. 1997. "An approach to instruction of pragmatic aspects: Implications of pragmatic transfer by American learners of Japanese." *The Modern Language Journal*, Vol.81 (3), 363-377.

Takahashi, T., & Beebe, L.M. 1987. "The development of pragmatic competence by Japanese learners of English." *JALT Journal*, 8, 131-155.

形態論と語用論
==指小辞（diminutives）の場合==

西川盛雄
熊本大学
nishi@educ.kumamoto-u.ac.jp

1．Introduction

形態論は語形成のメカニズムを取り扱い、語用論は話し手と聞き手の間にあるコミュニケーション過程に内在する諸原理を取り扱う。特に語用論は発話場面における発話者の語や文に対する認知・操作主義的な視点において言語現象を捉える。この語用論的ファクターが語形成過程においてどのように働いているかについての研究は案外少い。本稿では構造論だけでは説明のつかない「場面による話者の語や文の適切な使い分け」という認知・操作的手続きにおいて指小辞（diminutives）や politeness がどのような相をもつかを調べ、語用論と形態論との関係についての検証・考察を試みる。これは Schneider (2003), Kiefer (1989), Lakoff(1975), Leech (1983), 等を参考にしながら「語形成」における語用論的側面を考察することになる。

2. 概念規定

本稿において論を進めていく上で基盤となる指小辞の概念規定は Haspelmath (2002: 269) を参考に、次のように考えておきたい。

A diminutive noun is:

a denominal noun denoting a smaller (or otherwise pragmatically special) version of the base noun (diminutive adjectives, adverbs, and verbs are also possible).

つまり、指小辞は概ね基語（base）である名詞からさらに下位範疇化された新たな名詞を作り出す言語学的な方略のひとつである。

Quirk et al. (1985: 1584) では 指小辞は親密な人間関係において用いられる特徴があり、これを有標の familiarity marker として位置づけている。*-y/-ie, -o, -er, -s* などが例として上がっている。(cf. Charley, Susie, telly (television), daddy (dad), sweetie (sweetheart), ammo(ammunition), arvo (afternoon), footer, tucker, fresher, nuts, Moms）。比較的身近な指小辞には次のような例がある。

(1) book*let*, pig*let*; baby*kin*, lamb*kin*; duck*ling*, prince*ling*; dad*dy*, John*ny*; dog*gie*, bird*ie*; disk*ette*, cigar*ette*; gran*ule*, spher*ule*; nymph*et*, jack*et*; sweet*ing*, wild*ing*; icic*le*, knuck*le*

3. 事例

指小辞を表す表現は多岐にわたっているが、その多くは通時的な経緯があり生産性に乏しいが、比較的頻度数の高いものは存在する。次の例をみていただきたい。

(2) Paula was already in bed, reading a paper *novelette*. ---*British National Corpus (BNC)*
(3) Let me kiss you once ere you go, my *princeling*. --- *BNC*
(4) Well, here's a delicate tender *lambkin* and a careful shepherd. --- *BNC*
(5) ; stone *tablet* bearing a Chinese poem and the design of a tiger; --- Lafcadio Hearn, *Fuji-no-Yama*.
(6) Paintings and *statuettes* were used as fertility charms and as religious symbols, for instance. ---- Isaac Asimov, *Asimov's Guide to Science?*

ここで見られる事例 *-ette, -ling, -kin, -et* はそれぞれ指小辞である。(2) の場合、基語は novel に違いないが、この基語は認知的、操作的に潤色されている。これは中篇小説で、先の節で述べたように感傷的な三文小説的な含意があり、基語に対する発話者の主観的な評価的スタンスが反映されている。(3) の場合、基語の prince は古ノルド語由来の接尾辞 *-ling* によって潤色され、小君子、あるいは小公子となる。ここにも「小ささ」に加えて「愛着の情」が組み込まれ、「いいもの」「大切なもの」という評価的含意が反映されている。(4) の場合基語の lamb はオランダ語経由の指小辞 *–kin* によって「子羊」になり、さらに意味拡張を起して評価的な「愛しさ」が含意されている。(5) の場合は基語の table に指小辞 *-et* を付加したものでここでは石の銘板を意味するが、これは碑文などを書き付け、愛着のある比較的小さなものが想定されている。(6) は基語の statue に指小辞 *-ette* が付いて小型の彫像というほどの意味であるがここでは「お守り(charms)」や宗教的な象徴（religious symbols）を想起させる。いずれもこれはニュートラルな場合のことでアイロニーや潤色されたユーフェニズムなどの場合はここでは扱っていない。

4. 指小辞の特徴

4.1 指小辞の認知的特徴

上述の事例を見ると指小辞は接尾辞として形態論的な形式を担う機能だけではなく、話者の発話場面における communicative function を担う語形成要素として重要であることが分かる。ここには基語の指示的（denotative）意味に加えて基語に対する話者の主観的、評価的認知過程がきめ細かく反映されていると言える。形態論と語用論の関係という観点からこの研究の歴史はまだ浅いが、その基本となるスキームは次の通りである。

(7) $\boxed{\text{Base(N)}}$ + $\boxed{\text{Dim}}$

ここで基語（Base）は外延的、指示的（denotative）な側面を表すのに対して指小辞(Dim)では話者の communicative な認知・操作的主義的態度（attitude）の現れとして評価的（evaluative）側面さらには「気持」という点で感情的（emotive）な側面を表し、発話中に用いられる語に対する話者の主観的態度が反映されている。さらに赤ちゃん言葉に代表されるように小さなものに対する愛称表現の（hypocoristic）側面を担うのも指小辞の重要な役割である。認知・操作論的には指小辞の中に主観化が

働いて話者の心的態度が組み込まれていると言える。ここには言語の社会心理学的側面が反映されていると言える。以下は指小辞（Dim）を伴った denominal noun のスキームの特徴（features）を表示したものである。

(8)　Base　+　Dim
[+denotative]　[+attitudinal] [+evaluative]
[+emotive]　[+hypocoristic]

4.2 分析的と総合的

同じ smallness と cordiality/familiarity の特徴を表す場合でも 属性を表す形容詞と指小辞を使ういずれの場合も nickname のように対象に対する命名性（naming）が働いていると考えられる。little John が Johnny/ Johnnie になるとき前者は統語論的、分析的な相をもち、後者は形態論的、総合的な相をもっている。前者は句の形式をとり、後者は語の形式を取っているからであり、little は主要語（head）の属性を表す修飾形容詞であるが、-y/-*ie* は話者の基語（base）と聞き手に対する発話上（従って語用論上）の認知的態度、したがって対象に対する主観的なスタンスを表す接辞である。ここに両者の間に決定的な違いがある。前者は句形式を用いて分析的、後者は接辞を付加して一つの語としてまとめているがゆえに総合的といえる。さらに Schneider (2003: 8)も触れているような複合語の事例 dwarf tree や baby tree など、ドイツ語の Kleinstadt (small town)、Kleinvieh (small domestic animals) なども分析的な特徴をもつものとして考えておきたい。

4.3 接頭辞の diminutives

接頭辞 mini- は元来フランス語の miniature から来たものである。これ自体極小のイメージがあり、それゆえに基語との関係において非日常的に特化したものを表すのに用いられる。例えば minicar は単なる small car とは異なるものであろう。前者は特化した非実用的かつ趣味的な玩具に対して命名されたものである。後者は日常的な「車」のサイズについての説明的属性をいっている。ここで *mini-* は小ささに加えて cordiality, hypocoristic あるいは endearing な特徴を引き受けているのである。従って *mini-* は後者の small とは違って接頭辞の diminutive として理解することが可能である。次の例を見ていただきたい。

(9) minibar　minibike　minibus　minicab　minicar　minicomputer
minipants　miniskirt　ministate

4.4　右側主要部原理の適応不可

指小辞においては右側主要語の原理（the right-hand head principle）は適応しない。接尾辞は基語の品詞変化したがって機能変化を引き受ける場合が多いが、指小辞は基語の品詞変化はなく、むしろ基語の下位範疇の部分を引き受ける。例えば、book*let* は a kind of book ではあっても; *a kind of *let* ではない。duck*ling* は a kind of duck ではあっても*a kind of *ling* ではない。指小辞を付加することによって語の意

味の包摂関係が出来上がっているが、ここに指小辞付加による基語のサブセットとしての新しい語が形成されることになる。

4.5 褒め言葉と軽蔑語の語用論的二側面

例えば princeling を子供の prince に用いたとすれば、ここには親愛と愛着の心情において「可愛いらしさ」が前提となった褒め言葉であるに違いない。しかしもう立派に成人した大人の prince に対して用いたとすれば、まだ prince としての自覚に欠ける未熟な prince として少々の軽蔑の含意がある。つまり指小辞はこれを用いる対象と場面次第で語用論的なプラス・マイナスの使い分けが成されているといえる。

4.6 誇張辞

指小辞の反対概念は誇張辞であるが、その位相は変わらない。ball が balloon となれば ball の大きな「気球」である。フランス語の sala (広間)が saloon となれば「大広間」である。このように指小辞に対してものを大きくみせて命名する誇張辞 *-oon* の場合も認知・語用論的には指小辞と同様の機能をもつ。これはラテン語の *-onis* から出てイタリア語の *-one*、フランス語では *-on* に繋がっている。buffoon (道化師)はもともと歌劇の道化役 buffo にこの誇張辞 *-oon* が付加されたものである。

5. 諸相

5.1 種類

英語史的にもすでに古英語の時代から指小辞・誇張辞があり、言語接触（language contact）の結果として多くの事例が継承されて来ている。Schneider (2003: 78)は英語に関して以下のように８６のリストを示している。

(10) *-a, -aculus, -chik, -cuke, -culus, -die, -ee, -een, -el$_1$, -el$_2$, -ella, -ellus, -em, -en, -eolus, -eon, -er, - erel, -ers, -et, -ette, -ey, -ickie, -icle, -icule, -iculus, -idium, -ie, -ikie, -ikin, -il, -illa, -ille, -illo, -illus, -in, -ina, -incel, -ing, -iolus, -ion, -k, -kie, -kin, -kins, -l, -le, -let, -ling, -lot, -n, -nel, -nie, -no, -o, -ock, -ockie, -ol, -ole, -om, -on, -oon, -ot, -podicum, -poo(h), -pops, -r, -rel, -s, -sie, -sky, -sy, -t, -tie, to, -ton, -ula$_1$, ula$_2$, -ule, -uleus, -ulous, -ulum, -ulucs, -unculus, -usculus, -y*

他に興味深い例として Motu 語における reduplication の例がある。例えば単数 mero (boy) はこれ全体を繰返した meromero (little boy)によって指小辞表現が成立している。ここでは名詞の単数形を複数形にする接頭辞 *me-* が基語（mero）に付加されて複数形 memero (boys)が作られ、これがさらに繰返されて memeromemero (little boys) となって複数形の指小辞が成立している。

5.2 通時性（diachrony）

指小辞は古英語の時代からすでにあった。Bradley によれば、指小辞 *-incel* は tūnincel (小都市)、hūsincel (小屋)、scipincel (小舟)として使われていたが中英語ま

では生き残らなかった例をあげている。

姓（surname）を表す Wilkins, Jenkins, Dickinson, Wilkinson などもアングロ・サクソン語系の「親族」を表す指小辞 *-kin* に「所属」または「子孫」を表す接尾辞 *-s* または *-son* が付いてできたものである。

Katamba (1994: 183) は young urban professional の acronym である YUP が指小辞 *–ie/-y* と結合して yuppy/ie が出来上がっていることに触れて、社会や時代の変遷によって新しい語が作られていくことを説明している。

指小辞は歴史的には生産性が高い場合は生き残りさまざまな新語の誕生さえ可能にするが、生産性が低くまたその必要性のなくなった場合、やがて廃れていくか、新しく外来のものに取って替えられる。英語はノルマン・コンケスト以降中英語の時代にかけて外来語であるギリシャ・ラテン語系の言語が大量に流入した。そしてこの外来の言語は旧来の英語よりも豊かな指小辞をもっていた。当然両言語の混交のなかで残るもの、廃れるものが出てくる。指小辞の通時性はこれ以後も一貫してその生産性の度合いにおいて多様な姿を持つにいたるのである。

6. Pragmatics and Diminutives

6.1 Leech's Maxims of Politeness

Leech (1983) はコミュニケーションの場における話者と聞き手の心理的負担（cost）と 利益（benefit）の相対的比較においていくつかの Maxims を仮説している。cost と benefit は心理的なものであるだけに主観的かつ語用論的なものであり、量化することは出来ないが傾向として統計的には立証できる性質のものである。

指小辞は話し手の聞き手への心理的配慮の反映である。従って対象への話者の主観的・評価的な思いがこれに反映され、かつ聞き手に受け入れられなければならない。Leech(1983)は他者（聞き手）への負担(cost)を小さくし、他者（聞き手）への利益(benefit) を大きくすること、自らへの負担を大きくすること、自らへの利益を小さくすることを、それぞれ Tact Maxim, Generosity Maxim としているが、指小辞やその機能をもつ politeness 形式もまたこの Maxim と関係が深い。「うちの息子」という言い方に対して「うちの愚息」「うちの豚児」といったりして身内の人間を下げて言うことによって相手の心理的圧迫を取り除く発話はよくある politeness の方略の結果である。この場合「愚」「豚」は politeness を担う接頭辞である。これは謙遜の場合であるが相手を立てる言い方は「お世辞」(compliment)に近く、相手の benefit を大きくすることによって会話参与者間の人間関係をスムーズにするための方略の一つとなっている。

6.2 R. Lakoff (1975)

語用論的には politeness に関する Lakoff (1975) の以下の分類のうち(11c) の "show sympathy" が指小辞と深く関っている。

(11) a. Formality: keep aloof
　　b. Deference: give options
　　c. Camaraderie: show sympathy

ここには発話における主観性の反映として、話者の語用論的な態度(attitude)として愛着を込めた認知的な評価を聞き手に伝えるために丁寧表現が実現していると考えられる。指小辞はこのうち対象に対する sympathy を示すことによって camaraderie を実現していると考えられる。

6.3 Relevance

Sperber and Wilson (1995: 125) によれば relevance の基本的な概念は次のようなものである。

> "An assumption is relevant in a context to the extent that its contextual effects in this context are large and that the effort required to process it in this context is small."

ここではコンテキストの効果が大きく、情報処理の努力が小さい度合に応じて関連性（relevance）があるとしている。指小辞の使用は分析的な形容詞や複合語形式ではなく総合的な視点における接辞を用いるが故に、最小の努力で文脈的効果を得ている点、連関性が高く効率のよい表現形式となっている。

7. 他言語の事例

指小辞は類型学的には幾多の言語に存在する。接辞に篭めた話者の対象に対する主観的、評価的な態度を端的に表すことが可能だからである。日本語で ***-chan***（太郎—太郎ちゃん）が卑近な例であるが、以下に他の言語の例をいくつか列挙しておきたい。

7.1 琉球語（*guma-, -gwa*）

(12) a. mma (馬) --- *guma*-mma (子馬);　　mma --- mma-*gwa*
　　b. ishi (石) --- *guma*-ishi (小石);　　ishi --- ishi-*gwa*
　　c. shima (島) --- *guma*-shima (小島);　　wa (豚)--- wa-*gwa*（子豚）

これは(Chamberlain 1976)の例であるが、ここでは ***guma-*** は指小接頭辞、***-gwa*** は指小接尾辞を示している。

7.2 イタリア語（*-ino*(*-ina*), *-etto*(*-etta*), *-ello*(*-ella*), *-uccia*）

(13) a. film (film) <m.>--- film*ino*
　　b. verm (worm)<m.> --- verm-*etto*
　　c. mano (hand)<f.> --- man-*uccia*　　(Kiefer 1998)

ここでは指小接尾辞は男性名詞、女性名詞によって語尾が異なっている。

7.3 ポーランド語(*-owe, -y* (*-i*))

(14) a. profesorz --- profesorz*owe*　　(profesorz*y*)
　　b. astronom --- astronom*owe*　　(astronom*y*)　　(Kiefer 1998)

ここでの指小辞は ***-owe, -y(i)*** であり身近で親しみの概念を示す。

7.4 ショーナ語（*ka-, tu-*）

(15) a. tiyo … *ka*tiyo (sg),　　*tu*tiyo (pl)
　　b. komana … *ka*komana (sg),　*tu*komana (pl)　　(Vieth 1986)
南アフリカのこの言語では指小接頭辞 ***ka-*** は単数、***tu-*** は複数を表す。

7.5 オーストラリア英語(*-ie, -o*)

(16) ump*ie* (umpire),　old*ie* (old man),　host*ie* (air hostess),
　　school*ie* (school teacher),　soap*ie* (soap opera),　marj*ie* (marihuana)
(17) bedd*o* (bed),　comp*o* (compensation),　del*o* (delegate)
　　comb*o* (combination),　bizz*o* (business),　cam*o* (camouflage)
オーストラリア英語の特徴で ***-ie, -o*** は親しみをもって指小辞の働きをもつ。

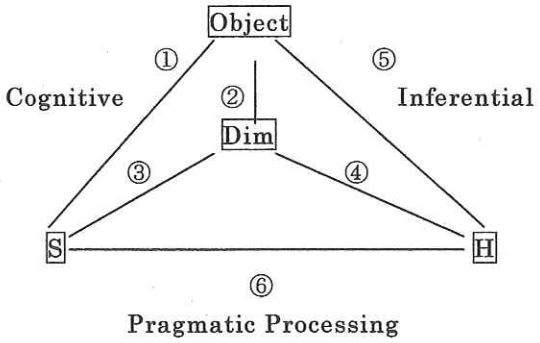
8. 指小辞の語用論的モデル

Schneider (2003: 63) は指小辞について簡潔に次のように述べている。

(18) Diminutives do not occur in isolation, but in context.

これは指小辞の語用論的本質を端的に言い当てている。筆者は以下に指小辞の語用論的モデルを提出し、語用論的認知過程の中に指小辞を位置付けて考えることを提唱してみる。①において話者（S）の人や物など、対象(object)への認知的(cognitive)志向プロセスがまずあり、②においてその対象に対する話者の評価的、心情的な主観的態度が指小辞（Dim）に明示的に反映され、③において発話者による発話のプロセス(speaking)が実現され、④において聞き手の理解のプロセス(understanding)が実現する。ここで⑤において聞き手(H)の理解のための推論過程（inferential processing）が働き、その結果として⑥の語用論的プロセスが成立するに至るのである。

(19)



① Cognitive Processing (Referential, Denotative, Objective)
② Diminutive Formation (Evaluative, Emotive, Subjective)
③ Speaking　　④Understanding
⑤ Inferential Processing　　⑥ Pragmatic Processing
[S: Speaker,　H: Hearer,　Object: Man/Thing,　Dim: Diminutives]

9. まとめ

指小辞は形態論に属して基語(Base)との関係において構造的記述を施すことが出来るがそれだけでは十分ではない。ここには話者の対象に対する主観的・認知論的な評価的、感情的、主観的な心的態度が語用論的特徴をもって反映されているのである。本稿ではコーパスを含むいくつかの具体的な事例に基いてこのことを検証し、Schneider（2003）による指小辞・誇張辞のリストと通時的分析に触れ、また英語や日本語に加えて世界の他の言語にも言及しながら指小辞における認知・語用論的側面を少しでも明らかにした。最後にこれを一般化し、指小辞の認知・語用論的モデルを提出してみた。

[参考文献]

Bauer, L. 2001. *Morphological Productivity*, Cambridge: Cambridge University Press.

Booij, G. 2005. *The Grammar of Words*, Oxford: Oxford University Press.

Bradley, H. and S. Potter. 1970. *The Making of English* (Revised Edition), London: Macmillan.

Chamberlain, B.H. 1976. *Essays in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language* (Translated by Eitetsu Yamaguchi) (日琉語比較文典). 沖縄：琉球文化社.

Di Sciullo, A.M., and E. Williams 1987. *On the Definition of Word*, Cambridge Mass.: The MIT Press.

Haspelmath, M. 2002. Understanding Morphology, London: Arnold.

Jespersen, O. 1922. *Language*. London: George Allen & Unwin.

Katamba, F. 1994. *English Words.* London & New York: Routledge.

Kiefer, F. 1998. "Morphology and Pragmatics" In *Spencer & Zwicky (1998)*. Oxford: Oxford University Press.

Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics,* London: Longman.

Lakoff, R. 1975. *Language and Woman's Place*. 1975. N.Y.: Harper & Row.

Nishikawa, M.(西川盛雄) 2000. "形態論と語用論" In *Memoirs of the Faculty of Education, Kumamoto University, The Humanities*, No49. 269-283.

Plag,I. 2003. *Word-Formation in English*. Cambridge:Cambridge University Press.

Quirk, R., S.Greenbaum, G.N.Leech, J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language,* London: Longman.

Schneider K.P. 2003. *Diminutives in English*. Tübingen: Niemeyer.

Spencer, A. and A.M. Zwicky (eds.) 1998. *The Handbook of Morphology*. Oxford: Blackwell.

Sperber D. and D.Wilson 1995 (2nd edition). *Relevance,* London: Basil Blackwell.

Vieth, H. 1986. *Fambai zvakanaka muZimbabwe*. Gweru: Mambo Press.

助数詞の選択と対象の捉え方について

濱野寛子
京都大学大学院
hamano@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

本稿の目的は、ある事物を数えるときにどの助数詞が用いられるのかという問題について、数える文脈によって事物の捉え方が異なる点に注目し、Croft(1993)の提唱するドメイン・ハイライティング(domain highlighting)の概念を用いて明らかにすることである。そして、助数詞の選択が異なるのは、数える対象の概念が形成するドメイン・マトリックスで、数える状況や話者の主観性によってハイライトされるドメインが異なるからであることを示す。従来、個々の助数詞の持つ意味的側面のみに注目する研究が多く、具体的な使用文脈については十分な考察がされてこなかった。認知言語学的な観点からもイメージ・スキーマ(Lakoff 1980)や、プロトタイプ意味論(Matsumoto 1993)のアプローチによって助数詞の研究がなされてきたが、我々の日常生活における助数詞の具体的な使用を捉えることは難しい。従って、本稿の狙いは、助数詞の意味や使用の記述について、根本的に問い直すことにある。その試みとして、Croft(1993, 1996)のドメイン・ハイライティングの理論的枠組みから、使用文脈によって様々な振る舞いをする助数詞について、実際の使用に基づいた記述を試みる。なお、分析については、ケーススタディとして「バラ」を数える際に、主に用いられる助数詞「本」と「輪」を取り上げ、両者の選択の違いは、従来の形状的な特徴を捉えただけでは表せないことを指摘し、文脈によって引き出されるドメイン・ハイライティングの効果によって明確になることを示す。

2. 問題提起と先行研究の批判的検討

助数詞が抱える根本的な記述的問題として、Ⅰ)数える対象が明示されない、Ⅱ)規範的制約のみでは助数詞の用法を捉えきれないという点が挙げられる。例えば、Ⅰ)について、助数詞「台」で数えられる「電話」は助数詞「本」でも数えられ、「本」の場合は、「台」のように物体としての電話機を数えているのではなく、電話の回線を数えていると考えられている。また、Ⅱ)については、(1)が示すように、通常「匹」で数えられる「魚」が、「本」でも数えられることが指摘されており(cf. 飯田 2004)、助数詞の意味分類の基準としても考えられてきた「人間／動物／非動物(cf. Matsumoto)」という一般的な自然種の分類規範に則して説明することができない。さらに、(2)が示すように、同じ「サンマ」という対象でも、文脈によっては「本」では数えることができない。

(1)　漁師が5｛本／匹｝のサンマを釣った。
(2)　母がスーパーで5｛??本／匹｝のサンマを買ってきた。

(1)や(2)に関しては、商品や獲物としての魚の数え方（cf. 飯田 2004）であるという指摘がある。なお、同様に文脈の影響が関わる例として、(3)に挙げるように「バラ」の場合、通常「本」で数えるが、「輪」でも数えられ、「輪」で数える場合は、バラの花の部分に注目していると言われる。しかし、(4)の文脈ではバラを「輪」で数えることができず、数える対象の形状的特徴に注目するだけでは、(3)と(4)の違いを説明することが難しい。

(3) 客が 300 {本／輪} のバラを鑑賞する。
(4) 花屋が 300 {本／*輪} のバラを入荷する。

このように、(1)から(4)までの例によって、数える対象が明確に言語化されないために、助数詞の使用が文脈依存的になる。従って、助数詞の意味や用法を、数える対象の形状や有生性といった規範的制約のみによって捉えることは困難である。以下では、「本」に関する主な先行研究のアプローチについて検討する。

2.1. 先行研究のアプローチ

従来の助数詞の研究では、認知言語学的な観点からイメージ・スキーマやプロトタイプ意味論のアプローチによって、助数詞「本」の意味が体系的に記述されてきた（cf. Lakoff 1980, Matsumoto 1993, 西光 2004）。このアプローチでは、助数詞「本」は、いわゆる「細長さ」という形状的特徴を中心的な意味とし、意味拡張が起こると考えられている。Lakoff(1980)では、「本」で数えられる中心的な対象「棒、つえ、鉛筆、ろうそく、木、ロープ、髪の毛など(Lakoff 1987: 104)」から「細長いもののイメージ・スキーマ」が形成されると考え、(5)のような拡張を指摘している。

(5) a) イメージ・スキーマ変換による拡張 (ex. 野球のヒットやホームラン、サッカーのシュート)
b) メタファーによる拡張（ex. 電話、テレビ番組）
c) メトニミーによる拡張（ex. 注射器、テープ）

a)について、例えば野球でヒットやホームランでは、ボールの描く軌跡から、「軌道のイメージ・スキーマ」が形成され、「細長いもののイメージ・スキーマ」との間でイメージ・スキーマ変換が起こり、「本」が適用される。b)では、「電話」や「テレビ番組」を「本」で数える場合、電話での会話のやりとりや、テレビ番組とテレビを見る者との間のコミュニケーションから、Reddy(1979)の「導管メタファー」が適応するとしている。c)では、注射器の中心的に機能する針の部分や、テープとしての機能を果たすための伸ばした状態が細長いため、その細長さがメトニミーによって全体のイメージとなり、「本」で数えられる。さらに、Lakoff(1980)は、a), b)の拡張の背景には「理想認知モデル(Idealized Cognitive Model)」がはたらいていることを指摘している。例えば、野球のヒットやホームランが「本」で数えられる際に、野球に関する知識の ICM や、打ったボールの軌跡が軌道のイメージ・スキーマを形成するための ICM が存在し、これによ

り「本」の適用が可能になる。

Matsumoto(1993)では、プロトタイプカテゴリーの理論から、さらに多くの事例について検討し、「本」が形成するカテゴリーでは、「際立って一次元的である」ものがプロトタイプ的な成員となり、この条件が弱められることによって、(6)のような拡張が起こると指摘している[1]。

(6) a) 巻かれているもの、輪状のものへの拡張（ex. カセットテープ、輪ゴム、タイヤ）
b) 容器の形状のメトニミー的拡張（ex. コーラ、牛乳、砂糖、注射、）
c) 経験的な一次元性を形成するもの（ex. 論文、台本、テレビ番組）や、軌道を形成するもの（ex. 電話、ホームラン、バスケットボールのショット）へのメタファー的拡張

同様に、西光(2004)でも、プロトタイプ特性として「細長い」という点や「棒状のものの握り方」について指摘し、メタファー的に抽象領域の対象へ拡張すると説明している。なお、「本」の用法に関しては、それぞれの対象の数え方を網羅的に記述するまでに留まっており、体系的な記述は示されていない(cf. 飯田 2004)。

2.2. 先行研究の問題点

前節で概観したように、先行研究では、数える状況に関する議論が十分でないことが明らかである。そして、先行研究のアプローチに対して以下の点が指摘できる。

(7) イメージ・スキーマやプロトタイプ条件による意味分類はトップダウン的であり、文脈依存的な助数詞のダイナミックな側面を捉えることが困難である。
(8) 特徴付けが一般的過ぎるため、どのような解釈も可能になる。

従来のLakoff(1980)のイメージ・スキーマや、Matsumoto(1993)のプロトタイプ意味論によるアプローチは、助数詞の使用におけるある事実の側面を広く捉えるものである。しかし、これは同時に、ある特徴が過剰に一般化される可能性も表している。助数詞の意味の記述に関して、上記の(1)から(4)で見たように、他の助数詞との関係や文脈依存的な使用の側面までを捉える必要があるが、「本」に関しては、数える対象の形状的特徴という観点からでは、そうした記述が困難である。

3. 本研究のアプローチ

本稿では、どの助数詞を用いるかという選択の問題を検討する上で、助数詞には、a)数える状況や b)話者の主観性が反映されているという理論的アプローチをとる(cf. Denny1976, 井上1999)。そして、助数詞の文脈依存的な使用に基づいた記述が必要であると考える。これを踏まえ、Langacker(1987)のドメインの概念を利用し発展させた Croft(1993,1996)のドメイン・ハイライティングの概念を利用する。

3.1. ドメインの概念について

本稿の分析で利用するドメインの概念について、Langacker(1987)によれば、言語表現の表す概念は、それが喚起する認知ドメイン(cognitive domain)との関係で特徴づけられるとしており、以下の2つのタイプのドメインが存在することを指摘している(Langacker1987: 147-150)。

(9) a. ベーシック・ドメイン(basic domain)
時間や3次元的空間、温度など最も基盤となるドメイン
b. アブストラクト・ドメイン(abstract domain)
(9a)以外の、概念の特徴づけに関わるドメイン

さらに、ある概念には、複数のドメインが存在し、複合的なマトリックスを形成していると考えられ、これをLangacker(1987)は「ドメイン・マトリックス(domain matrix)」と呼ぶ。Croft(1993)は、Langacker(1987)のドメインに関する概念を踏襲し、ドメイン・マトリックス内で、概念の特徴付けをする際の最も中心的なドメインを、プライマリー・ドメイン(primary domain)、その他のドメインを全てセカンダリー・ドメイン(secondary domain)と規定している。そして、Croftある概念の理解において前提となるような、アブストラクト・ドメインからベーシック・ドメインに至る一連のつながりを、ドメイン・ストラクチャーと呼んでいる。

(10) The vast majority of concepts belong to abstract domains which are themselves profiled in complex domain matrices, often also abstract , and so ultimately presuppose a large array of basic domains, which I will call a *domain structure*.
(Croft 1993: 341)

2.2. ドメイン・ハイライティング(Croft 1993)

Croft(1993)は、ある概念が前提とするドメイン・マトリックスにおいて、下位にあったドメインが、ドメイン・ハイライティングの効果によってプライマリー・ドメインにシフトするとき、言語表現のメトニミー的な解釈がおこると説明している。

(11) a. Proust spent most of his time in bed.
b. Proust is tough to read. (*ibid.* 348)

さらに、Croft(1993)は、ドメイン・ハイライティングの効果は、メトニミーだけではなく、(12)の"book"に観察されるような多義性の現象に対しても表れていると説明している。

(12) a. This book is heavy.
b. This book is a history of Iraq. (*ibid.* 349)

(12)の"book"について、(12a)では物体として、(12b)では本の内容としての意味をそれぞれ表すような場合、Croft(1993)は、このような多義的解釈は、構成する要素の組み合わせによって生じるものとして、(12a)では"*heavy*"という表現が、(12b)では"*be a history of Iraq*"という表現が"book"の多義的解釈を生むと指摘している。そして、[BOOK]という概念が形成するドメイン・マトリックスにおいて、(12a)の場合、"physical object"のドメインが、(12b)の場合、"meaning or semantic contain"というドメインがプライマリー・ドメインとなっていると説明している。

本稿では、Croft(1993, 1996) が(12)で示した多義的解釈にみられるドメイン・ハイライティングの効果を、助数詞の多義性として援用する。そして、(1)や(4)で示したような助数詞の使用の違いが現われるのは、数える対象の概念が形成するドメイン・マトリックス内で、使用文脈によってハイライティングが起こるドメインが異なるからだと考える。次節では、ケーススタディとして「バラ」を数えるときに主に用いられる助数詞「本」と「輪」を取り上げ、実際の使用の違いを検討する。

4. 助数詞の選択の問題に関するケーススタディ

本節では、前節で示したアプローチに基づき、「バラ」を助数詞「本」と「輪」で数える場合の両者の振る舞いについて、「バラ」の概念が形成するドメイン・マトリックス内で起こるドメイン・ハイライティングの効果に注目して、分析する。なお、分析にあたり、本稿では「X が N"助数詞"のバラを V する（ex. 花屋が 300 本のバラを入荷する）」という形式で事例を検討する。X は数える話者、N は数詞、V は動詞表現を指している。この形式によれば、プライマリー・ドメインを決定するための文脈情報は、X・N・V・"助数詞"のそれぞれに入ることが可能な表現と、それらの共起関係によって引き出されることになる。そして、ドメイン・ハイライティングの効果として表れ、最終的に「本」と「輪」の振る舞いが観察されると考える[2]。

我々の日常生活で、「バラ」という概念は様々なドメインによって解釈されており、その主なものを(13)に示し、それぞれのドメインに対応する使用例を(14)に挙げる。従来の規範的な制約に基づくアプローチでは、(13a)に挙げたような、単に物質としての「バラ」しか考慮されずに、助数詞の意味の記述が行われてきたといえる。しかし、(13b)～(13c)で挙げるように、物質として以外にも様々な状況において、「バラ」が解釈される。

(13) a. [物質]バラの形状やつくり、色などに関する物理的な性質を捉えるドメイン。
b. [栽培]植物として成長するバラを捉えるドメイン。
c. [鑑賞]美的価値を楽しむものとして捉えるドメイン。(ex. 生け花やガーデニング、フラワーアレンジメントなど)
d. [品質]バラの質を問題として扱うドメイン。
e. [売買]商品や贈答物など、売買するものとして捉えるドメイン。

(14) a. 業者がバラを（生花店へ）運ぶ。

b. 母がバラを咲かせる。
c. フラワーデザイナーが（ブーケに）バラをあしらう。
d. 育種家がバラを改良する。
e. 友人がバラを贈る。

(14a)のバラは、成長過程に関する側面や美的価値といった側面よりも、単なる運ぶモノという捉え方がされていると考えられる。(14b)は、特に花の部分の変化を表しているが、背景には栽培に関わる一連の過程を経たという知識が関わっている。(14c)は、バラの美しさを配置関係によってさらに引き立たせている文脈である。また、(14d)のバラを改良するという文脈では、対象の質について問題としているので、品質のドメインが関わる。(14e)は、バラが贈答物としての商品価値があるものとして解釈される。なお、それぞれの事例で、対象の解釈において優位になるドメイン以外の他のドメインは、セカンダリー・ドメインとして存在していることになる。

そこで、上記のような様々なドメインにおいて解釈されるバラに対して、「本」と「輪」の助数詞がどのように用いられているか、以下の事例を挙げる。

(15) 彼が 300{本／??輪}のバラを運ぶ。[物質]
(16) 庭師が 50 {本／??輪} のバラを植える。[栽培]
(17) 母が 20{本／?輪}のバラを育てる。[栽培]
(18) フラワーデザイナーが（ブーケ・リース等に）5{??本／輪}のバラをあしらう。[鑑賞]
(19) フラワーデザイナーが 5{?本／輪}のバラを引き立たせる。[鑑賞]
(20) 園主が（世界中から）3000 {本／??輪} のバラを買い付ける。[売買]
(21) 生花店が 200{本／??輪}のバラを入荷する。[売買]
(22) フラワーデザイナーが（園芸農家と）1000{本／??輪}のバラを契約する。[売買]

(14a)でみたように、(15)では、バラが運搬物として理解されることから、物質のドメインでは「輪」よりも「本」の使用が優勢となる。また、(16)や(17)では、栽培のドメインがハイライトされ、「本」よりも「輪」が優先的に用いられている。(18)や(19)の鑑賞のドメインにおいて数えられるような時は、「本」よりも「輪」の使用が優勢であると考えられる。(20-22)のような、売買においてやりとりされるものとしてのバラは「本」が用いられる傾向がある。

(15)から(22)のように、「本」と「輪」の振る舞いの違いを使用文脈との関係から検討してみると、あるドメインで二つの助数詞の間に選択の優位差があることが予測される。つまり、数える対象が「バラ」のとき、対象の「細長さ」という形状的特徴によって数える「本」は、[物質]、[栽培]、[売買] のドメインがハイライトされることによって選択され、一方、花の部分に注目する「輪」は、[鑑賞] のドメインとの関係で捉えられやすいと考えることができる。ただし、(7d)で挙げた [品種] のドメインについて、バラを「本」や「輪」では数えにくい。

(23) 育種家が 5 {??本／??輪／種} のバラを改良する。

(24)　委員会が3｛??本／??輪／種｝のバラを登録する。

(23)や(24)の場合、「5種」（あるいは「5品種」）という数え方が、より適切である。従って、「本」や「輪」では捉えられないような、別の助数詞の存在が指摘され、上記以外の他のドメインとそこで優勢になる助数詞があるという可能性が示されるが、これに関しては今後の検討課題とする。

以上のように、本節では、数える対象の概念が持つドメイン・マトリックスで、ハイライティングが起こるドメインが数える文脈によって変わり、用いる助数詞に影響を与えることについて検討したが、さらに、本節の分析から得られる示唆として、助数詞の選択に数える話者の主観性が介在しているという点がある。ここでいう主観性とは、話者によってどのドメインをハイライトするかということに関わるものであり、本分析の事例でX・N・V・"対象"のうち、特に話者の主観性については「X」が反映するものとなる。これに関しては、数える話者の持つ知識や経験の違いが背景にあると考えられ、顕著な例として、職業・専門的にその対象と関わっているかどうかという点が挙げられる。先にみた(1)をみると、「サンマ」に対して「本」と「匹」の両方の助数詞の使用が可能であるが、この場合、釣るという状況で、「漁師」といった職業・専門的に対象に関わる話者が選択するドメインと、そうでない話者が選択するドメインが異なると考えられる。こうした主観性という点からも、助数詞の使用はダイナミックであり、その側面を取り込んだ助数詞の意味の記述のために、ドメインという概念は重要であるといえる。

5. おわりに

本稿では、助数詞の選択の問題について、数える対象の概念から形成されるドメイン・マトリックスで、文脈によってハイライトされるドメインの違いから捉えた。本研究で利用したドメインの概念については、更なる検討が必要であることも明らかであり、今後の検討課題としたい。また、我々の日常生活の文脈が数える対象の捉え方と用いる助数詞を決定するという本稿の立場から、助数詞の意味に影響を与える語用論的知識との関わりも重要であると考えられ、この観点からもさらなる検討が必要である。

[注]

1. Lakoff(1980)では、(5)a)~c)の拡張の動機付けは相互排他的なものではなく、ある対象への意味拡張には、複数の動機付けが関わっていると考える。一方、Matsumoto(1993)は、Lakoff(1980)の考えを否定し、ある対象への拡張には、一つの動機付けで説明できるとしている。

2. 実際には、このように言語化された形式での使用例は、むしろ不自然であるが、本稿の分析では、助数詞の選択に関わる文脈情報について可能な範囲で明確にするため、このような形式に統一した。なお、分析の際、インターネットの検索サイト"google(http://www.google.co.jp/)"を使い、実際の使用例を参考にした。ただし、今回は統計的な目的での利用ではないため、使用例の数や頻度に関しては問題としない。

参考文献

Adams, Karen L. and Conklin, Nancy Faires. 1973. "Toward A Theory Of Natural Classification." *Papers from the ninth regional meeting, Chicago Linguistic Society*, 1-10,

Chicago: Chicago Linguistic Society.

Barcelona, Antonio. 1996 "Clarifying and applying metaphor and metonimy", in *Atlantis*, 19.1: 21-48.

Croft, William. 1993. "The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies" *Cognitive Linguistics* Vol.4-4, 335-370.

Denny, J. Peter. 1979. "Semantic analysis of selected Japanese numeral classifiers for units." *Linguistics,* Vol.17, 317-335.

Downing, Pamela. 1996. *Numeral Classifier Systems: The Case of Japanese.* Amsterdam: John Benjamins.

井上京子. 1999.「助数詞は何のためにあるのか」『月刊言語』(10 月号)30-37.

Lakoff, George. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作　他（訳）『認知意味論』紀伊国屋書店, 1993)

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar.* Vol.1, Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar.* Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

Matsumoto, Yo. 1993. "Japanese numeral classifiers: a study of semantic categories and lexical organization." *Linguistics,* Vol. 31, 667-713.

西光義弘. 2004. 「類別詞の認知様式の相関に関する理論的考察」西光義弘・水口志乃扶（編）. 『類別詞の対照』23-38. 東京:くろしお出版.

松本曜. 1991.「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」,『言語研究』(第 99 号)82-106.

水口志乃扶. 2004. 「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対照』61-77. 東京:くろしお出版.

山梨正明. 2000.『認知言語学原理』東京:くろしお出版.

認知語用論と心の理論の接点—命題態度理解の発達研究

松井智子
京都大学霊長類研究所

1．はじめに - 心の理論と発話理解能力

Sperber and Wilson (2002)によれば、語用論は「心の理論」の一部であり、かつ発話解釈という領域に固有のメカニズムを持つ心的モジュールとされる。心の理論と発話解釈能力の発達には強い相関関係があるという主張は Happe (1993), Bezuidenhout and Sroda (1998)のように関連性理論を理論的枠組みとして取り上げているものの他にも、Doherty (2000), Sullivan et al. (1995), Winner (1988) などで実証されている。心の理論と発話解釈の発達の相関関係の要因が何であるかを解明することは今後の課題であるが、その手始めとして、いわゆる心の理論や発話解釈に関与する個々の要素を同定することが重要である。これまでの研究により、心の理論には少なくとも以下の３つの要素が関係していることが明らかになっている。

(A) メタ表象能力 (Metarepresentational ability)

他者の心的状態の理解には、メタ表象の構築が必要である。これまでの心の理論の研究によれば、健常児は４歳から５歳になるころに一次的メタ表象 (first-order metarepresentation) を構築することができるようになる。それから２－３年を経て、二次的メタ表象の構築が可能になるとされる。心的メタ表象の生成は、言語的な従属節構造の生成能力に依存するという考え方もある (de Villiers and Pyers 2002. 統語論と心の理論の関係を含め、広く言語と心の理論の関係については、Astington and Baird 2005 を参照)。

(B) 心的概念の獲得 (Acquisition of mental state terms)

他者の心的状態を推測し理解するのには、欲求や信念といった概念の理解が前提となる。心の理論の研究では、２歳で欲求の概念を、４歳以降に思考・信念などの概念を理解し始めることがわかってきている。また、心的状態を表す語彙の獲得(特に理解面において)は、幼児の概念獲得を促進すると考えられている。英語圏での調査では、欲求を表す 'want', 'like'などの語彙は３歳までに、思考や信念を表す 'think', 'believe'および話し手の知識の状態を表す助動詞の 'may', 'must'などは４歳で意味獲得がなされることが明らかにされている (Bartsch and Wellman 1995; Moore et al. 1990) 。日本語に関しては、動詞の「思う」「知っている」などは４歳以降で、文末助詞の「よ」(話し手の確信度が強い)「かな」(話し手の確信度が弱い) などは３歳で十分な意味獲得ができていることがわかってきている (Matsui et al. 2005, 2006)。日本語や韓国語のように、話し手の態度が文末助詞のような形で文法化されている言語と、英語のように文法化されていない言語との間で、幼児の命題態度理解の発達時期に差

があるのかどうかは、議論の分かれるところである（Papafragou et al. 2006）。

（C）遂行機能 （Executive Function）

心の理論研究において、誤信念課題は他者信念理解の発達を調べる標準的なテストとして用いられている。このテストには、箱の中身を入れ替えるなどのごく単純なストーリーにおいて、入れ替えたという事実を知らず、文字通り誤った信念を持つ他者が登場する。ストーリーの一部始終を見ており、箱の中身も知っている（正しい信念を持っている）子供が、その他者の誤信念に言及できるかどうかを調べるものである。一般的に３歳児は、自分が事実を知ってしまっているためそれに強く影響され、他者の誤信念にまで考えが及ばず、自分と同じ正しい信念を他者も持っていると答えてしまう。自分にとってそのとき最も関心のあること（たとえば事実）についての思考を一時的に抑制し、それ以外のこと（たとえば他者の誤信念）に注意を向けるということを可能にするためには、脳に抑制制御(Inhibitory Control)の機能が備わっていなくてはならない。３歳児はそのような機能が著しく弱いと考えられている（Perner and Lang 1999）。

一方、発話理解力にも、以上の３つの要素は深く関与していると考えられる。発話の命題態度を理解するためには、思考、信念の概念を獲得していることが前提となる。さらに、メタ表象能力（命題態度、発話行為の表示に必要）と遂行機能（効率よい注意や労力の配分に必要）も不可欠である。Sperber (1994, 2000)は、発話理解力の発達を以下の３段階に分けてとらえているが、それぞれの段階はメタ表象能力の発達と遂行機能の高度化によって特徴付けられていると考えられる。

（１）「素朴楽観主義」①最小の労力で、②聞き手である自分にとって最も顕在的な解釈を選択
（２）「慎重楽観主義」①最小の労力で、②（自分にとって最も顕在的な解釈を抑制し）話し手自身が十分関連性を持つと考えたであろう解釈を選択
（３）「洗練された理解」①最小の労力で、②話し手が聞き手である自分にとって関連性があると考えたであろう解釈を選択

このように、心の理論と発話理解力は共通の要素を持つと考えることができる。それぞれの要素について、発達のスピードや獲得の時期を比較することは有益であろう。全体的にはふたつの能力の発達時期に相関関係があることは冒頭で見たとおりである。

２．誤信念発話の解釈に見られる幼児の命題態度の理解

このように、発話者の命題態度を理解するためには、思考・信念などの概念理解、メタ表象能力、遂行機能の三つが必要であると考えられるが、誤信念課題にパスできない３歳児にはこれらの能力が全て備わっているのだろうか。日常的なコミュニケーションについてのみ考

えれば、3 歳児は十分会話に参加する能力を持っていると言えるだろう。心の理論の生得説を唱える Leslie らは、健常な 3 歳児は発話の命題態度を理解する能力を持つが、自閉症児にはそのような能力が欠けていると主張している (Roth and Leslie 1991)。一方、3 歳児には、話し手が発話の内容を信じていない場合（たとえば嘘)、その命題態度を理解することができないことを示唆する結果も多く出されており、単純に結論を出すことは現時点では難しい (Peterson and Siegal 1996; Strichartz and Burton 1990)。

ここで、3 歳児の発話命題態度の理解の限度を顕著に示す実験パラダイムとして我々が注目している「誤信念発話」を用いた課題を紹介したい。もともとは、標準的な誤信念課題を 3 歳児にもパスできるように、より簡単なものへと改良するという目的のために使われたものであるが（Wellman and Bartsch 1988)、最終的に期待していた結果が得られなかったことから、逆に後で関心を集めることになったようだ。通常の誤信念課題と異なり、誤信念を持っている当人か、実験者が、その誤信念を言語化して伝える、というシナリオが加わっているのが特徴である。

たとえば、誤信念課題の一つである、標準的な「物の移動」課題(Change of Location Task) (Wimmer and Perner 1983)には、たとえばミッキーマウスがりんごを青い箱に入れて部屋を出て行ったあと、ドナルトダックがそのりんごを赤い箱に移し変えてしまうというシナリオが含まれる。それを知らないミッキーが部屋に戻ってきたあとで、被験者の 3 歳児は「ミッキーはどこにりんごを取りにいくかな？」とか「ミッキーはりんごがどこにあると思っているかな？」といった質問に答えることになる。この場合、実際りんごは赤い箱にあるのだが、ミッキーはそれを知らないので、「青い箱に取りに行く」、とか「青い箱に入っていると思っている」、というのが正解である。この「物の移動」課題に誤信念発話を加えた課題では、部屋に戻ってきたミッキーマウスが「僕のりんごは青い箱の中にあるんだ」と発言し、自らの誤信念を表明するという行為が加わる。被験者の 3 歳児は、この発話を聞いた後で、実験者の同じ質問に答えるということになる。

発話を聞いたあとであれば、3 歳児でも「青い箱」と正答するだろうと期待されたが、実際は大部分の幼児が相変わらず誤答するという結果となった。後に、「誤信念発話」課題に、新たに「ミッキーはなんて言ったの？」という発話内容を直接尋ねる質問を加えた実験が行われた。その結果、3 歳児はミッキーの発話そのものは記憶できていたのに、相変わらず誤信念に関する質問には正答できないという驚くべき事実が判明した（Riggs and Robinson 1995)。この結果は、発話を聞いていたにもかかわらず、それを話し手の信念、思考として理解することができなかったということを示唆しており、3 歳児の命題態度の理解の貧弱さを反映したものとして解釈することができるだろう。

このように、3 歳児の命題態度の理解については、矛盾するような結果が多く出されており、今後さらなる検証が緊急に待たれるところである。しかし、日本人 3 歳児に関しては、文末助詞「よ」「かな」などに表される話し手の確信度の理解が十分に可能であることが報告されていることから、表現方法によっては、話し手の命題態度を理解できる可能性があると考えられる。そこで、我々は誤信念発話に文末助詞「よ」「かな」を加えた課題を設定し、3

歳児の発話理解を検証することにした。

3．実験的検証―誤信念発話の理解と文末助詞

被験者は、3 歳児 24 人（平均年齢 3 歳 5 ヶ月）である。実験では、標準的な誤信念課題、「誤信念発話」課題、それに「推測発話」課題をコントロール課題として行った。以下に、簡単にそれぞれの手続きを述べる。

（あ）誤信念課題：「物の移動」課題

パペット A がりんごを青い箱に入れる。部屋を出て行った後で、パペット B がそのりんごを赤い箱に移す。パペット A が戻ってくると、子供は、そのパペットがりんごをどこに取りに行くか尋ねられる。

（い）「誤信念発話」課題：「よ」条件

上記の「物の移動」課題と同じシナリオだが、パペット A は部屋に戻ってくると、自らの誤信念を発話として伝える。発話は話し手の確信度の強さを表す文末助詞「よ」を含む（「りんごが入ってるのは青い箱だよ」）。このあと、子供は、パペットがりんごをどこに取りに行くか尋ねられる。

（う）「誤信念発話」課題：「かな」条件

上記の「よ」条件と同じ構成だが、発話は話し手の確信度の弱さを表す文末助詞「かな」を含む（「りんごが入ってるのは青い箱かな」）。

（え）「推測発話」課題：「よ」条件

実験者は子供に赤い箱と青い箱を見せ、りんごがどちらかひとつに入っていると話す。子供はどちらの箱にりんごが入っていると思うかと尋ねられる。子供が答えた後、パペットが登場し、りんごの在りかを推測して発話する（常に子供の意見と逆のことを言う）。この発話は「よ」を含む。子供はこのあと、パペットがりんごをどこに取りに行くか尋ねられる。

（お）「推測発話」課題：「かな」条件

上記の「よ」条件と同じ構成だが、発話は「かな」を含む。

結果は以下のとおりであった。まず、「物の移動」課題は、ひとりの子供がパスしただけであった。予想通り、3 歳児は標準的誤信念課題をパスすることはできなかった。次の「推測発話」課題では、「よ」条件の正答率が、「かな」条件の正答率より有意に高かった。これは、3 歳児が、「よ」「かな」それぞれの文末助詞に表された話し手の確信度を理解したことを示唆する結果であると解釈できる。最後に、「誤信念発話」課題では、正答率は 50 パーセント前後と低いものの、「よ」条件の正答率は、「かな」条件の正答率を有意に上回った。正答率

の低さは、3 歳児は現実に強く影響され、発話を聞いても現実に基づいた答えをする傾向にあることを反映していると考えられる。それでも、標準的誤信念課題と比較すると、「よ」条件の正答率は有意に高いことが明らかになった。これは、これまでの英語圏での実験には見られなかった結果であり、日本人 3 歳児の文末助詞の理解が反映された重要な結果であると言えよう。現在、ドイツ人幼児との比較を行っているが、英語圏の幼児と同様、誤信念発話による正答率の上昇は見られず、日本人幼児の特異性を際立たせる結果となっている。

4．考察

今回の実験結果は、2つの重要な発見につながったと言える。一つ目は、文末助詞「よ」「かな」が表す話し手の命題態度を 3 歳児は正確に理解し、それが誤信念の理解にも反映したということである。二つ目は、3 歳児にも条件によっては、他者の誤信念の理解が可能であるということである。

英語を母国語とする 3 歳児は、誤信念発話を聞いても課題にパスすることができなかったのに、日本人 3 歳児は、「よ」を含む誤信念発話を聞いたあと、正答率が高まった。なぜ発話が、日本人 3 歳児の誤信念の理解を促進したのだろうか。我々の仮説は、以下のようなものである。通常 3 歳児は、遂行機能が未発達で、うまく抑制制御が作動しないために、自分が正しい知識を持っているとそちらに気をとられて、他者の誤信念に注意を向けることがほぼ不可能となる。しかし、日本人 3 歳児は、既に「よ」「かな」の意味獲得ができており、それらを含む発話を聞くと、話し手の命題態度を含む発話理解ができるようになっている。そのため、通常は注意を向けることができない誤信念であっても、「よ」を含んだ発話として伝達されると、その内容に注意を向けざるを得ない、という状況が作られているのではないだろうか。言い換えれば、「よ」「かな」などの文末助詞は、3 歳児の注意力を操作するのに一役買っていると言えないだろうか。もしこの仮説が正しいとすると、3 歳児は他者の誤信念や命題態度を理解するのに必要な最小限のメタ表象能力と、信念や確信度といった基本的な心的概念を既に備えていて、遂行機能の未発達がそれらの発現を妨げているという、生得説に近い説明が可能になってくる。3 歳児以下の幼児の発話解釈能力は、これまでメタ表象能力の未発達という点から説明されることが多かったが、今回の実験では、今後、抑制制御の点からも、吟味していかなければならないことが多く残されていることが示唆されたと言えるだろう。

参照文献

Astington, J. W. and Baird, J. A. eds. 2005. *Why Language Matters for Theory of Mind.* Oxford University Press.

Bartsch, K. and Wellman, H.M. 1995. *Children Talk about the Mind*. Oxford University Press.

Bezuidenhout, A. and Sroda, M.S. 1998. Children's Use of Contextual Cues to Resolve Referential Ambiguity: An Application of Relevance Theory. *Pragmatics and Cognition* 6, 265-299.

De Villiers, J.G. and Pyers, J.E. 2002. Complements to Cognition: A Longitudinal Study of the Relationship between Complex Syntax and False-Belief Understanding. *Cognitive Development* 17, 1037-1060.

Doherty, M. 2000. Children's Understanding of Homonymy: Metalinguistic Awareness and False-Belief. *Journal of Child Language* 27, 367-392.

Happe, F. 1993. Communicative Competence and Theory of Mind in Autism: A Test of Relevance Theory. *Cognition* 48, 101-119.

Matsui, T., Yamamoto T. and& McCagg, P. 2005. Who Can You Trust? A Closer Look at Preschoolers' Developing Sensitivity to Epistemic Expressions. *Proceedings of the 29th Annual Boston University Conference on Language Development*, 376-388.

Matsui, T., Yamamoto, T. and McCagg, P. 2006. On the Role of Language in Children's Early Understanding of Others as Epistemic Beings. *Cognitive Development* 21, 158-173.

Moore, C., Pure, K. and Furrow, D. 1990. Children's Understanding of the Modal Expressions of Speaker Certainty and Uncertainty and its Relation to the Development of a Representational Theory of Mind. *Child Development* 61, 722-730.

Papafragou, A., Li, P., Choi, Y. and Han, C. In press. Evidentiality in Language ad Cognition. *Cognition*.

Perner, J. and Lang, B. 1999. Development of Theory of Mind and Executive Control. *Trends in Cognitive Sciences* 3, 337-344.

Riggs, K.J. and Robinson, E.J. 1995. What People Say and What They Think: Children's Judgments of False Belief in Relation to Their Recall of False Messages. *British Journal of Developmental Psychology* 13, 271-284.

Roth, D. and Leslie, A.M. 1991. The Recognition of Attitude Conveyed by Utterance: A Study of Preschool and Autistic Children. *British Journal of Developmental Psychology* 9, 315-330.

Siegal, M. and Peterson, C.C. 1996. Breaking the Mold: A Fresh Look at Children's Understanding of Questions about Lies and Mistakes. *Developmental Psychology* 32, 322-334.

Strichartz, A.F. and Burton, R.V. 1990. Lies and Truth: A Study of the Development of the Concept. *Child Development* 62, 211-220.

Sperber, D. 1994. Understanding Verbal Understanding. In J. Khalfa. ed. *What is Intelligence?* 179-198. Cambridge University Press.

Sperber, D. 2000. Metarepresentations in an Evolutionary Perspective. In D. Sperber. ed. *Metarepresentations: An Interdisciplinary Perspective*, 117-137. Oxford University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. 2002. Pragmatics, Modularity and Mind-reading. *Mind & Language* 17, 3-23.

Sullivan, K., Winner, E. and Hopfield, N. 1995. How Children Tell a Lie from a Joke: The Role

of Second-Order Mental State Attributions. B*ritish Journal of Developmental Psychology* 13, 191-204.

Wellman, H. and Bartsch, K. 1988. Young Children's Reasoning about Beliefs. *Cognition* 30, 239-277.

Wilson, D. 2005. Pragmatic Processes and Mind-Reading Abilities. Paper presented at 9th International Pragmatics Conference.

Wimmer, H. and Perner, J. 1983. Beliefs about Beliefs: Representationa and Constraining Function of Wrong Beliefs in Children's Understanding of Deception. *Cognition* 13, 103-128.

Winner, E. 1988. *The Point of Words: Children's Understanding of Metaphor and Irony*. Harvard University Press.

「のに」　ーメタ心理的用法の観点からー

松尾　貴哲
神奈川大学大学院外国語学研究科

1. はじめに

本論は、言語の解釈的表示という概念を打ち出した Sperber&Wilson(1986/95)に端を発し、Wilson(2000)、Sperber(2000)で精密化された、メタ表示的な機能を有する言語表現に関する一考察である。本論では関連性理論の枠組みを用い、日本語接続詞「のに」がメタ心理的表現であることを主張する。さらに「けど」との比較考察によって「のに」発話がいかにして関連性を達するかについても言及していく。

辞書的意味の「のに」は、先行発話と後続発話との間に矛盾関係を生じさせ、予期される事柄とは反対の事が起こったことに対する話し手の残念・意外な気持ちが伝わる表現だと記される。(1)、(2)は典型例である。

(1)　　やめたいのに、やめられない。

(2)　　(結果が自分の望むようなものではなかった場面で)
　　一生懸命やったのに。

(1)では、話し手は「やめる」ことに対して強い意志を持っていたにもかかわらず、後続発話の「やめることができない」という事実によって、話し手の意志が崩れてしまうことによる無念さが伝わってくる。(2)は文末的使用の例である。後続発話は非明示的ながら、話し手の思い通りの結果が得られないという事実から、落胆の感情が伝わることとなろう。

先行発話と後続発話の間に何らかの矛盾関係を構築させるという「のに」の見解は、矛盾関係を構築する逆接の「けど」と多くの場合で交換可能であるという事実を反映する。(3)、(4)を見てみる。

(3)　a.鈴木さんは関西出身なのに、標準語を話します。
　　b.鈴木さんは関西出身だけど、標準語を話します。

(4)　(出かけようとしている息子に対して)
　　a.朝ご飯の仕度ができたのに。
　　b.朝ご飯の仕度ができたけど。

いずれも「のに／けど」は容認可能であるが、「のに」が残念な感情を伝達しうる点で、伝達される話し手の真の意図は、(3a)と(3b)でそれぞれ異なるのは言うまでもない。加えて、「のに」発話それ自体に聞き手の伝達したい意図が込められている、言い換えれば発話が完結しているものと感じることに両者の決定的な違いがある。すなわち(4a)の「のに」では、朝食をとらない息子に

対して、母親の何ともやりきれない気持ちが伝わるだろう 1)。一方、(4b)において「けど」発話それ以降に、「朝食を食べないで出かけるのか」といったことが間接的に伝えられると考えられる。言い換えれば、発話に更なる続きがあるのだと聞き手は期待するだろう。

さらに(5)や(6)では「けど」使用との交換が認められず、「のに」の方が好ましいと感じる。

(5) a.春なのに、お別れですか。
b.?春だけど、お別れですか。

(6) A:あの二人は別々の人と結婚しようとしているのよ。
a.B:(あの二人は)愛し合っているのに。
b.B:？(あの二人は)愛し合っているけど。

本論では、この「のに」がもつ残念・不快感、そして「のに」節で発話が完結することを伝達する効果はどのようなものに根ざすものかについて、関連性理論の枠組みで考察するものである。本論は第一に、矛盾関係が発話の事象間にある「けど」とは対照的に、「のに」は「のに」節の事象に対する聞き手の信念と後続発話との間に生じるものであると分析し、メタ表示的機能、とりわけメタ心理的機能を有する言語表現であると主張する。第二に「けど」との比較考察から、「のに」は「P のに Q」において、P 節が話し手のよりアピールしたい内容であることを聞き手に提示することで、関連性を有する発話であると主張する。

2. 解釈的用法とメタ表示

発話解釈をメンタルプロセスと考える関連性理論は、発話を話し手の信念や思考、あるいは誰かの信念や思考を様々な類似性をもって解釈的に表示したものと位置づける。言い換えれば、オリジナルの表示と話し手の解釈的表示との差は、話し手の主観的な解釈が関与しているか否かである。

内田(1998)は、日本語の文末助詞「のだ」が解釈的表示であることを明確に記すマーカーであるとし、オリジナル発話の命題に話し手の主観的判断が含まれていることを明示的に聞き手に伝える言語手段の一つであるとしている。(7)を見てみよう。

(7) a.太郎が窓ガラスを割った。
b.太郎が窓ガラスを割ったのだ。

(7a)は「太郎が窓ガラスを割った」という事実そのものを記述的に伝える発話である一方、(7b)は、「太郎が窓ガラスを割った」という事実を、話し手の解釈でもって判断し伝えている発話である。

また、基本的にすべての発話は聞き手の思考の解釈であるという関連性理論の想定は、発話解釈にマインドリーディング(mind-reading)能力が欠かせないことを意味している。我々は発話解釈にあたり、人間の認知メカニズムの中枢をなす「心の理論機構(Theory of Mind Module)」を稼働させ、当該の発話から話し手の意図を推測し、命題、発話、そして話し手の信念・思考を帰属

させることを可能にする。外界の出来事を反映する一次的表示から、認知的な解釈として表示するのがメタ表示(metarepresentation)と呼ばれるものである。

メタ表示とは表示の表示である。Wilson(2000)はこのメタ表示の低次表示を抽象的表示、伝達的表示、心的表示と3種に区別し、Sperber(2000)はこれらを表示する能力をそれぞれメタ論理的、メタ伝達的、メタ心理的と位置づける。そのうち心的表示すなわちメタ心理的能力とは、帰属する一次的表示として、話し手の信念・思考などの認識的表示を担うものである。

松井(2004)は、日本語の文末助詞「って」が3種のメタ表示的機能を担うものとして捉えている。以下の例を見てみよう。

(8)　名前って、何なの？　　(抽象的表示)

(9)　A:それで、彼女はなんて言っていたの？
　　B:あなたとは話もしたくないって。　　(伝達的表示：メタ伝達的用法)

(10)　B:僕のことが嫌いなんだって。　　(心的表示：メタ心理的用法)

(8)は、日本語の名詞「名前」の音声形式を引用したものであり、他者への帰属性がないことから、低次表示は抽象的表示である。一方の(9)、(10)はオリジナルの発話が存在する故に、他者への帰属性がある。(9)は、彼女が発したことばを直接引用する点で、低次表示は伝達的表示であり、この場合の「って」はメタ伝達的用法になる。(10)は、彼女の発話をBが主観的に解釈したものが低次表示となり、故に話し手の思考・信念が解釈に加えられる。(10)の「って」はメタ心理的用法である。

これらの先行研究をふまえた上で、「のに」を検討してみよう。(5)をもう一度見てみる。

(5a)　春なのに、お別れですか。

我々は、春と別れが相容れない性質のものであるという直感的判断をもっている。いうなれば、「のに」によって伝わる話し手の残念な気持ちとは、「春ならば別れるべきではない」という話し手の期待が叶わないことの嘆きを表している。話し手は「のに」の使用によって、話し手の何らかの期待すなわち主観的判断を伝え、それが反してしまうことを聞き手に訴えているのである。

言い換えると、先行発話「春である」からの想定「春ならば別れるべきではない」は先行発話の解釈的表示であり、前述のメタ表示の説明に従えば、この想定は話し手の期待つまり信念が付与された心的表示と捉えられることとなる。聞き手は、「のに」から推意としての心的表示「話し手は、春ならば別れをすることはないと信じている」を先行発話から導出し、後続発話の表出命題「別れである」によって、話し手の信念が叶えられないものであると推論する。そして、この推論の結果、話し手の残念感が聞き手に伝わると考えられるのである。

これらの見解から帰納することは、日本語の接続詞「のに」がメタ表示的機能を持ち、とりわけメタ心理的な言語表現ではないかということである。本論はこの仮説を維持し、矛盾の関係が発話の事象間にある「けど」とは対照的に、「のに」は「のに」節の推意に対する話し手の信念と

後続発話との間に生じるものであると分析する。

3. メタ心理的用法としての「のに」

メタ心理的用法とは話し手の信念・思考などの認識的表示を担うものであり、そこには「話し手の主観的判断」が聞き手の解釈に加えられる。「のに」がメタ心理的機能を有する言語表現ならば、その推論プロセスはいかなるものであろうか。メタ表示の概念に沿って(1)をもう一度考えてみる。

(1') a.(会社を)辞めたいけど、辞められない。
b.(会社を)辞めたいのに、辞められない。

(11) a.先行発話の命題表示：話し手は[話し手が会社を辞める]ことを望んでいる。
b.「けど」節からの推意：会社を辞められるであろう。
c.後続発話の表出命題：話し手は会社を辞めることができない。

Blakemore(1986,2002)の but 分析に従えば、「のに」の使用は「けど」同様、先行発話と後続発話の間に何らかの矛盾関係があることを聞き手に伝えると分析される。つまり(1'a)「けど」の場合は、(11a)の表出命題から導出される想定(11b)が、後続発話の表出命題(11c)と矛盾する。一方(1'b)「のに」の場合も、(11a)から推意を導出する道筋までは同じだが、「のに」はさらに(12)のような、話し手の信念・思考を担う高次表示と後続発話が矛盾すると本論は分析する。

(12) 「のに」節からの推意：話し手は[辞められるであろう]と信じている。

我々は誰しも、自分の信念が成就されなければ、当然ながら意外・残念に思うものである。「のに」節の推論プロセスの結果、「話し手の失望」あるいは「被害者意識」とでも言うべき、話し手の心的態度が伝達されることになると本論は分析する。つまり「のに」は「けど」と同様、先行発話 P の推意 P'と後続発話 Q との間に矛盾関係を有することを伝えるのであるが、推意 P'と後続節 Q 間の矛盾を伝える「けど」とは対照的に、その矛盾関係は先行発話と関係づけられる想定 P'に対する聞き手の信念と後続節 Q との間に生じるものと説明される 2)。

次に、「のに」の文末使用の場合を考えてみる。

(4b) 朝ご飯の仕度ができたのに。

(13) a.「のに」節命題表示：朝ご飯の仕度ができた。 =P
b.「のに」節推意：聞き手が今、朝食を食べる。 =P'
c.メタ心理的高次表示：話し手は[P']を信じている。 =心的表示
d.非明示的後続節命題：[聞き手は今、朝食を食べない] =Q

「のに」の使用は、「のに」節と矛盾の関係にある事象をコンテクストから聞き手に検索させ、話

し手の信念が叶わないことを聞き手に伝える。話し手が真に伝えたいことは、非明示的後続節の内容に加え、「のに」節からの推意に対する自分の信念がそれと相反するということなのである。

「のに」の使用によって、話し手の抱く信念が矛盾関係の対象となるように聞き手に指示するという本論の主張は、後続発話のモダリティ付加に一定の制約を課すという、さらなる示唆も与える。

(14)　路面が凍っているのに／けど、車を運転する。

(14)は「のに／けど」どちらも容認可能である。しかし、(15a)のように後続発話に許可・命令・勧誘などのモダリティが付与されると「のに」は容認不可となり、禁止のモダリティ(15b)の場合は「のに」は容認されることになる。

(15)　a:路面が凍っている*のに／けど、車を運転していいよ／運転しろ／運転しよう。
　　b:路面が凍っているのに／けど、車を運転するな 3)。

(14)の聞き手は、「のに」の使用によって、先行発話から話し手の心的表示「路面が凍っているのだから、車を運転すべきではないと信じている」を呼び出し、それが話し手にとって成就されない想定であると推論する。さらに、危険な状況での運転を危惧する話し手の感情をも復元することとなろう。

しかし、(15a)のような「路面が凍った状況で車を運転する」という想定を話し手が許可したいと思うようなコンテクストでは、話し手は「のに」を使用することはない。話し手が、自身の信念矛盾による語用論的な違反を避けるためである。後続発話の想定に反する信念を抱いている話し手は、後続発話の想定を許可したり、命令したりすることはないのである。

それゆえ、(15a)が対話文、たとえば(16)になると「のに」の使用が容認される。

(16)　A:車を運転していいよ／運転しろ／運転しよう。　(Aの許可／命令／勧誘)
　　B:路面が凍っているのに？　(Bの信念)

「運転する」ことを許可しているのはAであり、「車を運転すべきではない」と信じているのはBであるから、(15 a)のような同一話者による信念の矛盾が生じず、「のに」が容認されるのである。

一方(15b)で「のに」が容認されるのは、禁止のスコープが「路面が凍っているのに車を運転する」すなわち「P のに Q」全体を包むからである。聞き手は危険な運転をすることへの話し手の不安な感情、そして、それら一連の想定を遂行することは許さないという話し手の意図をも復元することとなろう。さらに禁止のスコープが一連の想定を包むという事実は、話し手にとって後続節Qが、すでに自分の期待する想定と相反する事象として確定していることを意味している 4)。言い換えれば、「路面が凍っていて、聞き手が車を運転しようとしている」コンテクストにおいて、話し手が「聞き手が車を運転する」という事象が自分の意に反している事象であることを伝えるのである。

このように、「のに」は話者の信念が関与している。「のに」節から導き出される想定に対する

信念が成就されないものであると聞き手に解釈されることで、結果として話し手の残念感が伝わるのである。さらに(15)で見たように、「のに」節に話し手の信念が関与することにより、「のに」は後続発話つまり主節のモダリティに制約を課す表現であるとも言えよう。

4.「のに」発話の関連性

最後に、「のに」発話がいかにして関連性を達するかについて、「けど」と比較しながら考えてみたい。(3)をもう一度見てみよう。

(3) a.鈴木さんは関西出身なのに、標準語を話します。
b.鈴木さんは関西出身だけど、標準語を話します。

真理条件は(3a)(3b)共に同じであり、先行発話と後続発話との間に何らかの矛盾関係を伝達するという面でも等価である。しかしながら、P と Q どちらが前景(foreground)／背景(background)[5]であるかをポイントするという意味の点で、言い換えれば、どちらが話し手のよりアピールしたい命題であるかという点で、両者は異なると本論は主張する。

武内(ms)によると、「けど」は「P けど Q」において先行発話から導かれた想定 P'を削除するのではなく保持し、それをコンテクストとして取り込み、その上で Q 節を処理せよという手続き的意味を有する言語表現であると述べている。すなわち(3b)において、先行発話から導かれる推意 P'「関西出身ならば、標準語を話すのだろう」をコンテクスト化し、その中で Q 節「鈴木さんは標準語を話す」を処理することで関連性を有すると説明される。一方、本論が主張する(3a)「のに」は、「P のに Q」において Q 節を背景化し、その Q 節に反する想定として P 節からの推意 P'を解釈することで文脈効果を生み出し、関連性を有する。言い換えれば、後続節 Q の命題「鈴木さんは標準語を話す」が、すでに話し手が知っている事象であると聞き手に思わせることが、「のに」を使用させるのである。この点で、「のに」と「けど」は、解釈の方向において対照を成すといえよう。

この主張に従って、文末使用である(4)を再考察する。

(4) (出かけようとしている息子に対して)
a.朝ご飯の仕度ができたのに。
b.朝ご飯の仕度ができたけど。

(4)において、Q は明示的ではないが、コンテクストとして、顕示的想定「息子は朝食をとらないで出かけようとしている」がある。(4a)の「のに」は、聞き手に「仕度ができているのだから、息子は朝食を食べると信じる」といった想定 P'を呼び出させるが、この文脈想定が「朝食をとらないで出かけようとしている」という顕示的想定 Q と矛盾することになり、「のに」節の表出命題が話し手のより訴えたいことであること、さらにその推意としての、話し手の信念が叶わないことへの残念感が聞き手に伝わることとなる。一方「けど」の使用においても、「けど」節から想定 P'を呼び出させる推論の道筋は同じであるが、「けど」は、P 節を背景情報とすること、つまり呼び出した想定 P'をコンテクストに取り入れることを聞き手に指令する。そして、それを結論へ

の足がかりとした上で、顕示的想定Qである「朝食をとらないで出かける」の処理に向かわせることを「けど」は伝えるのである。このように、「けど」によって、聞き手がコンテクストを頼りに、処理すべき非明示的後続節の検索を行うことは、「けど」発話のみでは話者の意図伝達が未完であるという直感をも説明している。

すなわち、話し手が聞き手にたどるよう指示する推論の道筋は、(4a)では「のに」節の表出命題が結論であり、対照的に(4b)は「けど」節の表出命題が顕示的想定の前提となり、その上で帰結節を解釈することになると本論は分析する。

さらに「のに／けど」交換不可能な(6)の例を考察する。

(6)　A:あの二人は別々の人と結婚しようとしているのよ。
　　a.B:(二人は)愛し合っているのに。
　　b.B:？(二人は)愛し合っているけど。

(6)では、Bの「のに」発話に先行し、後続発話QがAの発話によって明示されているのであるから、Aの発話は、AとBの会話において背景情報として機能することとなる。話し手Bによる「のに」の使用は、「愛し合っている」から引き出される「愛し合っているなら二人は結婚すると信じている」という想定P'と、聞き手Aの発話内容つまり背景情報Qが矛盾し、その上で話し手Bの「のに」発話を処理することを聞き手Aに提示する。「のに」の手続きに従って、聞き手のAはQを背景化することで、「のに」節Pが、話し手Bがより訴えたいことであると解釈する。加えて、愛し合っているのに結婚しないことが極めて不条理であるというBの感情をも復元するのである。一方で、言うまでもなく、(6)のような聞き手Aの発話であるQがすでに背景化されているコンテクストにおいては、「けど」の使用は適切な文脈効果をもたらさず、容認されにくいのである。

結論として、「Pのに／けどQ」において、話し手はP、Qとも伝達したい命題内容ではあるが、「のに」は主節つまり後続発話Qを背景情報とし、「のに」節の命題が話し手のよりアピールしたい内容であることを聞き手に指示するものである。一方の「けど」は、Q節と矛盾するPからの想定P'をコンテクストに加える、つまり背景化し、Q節の命題を話し手の結論としてより訴えたいということを聞き手に指示するものである。

5.　結語

本論では「のに」が持つ機能として以下の2つを定義する。一つは、「のに」はメタ心理的機能を有する表現であり、先行発話からの想定P'に対する聞き手の信念が達成されないことを伝える表現であること、二つに「のに」は、「PのにQ」スキーマにおいて、Q節を背景情報として捉えた上で、P節からの推意P'を処理するよう指令する手続き的意味を持つことである。したがって、話し手の残念な気持ちが伝達されることと、「のに」節に話し手のアピールしたいことが置かれる、すなわち「のに」が文末助詞的機能を持つという直感が説明される。本論の定義に従えば、「のに」発話が持つ効果を一様に説明することができることを主張した。

注

1. この直感は、「のに」が文末助詞的な機能を有する一つの証拠でもある。

2. 一般的に「矛盾」というのは二者命題間に生じる論理学的概念である。本論では便宜上、話者の信念と命題間の相反する関係も「矛盾」と呼ぶことにするが、本論が真に主張するところは、話者の信念が後続発話の事象によって叶わないことを伝えるものであることに注意されたい。

3. スノータイヤに履き替えたばかりの車の性能を試そうとしていたようなコンテクストでは、「けど」も容認されよう。

4. 前田(1995)は、「のに」は先行発話と後続発話が表す事象が、ともに事実として確定している場合に用いられるとしている。

5. 前景(foreground)／背景(background)情報は、伝統的研究における前提／焦点などに代わる概念である。詳しくはSperber&Wilson(1986/95)を参照。

主要参考文献

Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.

Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Pragmatics and Semantics of Discourse Markers*. Cambridge: CUP.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

前田直子. 1995. 「ケレドモ・ガとノニとテモー逆接を表す接続形式ー」『日本語類義語表現の文法(下)』.497-505.東京:くろしお出版.

松井智子. 2004. 「語用論から見た言語の進化」『月間言語〈言語の起源〉再考ー新たなアプローチの提案』6月号. 31-37.東京:大修館書店.

Sperber, D. 2000. Metarepresentations in An Evolutionary Perspective. Sperber, D. (ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 117-37. Oxford:Oxford University Press.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

内田聖二. 1998.「「(の)だ」ー関連性理論からの視点ー」『現代英語の語法と文法』243-51.東京:大修館書店.

Takeuchi, M. 1998. Conceptual and Procedural Encoding: Cause-Consequence Conjunctive Particles in Japanese. Villy Rouchota and Andreas H, Jucker (eds.) *Current Issues in Relevance Theory*.82-103. Amsterdam:John Benjamins

Takeuchi, M. (ms).Japanese Consessives KEDO and DEMO in Utterance-Initial Use.

Wilson, D. 2000. Metarepresentation in Linguistic Communication. *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*. Sperber, D. (ed.) 411-48.Oxford:Oxford University Press.

渡部学. 1995. 「ケド類とノニー逆接の接続助詞ー」『日本語類義語表現の文法(下)』.557-64.東京:くろしお出版.

A Corpus-Based Analysis of "*Go and* VERB" and "*Go to* VERB" Constructions

Noriko Matsumoto (noriko-mtmt@pop02.odn.ne.jp)
Doshisha Women's College of Liberal Arts

1. Introduction

The English motion verbs have been a prolific research area for many years; particularly, some studies in the functional and cognitive paradigms have drawn attention to semantic differences between *go* and *come*, and have offered a synthesis to a large extent. (See, for example, Clark 1974, Fillmore 1971, Levinson 1983, Radden 1996.) The most semantically and cognitively oriented approaches to *go* and *come* have attached great importance to the meaning of *go* itself and/or *come* themselves. Although describing the semantic difference between *go* and *come* is of importance, this paper focuses specifically on spatial and non-spatial uses of *go*, that is, actual and fictive motion construals of *go*, by shedding light on the *go-to-VERB* and the *go-and-VERB* constructions to which the previous accounts have paid attention. Whereas Radden (1996) proposes that the fictive motion construal of *go* involve the conceptual metaphor, CHANGE IS MOTION, Langacker (1991) emphasizes not on metaphorical mappings between the actual and the fictive motion domains, but on abstract conceptual structures which are schematic for different domains. Metaphor, for Langacker, is mainly a matter of semantic extension.[1] To reinforce Langacker's idea, this paper will first examine the construction of *go-to-VERB* and then that of *go-and-VERB* through an image schema, the SOURCE-PATH-GOAL schema, and the image schema blending, and will offer a unified account of the two constructions respectively. Furthermore, it will provide an integrated explanation for both constructions which are seemingly unrelated.

2. *Go-to-VERB* Construction

I would like to propose a schematic characterization of the *go-to-VERB* construction, which is valid for all instances. The SOURCE-PATH-GOAL schema is one of the most common structures that emerge from our constant bodily functioning (see Lakoff 1987:275, Johnson 1987:28). This schema is topological because a path can be expanded, shrunk, or deformed (Lakoff & Johnson 1999:33). The meaning of a sentence with the *go-to-VERB* construction depends on what element in the SOURCE-PATH-GOAL schema is profiled. The sentences in (1)-(3) demonstrate the cases in which the source, the path, and the goal are all profiled.

(1) As you know, when Bill Clinton goes to speak to a press dinner in Washington, or the Gridiron dinner, he gets a lot of people in advance to give him jokes. (CNN 2000.10.19.)
(2) It doesn't recognize this kidney so it goes to fight it and you have to take the rejection medicine. (CNN 2001.8.29.)
(3) Every single penny from her goes to help America's children, not just in the United States but also in other countries, like… (CNN 2003.10.21.)

In (1), the source as the actor actually goes somewhere as the path, and then carries out the infinitival event as the goal. These two subevents are unquestionably arranged in chronological order. (2) is similar to (1), but (2) is different from (1). In (1) the source is the actor, and the actual motion is explicitly involved. However, in (2) the source is not the actor and the actual motion of the kidney itself seem to be tough to construe. This is not a problem, because we can construe the kidney, more precisely every kidney cell, as if it were an actor; as a result, through a construal operation, metonymy, we can construe the situation as if the kidney went somewhere to fight something. In fact, it is true that every kidney cell can go somewhere

in a person's body to fight against bacteria or viruses, and in (2) the actual motion is also involved. This type of motion may show the middle between the actual and the fictive motion. (3) is similar to (2), but (3) is different from (2). In (3), the actual motion is not explicitly involved. However, we can construe the situation as if every single penny were an actor, and then we can construe the situation as if the actor went somewhere to help America's children. This is why (3) involves the fictive motion.

As "*go to show*" means "to help to prove something," (4) also involves the fictive motion. (4) is equivalent to the idea that certain property of the path may be segregated off as background properties, although the speaker conceives the whole situation which the source, the path, and the goal are capable of signifying. In (4) the speaker conceives the passage of time as the path.

(4) I mean, it goes to show you that money doesn't solve all your problems. (CNN 2002.6.7.)

In sum, the sentences in (1)-(4) are instances of gradient phenomena which signify a shift from the actual motion to the fictive motion construal, that is, the process of semantic bleaching. Such a shift could be elucidated not by metaphorical extension of action motion senses, but by the abstract characterization of motion or change, on the basis of the SOURCE-PATH-GOAL schema. This image-schema oriented approach reinforces Langacker's analysis that is based not on metaphor, but on semantic extension.

3. *Go-and-VERB* Construction

I would like to discuss the syntactic and semantic properties of the *go-and-VERB* construction. The construction involves two verbs which are coordinated by *and*, rather than by simple juxtaposition, as in *Go jump in a lake*. The syntactic evidence indicates that the two verbs are not simply coordinated, but form a single syntactic unit (see Ross 1986:98). Semantically, the Gestalt analysis of coordination gives a natural explanation as to why a coordinate construction "A and B" joins two consecutive events into a single Gestalt, and is often interpreted with more than the truth-conditional meaning "A is true and B is true."[2] According to Quirk et al. (1985), the *go-and-VERB* construction is termed pseudo-coordination. Semantically, pseudo-coordination belongs to informal style, and many examples have derogatory connotations. However, Stefanowitsch (1999) shows that the *go-and-VERB* construction occurs in a variety of uses with or without derogatory connotations, as in (5)-(8).

(5) a. Look what you've gone and done!
b. He's gone and lost his job.
c. It was going to be a surprise, but he went and told her.
(6) Nobody thought he could climb Everest, but he went and did it!
(7) We asked him not to call the police, but he went (ahead) and did it anyway!
(8) I'll go and get the rest of your stuff. (Stefanowitsch 1999:124)

The sentences in (5) express annoyance on the part of the speaker, an implication that the action described by the multi-verb sequence is stupid or undesirable. (6) expresses a certain degree of surprise. (7) conveys something like proceeding without hesitation or without regard to others. (8) expresses actual motion. Especially, Quirk et al. (1985) point out that *gone* in the *go-and-VERB* construction loses the normal meaning of *go*, as in (5a) and (5b). In fact, many examples in the *gone-and-VERB* construction have derogatory connotations, as in (5a) and (5b), but there are counter-examples, as in (9).

(9) a. And it would have been extremely rude of me not to have gone and shaken hands with your president, no matter what my political views are. (CNN 2005.2.7.)

b. We've gone and established a transportation security agency, which is headed incidentally by a former director of both the CIA… (CNN 2002.1.9.)

c. And he has gone and gotten doctors to say that she's in this persistent vegetable state,… (CNN 2004.9.27.)

It should be emphasized here that the *go-and-VERB* construction fuses the semantics of *go* and the second verb into a single event frame. Stefanowitsch (1999) explains that the connective *and* in *go-and-VERB* construction does not function as a coordinator, but as a semantic instruction to blend the image-schematic structure evoked by *go* with the event structure evoked by the second verb, and that this integration allows the speaker to construe the event in accordance with the motion schema.3 Stefanowitsch (1999:130) explains (6) on the basis of the image-schema blending. The event encoded by *he could climb Everest* is an instance of the transitive event schema, in which an agent acts on a patient with some result. By blending this ACTION schema with the DIVERGENCE schema, the event is construed as a divergence from an expected conceptual path. In this case, an expected course of action would have involved the agent doing nothing to do with the patient, that is, not climbing Everest. His analysis is schematized as Figure 1 (Stefanowitsch 1999:130).

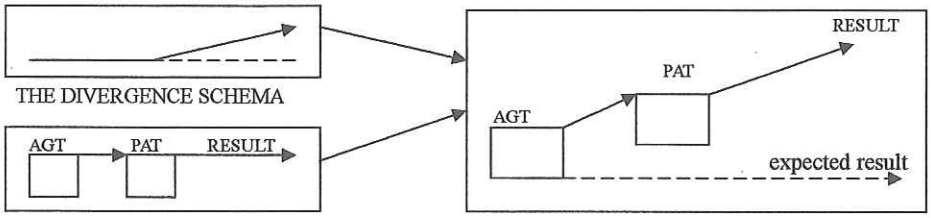


Figure 1.

Since the DIVERGENCE schema also entails a divergence from the expected flow of events or from the currently expected flow of a narrative, as in (5), expressing the implication that the action described by the second verb is stupid or undesirable could be explained easily on the basis of this image-schema blending. Stefanowitsch's analysis is of limited importance because it does not treat the *go-and-VERB* construction expressing proceeding without hesitation, as in (7), and actual motion, as in (8), on the basis of the image-schema blending. His image-schema blending account should be reorganized.

4. An Integrated Account of Both the *Go-to-VERB* and the *Go-and-VERB* Constructions

I would like to revise Stefanowitsch's image-schema blending, explain the difference between the *go-to-VERB* and the *go-and-VERB* construction, and explicate an integrated account of them. First, Stefanowitsch's blending schema, as in Figure 1, will be modified, as in Figure 2, on the basis of the SOURCE-PATH-GOAL schema and the DIVERGENCE schema (Johnson 1987:46, Radden 1996:438).

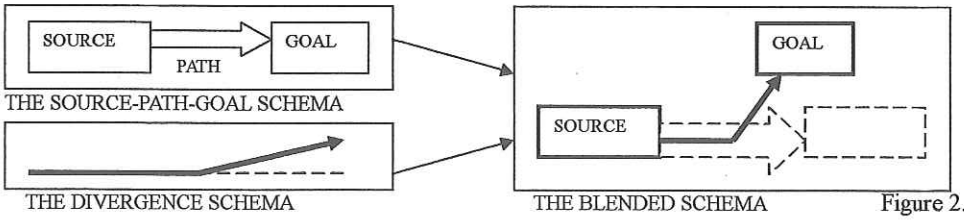


Figure 2.

In my model, Stefonowitsch's ACTION schema is replaced with the SOURCE-PATH-GOAL schema. Second, I will demonstrate that (7) expressing proceeding without hesitation could be explained on the basis of my image-schema blending. The event encoded by *(We asked) him not to call the police* especially *not him to call the police*, is an instance of the transitive event schema, in which an agent as the source acts on a patient as the goal with some result. By blending this SOURCE-PATH-GOAL schema with the POTENTIAL OBSTACLES schema (Stefanowitsch 1999:129), we can construe the event as a potential obstacle from an expected conceptual path, where the obstacle corresponds to potential reason not to act in a certain way. In this case, a potential obstacle corresponds to the event that *he did not call the police*. However, he proceeded without hesitation or he paid no attention to the obstacle; as a result, he called the police. This analysis is schematized as Figure 3.

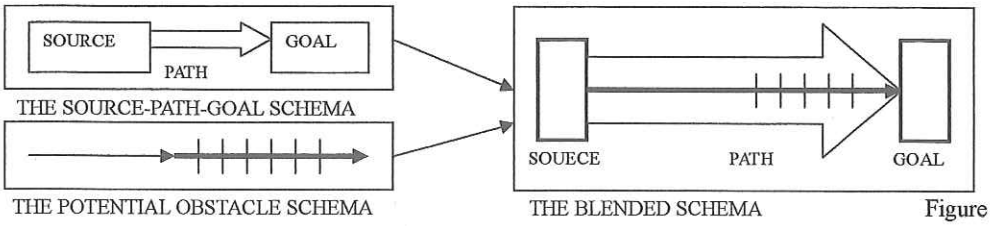


Figure 3.

Third, generally speaking, both *go-to-VERB* and the *go-and-VERB* constructions could express actual motion, as in (10). At first sight, "*go to interview*" and "*go and interview*" seem to convey the same meaning. As Bolinger (1968:127) points out that "a difference in syntactic form always spells a difference in meaning," there is, in fact, a subtle distinction between both constructions. Each construction requires a different construal.

(10) a. Dan Bolts, a colleague of mine at "The Post" and I went to interview Bush in December. (CNN 2002.11.18.)

b. So he goes and interviews him, and what do they say? (CNN 2001.5.21.)

As I have shown in the section two that "*go to interview*" could be construed on the basis of the SOURCE-PATH-GOAL schema, now I would like to demonstrate that *go-and-VERB* construction expressing actual motion could be also construed on the basis of the image schema that blends the SOURCE-PATH-GOAL schema and the COMPULSION schema (Johnson 1987:45, Radden 1996:438), as Figure 4. As the COMPULSION schema is incorporated into the SOURCE-PATH-GOAL schema, superficially this BLENDED schema and the SOURCE-PATH-GOAL schema may look the same.

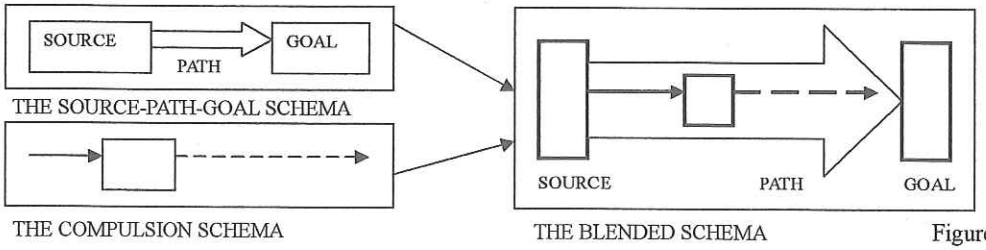


Figure 4.

However, it is clear that there is a subtle difference between both two schemas. Obviously, in (11) "*go and do*" and "*go to do*" do not convey the same meaning.

(11) a. And it's interesting because Hillary Clinton says some of the right things, and then unfortunately she goes and does the opposite. (CNN 2000.2.7.)

b. OK, the first thing we did, we went to do the Frank Sinatra TV special on Miami Beach. (CNN 2002.8.17.)

(11b) involves actual motion and it could be construed on the basis of the SOURCE-PATH-GOAL schema. On the other hand, whether *she goes and does the opposite* in (11a) involves actual motion or not is ambiguous, and also it conveys the additional meaning, that is, an implication that Hillary did stupid or undesirable things. In (11a), more elaborately the DIVERGENCE schema and the COMPULSION schema are incorporated into the SOURCE-PATH-GOAL schema. Consequently, this paper could explain a unified account of the *go-to-VERB* construction and the *go-and-VERB* construction respectively, and an integrated account of both constructions on the basis of the SOURCE-PATH-GOAL schema and the BLENDED schema.

Finally, I have to explain why the *go-to-VERB* construction is associated with the SOURCE-PATH-GOAL schema, why the *go-and-VERB* construction is associated with the BLENDED schema, and why quite the reverse never occurs. The key notion is the word "*to*." It is shown that the infinitive has its diachronic origin in a nominal purposive form and that the grammaticization of a purposive form to an infinitive is a widespread phenomenon in the languages of the world. From a historical perspective, the locative meaning of the allative preposition is the original meaning which has eventually given rise to the meaning of the infinitive.[4] Since the development of the infinitive from purposive forms is an instance of grammaticization, it is clear that the process of grammaticization exhibits a path (see Haspelmath 1989, Traugott 1995). As mentioned in the section two, the *go-to-VERB* construction involves the process of semantic bleaching, but the *go-and-VERB* construction does not. To put it another way, the SOURCE-PATH-SCHEMA involves the process of semantic bleaching, but the BLENDED schema does not. As grammaticization is at least related to semantic bleaching, it is obvious and pivotal that the process of semantic bleaching is closely related to the path, the word "*to*." Thus, this paper concludes that the conceptualization of the path from the historical perspective could be found in the *go-to-VERB* construction, not the *go-and-VERB* construction, and that such historical facts reinforces the fact that semantic bleaching could be found only in the *go-to-VERB* construction. This also concludes that the *go-to-VERB* construction is closely connected with the SOURCE-PATH-GOAL schema.

5. *Go-to-VERB* and *Go-and-VERB* constructions in the CNN Larry King Live Corpus.

Obviously, the more corpora we use, the more significant and reliable results we get. However, this paper uses only one self-produced corpus, the CNN Larry King Live Corpus (2000.1.1.-2005.10.31.) to reinforce my views and shows some significant results in data-driven analysis. As shown in Table 1 and Table 2, both the *go-to-VERB* and the *go-and-VERB* constructions have a great tendency to take the present *go* and the past *went* as the main verb. In particular, the *go-and-VERB* construction takes the past *went* as the main verb more frequently than the present *go*, whereas the *go-to-VERB* construction the present *go* more frequently than the past *went*. It should be noted here that, as mentioned above, the fact that semantic bleaching could be found only in the *go-to-VERB* construction is reinforced by the verb *show*, as shown in Table 2. Therefore, the motion meaning of *go* in "*go to show*" is attenuated, as in (12). On the other hand, as in (13), in the CNN Larry King Live Corpus only two '*go and show*' constructions appear. In this case, the verb *go* actually conveys the motion meaning. Consequently, (12) and (13) support the fact that *go-to-VERB* construction involves the process of semantic bleaching and that the *go-and-VERB* construction does not involve it.

	go and verb (433) <65%>	*goes and V* (25) <3.8%>	*went and V* (180) <27%>	*gone and V* (28) <4.2%>	*total* (666) <100%>
get	26 <6.0%>	3 <12.0%>	36 <20.0%>	3 <10.7%>	68 <10.2%>
do	41 <9.5%>	2 <8.0%>	14 <3.2%>	3 <10.7%>	60 <9.0%>
see	40 <9.2%>	0	6 <3.3%>	1 <3.6%>	47 <7.0%>
have	13 <3.0%>	1 <4.0%>	8 <4.4%>	0	22 <3.3%>
look	11 <2.5%>	1 <4.0%>	9 <5.0%>	0	21 <3.2%>
talk	12 <2.8%>	0	4 <2.2%>	3 <10.7%>	19 <2.9%>
visit	13 <3.0%>	0	4 <2.2%>	2 <7.1%>	19 <2.9%>
be	14 <3.2%>	0	2 <1.1%>	0	16 <2.4%>
say	11 <2.5%>	0	1 <0.6%>	1 <3.6%>	13 <1.9%>
•	•	•	•	•	•

Table 1. Frequencies of collocates of verbs in the *go-and-VERB* construction in the CNN Larry King Live Corpus (sum in parentheses).

	go to verb (221) <34.9%>	*goes to V* (58) <9.1%>	*went to V* (335) <52.8%>	*gone to V* (20) <3.2%>	*total* (634) <100%>
see	35 <15.8%>	5 <8.6%>	119 <35.5%>	4 <20.0%>	163 <25.7%>
work	15 <6.8%>	0	20 <6.0%>	0	35 <5.5%>
get	14 <6.3%>	0	14 <4.2%>	1 <5.0%>	29 <4.6%>
visit	3 <1.4%>	2 <3.4%>	20 <6.0%>	3 <15.0%>	28 <4.4%>
do	19 <8.6%>	0	8 <2.4%>	0	27 <4.3%>
show	0	25 <43.1%>	0	0	25 <3.9%>
go	3 <1.4%>	0	20 <6.0%>	0	23 <3.6%>
be	9 <4.0%>	0	4 <1.2%>	1 <5.0%>	14 <2.2%>
vote	6 <2.7%>	1 <1.7%>	5 <1.5%>	0	12 <1.9%>
•	•	•	•	•	•

Table 2. Frequencies of collocates of verbs in the *go-to-VERB* construction in the CNN Larry King Live Corpus (sum in parentheses).

(12) a. The incredible thing is that, as the colonel was suggesting, by any traditional definition, this mission on October the 3rd was a victory. We got the two guys we were after. Eighteen Americans were killed, a disaster. A thousand Somalis were killed, is the closest estimate I've heard. Mission accomplished? Their casualties far outweighed ours, but it just goes to show that traditional definitions don't count for anything anymore. It was perceived as a disaster. (CNN 2002.1.16.)

b. We're interested in any information that goes to show someone is guilty of what they're charged. We're just as interested in any information that goes to show someone's innocent. And if anybody provides us with that, we will absolutely review that information to see if the wrong person is charged. (CNN 2003.5.27.)

(13) a. In the early years of the queen's reign and even in the final years of her father's reign when she was taking on his duties. She spent a lot of time away. It was the pretelevision age. The feeling was she had to physically go and show herself for long periods of time around her commonwealth. (CNN 2002.4.9.)

b. KING: He was one of the first activists, right?
DARIN: He was there. He was at the march on Washington. And he was doing things quietly. He didn't want to do it for the press. He'd give money. He'd go and show up. (CNN 2005.1.15.)

(14) and (15) also reinforce the fact that, as mentioned above, the *go-to-VERB* construction is closely connected with the SOURCE-PATH-GOAL schema.

(14) Pakistan, one of the first things that I did is I went to go and visit refugee camps that are strung along the Pakistan/Afghan border that have been there for over a decade, … (CNN 2001.12.26.)

(15) *Pakistan, one of the first things that I did is I went to go to visit refugee camps that are strung along the Pakistan/Afghan border that have been there for over a decade, …

In the SOURCE-PATH-GOAL schema, the *go-and-VERB* construction could appear in the GOAL position, as in *went to go and visit* in (14), but the *go-to-VERB* construction could not appear, as in *went to go to visit* in (15). To put it another way, we cannot construe two SOURCE-PATH-GOAL schemas at the same time, but we can construe simultaneously both one SOURCE-PATH-GOAL schema and another schema that produces the BLENDED schema with the SOURCE-PATH-GOAL schema. This strongly supports my view that the conceptualization of the word "*to*" expressing the path could be found in the *go-to-VERB* construction, not the *go-and-VERB* construction (cf. Goldberg 1995:81-86).

In this section, by using the CNN Larry King Live Corpus, this paper will try to account for some important results in data-driven analysis to reinforce my accounts in the previous sections. It should be emphasized here again that although the *go-to-VERB* construction and the *go-and-VERB* construction look similar at the first glance, each construction indeed requires a notably different construal respectively. Such construals are largely invisible to us. However, by following Langacker's (1987, 1991) content requirement strictly, this paper demonstrates that they can be made visible by the careful analysis of linguistic data, and that to construe a conceived situation requires the SOURCE-PATH-GOAL schema and the image-schema blending. As a result, some significant outcomes in data-driven analysis could reinforce some convincing explanations throughout this paper.

6. Concluding Remarks

This paper demonstrates that symbolic units, as specified by Langacker (1987, 1991), such as the *go-to-VERB* construction and the *go-and-VERB* construction, would account for the understanding of form-meaning correspondences that have a cognitive reality, and that such symbolic units afford a unified account of linguistic phenomena traditionally handled separately and in very different ways. Thus, image schemas, representing the fundamental, pervasive organizing structures of cognition, are directly linked with two key notions of Langakcer's cognitive grammar, the symbolic view of grammar and the content requirement. There are many ways of explicating linguistic forms, functions, and meanings. Even when various kinds of phenomena can be subsumed with effort under a highly limited number of rules, cognitive linguists cannot accept that such phenomena have thus been explicated. They emphasize that only when linguistic phenomena and human cognition are plausibly connected can such phenomena explicated. I believe that the interpretation of the image-schemas has enhanced research. As the image schemas are dynamic recurring patterns of our mundane bodily experiential interactions, one fascinating aspect is that linguistic facts which need to be taken for granted but are in fact unexplained can now be interpreted as manifestations of the image schemas which are embodied. In particular, in this paper the SOURCE-PATH-GOAL schema and the image-schema blending are pivotal to account for an integrated explanation of both the *go-to-VERB* and the *go-and-VERB* constructions inclusively.

Although space constraints do not permit further discussion here, this paper raises new problems and thereby opens up avenues for further investigation. Given that constructions as symbolic units code best what speakers do most, attributing the SOURCE-PATH-GOAL schema and the image-schema blending to both the *go-to-VERB* and the *go-and-VERB* constructions will render more transparent the nature of its relationship to other types of constructions including the verb *go* such as *Go wash your hands* as the *go-VERB* construction and *The bullet went flying over my head* as the *go-VERB+ing* construction, or various types of constructions including the verb *come*.

Notes

I would like to thank my advisor, Osamu Nobuhara at Doshisha Women's College, for his wisdom, enthusiasm, and encouragement. He provided much helpful input, and was consistently willing to lend an ear and a critical eye. I am also deeply grateful to William F. Reis at Doshisha Women's College for having given me many insightful suggestions as an informant. I would also like to thank Ichiro Akano at Kyoto University of Foreign Studies for his helpful feedback and discussion. Responsibility for errors is, of course, my own.

1. Langacker (1991:507-514) discusses not metaphor in language, but metaphor of language. Consistent with the Lakoff and Johnson (1980, 1999) approaches, Langacker draws attention to the harmful effects of building block metaphor in morphology, syntax, and semantics. At the same time, he believes that linguists should be capable of surmounting the potentially misleading entailments of conceptual metaphor.
2. Gestalt means that the whole is different from the sum of its parts, that is, gestalts have parts but the sums are not reducible to the parts. Gestalt have additional properties by virtues of being sums, and the parts may take on additional significant by virtue of being within those sums.
3. The sense of blending used here refers to a complete incorporation of the image-schematic structure of *go* into the more specified event frame of the multi-verb sequence. Stafanowitsh points out that the term "blending" might be referred to as the term "fusion."
4. Haspelmath (1989) claims that it is no coincidence that the infinitive is marked by an element that is synonymous with the allative preposition *to*, and that there is a close connection between the modal meaning of the infinitive and the allative meaning to the preposition *to*.

References

Bolinger, D.L. 1968. "Entailment and the Meaning of Structure." *Glossa* 2, 119-127.

Clark, E. 1974. "Normal States and Evaluative Viewpoints." *Language* 50, 316-331.

Fillmore, C. J. 1971. *Santa Cruz Lectures on Deixis*. Bloomington, Ind.: Indiana University Linguistic Club.

Goldberg, A.E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

Haspelmath, M. 1989. "From Purposive to Infinitive – A Universal Path of Grammaticization." *Folia Linguistica Historica* 10, 287-310.

Johnson, M. 1987. *The Bodily in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphor We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

Langacker, R.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, R.W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Radden, G. 1996. "Motion Metaphorized: The Case of *Coming* and *Going*." In E.H. Casad, ed. *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*, 423-458. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Ross, J.R. 1986. *Infinite Syntax!* Norwoood, NJ: Ablex.

Stefanowitsch, A. 1999. "The *Go-And-Verb* Construction in a Cross-Linguistic Perspective: Image-Schema Blending and the Construal of Events." In D. Nordquist and C. Berkenfield, eds. *Proceedings of the Second Annual High Desert Linguistic Society Conference*, 123-134. Albuquerque, NM: High Desert Linguistics Society.

Traugott, E.C. 1995. "Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspective." In D.Stein and S.Wright, eds. *Subjectification in Grammaticalisation*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.

Corpora

CNN Larry King Live. http://transcript.cnn.com/TRANSCRIPTS/lkl.html.

「だって」の意味論

神奈川大学大学院
山田　大介

1. はじめに

本発表は、発話や談話の冒頭の「だって」(注1,2)の意味を関連性理論の立場から分析するものである。従来から多義として研究されてきた様々な「だって」意味機能の統一的な分析を試みる。そもそも「だって」は2つに区別して説明されることが多い(森田(1994)でも後述)。たとえば、日本語に翻訳するとき、butとbecauseが併記されている時があるし、実際に和英辞典にもこの2つの意味が併記されている。しかし、直感的にbutとbecauseと、「でも」と「なぜなら」は、2つの区別される意味であろう。本発表で提示しようとするものは、「だって」の多義に代わる一義的説明、つまりどのような手続きを記号化しているのかということで、これには語用論的推論が大きな役割を果たしていることを示していきたい。

まず2節で先行研究として、従来の「だって」の分析を、辞書的(意味的)、会話分析の立場、そして発話行為理論のそれぞれ立場から紹介し、「だって」の多様な現れを紹介しながら、従来の「だって」分析の不備を指摘し、これらの先行研究を基にした3つの多義的意味を提示する。3節は、本論の分析の拠って立つ関連性理論の枠組み、特に本論の議論の中心となるメタ表示の概念を紹介する。さらに、4節では、初めに提示した3つの意味を、関連性理論の枠組みによって考察し、「だって」の統一的な意味を提示する。結論として、「だって」は「メタ表示」された想定を聞き手に導かせ(探させ)、「だって」節の命題が、メタ表示された想定の理由(または根拠)となること、そして「だって」は、高次表意の派生に制約を課す、手続き的情報を記号化していることを主張する。

本発表では、(1-8)に示される発話や談話の冒頭の「だって」を分析対象とした。

(1)　真由ねー幼稚園には行かない。だって、お友達きらいなんだもん。
(2)　早く寝なさい。だって、明日テストなんでしょ？
(3)　A:今晩のサスペンスドラマは見るよね？
　　B:もちろん。だって、私の好きな俳優が出ているんだもん。
(4)　A:早く寝なさい。
　　B:だって、見たいテレビがあるんだもん。
(5)　A:またピーマン残して！
　　B:だって、苦いんだもん。
(6)　A:どうしてパーティーにこないの？
　　B:だって。
(7)　A:お皿洗ってくれる？
　　B:だって、君、疲れているもんね。　(Yamamoto et al 2001, 82)
(8)　A:明日早く終わるから映画に行かない？
　　B:だって、招待券あるしね。

(1-3)は発話の冒頭に現れ、先行する発話の内容に対してその理由を提示している「だって」、(4-8)は談話の冒頭に現れる「だって」である。(6)は先行する発話だけでなく、後続発話までない例である。さらに、(4-5)は後続発話が先行発話の「否定」の例である一方、(7-8)は肯定の例である。

2. 先行研究:「だって」の多義的分析

(1-8)の「だって」の表れと並行しながら、先行研究を見ていくことから始める。辞書的な意味提示をしている森田(1994)から、会話分析の手法で取り上げた分析(メイナード(1993)、Maynard(1993)(注3)、沖(1996))、そして発話行為理論からの語用論的アプローチをしているKuboまでの分析を紹介する。そして、これら先行研究の流れを汲んで、本論では「だって」の意味の表れを便宜的に2.1~2.5の3種に分類し、一義的意味の提示

への足がかりとする。

2.1 森田(1994)

森田(1994)は、「だって」を意味と機能の側面から、「なぜなら」や「でも」との併記により、大きく 2 種(細かくは 4 種に)に区別し、その意味を説明している。一つは、(1)のように「前の文で述べたことに対して、その理由を説明する」ものや、「相手の質問に対し、行わない理由を説明する」というもので、これらの先行節は、具体的な事実や、疑問文の場合であり、理由説明の接続詞「なぜなら」に置き換えられるとする。もう一つは、(4)の例のような、「相手の命令や勧誘に対し、従わない理由を提示したり、言い訳したりする」や、「相手の意見に対しそれを否定する理由を説明する」というものであり、先行節が、命令文や勧誘文・念押し文などに対する否定回答に使われるとしている。すなわち、「だって」は、(1)の例のように、「なぜなら」(あるいは「というのは」)のように、先行する話の内容への理由づけを後件から補足するものと、(4)のように「でも」(「けれども」)のように、先行する話の内容から予想されることに反する内容を述べる、という 2 種の意味を有していると主張する。この区分けそのものについては議論すべきところがあり、いずれの意味もそのままでは置き換えられない。また、(6-8)の発話には一切言及されていないので、「だって」の意味・機能を提示しているとは言えないであろう。

2.2 メイナード(1993)・Maynard(1993)

森田とは異なり、談話接続語として「だって」を会話分析の手法に立って分析したのはメイナードである。彼女の基本的主張は、(1)のように同一発話内において、自分が前に述べた立場を弁明(または支持する)するための理由を現す場合に because の意味を、(4)のように、先行発話と後続する「だって」発話の話者が異なり、先行話者に対する反対の意思を表す場合には but の意味を、それぞれ持つとしている。そして、(10)のように but と because の意味が合わさった(convergence)解釈もあるという。

(10) A:少し休暇をとろうかなあ。
B:だって、ずっととってないんでしょ? (メイナード 1993, 105)

(10)の「だって」の意味には、話者の「支持」と「反対」の意味が収斂したもので、そこで but と because の意味が両方が存在すると主張しているのである。しかしながら、この両者の意味が convergence しているとは直感としては分かるにしても、この 2 つの異なる意味を convergence したものと解釈するのはどういうことなのかとの説明がされていない。本発表での分析は、関連性理論の枠組みで統一的な解釈を可能とする。

2.3 沖(1996)

沖(1996)の分析のベースには「理由説明」がある。彼女は「だって」の形式を、発話内に現れる「独話型」と、談話中に現れる「対話型」とに分類し、どちらも「理由説明」という一義の意味で説明可能であるとする。「独話型」に現れる「だって」の意味は、「だって」節の内容が前節で述べられた内容の「理由説明」をするとする一方、「対話型」の「だって」には前節が「省略」されていると主張する。(4)の例をとって考えてみると、「だって」発話の前には(11b)の下線のような回答が省略されており、会話の受話の冒頭で「だって」が出現したとき、このような省略があるとする。

(11) a. 早く寝なさい。
b. <u>寝たくない</u>。だって、頭が痛んだもん。

この省略が復元されることにより、「独話型」と同じように、「理由説明」の意味を持つ接続語であると説明する。この復元とは「聞き手の意図に反する主張」であるという。つまり、「P だって Q」のスキーマにおいて、彼女の主張する「だって」の意味は、同一発話内においては「理由説明(P の理由を Q で説明する)」で、会話の冒頭部においては「聞き手の意図に反する主張(P)+理由説明」であるとする。しかし、省略として考えたとしても(7-8)の例の P は、決して「聞き手の意図に反する主張」ではない。いうなれば「聞き手の意図に同意する主張」であろう。こう考えただけでも完全な説明とは言えない。

2.4 Mori(1999)

Mori(1999)は、談話の冒頭の「だって」を中心に、数あるデータの中から抽出した分析により、agreement utterances と disagreement utterances の 2 種に区別して論じている。つまり、(4-5)のような発話を agreement utterances とし、「だって」自体が因果関係を表すマーカーとしての機能を有し、また(7-8)を disagreement utterances とし、先行発話の話し手の内容を同意しサポートするものとしての機能を有しているとする。問題の一つは、前者は命題レベルで捉えており、一方後者は命題内容の提示というメタレベルで捉えていることである。

2.5 Kubo(1999)

Kubo(1999)は、発話行為理論の立場から、発話や談話の冒頭の「だって」の意味機能について分析しているという点において先の 4 つの分析とは異なる。彼は「なぜなら」に置き換えられる「だって」や Mori(1999)の agreement utterances に該当する例を使って、illocutionary force として objection と supplementary explanation の2種が、「だって」発話の持つ機能として存在するとする。つまり、Kubo の見解は、たとえば(3b)において、「だって」が objection と supplementary explanation との 2 つの illocutionary force を持っているものと分析していると考えられる。Agreement utterances の例でも同様のことが言えるが、これらの「だって」に objection があるとは考えにくいように思われる。また、発話によっては、objection と supplementary explanation だけでなく、protest や justification といった illocutionary force も出てくるという。形式から見れば統一的に説明できていると思われるが、発話により発話行為が変化するということは、多義であることを示していると言えよう。関連性理論によれば、高次表意に属するということになろうが、Kubo が関連性理論と根本的に違うことは、「だって」を手続き的よりは概念を記号化しているものと捉えていると思われることであろう。

2.6 3種の「だって」

4 つの先行研究を見てきたが、どの研究も統一的な「だって」の意味を説明するものはなく、またその機能の説明もばらばらであることは否めない。「だって」の多様な表れを、便宜的に「なぜなら」と「でも」との掛け合わせによって(1)-(3)を logical implication(論理的含意)，(4)-(6)を disagreement utterances そして、(7-8)を agreement utterances として分類し提示する。

2.6.1 Logical implication utterances: なぜなら／*でも

Logical implication は、「なぜなら」と置き換えられると考えられる例である。つまり、明示的に、先行発話で提示した事象の理由として「だって」の発話を提示する。たとえば(1)の話し手である真由は、自分が幼稚園には行かないというその理由として、後件に幼稚園の友達が嫌いであるという理由を挙げており、また(2)は、話し手の早く寝なさいと主張するその理由として、明日テストがあることを提示している。さらに(3)は、A の発話の応答として、「だって」発話に先行する「もちろん」は、「今晩のサスペンスドラマを見る」ことを伝え、「だって」発話が、それに対する理由として解釈されるよう意図している。これら(1)-(3)は、「だって」発話に先行する発話が明示的にあり、その主張に対する理由として「だって」発話が解釈される。「なぜなら」(ここでは「なぜって」の方が自然だが)で置き換えられるのは、先行発話の命題内容と「だって」発話の命題内容の間の因果関係、すなわち、後者は前者に対する理由を提示している場合である。

これに対して、次の 2.6.2 と 2.6.3 は先行発話の命題内容が明示的ではない場合、すなわち「だって」発話が理由となっている事象が明示的ではない場合、「なぜなら」との置き換えを許さない例について考察する。

2.6.2 Disagreement utterances: *なぜなら／でも

Disagreement utterances として分類したのは、先行発話に対する「だって」発話の応答が否定的であるということである。このことが、否定の接続詞「でも」との置き換えを可能にしている。(4-5)の発話を見てみると、双方とも先行発話 A に対する否定や拒絶の応答の理由として「だって」発話が解釈される。すなわち、(4)は A の早く寝なさいという命令に対して、B はその命令には従えない理由を提示している。また(5)は、ピーマンを残してはいけないという A の想定に対して、B はそれには応じられないとする理由を提示する。(4-5)の「だって」発話が、前

件の命令や主張に対する否定の理由を後続発話に示すことから、否定の接続詞の「でも」との置き換えが可能であるであろう。また、(6)のような言語的コンテクストの全くない「だって」の使用もある。(6)は例えば次のようなシナリオが考えられる。A が主催するパーティーで、B があまり行きたくないことを A が分かっていて、敢えて聞く場面である。B は「だって」のみを発して、行きたくない理由を明示的にせず、聞き手である A に解釈を委ねる。このような「だって」の使用については今まで研究されていないと思われる。これについても関連性理論の枠組みの中で説明できることを示したい。

2.6.3 Agreement utterances: *なぜなら／*でも

Agreement utterances の例は、先行研究では Mori と Kubo で触れているが、「でも」との置き換えを許さず、もちろん「なぜなら」との置き換えも受け入れられない。(7)は、A のお皿を洗ってくれるかという依頼に対して、B はその依頼を受け止め、了承し、その了承する理由として、「だって」発話が解釈される。(8)は、A の映画に行かないかという勧誘(提案)の発話に対して、話し手はその勧誘に応じる理由を挙げている。

これら「だって」の多様な現れを、関連性理論は一様に説明することを可能にする。このことを提示する前に、「だって」の単義的説明に必要とする関連性理論の概念の中で、メタ表示の概念を紹介する。

3. 一義的説明

3.1 解釈的用法とメタ表示

言語形式の持つ意味と、話し手が意図する意味との間に大きな隔たりがあるという主張は関連性理論の基本的な仮説である。発せられた言語表現は、話し手の意図する意味には程遠く、発話としての意味に到達するには多くの作業が含まれる(Carson 2000)。その溝を埋めていこうとするのが推論の役割であり、発話解釈は言語的材料を基に、推論を働かせて得られるものであると関連性理論は説明する。

すべての発話は表示である。しかし表示する対象は常に、客観的状況や話し手自身の考えとは限らない。聞き手を含む他人の発話や考え、あるいは他人の考えていそうなことも表示対象となる。関連性理論では、話し手の見解とそれが表示するものの関係によって、発話を「記述的」「解釈的」に使用されると考える。

(12) Frederick reproached Elizabeth. She had behaved inconsiderately. (Wilson 2000, 427)

(13) a. Frederick says that she had behaved inconsiderately.
b. Frederick believes that she had behaved inconsiderately.
c. The speaker says that Frederick believed that she had behaved inconsiderately.
d. The speaker believes that Frederick believed that she had behaved inconsiderately.

(12)の発話例は(13a)あるいは(13b)のように解釈される。(13a)は、(12)の第 2 発話を低次表示として、出来事の真の記述として、つまり「記述的」に表示している。この発話は、話し手が真だと思うことに表示を加えたものであり、話し手自身の信念を表明するものではない。一方、(13b)は、話し手が真だと信じている事象に表示を与えているものであるが、特に話し手自身が持っている意見を表出している。すなわち、低次表示の事象を話し手の信念として「メタ表示」している。このように、話し手の思考をメタ表示した場合、表示を加えるものを「解釈的用法」という。さらに、(13c-d)も解釈的に使用されたものである。話し手が自分とは異なる考えを持つものが存在することを知っており、自らのものではない第三者の考えや思考を「解釈」したものである。すなわち、他人の考えに表示を与えている、つまり表示の表示という意味で「メタ表示」である。

「メタ表示」は、他人の考えや意見に帰属する能力である。(13c-d)は、人の考えや意見を表示したもので、(13c)の話し手は、自分の考えや意見と異なる他人のものを表示しており、(13d)は、自分の意見とは異なる他人の考えについての意見を表示している。このようにメタ表示能力は、人の意見や考えに帰属することで、表示を与えることを可能にするものであると考えられる。関連性理論では、メタ表示が、オリジナル表示への話し手の想定を表明するために使用されたとき、エコー的であると説明する。発話が解釈的に使用されるとき、(13a)の例のように解釈的であるという機能(手立て)が明示されないことがある。もし Frederick が Elizabeth had behaved inconsiderately と言ったのであれば、第 2 発話は(13a)のように、Frederick が言ったことの忠実な表示として解釈される。(12)の第 2 発話は(13a)と同じ表意を表すよう意味拡充される。(13a-d)は、(12)の発話例を意味

拡充してメタ表示であることを明示的にしたものである。つまり関連性を求める聞き手にメタ表示を構築させるのである。本発表では、「だって」発話の機能も、それに続く発話が別の発話の解釈として関連性がある、という新しい分析を提示する。語用論的推論が本質的な役割を果たすことを以下見ていくこととする。

3.2 「だって」発話の解釈

本発表で、「P だって Q」というスキーマの中で、「だって」の意味機能が捉えられていると考える。すなわち、(14)に示されるように、P は先行発話の命題内容、P からメタ表示された想定を R とし、Q は R への理由・根拠である。「だって」節は、聞き手が P を基に構築され解釈した想定(R)の理由、あるいは根拠を表示するという分析である。

(14)　P だって Q
　　P:先行発話の命題内容
　　R:P のメタ表示された想定(推意も含めた命題群)
　　Q:R への理由・根拠

以下(14)のスキーマを基に、本発表で提示した例文を順に使って、「だって」の持つ意味を考察する。まず、disagreement utterances の(4)-(5)の例から始める。それぞれの例は(4')-(5')として、さらに(14)で示したそれぞれの概念と共に表示している。これらの発話での、命題 P の聞き手による解釈である R は、P の反対である。

(4')　A:早く寝なさい。
　　B:だって、見たいテレビがあるんだもん。
　　P:早く寝ることが聞き手にとって望ましい
　　R:話し手 B は<P>には応じられない。
　　Q:話し手 B は<P>には応じられない。なぜなら、見たいテレビがあるから。
(5')　A:またピーマン残して！
　　B:だって、苦いんだもん。
　　P:ピーマンを残こすべきではない(食べるべきである)。
　　R:話し手 B は<P>には応じられない。
　　Q:話し手 B は<P>には応じられない。なぜなら、ピーマンは苦いから。

(4')において、関連性理論によれば、A による命令発話は、「早く寝ることが話し手 B とって望ましい」という命題内容 P を伝えると分析される。「だって」の使用は、話し手 B が、P を一旦受け止め、そして認めるという意図を伝える。次にこれを解釈し、それに応じられないことを伝える。その理由として、Q 節を解釈するよう聞き手は求められる。話し手 B の「だって」の使用により、応じられない根拠あるいは理由を、「だって」節が提示していると聞き手に解釈させる。(4')と同様、(5')においても、Aの「ピーマンを残して！」という発話から、もしかしたらAのいつもピーマンを残してはいけないと言われていたかもしれないという想定(P)を B は一旦受け止め、「ピーマンが苦いという」という理由で話し手BはAの主張を受け入れられない(R)と解釈する。話し手Bが「だって」を発することで、聞き手 A に想定 R を導出させ、その理由または根拠として Q を提示する。

次に、Agreement utterances の(7-8)の例を考えてみる。この場合、R は聞き手に対して解釈された想定が、同意や受諾というものである。

(7')　A:お皿洗ってくれる？
　　B:だって、君、疲れているもんね。
　　P:A は話し手 B にお皿を洗ってほしい。
　　R:話し手 B は<P>に応じる。
　　Q:話し手 B は<P>に応じる。なぜなら、話し手 A は疲れているから。

(8') A:明日早く終わるから映画に行かない？
B:だって、招待券あるしね。
P:Aは話し手Bと映画に行きたい。
R:話し手Bは<P>に応じる。
Q:話し手Bは<P>に応じる。なぜなら、招待券があるから。

(7')において、Aの「お皿を洗ってくれるか」という提案に対し、「だって」の使用が、Bにその提案を受け入れさせ、「だって」節がその理由であると解釈させる。同様に、(8')においても、Aの「映画にいかないか」という誘いに対し、聞き手はその提案を受け入れ、よって、聞き手はそれを解釈した想定Rを導出し、その根拠としてQを解釈する。

ここまで、Agreement utterancesとdisagreement utterancesの場合、先行発話からの想定を解釈した想定を探させる、この解釈的表示こそが、「だって」発話の理由の対象となることを示した。これら両者の「だって」発話が「なぜなら」と置き換えることが容認されない事実は、解釈的に表示された想定に対する理由説明であるからと説明される。そこで、Logical implicationの(1-3)の例を考えてみよう。一見、二事象間の記述的因果関係を明示する「なぜなら」と置き換えを可能にするlogical implicationの「だって」発話は、これら2つと同じように説明出来ないかもしれない。しかしながら、これら一見してメタ的表示されていないように思われるlogical implicationも、(1')のように提示することで、同様に分析されると主張したい。

(1') 真由ねー幼稚園には行かない。だって、お友達きらいなんだもん。
P:真由は幼稚園には行きたくない。
R:話し手は<P>と主張する。
Q:真由は幼稚園には行かないと主張する。なぜなら、お友達がきらいであるから。

(2') 早く寝なさい。だって、明日テストなんでしょ？
P:早く寝ることは聞き手にとって望ましい。
R:話し手は<P>と主張する。
Q:話し手は<P>と主張する。なぜなら、明日テストだから。

(3') A:今晩のサスペンスドラマは見るよね？
B:もちろん。だって、私の好きな俳優が出ているんだもん。
P:今晩のサスペンスドラを見るつもりである。
R:話し手Bは<P>と主張する。
Q:話し手Bは<P>と主張する。なぜなら、私の好きな俳優が出ているから。

すなわち、先行命題Pを話し手の主張としてメタ表示すると分析するのである。話し手の「だって」の使用により、聞き手は推論を駆使し、Pであると主張しているものと解釈(R)を復元し、Qをその主張の理由・根拠として理解する。(2)の例も、話し手は、「早く寝なさい」と発し、「だって」の使用により、聞き手は推論によって、P(「早く寝ることが聞き手にとって望ましい」こと)を主張していると解釈を復元する。そしてQをその主張の理由・根拠として聞き手は理解する。さらに(3')においても、「だって」の使用により、聞き手は推論によって、P(「今晩のドラマは見る」ということ)を主張していると解釈し、そしてQをその理由・根拠として聞き手は理解するのである。Logical implicationとして分類した「だって」発話も、先行発話を解釈した想定RをPであると主張するとメタ表示するという分析によって、先の2つのタイプ同様に説明される。

また、本発表の分析に従えば、「だって」節が明示的ではない(6)の例も同様に分析できる。

(6') A:どうしてパーティーにこないの？
B:だって。
P:話し手AはBにパーティーに来て欲しい／来る事が望ましい／来るべきだ。
R:話し手Bは<P>には応じられない／<P>が望ましいとは思わない。
Q:話し手Bは<P>には応じられない。なぜなら、(行きたくないから)。

(4)や(5)と同様に、「パーティーに来ないの？」という発話から、A のパーティーにきてほしいという勧誘に対し、B は A の誘いには十分理解できると受け止めている。しかし B はその勧誘には受けられないことを「だって」の使用によって伝達する。「だって」を使用することで、聞き手に R という想定を導き出させる訳であるが、同時に、明示的でない根拠 Q も復元させる。「だって」以降の発話を敢えて発せず、聞き手である A にさらなる労力を課すことで、行きたくないとする理由を強く示すことになる。このような言語的コンテクストのない「だって」の使用は、「だって」が手続き的情報を記号化していることの証拠となる。

「だって」を使用することで、聞き手に R という想定を導き出させる訳であるが、この時の先行発話からの想定を解釈した想定は、様々な想定が関与すると考えられる。たとえば(4')において、話し手の P には応じられないということの背景には、「今日の番組はとりわけ面白い」や「先週見逃してしまったから今週は是非見たい」などや、また(7)には「今日は君は忙しかった」や「昨日は君が洗ったから、今日は私の番だ」などという複数の想定が存在する。つまり、メタ表示が層をなしていると考えられる。(14)の R にある、「推意も含めた命題群」とはまさにこのことで、「だって」の使用は、このような複数の想定を聞き手に復元させるのである。

最後に「でも」との置き換えについて触れる。Maynard が「だって」の意味が but と because の convergence であると主張していたことを思い出して欲しいが、Takeuchi (ms.) が談話連結語としての「でも」の分析の中で、「でも」は(「けど」と対照的に)、英語の談話連結語 but と同様に、前件発話の矛盾と削除という意味を記号化しているとしている。「だって」の先行研究(森田(1994)、沖(1996)など)には、否定の回答発話という説明があった。しかし agreement utterances ではもちろんのこと、logical implication の例でも、「でも」の使用を許さない。(4)は「でも」で置き換えられた場合は、(4")のように想定を復元し、聞き手はその想定には応じられないという想定と矛盾する理由を提示している。「だって」が「でも」が必ずしも共起しないことは、「だって」発話は、前件との矛盾の関係を表すものではないということである。

(1")　*「真由ねー幼稚園には行かない。でも、お友達きらいなんだもん。」
(4")　A: 早く寝なさい。
　　B: でも、見たいテレビがあるんだもん。

このように、「だって」の機能がメタ表示された想定への理由(または根拠)として統一的に解釈されることを示してきた。

最後に、英語の理由を表す because と付き合わせてみたい。

(15)　a. The grass is wet, because it's raining.
　　b. It's raining, because the grass is wet.　　(Wilson 2000, 431)

(15ab)とも「雨が降ったこと」と「芝がぬれていること」との二つの命題間の推論的因果関係を示している。(15a)はこの 2 つの事象の因果関係を「記述的」に示している一方、(15b)は、直接的な 2 つの事象の因果関係を because が結んでいるのではなく、事象と発話または思考との関係によって結ばれている。つまり雨が降っていると思うことの根拠として because 節が機能する。英語においては、1 語でコンテクストに応じて使い分けされる一方で、日本語は「なぜなら」と「だって」という 2 つの異なった形式が対応するわけである。

4. おわりに

本発表では、関連性理論の枠組みにより、発話や談話の冒頭に起こる「だって」の意味機能について、多義に代わる一義的分析をしてきた。ここで「だって」の意味論ということで、「だって」の記号化する意味として、次のように提示することができよう。

「だって」節の関連性:　手続き的情報　(i) P をメタ表示した想定 R を探させる
　　(ii) Q は R の理由・原因説明である(認知効果)
　　高次表意に貢献する言語表現

前節 3 で見たように、表示をメタ表示することは、関連性理論では高次レベルの表示としてその表示を埋め込むことである。「だって」は発話の高次表意に制約を課す言語表現である。この意味で、Blakemore の言う談話連結語(so, after all など)の範疇には入らないだろう。しかしながら、一方では、Blakemore の談話連結語や日本語の Takeuchi(1999)や武内(2003, 2005)や談話連結語と呼ぶ「やはり」「どうせ」(「しょせん」「どうも」)などと同様、概念ではなく、手続きを記号化しているのである。Matsui(2001)が「だから」について高次表意への貢献をする手続き的情報を記号化したものとして分析し、新しいカテゴリーを求めている。「だって」もこの「だから」の求めるところにあると思われる。

「だって」発話を理解するのは、考えられるよりはるかに多くの推論が関わっているように思われる。先行発話からの想定を解釈した複数の想定が復元される。つまり、メタ表示が層をなすことである。さらに、「だって」発話は、正当化や不満といった、話し手の態度を伝達することもある。想定から自分を切り離す態度(disassociation)を伝える、エコー発話とみなされる可能性もあるであろう。今回の分析は「だって」の意味機能の一部にすぎない。これらの考察は今後検討していきたい。

注

1 本発表では、発話や談話の冒頭に置かれる「だって」のみを議論の対象とする。「係助詞」「副助詞」、あるいは「取り立て詞」と言われるような、文中の「だって」については今回は言及しない。

2 「だって」の意味機能を分析していくに、直観的に論理特性(logical property)を持たないことから真理条件的でないこと。また、「だって」自体に compositionality があるように思えないことから、手続き的情報を記号化している。これら 2 つを前提として考えていく。

3 蓮沼(1996)も独自の分析を行っているが、蓮沼は基本的にはメイナードの分析を踏襲しているので、本発表では省略する。

参考文献

蓮沼 昭子. 1995.「談話接続語「だって」について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第 4 号. 265-281.

Kubo, S. 1999. "On an illocutionary connective *datte*." *The Semantics/Pragmatics Interface from Different Points of View*. Oxford: Elsevier. 293-315.

Matsui, T. 2001. "Semantics and pragmatics of a Japanese discourse maker *dakara*: a unitary account." *Journal of Pragmatics*. 34, 867-891.

メイナード 泉子. 1993.『会話分析』東京: くろしお出版.

Maynard, S. 1993. *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion And Voice in The Japanese Language*. Philadelphia: John Benjamins.

Mori, J. 1999. *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.

森田 良行. 1994.「基礎日本語辞典」東京: 角川書店.

沖 裕子. 1996.「対話型接続詞における省略の機構と逆接ー「だって」と「なぜなら」「でも」」『論集 言葉と教育』97-112. 大阪:和泉書院.

Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. 内田聖二, 中逵俊明, 宗南先, 田中圭子訳.『関連性理論—伝達と認知—』1999. 東京: 研究社出版.

Takeuchi, M. 1999. *"The Japanese Adverbial DOOSE"*. Kanagawa University Studies in Language. 22, 13-30.

武内 道子. 2003.「手続きの記号化:「やはり・やっぱり」の場合」『語用論研究』第 5 号. 73-84.

武内 道子. 2005.「関連性への意味論的制約 —「しょせん」と「どうせ」をめぐって—」『副詞的表現をめぐって—対照研究—』63-87. 東京: ひつじ書房.

Takeuchi, M. (ms.) Japanese concessives KEDO and DEMO in utterance-initial use.

Wilson, D. 2000. "Metarepresentation in linguistic communication." Sperber, D.(ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*. Oxford: Oxford University Press. 411-48.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic form and relevance." *Lingua* 90, 1-25.

Yamamoto, T., Matsui, T., and Peter McCagg. 2001. "Development of Metalogical Ability in Children: Use of the Japanese Connective DATTE by Children before Age 4." *Program & Abstracts*. 6th conference of The Pagmatics Society of Japan. 81-88.

逆接表現の拡張用法とその語用論的効果に関する構文文法的考察

—ケドの終助詞的用法を例に—

横森大輔(京都大学大学院)
yokomori_daisuke@yahoo.co.jp

1. 研究の目的

日本語の話し言葉において、逆接の接続助詞であるケドが文末に用いられることがある。

(1) a. お茶が入りましたけど。
　　b. 〈贈り物をあげる際に〉つまらないものですけど・・・。

「接続助詞」とは、二つの節ないし二つの語を結ぶもの（cf. 益岡・田窪,1992:51）であり、ケドの前後には何らかの言語的要素が現れるはずである。この点で、ケドを文末に用いること（以下、"ケドの終助詞的用法"）は、(2)にあげるような本来的な統語パターン（以下、"ケドの本来的用法"）から**逸脱**している。

(2) a. お茶が入りましたけど、まだ熱くて飲めませんよ。
　　b. つまらないものですけど、差し上げます。

しかしながら、ケドの終助詞的用法は非常に生産性が高く、**決してランダムに生じた表現形式ではない**。また、このような"伴われるはずの言語的要素が現れない"という拡張は、ノニやシカシといった他の逆接語彙においても広くみられる、一般的な現象である。

(3) 「僕、畳の部屋はいらない」
　　「便利なのにね」母の信子は言った。「狭い家は畳に限るのに」　（『太郎物語』）
(4) 「私は結婚を申し込むためにここへ来たのです」
　　「しかし……」
　　「断わられても戻るところはありません。学校も下宿も皆引き払って出てきたのです。お願いです」
　　（『花埋み』）

(1)および(3)、(4)の事例を観察すると、これらの拡張的用法の事例には、使用される文脈が特定的な発話や慣用的な発話であることが多いことがわかる。これらの発話は、**構成要素である逆接表現の語彙的意味からは予測されないような語用論的効果(pragmatic effect)[i]を備えている**といえる。

ここで、本稿の目的を以下のように定める。

(5) 逆接表現の拡張用法における振る舞いの規則性・体系性に着目することで、その語用論的効果を記述する妥当な枠組みを構築する。

分析の事例として、冒頭に掲げた**ケドの終助詞的用法**をとりあげる[ii]。端的に言えば、[P ケド φ]という形式のトークンの発話が与えられたとき、どうすればその語用論的効果を予測することができるか、という問題に答えるべく考察を行う。

アプローチとしては、構文文法（Construction Grammar）の枠組みに緩やかに準拠し、構文スキーマのネットワークにおける上位レベルスキーマから下位レベルスキーマへの特性の継承関係の観点から、問題の言語形式における語用論的効果を記述・説明する。このアプローチに拠ることで、ケドの終助詞的用法の特異

性（イディオム性）と体系性の両方を一貫したかたちで記述・説明することが可能になることを示す。

2. 先行研究の批判的検討

2.1 先行研究の分析

本節では、問題の現象に対するケドの終助詞的用法に関して、非常に多くの研究者によって論考が重ねられてきている（国立国語研究所,1951; 森田,1980; 白川,1996; 永田・大浜,2001; 内田,2001; 佐藤,1993; 水谷,2001; 夫・クワンチラー,2002; 石川,2005; Itani,1992; Ohori,1995; 尾谷,2003,2004; 許,2004）。しかしながら、ほぼ全てに共通する問題点として以下のものが指摘できる。

(6) ケドの終助詞的用法の語用論的効果の記述において、複数の要因が混同されている。

例えば、水谷(2001)は、以下に引用するようにケドの終助詞的用法について記述している。

(7) [相手の反応を待つ]
「ぼくはどうせなまけ者だから、ちょっと本気にできないだろうけど。」
[相手の発言・あいづちを期待する]
「昼ごろ古本屋をまわって、ちょっとスーパーで買い物をして、帰ったんだけど。」
[相手の反論を予期する]
「わたしは昔みたいな小粒のほうが好きだけど。」
[不安・疑問等を暗示する]
父：（息子について）学校でいじめられていなければいいけど。
母：今のところは大丈夫だと思うけど。
[相手の発言を補強する]
A：大工仕事をする女性が増えているそうですね。
B：昔は大工仕事は男の仕事と決まっていましたけどね。
[先行発話を補強する]
「あら、カロリー低いのよ、ここに書いてあるけど。」 (*ibid.*:110-119.)

これらの記述は「ケドの終助詞的用法」の個別の事例の記述としては問題が無いようにみえる。しかし、複数の事例間での記述の一貫性・体系性の点に困難が生じる。具体的には以下のような問題がある。

(8) a. 終助詞的用法の中で、下位用法間の相互関係が明らかでない（例えば (7) で分類されている各事例の相互関係は不明である）。
b. 本来的用法と終助詞的用法の間の相互関係が明らかでない。終助詞的用法は、本来的用法と全く別物として扱われてしまう。

こういった問題の原因となっているのが、(6)に指摘した点である。例えば、「学校でいじめられていなければいいけど。」および「今のところは大丈夫だと思うけど。」という発話が[不安・疑問等を暗示する]のは、**従属節 P において話し手にとって良い事態への期待を述べている**ことの効果である。また、「あら、カロリー低いのよ」に対して「ここに書いてあるけど。」という発話が[先行発話を補強する]のは、**先行発話に対して何らかの発話を後続すること一般の効果**である。すなわち、ケドの終助詞的用法の意味的特徴づけに、**【従属節の意味内容の効果】**や**【当該の文脈で発話すること自体の効果】**が混入されているのである。

2.2 先行研究を乗り越えるために

一方、これを逆の視点から捉えれば、[P ケド φ]という形式の発話の語用論的効果を決定する要因は、以下のように大別されると考えることができそうである。

(9) a. [P ケド φ]という抽象的な形式に対応する意味
　　b. 従属節 P の意味
　　c. 当該の文脈・発話状況で発話すること事態の効果

つまり、ケドの終助詞的用法に伴う語用論的効果はこのような**様々な要因の複合体**であり、**これらを分離して記述することが当座の課題**となる。

3. 構文文法の観点から

第一節でみたように、(9a)にあたる[P ケド φ]という形式の振る舞いは、構成要素のケドという語彙の性質からは予測され得ない。[P ケド φ]という複合的表現は、部分の意味に還元できない意味的特徴を持つといえる。そこで本稿は、構文文法（Construction Grammar; cf. Fillmore *et al.*,1988; Fillmore,1988; Kay,1997）の枠組みに緩やかに準拠し、**[P ケド φ]という形式を構文(construction;)[iii]として認定**することで、その意味的特徴を探っていく。そのための予備的段階として、本節では構文文法の枠組みを整理し、[P ケド φ]の分析に適用可能であることを示す。

3.1 構文における語用論的情報

構文文法の枠組みでは、様々なレベルでの"**形式と意味の慣習的な結びつき**（i.e.**構文**）"を言語記述の単位として認め、言語形式によっては語用論的情報とも結びつく場合がある点を強調している[iv]（cf. Fillmore,1988:37; Kay,1997:123）。例えば、日本語や英語の構文の例として以下のものがあげられている。

(10) 形式　[[A ことは A]……]
　　語用論的効果　"A という述語から相手が期待することを、最低限のものに止めさせる"
　　a. 今晩はパーティーに行くことは行きますが、少し遅れると思います。
　　b. この本は読んだことは読んだんですが、あまりよく分かりませんでした。
　　c. バークレーのキャンパスは、綺麗なことは綺麗なんですが、少し狭いです。
　　d. スタンフォードのキャンパスは、広いことは広いんですが、少し殺風景です。　(Fillmore,1989:21)

(11) 形式　[[対格名詞句]　[動詞句（原形、語幹のみ）]]　（特定の音調を伴う）
　　語用論的効果　"主張された命題に関する、話し手の「疑い」ないしその種のものを表現する"
　　a. Him be a doctor?
　　b. Him help an enemy?　(Kay,1997:123-4; Kay,2004)

当然のことながら[P ケド φ]構文とこれらを全く同列に扱うことはできないが、**抽象的な形式パターンそのものに語用論レベルの情報が符号化されている**可能性が示唆されている。

3.2 構文文法の利点：ネットワークと継承関係

構文文法では、形式的特徴と意味的特徴の対応関係（i.e.構文効果）が、様々な抽象度において生じることを認めているために、部分の意味から全体の意味が予測されない(i.e.構成性の原理が成り立たない)ような複合的な言語表現の記述に適している。

そして、ただ単に部分の意味と全体の意味を独立の記述対象として認定するのみならず、意味的特性および形式的特性の**「継承(inheritance)」**の関係に基づくネットワークを形成しているとみなすことによって、各水準の構文（効果）の間の相互関係をとらえることが可能になる。

ある抽象度のレベルの構文は、上位の構文の特性を、全て継承し、かつ下位同士は、互いに共有しない独特の特性を持つ、とみなされる[v]（Kay,1997:130）。実際の発話は各々の構文スキーマのスロットに具体的な語彙項目が入ったものであり、スキーマレベルの意味特性が具体事例に継承される。構文スキーマの抽象度は、

スロットにおける値の指定・未指定の反映であると言い換えることもできる。

3.3 語用論への構文文法的アプローチの限界

構文スキーマのスロットの値が全て指定されたとしても、言語形式に符号化された情報のみでは、具体的なレベルでの語用論的効果は確定しないことの方が多い。以下の Yamanashi(2001)の例は、ある発話に伴う発話の力(illocutionary force)が多様であり得ることを示している。

(12) "Hey, Walt, how about you all leaving me your record player?" {requested/ asked/ questioned} Duke. (Yamanashi,2001:229)

ある発話に伴う具体的なレベルでの語用論的効果を記述するためには、**構文の記述だけでは不十分であり、文脈・発話状況の記述が必須である**ことを強調しておきたい。

4. [P ケド]構文ネットワークの分析

以上を踏まえて、ケドの終助詞的用法を分析していく。本節で用いる構文スキーマの表示法に関しては、以下のように定める。

(13) 【F】【M】 :構文の形式特性と意味特性
[Conj.] :値が何らかの接続表現となるべきスロット
[X],[Y] :値が**未指定**のスロット。値には[P]または[φ]のいずれかが入る。
[P] :スロット[X],[Y]の値が言語的要素によって実現されている
[φ] :スロット[X],[Y]の値が言語的要素によって実現されていない

4.1 上位スキーマの設定

[P ケド φ]構文の上位スキーマとして、**"ケドの使用"**に伴う構文効果と**"接続助詞での言いさし"**に伴う構文効果の二つを作業仮説として設定する。これを模式化したのが以下の図 1 である。これに従えば、上位スキーマ[X ケド Y]の特性と上位スキーマ[P conj.φ]の特性をそれぞれ継承して、それらより一段階だけ具体的なスキーマである[P ケド φ]の特性が予測される[vi]。

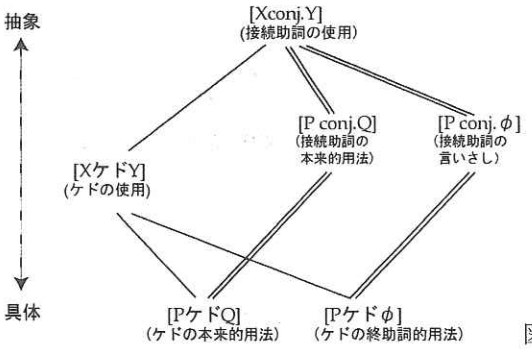


図 1

4.1.1 [X ケド Y]の構文効果

渡部(1995)はケドによる意味関係について、以下のように述べているが、本来的用法 ((15)) を観察すると、渡部による定義はほぼ問題がないことがわかる。

(14) P{ケド}、R :
P から Q が予想/期待される{ケド}、実際には R である。但し、実際の発話では Q は発話

されることは少ない。(*ibid.*:558)

(15) a. 授業は厳しいけど、楽しい。 (森田,1980:135)
b. こんなこと訊くのもなんだけど、君ってロッテファン？
c. 例の件だけど、内密にお願いします。

Sweetser(1990)が接続詞は、認識領域での接続関係と会話領域（発話行為領域）での接続関係があると述べたように、(14a)は**認識領域での予期からの逸脱**を、(14b)および(14c)は**会話領域（発話行為領域）での予期からの逸脱**を表していると考えられる。ただし、以下に見られるような[X ケド Y]における[X]と[Y]の非対称性について、渡部(1995)の定義に加える必要がある。

(16) a. 授業は楽しいけど、厳しい。
b.* 君ってロッテファン？けど、こんなこと訊くのもなんだ。
c.* 内密にお願いしますけど、例の件だ。

(15)の各事例における前件と後件を交換させると、(b)および(c)は非文となり、(16a)もまた(15a)とは意味的に同値でない発話となる。以上から、次のように**“ケドの使用”**による構文効果を定める。

(17) 【F】 [X ケド Y]
【M】 背景情報 X から予期されることに対し、前景情報 Y が逸脱的である。

4.1.2 [P conj.φ]の構文効果

次に、**“接続助詞で言いさす”**ことの構文効果について検討する。山梨(2000)は、以下のように述べる。

(18) (i)もう遅いから帰れば！
(ii)わからなかったら、誰かに聞いたら！
(iii)僕はもう年｛だ／です｝から！
(iv)お湯がわいたけど！
このタイプの表現は、忠告、示唆、指示、陳述、提供等の発話の力をともなうスピーチアクト・イディオムとして機能している。 (山梨,2000:110)

このように、接続助詞による言いさしという形式は(i)生産性が高い、(ii)形式パターンと特定の語用論的効果の傾向が認められる、という二点から構文とみなすべきである。では、このように接続助詞で言いさし、後件が発話されないのはなぜだろうか。これには互いに密接した幾つかの要因が考えられる。

(19) ・言語化せずとも文脈から明示的であるため。
・言語化によって明示化せずともコミュニケーションの目的が達成されるため。
・主節相当の情報は認識されていても、何らかの理由で言語化できないため。

談話処理中の参与者は**言語化する以上にはるかに豊かな情報を持っている**。[P conj.φ]構文は、そのような”**発話の場において利用可能な情報**”に対する従属節としてはたらいている、と考えられる[vii]。

(20) 【F】 [P conj.φ]
【M】 P は、「発話の場において利用可能な何らかの情報」に対する背景情報としてはたらく。

4.2 [P ケド φ]の構文効果

以上に定めた二つの上位スキーマから、双方の形式特性と意味特性を継承したものとして[P ケド φ]の構文

効果を定義するならば、以下のようになる。

(21) 【F】 [P ケド φ]
【M】 背景情報 P から予期されることに対し、前景情報である「発話の場において利用可能な何らかの情報」が逸脱的である。

ここに至って (9a)であげた「[P ケド φ]という抽象的な形式に対応する意味」が明らかになった。もちろん、この段階では具体的な語用論的効果を予測するには不十分である。しかし、ケドの終助詞的用法そのものの意味をこの段階に留め、**更なる発話の位置づけについては独立に要因を探索する**ことが妥当である、という方向性を示した点に、この分析の意義がある。

4.3 語用論的効果に関わる他の決定要因

従って、ケドの終助詞的用法に伴う具体的な語用論的効果の予測には、(9b)および(9c)に記した要因の体系的記述が必要になる。これらの要因、すなわち「可能な P のパターン」や「可能な文脈のパターン」の網羅的な探索は、本稿の目的も筆者の力量も明らかに超えている。そのため本節では、顕在的であった幾つかの要因をあげ、このアプローチの妥当性を示唆するにとどめる。

4.3.1 変数 1 ：主節相当情報は発話時点で確立しているか

まず「[P ケド φ]の**発話時点で聞き手の認識において確立している情報**に対する」場合とそうでない場合に大きく二分される。前者の事例は(22-25)に示されるものである。この場合、P と対立する情報が既に確立しているため、ケドを削除すると発話として不適切になるのが特徴である。後者は、**[P ケド φ]の発話によって、聞き手の認識に発話の場の当該情報への注意を喚起する**ものである。この場合、ケドを削除してもさほど容認度は下がらない。

(22) **[言及される発話の場の情報：直前の文（いわゆる倒置）]**
一方、大差をつけられて敗色濃厚だった阪神・岡田監督も「(濃霧) そら、しょうがない。終わり方はすっきりせんかった {けど／*φ} な」と納得顔。 (『毎日新聞』)

(23) **[言及される発話の場の情報：直前までに談話から構築された情報]**
こんなに一人の時間がいっぱいあるのはいいことなんだ、と思うようにしよう。これからも続く長い人生の、ほんのちょっとした空白だ、と考えればいい。ゆっくり自分を見つめる時間が持てた、と思えばいいんだ。ほんのちょっとがいつまでなのか、ちょっぴり不安がつきまとう {けど／??φ}。 (『毎日新聞』)

(24) **[言及される発話の場の情報：直前の他者の発話]**
辺： そういうことを知らない日本人は、「韓国はサービス悪いな」と思うんでしょうが。
サンコン： 水、出ないから。
糸井： キムチは出る {けど／??φ}。(笑) (『婦人公論』)

(25) **[言及される発話の場の情報：(非言語的) 話し手の行為]**
「まだ公開はできないけど／??φ}」――そう言って、彼女は一枚の図面を広げた。 (『毎日新聞』)

4.3.1 変数 2 ：聞き手の応答責任性の有無

上記の変数 1 で後者の状況は、さらに「問題となっている事態に対して**聞き手は応答責任性 (responsibility) があるか**どうか」という点から発話の語用論的効果が区別される。聞き手の応答責任性が高ければ、発話はより発話の力(illocutionary force)を帯びやすくなる。これは以下のような事例から示される。

(26) [言及される発話の場の情報：聞き手（店主）の責任]
（店主に）「このラーメン伸びきってるんだけど」と｛抗議した／??笑った｝。

(27) [言及される発話の場の情報：ラーメンの状態]
（話し手が作ったラーメンに関して友人に）「このラーメン伸びきってるんだけど」と｛???抗議した／笑った｝。

5. まとめ

[Pケドφ]構文のトークンにおける語用論的効果を決定するのは、(a) [Pケドφ]構文の意味特性、(b)[P]の意味、(c)発話状況・文脈、といった要因がある。このうち(a)に関して、継承関係に着目する構文文法的アプローチによって、「背景情報Pから予期されることに対し、前景情報である"発話の場の何らかの情報"が逸脱的である」というものであることが明らかになった。この、発話の場に対して言及する、という意味特性のため[Pケドφ]は語用論的な効果を伴うことが多く、実際の発話における具体的な語用論的効果に対しても、(a)の特性が継承され、反映されている。

とはいえ、具体的レベルでの語用論的効果は[Pケドφ]構文に符号化されているとは言えず、この形式とは独立に(b)や(c)の諸要因を探っていくこと（例えば使用文脈の類型化など）が今後の課題として必要である。

---

* 本稿は、日本語用論学会第 8 回大会（2005 年 12 月 10 日於京都大学）で行った研究発表に加筆・修正を施したものである。発表に前後して、多くの方々から貴重なコメントを頂いた。特に共同研究者の山嵜章裕氏（京都大学大学院）には、本稿の完成に至るまでに多大な協力を仰ぐことができた。ここに記して謝意を表したい。

i 本稿では、発話の力(illocutionary force; cf.Austin,1962)や心的態度の表出など、談話水準での意味的特徴を総称して「語用論的効果(pragmatic effect)」と呼ぶ。

ii ケドと同じくケレドモ由来のケレドモ・ケレド・ケドモや類義表現であるガは、本研究では考察の範囲に含めない。先行研究ではこれらとケドとを並列的に扱っている場合が多いが、形式と意味のシンボリックな対応関係を重視する本研究の立場からは、それらの意味・機能の同一性は自明ではないからである。

iii 本稿では"construction"に対して訳語を「構文」としたが、この概念の有効性を文(sentence)レベルの現象に限定することを意図するものではなく、便宜上これまでの習慣に従ったに過ぎない。実際、Fillmore(1988:54)は"While I will be speaking mostly of constructions on the level of phrases and clauses, we assume that similar principles are at work in **word-formation** and in the **conventionalized patterns that structure discourse**."（強調は筆者による）と述べている。

iv「構文文法」は、単一の理論的枠組みというよりも、哲学的な背景を共有する複数の研究の総称である（cf. Croft&Cruse,2004:257-290）。Kay(1997)は、構文文法の理論的特徴として(1)非-モジュール的(non-modular)であること、(2)生成的(generative)であること、(3)非-派生的(non-derivational)であること、(4)単層的(monostrual)であること、(5)ユニフィケーション基盤(unification-based)であること、の 5 点を挙げているが、「構文文法的アプローチ」を称する研究者の間でもこういった諸特徴のどういった点に力点を置いて分析を行うかは様々である。

v このような「継承」の捉え方に関しては、構文文法の中にもいくつか異なる見方がある(cf. Goldberg,1995)。

vi ただし、[X ケド Y]と[P conj.φ]は構文としての抽象度が異なるため、[P ケド φ]構文に対する継承の度合いは異なる。

vii 山梨(2000)は「スピーチアクト・イディオム」と呼んでいるが、「発話の場の情報」とリンクするような発話が行為性を帯びるのはもっともなことだと言える。

[例文出典]

・小説：『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（新潮社）より
（曾野綾子『太郎物語』／渡辺淳一『花埋み』／スタインベック『怒りの葡萄』／水上勉『越前竹人形』／井上靖『あすなろ物語』）

・新聞記事：『CD-毎日新聞'95 データ集』（毎日新聞社）より

・雑誌記事：『婦人公論』2001 年 5 月 22 日号（中央公論社）より

なお、引用元が示されていない例文はすべて発表者の作例である。

[参考文献]

Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford Univ. Press.

Croft, William. and D.Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge Univ. Press.

Fillmore, C.J. 1989. 「「生成構造文法」による日本語の分析—試案」久野・柴谷（編）『日本語学の新展開』, 11-28. 東京：くろしお出版.

Fillmore, C. 1988. "The mechanisms of 'Construction Grammar'", *Proceedings of the 14th Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 35-55.

Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary Catherin O'Connor. 1988. "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of 'Let alone'", *Language* 64(4), 501-538.

夫明美・セナ　クワンチラー. 2002.「タイ人日本語学習者による終助詞「けど」の使用について」, 『語用論研究』4, 17-32.

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.

石川智. 2005. 「文末表現「けど」のポライトネス—OPI から見た母語話者と学習者の使用状況—」,鎌田修・筒井道雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ(編)『言語教育の新展開　牧野成一教授古希記念論集』,349-364,ひつじ書房.

Itani, Reiko. 1992. "Japanese conjunction kedo ('but') in utterance final use: a relevance-based analysis," *English Linguistics* 9, 265-283.

Kay, Paul. 1997. *Words and the Grammar of Context*, CSLI.

Kay, Paul. 2004. "Pragmatic Aspects of Grammatical Constructions". in Horn and Ward(eds.), *Handbook of Pragmatics*, Blackwell.

国立国語研究所. 1951. 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』,秀英出版.

許夏玲. 2004. 「語用論の観点から見た文末表現の使用—「ケド」を例にして—」,『東京学芸大学紀要 2 部門』55,59-65.

益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』,くろしお出版.

水谷信子. 2001. 『続日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版.

森田良行. 1980. 『基礎日本語 2 』, 角川書店.

永田良太・大浜るい子. 2001. 「接続助詞ケドの用法間の関係について－発話場面に着目して－」,『日本語教育』110,62-71.

尾谷昌則. 2003. 「主体化に関する一考察：接続詞「けど」の場合」,『日本認知言語学会論文集』vol.3,85-94.

尾谷昌則. 2004 . 「発話者志向の語用論：「けど」の手続き的意味を通じて」,『日本言語学会第 129 回大会予稿集』.

Ohori, Toshio. 1995. "Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology", Shibatani and Thompson(eds.), *Essays on Semantics and Pragmatics*, Amsterdam: John Benjamins,201-218.

佐藤勢紀子. 1993. 「言いさし『……が／けど』の機能－ビデオ教材の分析を通じて－」,『東北大学留学生センター紀要』1 ,39-48.

白川博之. 1996. 「「ケド」で言い終わる文」,『広島大学教育学部日本語教育学科紀要』第 6 号, 9-17.

Sweetser, Eve Eliot. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge Univ. Press.

内田安伊子. 2001. 「「けど」で終わる文についての一考察－談話機能の視点から－」,『日本語教育』109, 40-49.

渡部学. 1995. 「ケド類とノニ—逆接の接続助詞—」, 宮島達夫・仁田義雄(編).『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』,くろしお出版, 557-564.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』,くろしお出版.

Yamanashi, Masa-aki. 2001. "Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality", in Vanderveken & Kubo(eds.), *Essays in Speech Act Theory*. John Benjamins, 225-238.

山嵜章裕・横森大輔. 2005. 「断りの慣用的表現「せっかくですが」に関する考察」, 『日本語用論学会第 8 回大会予稿集』.

横森大輔. 2004. 「『けど』の終助詞的用法について：聞き手に対する効果の観点から」,『日本語用論学会第 7 回大会予稿集』, 89-96.

ポライトネスに関わるプロソディの役割

吉成　祐子
神戸大学大学院生（ yoshinari@lit.kobe-u.ac.jp ）

1．はじめに

聞き手によって使い分けられる言語表現は、「待遇表現」や「敬語行動」として数多くの研究がなされている。しかし、それらの研究は、語彙的・文法的な言語形式による違いを問題にすることが多く、音声面からの検討をしているものはあまりない。

本研究では、相手との関係によって語彙的に制約されない「こんにちは」というあいさつ表現を取り上げ、対人関係に配慮した言語表現の使い分けとプロソディとの関わりについて検証することを目的としている。洪(1993)で説明されているように、プロソディとは、発話の高さ、速さ、強さなどのパラ言語と、アクセント、リズム、イントネーション、ポーズなどの音声の韻律的特徴をまとめたものをさす。このようなプロソディの特徴が、聞き手によってどのように使い分けられているのか、また、どのような役割を果たしているのかを明らかにするために、聴覚実験や音響分析を行う。従来、使い分けの基準には「丁寧さ」がかかわり、その要因として相手との上下・親疎関係が考えられてきた。このような相手との関係を詳しく検証することにより、「丁寧さ」だけでなく、「親しさ」が音声面での使い分けに関わっていることを指摘したい。

2．先行研究と本研究の目的

2.1 丁寧さと音声との関わり

相手による言語表現の使い分けと音声の関係を取り上げた先行研究は、あまり多くはない。その中でも主に注目されているのは、丁寧さと音声との関わりである。洪(1992)は、丁寧さの判断基準に関する意識調査を実施し、聞き手は、敬語使用の適切さよりも、声の調子を含む、顔の表情、視線などの非言語表現によって丁寧さを判断していると述べている。また、前川・吉岡(1997)は、熊本方言の疑問詞疑問文の使用に注目し、韻律的要因が語彙的要因とは独立して、発話の丁寧さの判定に同程度に寄与していることを明らかにしている。このように、プロソディは、発話が丁寧であるかどうかの知覚において重要な役割を果たしており、丁寧さに関して、言語形式だけでなく音声面からの検討が必要であることがわかる。

2.2 丁寧さにおける音声の特徴

丁寧さにおける音声の特徴は、2 つの側面から検証が行われている。発話者（いわゆる話し手）が丁寧さを意識して話すとき、どのような音声的特徴がみられるのか、そして、発話を聞いた聴覚者（いわゆる聞き手）が丁寧な発話だと判断するのはどのような音声なのか、という点である。洪(1994)は、丁寧な話し方が必要な場面とそうでない場面での発話を音響分析し、丁寧な発話は持続時間が長く、ピッチが高く、また聞き手側となる聴覚者もそれが丁寧な話し方だと判断していることを明らかにしている。Ofuka et al.(2000)は、丁寧な発話とカジュアルな発話を基本周波数(F0)と時間長の面から調査し、丁寧な発話には、持続時間が長い、文末母音が上昇調で長いなどの特徴がみられるが、丁寧さの判断には、文末母音のF0 形状、特に母音長のみが影響を与えていることを指摘している。また河野(1995)は、丁寧さの異なる（丁寧・普通・ぞんざい）発話文（「どうも」「どうぞ」など）を取り上げ、方言差に注目して分析している。その中で、全般的な発話時の丁寧さには、持続時間が長く、ピッチが高いこと、そして丁寧度の知覚には持続時間の長さが、より大きく関わっていることを明らかにしている。このように、発話者が発する丁寧な音声特徴がすべて聴覚者の丁寧さの判断に関わっているわけではないが、「持続時間が長い」「ピッチが高い」「文末母音が長い」などの特徴は、丁寧な音声として、発話者・聴覚者に共通した認識があることが明らかにされてきた。

しかし、これまでの先行研究では、丁寧さを考えるあまり、上下・親疎関係といった相手との関係を厳密に検証していない点に問題があることを指摘したい。分析に使用される丁寧な発話は、「丁寧に話してください」と丁寧さを指示した上での発話を扱っているものがほとんどである。聞き手との関係に注目しているものでも、目上には丁寧に、目下・同等には普通に、ぞんざいに、といったように相手に対する固定化した発話を強要してしまっている。もちろん、目上や疎の関係にある相手には丁寧に、友達や目下にはカジュアルに、という傾向があることは多くの研究より明らかにされている（杉戸 1979、荻野 1983 など）。しかし、丁寧さを指示してしまうことで、音声の使い分けが聞き手との上下関係によるものなのか、親疎関係によるものなのかがわからなくなってしまう。目上でも親疎関係はあり、親しい仲でも上下関係は存在する。その区別をせずに丁寧さを固定してしまっては、何が要因となって対人関係に配慮した音声の使い分けがなされているのか、検証できなくなってしまう。

2.3 本研究の目的

本研究では「丁寧さ」だけに注目するのではなく、丁寧な表現が用いられる要因となっている「聞き手との関係」に焦点をあて、対人関係によってどのようにプロソディが使い分け

られているのかを明らかにすることを目的とする。プロソディの役割を検証するためには、語彙や文法、発話意図に左右されない言語表現の検証が必要である。また、相手によって使い分ける現象を検証するためには、相手との関係に配慮する、ポライトネスに関わる発話状況が必要である。そこで、他者との良好な人間関係を構築し保持するための最も重要な手段の一つである「あいさつ」（中道・石田 1999）に注目し、「こんにちは」というあいさつ表現を取り上げ、以下の3点を研究課題として、検証・分析を行う。

(1) 話し手は、相手との関係（上下・親疎）によって、プロソディを変えているのか。
(2) そのプロソディには、どのような音声的特徴があるのか。
(3) 聞き手は、プロソディの使い分けを知覚しているのか。

3．調査

3.1 音声データの録音

社会人女性3名（FS1、FS2、FS3とする。平均年齢32歳）に、偶然道で会った相手を想像しながら「こんにちは」と発話してもらい、その音声を録音した。「おはよう」「おはようございます」とは異なり、「こんにちは」というあいさつは、相手との上下・親疎関係に関わらず使用される表現である。また平板アクセントであるため、丁寧さに関わりのあるピッチの特徴がわかりやすいという利点がある。録音を行った3名は関西方言話者であるが、「こんにちは」というあいさつは普段から平板アクセントを用いている。

想定する相手は、親疎関係＜親しい／あまり親しくない＞と、上下関係＜目上／同年輩＞を組み合わせ、①親しい目上（親上）、②あまり親しくない目上（疎上）、③親しい同年輩（親同）、④あまり親しくない同年輩（疎同）の4パターンを設定した。1名から得られる刺激音は4、それが3名分となり、全部で12の音声データとなった。

まず、自分自身の音声を聞き分けるテストを行った。例えばFS1の場合、FS1自身の音声データについて、ランダムに再生された4つのの刺激音がそれぞれどの相手に対するあいさつなのかを聞き分けるテストである。その結果、全員が各自の音声をほぼ聞き分けていることが確認できた。つまり、発話者自身は使い分けを自覚しているものと思われる。

3.2 丁寧さの意識調査

音声データを録音したFS1、2、3の3名に、4パターンの相手に対する丁寧さの必要性を5段階（0～4）で評価してもらった。その結果、3名の丁寧意識の平均値と標準偏差(SD)をまとめたものが、表1である。評価が最大値4に近いほど丁寧さが必要だと意識される相手

となるため、親疎に関わらず目上に対して丁寧さが必要であり、同年輩には不要と考えられていることがわかる。また、3 名の評価にばらつきがないことから、本調査における発話者の意識には、「丁寧さ」については相手との上下関係が、「親しさ」については親疎関係が基準となっていると考えられる。

表 1　相手に対する丁寧さの必要性

	親上	疎上	親同	疎同
平均値(SD)	3 (0)	4 (0)	0 (0)	1.3 (0.58)

4．音響分析

4.1 方法・結果

FS1、2、3 の音声データを SUGI Speech Analyzer で分析を行った。分析の対象となるのは、「こんにちは[koNnitiwa]」という発話全体の持続時間・ピッチの最大値（F0max）・音圧（音の強さ）と、語末母音[a]の持続時間・音圧である。想定された 4 パターンの相手に対する各発話者の結果を表 2 に、3 名の平均値と標準偏差の結果を表 3 にまとめている。

表 2　発話者別「こんにちは」音声の音響分析

		「こんにちは」全体			語末母音	
		持続時間(ms)	F0max(Hz)	音圧(dB)	持続時間	音圧
FS1	親上	727	400	−18	201	−18
	親同	591	376	−25	121	−25
	疎上	700	249	−17	132	−29
	疎同	632	243	−28	148	−28
FS2	親上	663	268	−20	250	−20
	親同	713	267	−25	285	−25
	疎上	626	246	−24	174	−26
	疎同	546	260	−25	146	−25
FS3	親上	787	264	−20	312	−20
	親同	527	268	−23	101	−23
	疎上	642	386	−27	214	−27
	疎同	597	537	−27	154	−27

表3　発話者平均「こんにちは」音声の音響分析

		「こんにちは」全体			語末母音	
		持続時間	F0max	音圧	持続時間	音圧
平均	親上	726 (62)	311 (77)	−19 (1)	254 (56)	−19 (1)
(SD)	親同	610 (94)	304 (63)	−24 (1)	169 (101)	−24 (1)
	疎上	656 (39)	294 (80)	−23 (5)	173 (41)	−27 (2)
	疎同	592 (43)	347 (165)	−27 (2)	149 (4)	−27 (2)

想定された相手のどの要因（上下・親疎）が音声特徴の差になっているのかを検証するため、相手との関係要因である、親疎・上下の二要因分散分析（被験者内）の統計処理を実施した。その結果、「こんにちは」全体の持続時間・ピッチの最大値・音圧、そして語末母音の持続時間に有意な差はみられなかった。つまり、先行研究で指摘されてきた、丁寧な音声の特徴が本研究ではみられなかったことになる。有意な差がみられたのは、語末母音の音圧（音の強さ）のみであった。交互作用が有意であったため（$F(1,2)=15.21$, $p<.10$）、単純主効果の検定を行った結果、親疎における目上の単純主効果（$F(1,4)=33.88$, $p<.01$）がみられた。つまり、目上といっても親か疎かによって音圧に違いがあるということである。音圧はマイナスの値が小さいほど音が強いことから、相手が目上の場合、疎よりも親の関係にある相手のほうが、語末の母音が強く発音されることがわかった。これは、親しい目上に対して用いられる音声特徴といえる。

4.2 考察①

話し手が使い分ける音声の特徴を統計的にみると、「丁寧さ」の基準となる上下間の区別には有意な特徴がみられなかったが、「親しさ」の基準となる親疎間の区別には、語末母音の音の強さが関わっていることがわかった。先行研究のように「丁寧さ」だけに注目していては得られなかった結果である。本研究では、丁寧さの要因となっている相手との関係に注目することによって、プロソディが「親しさ」を表す役割を果たしている可能性があることを指摘できたといえよう。

良好な人間関係を築く、あるいは維持するための対人配慮行動において、「親しさ」の表明は「丁寧さ」の表明と同様に重要なストラテジーである。これまで日本語における待遇表現研究ではあまり指摘されてこなかったが、Brown & Levinson(1987)が提唱した「ポライトネス理論（Politeness Theory）」では、対人配慮を「丁寧さ」だけでなく、「親しさ」のような、相手との距離を縮めようとする態度も考慮している。その中で、相手への「親しさ」

表明のストラテジーの1つとして、「誇張すること」をあげており、誇張の方法として、大げさなイントネーションやストレス、他の韻律的な面についても言及されている（Brown & Levinson 1987:104-106）。これを援用すると、本研究で得られた結果である、親しい目上に対して語末の母音を強く発話することは、「親しさ」を表す対人配慮（Positive Politeness）によるものではないかと推測される。また、同年輩に対しては差がなく、目上にのみ親疎の違いによって語末母音の音の強さに有意な差があらわれた結果については、同年輩に対してわざわざ親しさを表明する必要はなく、目上に対してだからこそ、語彙的には表せない「親しさ」を表明するために、プロソディがストラテジーとして用いられていると解釈するこができる。「丁寧さ」を気にしなくてもいい相手には「親しさ」をあえて表明する必要がないことは、「丁寧さ」と「親しさ」がともに関わりながら、対人配慮に基づく言語表現の使い分けの要因となっていることを示唆している。

5．聴覚実験

5.1 方法・結果

発話者は、相手による使い分けを自覚して発話しており、その音声特徴も明らかにされた。次に、聞き手である聴覚者は発話者の使い分けを知覚しているのかどうか、この点を確認するために、他者の音声を聞き分けるテストを行った。判定者は大学院生7名（男性4名、女性3名。平均年齢25.3歳）である。対象となるのはFS1、2、3の音声データである。手続きとしては、まず、FS1の4つの「こんにちは」音声（1ラウンド）を2度試聴してもらう。そして、FS1の4つの刺激音をランダム再生し、どの相手に対してのあいさつなのかを記入してもらった。回答は、親か疎か、かつ、目上か同年輩か、を選択する方法をとった。1ラウンドを5回、FS1に対して計20の回答を得ることができる。FS2、FS3の音声データも同様にテストを行った。判定者7名の正答率を、音声データ毎にまとめたものが表4である。

表4　他者音声の聴覚実験正答率（%）

データ	親疎	上下	正答数
FS1	88.6	46.4	38.6
FS2	82.1	56.4	46.4
FS3	92.1	45.7	40.0
平均	87.6	49.5	41.7

表4では、親疎の区別のみ正答、上下の区別のみ正答、そして完全な正答率がまとめられ

ている。どの音声データについても、親疎の区別の正答率はとても高いことがわかる。また、上下の正答率よりも親疎の正答率が高いことから、聞き手である判断者は、上下間よりも親疎間の区別をよりはっきりと知覚していることがわかる。つまり、聞き手にとって、プロソディの使い分けを知覚する基準には「親しさ」が関わっていると考えられる。

5.2 考察②

語彙的な面では相手に対することばの使い分けができない「こんにちは」という表現において、話し手は相手によってプロソディを使い分けており、その音声特徴は、語末母音の音の強さが親疎の区別としてあらわれることがわかった。また、相手によって使い分けられる発話を聞いた聴覚者（聞き手）が知覚するのも、親疎の区別であることがわかった。つまり、親しさをあらわすプロソディには、なんらかの基準があり、それは話し手と聞き手に共通の理解があることを意味する。ただし、本研究では、聞き手が親疎を区別することまでは明らかにされたが、その判断基準が語末母音の音の強さかどうか断定はできない。他の音声特徴が関わっている可能性もあり、その検証までには至っていない。今後の課題として、他の音声特徴を排除した音声を作成し、語末母音だけが影響を与えているかどうかの聴覚実験を行うなど、親しさの知覚に関与する音声特徴を確認する必要がある。

これまでの先行研究では、「持続時間が長い」「ピッチが高い」など、丁寧さをあらわす音声特徴が指摘され、それは話し手・聞き手に共通の認識としてあることが明らかにされてきた。しかし、本研究の結果では、丁寧さに関する有意な差を示す音声特徴はみられず、また聞き手も丁寧さに関わる上下間の区別についての知覚があまりできてはいなかった。この結果は、「丁寧さ」の基準を上下関係だけでとらえたためではないかと思われる。相手との親疎関係が直接的に「親しさ」という指標に関わっているのに対し、実験参加者にとって、上下関係が「丁寧さ」に直接関わっていると判断しづらいものだったのかもしれない。丁寧さは、一般的に疎の関係にも反映されるものであり、また発話意図や状況などにも左右されるものである。本研究の結果が、まさに、「丁寧さ」というものが上下関係だけによるものではなく、「親しさ」や状況など、他の要因とも深く関わる複雑なものであることを示唆している。この点を考慮し、今後は「丁寧さ」と音声についての検証も考えていきたい。

6．おわりに

本研究では、語彙的な制約のないあいさつ表現を用いて、対人関係に配慮した音声の使い分けの検証を行った。先行研究では丁寧さだけに注目していたが、本研究ではさらに、より厳密に対人関係配慮を考察するため、上下・親疎といった聞き手との関係を設定した実験を

試みた。その結果、「丁寧さ」だけでなく、「親しさ」もあらわすという、プロソディの役割の可能性を指摘することができた。

本研究より、以下のことがわかった。

1) 話し手は相手との関係によってプロソディの使い分けを自覚しており、「丁寧さ」の基準となる上下関係では共通した音声特徴は見られなかったが、「親しさ」の基準となる親疎関係では、語末母音[a]の音の強さに特徴が見られた（研究課題 1、2）。

2) 聞き手は、発話者のプロソディの使い分けを知覚しており、特に、親疎間の区別をはっきり知覚していることがわかった（研究課題 3）。

親疎の区別に関しては話し手も聞き手も共通の理解があり、プロソディが「親しさ」の表明という役割を担っている可能性を示せたことは意義深い。ただし、それに寄与する音声特徴の確定までは至っていない。この点を明らかにするための実験が必要であり、これを今後の課題としたい。

＜参照文献＞

Brown, P & Levinson, S. 1987. *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.

洪珉杓. 1992.「日本人と韓国人の丁寧意識の比較」『計量国語学』18(7):324-335.

洪珉杓. 1993.「丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究」『音声学会会報』204:13-30.

河野俊之. 1995.「プロソディと丁寧表現－東京・大阪・名古屋の方言さを考慮して－」『音声学会会報』208:9-17.

前川喜久雄・吉岡泰夫. 1997.「発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与」『国語学』190:12-23.

中道真木男・石田恵里子. 1999.「日本語学習者と「あいさつ」－日本語教育の場で」『国文学－解釈と教材の研究』44(6):118-125.

Ofuka, E., McKeown, D.J., Waterman, G.M., Roach, J.P. 2000. "Prosodic cues for rated politeness in Japanese speech." *Speech Communication.* 32:199-217.

荻野綱男. 1983.「待遇表現の数量化」水谷静夫編『朝倉日本語新講座５運用Ｉ』東京：朝倉書店.

杉戸清樹. 1979.「職場敬語の一実態―日立製作所での調査から」『言語生活』328:30-4. 東京：筑摩書房.

名詞の概念的役割解釈における類型化の試み

李 在鎬（リ ジェホ）、黒田 航、井佐原 均
情報通信研究機構　けいはんな情報通信研究融合センター　自然言語グループ
{jhlee, kuroda, isahara}@nict.go.jp

1. はじめに（目的と主張）

本稿では、名詞の概念化をめぐる諸問題を考察する。主として黒田・井佐原（2005）の問題提起に基づき、名詞の（概念化の帰属先としての）意味役割に関する一般的問題を示したあと、その類型化を試みる[i]。類型化の手掛かりとして語の用途内在性を表す「～の代わり」構文をコーパスベースに調査し、共起テストに基づいて特徴づけを行う。そして、意味役割間の関係を明示化するため、多変量解析を行う。

具体的な主張として X が持つ意味役割として手段、対象、方法、道具、具体的事例の意味クラスが観察されたことを報告する。そして、クラスタ分析によって意味役割間の体系的関係が明らかになることを示す。最後に、本研究の理論的示唆として語用論的知識の問題と語彙意味論の問題に言及し、両者が相互に分離できない関係にあることを示す。

2. 問題提起

黒田・井佐原 (2005) および黒田・中本・野澤 (2005) では意味役割の一般理論として、語の意味記述において二つの区別を設け、定義づけることを提案している。それは、意味型 (semantic types)と意味役割 (semantic roles) の区別である。両者の相違は以下のようにまとめることができる。

意味型	意味役割
自然分類の基準で分類される体系	利用者から見た機能/用途で分類される体系
物理的実体性を前提にする	物理的実体性を前提にしない
対象の属性に左右される	知識構造に左右される

表 1.　意味型と意味役割のふるまいの差

表 1 が示す通り、意味型と意味役割は異なる成立過程を持つ。意味型はタイプの体系としてシソーラスなどで採用されている分類体系で、様々なものが提案されている（例えば、日本語語彙大系など）。しかし、表 1 が主張する意味役割の問題は、（意味理解における）その重要さに比べ、記述の粒度をめぐる困難さなどから体系的には論じられてこなかった。この点をめぐるより詳細な考察は、黒田・中本・野澤（2005）に委ねるが、本稿が意味役割の問題として位置づけている現象を（1）例から簡単に紹介する。

(1)　a.　この本はつまらない。
　　b.　その本は遅かった。
　　c.　この本は高い。
　　d.　この本は汚い。

（1）におけるすべての「本」は（2）に示す意味型においては、同一のものと言える(cf. 日本語語彙大系)。

（2）　具体物→無生物→人工物→道具→文具→出版物

「本」は、その物理的実体性において、具体物の中でも無生物に属し、無生物の中でも人工物、さらに人工物の中でも道具、道具の中でも文具で出版物といった属性を帯びる。しかし、問題は（1）の意味理解は（2）に還元できない。なぜなら「本」という語の概念化における帰属先としての意味役割は必ずしも一様ではないからである。個々の文脈が想起させる「本」の実際の言及対象は（1′）だと考えられる。

（1′）　a.　この本の {内容/中身/ストーリ構成} はつまらない。
　　b.　その本の {刊行/発売開始/配布} は遅かった。
　　c.　この本の {値段/価値/評価} は高い。
　　d.　この本の {装丁/紙質/表紙} は汚い。

（1a）における本は（1′a）が示すように本の内容や中身について言及している。（1′b）から（1′d）においても同様のことが言えよう。その論証として（1″）を挙げることができる。

（1″）　a.　この本の {?*刊行/?*発売開始/??値段/?評価/??装丁/??紙質} はつまらない。
　　b.　その本の {??内容/?ストーリ構成/*値段/??評価/??装丁/*紙質} は遅かった。
　　c.　この本の {??内容/*刊行/*発売開始/?装丁/*紙質} は高い。
　　d.　この本の {?ストーリ構成/#内容/*刊行/*発売開始/??値段/?評価} は汚い。

このような事実をいかに捉えるかという問題は、語句の意味記述に関する言語学の古くて新しい問題であり、数多くのモデルが存在する（例えば国広（1997）の多面的多義の理論や小野（2005）のクオリア構造の理論など。この種の問題の難しさは山田（2005）を参照）。本稿では、名詞の意味解釈に関する文脈効果に着目するという点で先行研究と問題意識を共有しつつ、コーパスから得たデータを定量的に分析するという独自の方法論とモデルで、その体系的記述を試みる。

3. データと方法

本稿では、意味役割の問題を調査することを目的とするが、調査の性質は予備的であるため、暫定的に黒田・井佐原（2005）が語の用途内在性のテストとして用いた「X の代わり」構文を用いることにした[ii]。ただし、分析対象は作例によるものではなく、KWIC データをコーパスから収集し、それを利用した。

私たちが名詞の指示対象の特定に用いた方法は、比較的一般性の低いものである。それを（3）の例に説明する.

（3）　a.　この本は楽しい。
　　b.　この本は安い。

（3a）における「本」がこの文脈で意味しているのは、前節で示した意味役割への言及の観点から見れば「本」の【内容】のことである。これを【活動体】としてのヒトの個体 a (= この文の【発話者】)

が「本」という名の対象 b に対して行なう(相互)作用 $I(a, b)$ の観点から捉えた場合、I は【読書】という行為だと考えられる。これは語彙的には明示されていないが、「本」が（3a）で暗黙の内に【読書】の特有な【読み物】という意味役割を実現していると解釈されるということである。これが成立するのは、解釈の際に、$I(a, b)$ が何であるかに関する推定が行われているということである。

同様に、（3b）での理解で「本」という名の対象 b は、ある活動体 a に対して成立する $I(a, b)$ が【購入】であるという推定が行われている。これが（3b）の「本」が【購入】に特有な【商品】という意味役割を実現していると解釈されるということである。こうした一連の $I(a, b)$ の推定とそれから結果する意味役割の割当は、前節の表 1 で示した利用者の用途や機能に関する知識の体系に基づいて行われる一般的な推論過程である。あらゆる文のあらゆる語句の意味理解に、このような推定が関与しているというのが、黒田・中本・野澤（2005）の主張である。

とはいえ、彼らの主張は雲をつかむほど一般的な主張であるため、妥当性を検証することは簡単ではない。そこで本研究では黒田・井佐原（2005）が用途内在性のテスト項目の一つとして挙げている「X の代わり{に, の} Y」に調査対象を絞り、そのテストの予測力を実証的な方法で評価することを試みる。

3.1. データ分類(1)

さて、本研究が調査に利用したデータは、読売新聞データである。調査手順としてコーパスから「X の代わり」で KWIC 検索を行い、153 例を収集した。具体的な調査内容としては（4）のコーパスデータに対して（5）のテンプレートで変項を特定していった。

（4）　デジタルカメラ（デジカメ）は、従来の銀塩写真フィルムの代わりに光を電気信号に変換するＣＣＤ（電荷結合素子）などの素子を用いている。

（5）　X (→R) の代わり{に; の} Y

（4）における変項 X, Y, R を表 1 の形式で特定した。

変項	実現値	解釈
X	銀塩写真フィルム	R の典型的/理想的な実現値
Y	光を電気信号に変換するＣＣＤ（電荷結合素子）などの素子	X に準ずる/代わる R の実現値
R	画像記録媒体 [+カメラの__][implicit]	X, Y によって共通に実現される意味役割 R (= 潜在的に理解される用途/役割の概念)

表 2.　変項の内容

表 2 の[implicit]は明示的な言及がなく、暗黙のうちに理解される内容を表わす。一方、文章内に明示的に言及があるものは[explicit]のタグを付与した。そして、照応詞などで文字列に名詞が表れておらず、X が特定できない 28 例を除く、125 例を対象に考察した。

3.2. データ分類(2)

次に変項間の関係を特徴づけるために複数の共起テストを行った。共起テストに使用したのは、以

下の七つである。

テスト A）XがすることをYがする　　テスト B）XがRになり、YもRになる
テスト C）XがRになる　　テスト D）XはRだ
テスト E）XでRをする　　テスト F）XをRにする、
テスト G）RとしてXを使う。

テスト A）から G）のテンプレートは変項間の等価性をテストし、役割間の質的相違を特徴づけるためのものである。それぞれの容認度を「普通に言える場合（1)」と、「言えない場合（0)」、「どちらとも言い難い（0.5)」場合の 3 段階で評定し、人手による意味クラスの抽出を行った。また、その評定結果を行列化し、（役割同士の階層的関係を明らかにするため）クラスタ分析を行った。

4. 結果と考察

4.1. 「X の代わり」構文の意味クラス

解析の結果、「X の代わり」構文の用法のクラスとして次の三つが観察された。次に代表事例を示す:

(6)　ジーコ監督は服部の代わりに、中西を左サイドバックで先発起用する考えを示した。
(7)　給与水準を落とし、その余剰分で教員数を増やしたり、常勤教員の代わりに非常勤講師を増やすことが各都道府県の裁量でできる。
(8)　今回もカサゴの代わりにメバルだっていいんです。

(6) から (8) の事例における意味役割は表 3 の通りである。

例文	X	R	Y
(6)	服部	先発出場選手[implicit]	中西
(7)	常勤教員	教育担当者/役[implicit]	非常勤講師
(8)	カサゴ	食材[implicit]	メバル

表 3.　変項

(6) から (8) の事例の特徴づけとして、前節で示した共起テスト A (X がすることを Y がする) と B (X が R になり、Y も R になる) を用いた場合、表 4 のような差が見られる。

例文	テスト A	テスト B
(6)	○	○
(7)	○	×
(8)	×	×

表 4.　共起テスト結果

こうしたパターンの分化から、「X の代わり」構文には (6) に代表される【交替】を表すクラスと (7) に代表される【交替】を表すクラス、さらに (8) に代表される【代用】のクラスが存在することが示唆された。本稿が関心をもっている意味役割は用途分類に対応するという仮定から，重要なのは【代

用】のクラスとなる。このため、これに続いて【代用】クラスに対するより詳細な考察を行った。

4.2. 代用クラスにおける意味役割

解析の結果、「X の代わり」構文の【代用】クラスの下位類として次の五つが観察された。代表事例を以下に示す:

(9)　「再編期の世界経済—統合と分散」という題で討論に入りますが、統合はいいとして、分散の代わりにここでは分裂という言葉を使いたい。
(10)　「人質の代わりに女性警官をよこせ」などと要求した。
(11)　言葉の代わりに涙があふれ出た。
(12)　今回もカサゴの代わりにメバルだっていいんです。
(13)　現行法制では困難な直接支援の代わりに継続中のテロ支援策を強化し、側面支援の姿勢を明確にしたい思惑がある。

これらのクラスを特徴づけるため、意味役割を規定した．結果は表 6 の通りである。

例文	X	R	Y
(9)	分散（理想値）	適切な特徴づけ方 [implicit]	分裂（適切な非典型値）
(10)	人質（典型値）	交渉手段 [+強迫の__][implicit]	女性警官（非典型値）
(11)	言葉（典型値）	感謝したいとき、感動したいときに行なうこと[implicit]	涙（非典型値）
(12)	カサゴ（理想値）	食材[implicit]	メバル（非典型的次善値）
(13)	直接支援（理想値）	支援法[implicit]	側面支援（次善値）

表 5.　変項

前節同様，これらの事例を特徴づけるべく共起テストを行った結果，表 7 に示す差が認められた。

例文	テスト C	テスト D	テスト E	テスト F	テスト G
(9)	○	○	×	?/×	○
(10)	○	○	×/?	○	○
(11)	?/○	○	×	×/?	○
(12)	○	○	×	○	○
(13)	○	○/?	×	○/?	○

表 6.　共起テストの結果

以上の考察から、X が R に対して持つ意味的関係として（9）の【不適切な典型値の（より）適切な非典型値への修正案】を表すグループ、(9) の行為における【材料や道具】を表すグループ、(10) の行為の【手段】を表すグループ、(11) の行為の【利用可能性の低い理想的典型値の，利用可能性の高い

非典型的での代替】を表すグループ、(11) の行為の【方法】を表すそれぞれのグループが特定できた。

4.3. 意味役割間の関係（階層性の明示）

さて、前節で明らかになった意味役割のクラスは何らかの親疎関係を持つ。このことを明らかにすべく、評定結果を行列データとして定義し、クラスタ分析を行った。言える場合は1、言えない場合は0、どちらとも言い難い場合は0.5に数値化し、その平均値でクラスを定義した。その結果表8が得られた。

事例	テストA	テストB	テストC	テストD	テストE	テストF	テストG
交換	1.00	1.00	0.95	0.87	0.09	0.63	0.00
交替	1.00	0.00	0.81	0.88	0.06	0.25	0.00
修正案	0.00	0.00	0.69	0.94	0.00	0.69	0.81
材料・道具	0.00	0.00	0.96	1.00	0.09	0.96	1.00
手段	0.00	0.00	1.00	1.00	0.00	1.00	0.89
代替	0.00	0.00	1.00	1.00	0.00	0.75	0.92
方法	0.00	0.00	1.00	1.00	0.08	0.08	0.83

表8.　意味クラスの定義

そして、意味クラス間の関係を調べるべく、表8の値をもとに階層法でクラスタリングを行った。分析においてはSPSS 13を使用した。距離の定義はユークリッド距離を、クラスタ法はWard法を使用した。データの標準化は行っていない。

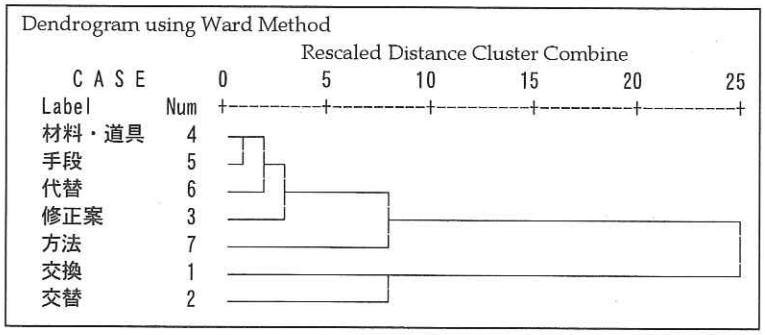


図1.　デンドログラム

図1の分岐パターンを見た場合、代用クラスと非代用クラスで大きなクラスタが出来ている。そして代用クラスの中では、方法と非方法でそれぞれクラスタ化している。なお、材料・道具と手段の間でもっとも高い類似度が示され、本稿のコーディングの妥当性を示唆している。

5. まとめ

以上の結果は二つの側面から評価できる。まず、直接的な側面として言えることは、意味役割の体系性である。本稿のこれまでの分析モデルによって、語の意味役割が決して無秩序に分布しているわ

けではないということが明らかになった。すなわち共起テストによって意味役割の特徴づけと、それらの関係性をクラスタ分析によって推定することができた。次に間接的な側面として示唆されていることは、語彙の意味役割の解釈においても語用論的知識が入り込んでおり、そこに体系性が見られる点である。そこからの理論的帰結として語彙の意味の問題（＝語彙意味論的問題）と語用論の問題を切り離すことはできない。語彙意味論と語用論の線引きは理論的仮定以上のものではないという示唆が得られる。この点をめぐるより詳細な考察は黒田・中本・野澤（2005）を参照されたい。

6. 最後に（本稿の問題点と課題）

本稿の問題点として二点言える。一点目は本稿の方法論に関するもので、（類型化を目的にしたとはいえ）意味役割 R を自明なものとして予め特定し、コーディングした点である。これによって論点を先取りする形で考察を行ったことになり、議論の流れそのものに重大な問題点があったと言える。これはむしろ多変量データから探索的な手法によって（意味役割を）発見していくべきだったように思う。二点目に現象レベルで偏りがあった。というのは、本稿が扱ってきた意味役割の多くは行為を受ける側の役割に偏っていた。少なくとも代用クラスにおける、意味役割に関してはそう言えるであろう。その原因としては（原因はは不明であるが）「X の代わり」構文の多くが他動詞構文内、すなわち「X の代わり(に/の) Y を V する」という構文において「X の代わり」構文が生起していたことが挙げられる。

もう一つ考えられる要因として本稿が現象を一般化する基盤として「その行為にとって何か」を問題視してきたことが関係しているかもしれない。この点に関連して指摘しておきたいのは（14）の事実である。

（14）　a.　震度 4 の地震で<u>銀行</u>が倒れた。
　　b.　会社の再建会議に取引<u>銀行</u>が出席しなかった。
　　c.　都市<u>銀行</u>が一斉に金利を引き下げた。
　　d.　東京スター<u>銀行</u>がお約束すること。
　　e.　資金不足で<u>銀行</u>に泣きつくライブドア。

（14）の「銀行」は様々なメトニミー的解釈が与えられるが、おのおおのの解釈で興味深い概念化の違いを許す。(1)、(3) の「本」の場合と同じく、「銀行」という同一の語が（14a）では潜在的に【建築物】という意味役割を実現し、（14b）では潜在的に特定の【会議】の【参加者】(の【代表者】という意味役割を実現し(つつ、それと同時に、その役割を担った特定の個人、ないしはグループを指し)、（14c）では潜在的に【経済活動】の【(内部調節)機関】という意味役割を実現し、（14d）では潜在的に【客】を相手に【商売】をする【企業】、より明示的には【(損をしない)取引】の【(損をしない)取引相手】という意味役割を実現し、（14e）では潜在的に【会社経営】に必要な【(経営)資金】の【貸し手】という【助力者】の意味役割を実現している。こうした現象は潜在性のものであるため明示化のためのテストが必要であるが、残念ながら、本稿が取り扱った共起テストではこれらは特定できない。このクラスの潜在的意味役割の特定にどのような手法が有効かは、テストの一般化を通じて、今後慎重に考えていく必要がある。

* 本稿は 2005 年 12 月　第五回日本語用論学会における口頭発表に基づくものである。司会の余維先生には貴重なコメントと励ましをいただいた。またフロアの方々からもご批判をいただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

---

[i]本稿でいう意味役割は通常言語学、特に統語論で「意味役割」と呼ばれている概念化の単位を、語彙化の違いを反映するほど細かくしたものである。この意味で私たちが意味役割と呼んでいる対象は、言語学の文献で一般に主題役割 (thematic roles) と呼ばれている概念化の単位や Fillmore らが格文法時代に意味役割と呼んでいた概念化の単位よりも細かい粒度で行なった意味記述でのみ差違が見えるような単位である。本稿が想定する意味役割は、語彙化の違いに反映する概念化の単位であり、統語パターンの実現値の違いに反映する概念化の単位よりも、もっとずっと細かい意味の単位であり、それは主題役割、格文法で定義されるような意味役割の概念も下位類として含む。詳細は黒田・中本・野澤 (2005) を参照されたい。

[ii]黒田・井佐原（2005）では、語 (e.g. 枕) によって表わされている概念が意味役割を定義するかどうかを共起テストによって判定した。例えば、d が意味役割を定義する語であるならば、(1) か (2) を満足する適当な a, b, c, d の組が少なくとも一つ存在する。

(1)　a が (b のために) c を d にする
(2)　a が (b のために) c を d の代わりにする

d が (2) のみを満足する場合、d は意味役割を定義するが、c はその適切な具現化ではない。例えば、

(3) a.　彼はその日，**本を枕**にして寝た。b.　彼はその日，**本を枕**の代わりにして寝た。
(4) a.　彼は(自分の)手が天井に届くようにするために**椅子を台**にした。
　b.　?彼は(自分の)手が天井に届くようにするために**椅子を台**の代わりにした。
(5) a.　??新しいレンチを買わなくても済むように**レンチを金づち**にした。
　b.　新しいレンチを買わなくても済むように**レンチを金づち**の代わりにした。

＜参考文献＞

安藤 まや・関根 聡. 2005.「新聞記事コーパスに基づいた上位語・下位語を含む連体修飾 表現の分析」、『計量国語学会』(24 巻 8 号）. 365-381.

東森 勲. 2003. 「Lexical Pragmatics による日本語の語彙分析」、KLCAM 発表資料

東森 勲, 吉村 あき子. 2003.『関連性理論の新展開一認知とコミュニケーション』 東京: 研究社.

国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』東京: 大修館書店。

黒田 航・中本 敬子・野澤 元. 2005.「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」『認知言語学論考 No. 4』133-269. 東京: ひつじ書房.

黒田 航・井佐原 均. 2005. 「意味役割名と意味型名の区別による新しい概念分類の可能性: 意味役割の一般理論はシソーラスを救う?」『信学技報』105（204）47--54. 電子情報通信学会.

小野尚之. 2005. 『生成語彙意味論』東京:くろしお出版.

Sperber, Dan & Deirdre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Blackwell Pub.

UtiRama, Masao and Hitoshi Isahara. 2003. "Reliable Measures for Aligning Japanese-English News Articles and Sentences." *Proceeding of the ACL-2003,* 72--79.

山田進. 2005. 「辞書の意味記述」、『レキシコンフォーラム』(No.1) 東京: ひつじ書房.

＜データベース＞

NTT コミュニケーション科学基礎研究所. 『日本語語彙大系 CD-ROM 版』、岩波書店.

日英新聞記事対応付けデータ (Japanese-English Alignmen Data: JEAD)
(http://www2.nict.go.jp/jt/a132/members/mutiRama/jea/index-ja.html)

感情的モダリティ(Emotive Modality)を表す文副詞 Surely の意味機能をめぐって
―語用論的アプローチ―

関西外国語大学・大阪産業大学　非常勤　岡本　芳和

1. はじめに

英語の文副詞 surely は、肯定文で用いられる場合と疑問文や否定文で用いられる場合とでは、その意味が異なる。本稿では、英語の文副詞 surely が疑問文、または否定文で使用される際の話し手の心的態度と語用論的機能について考察する[1]。この surely の意味機能に関して、次のような条件を提出する。

(1) 「意外性の条件(Unexpectedness Condition)」
《疑問文の文頭に生起する surely は、話し手にとってその命題内容が思いがけない事柄である（あった）ことを表す。》

また、本稿では、(2)で示すように、疑問文を2種類に区別をする。①の質問とは、話し手が聞き手に対して何かを質問する意味機能である。一方、②の疑念表出とは、話し手の意外な気持ちの表出のことで、話し手の心的態度が表出される。本稿で扱う surely によって修飾される文は、②の疑念表出文に相当する。

(2) 疑問文の意味機能
- ① 質問
- ② 疑念表出（「意外性」という話し手の心的態度の表出）

この疑念表出文の形式の中で見られる surely の文と(1)の「意外性の条件」がどのような関係にあるのかを論証してみたい。

2. OALD[7]による記述

まず、OALD 第7版の surely の記述について説明する。OALD 第7版では、以下に示すように、3つの意味を定義している[2]。本稿の surely に関する意味は、①や②の意味である。

(3) surely の意味

① 話し手が自分の言っていることをほとんど確信しており、他人に自分に同意してもらいたいことを示すときに用いられる。
<u>Surely</u> we should do something about it?

② （否定文において）何かが話し手を驚かせ、話し手がそれを信じたくないことを示すときに用いられる。
<u>Surely</u> you don't think I was responsible for this?

③ （形式的）「疑いなく、確かに」の意味。
He knew that if help did not arrive soon they would <u>surely</u> die.

3. surely の意味分析

ここでは、2で説明した①から③意味について詳しく見ていきたい。本稿は、2で説明した①と②の意味に焦点を当てる。興味深い点は、これらは疑問文の形式になっているということである。その前に、③の「確かに」の意味について説明してみたい。

3.1. 「確かに」の意味(③の意味)について[3]

まず、(4)の例をみてみよう。このsurelyは、「確か（に）」の意味で、この意味では、surelyの後ろには肯定文が続き、文全体が話し手の主張を表している。

(4) Surely I've met you before somewhere.
「確かあなたには以前どこかでお目にかかりましたね」

(小西 1989: 1827) (以下下線筆者)

(4)においては、Surelyに焦点が当てられていることがわかる。なぜならば、It is sure that I've met you before somewhere.でパラフレーズすることができるからである。 次に日本語の「確かに」の例について考えて見よう。

(5) (かばんがなくなったと聞いて)
「君、確かに調べたの。」→調べたことが確かかどうか
(6) (書類をうけとっていないと聞いて)
「君、確かに渡したの。」→渡したことが確かかどうか

(5)や(6)の例では、「確かに」の後が疑問文の形式になっているが、これは、焦点が「確かに」に当たっているので適切な文になる。日英語の両方において、「確かに」の意味で用いられる文は、そこに意味の焦点が当てられている。しかしながら、①や②のsurelyの意味では、③の意味のように「確かに」に焦点が当てられるような解釈にはならない。

3.2. ①の意味と②の意味の区別

①と②のsurelyの意味について(7)や(8)のように区別できる。(7)は肯定文に疑問符が付いた形式で、(8)は否定文に疑問符が付いた形式である。注目すべき点は、「両者とも疑問文ではあるが、主語と助動詞の倒置が起こっていない」、「(4)から(6)における「確かに」の意味とは異なり、この場合surelyに焦点が当たっていない」ことの2点が挙げられる。

<①の意味→肯定文＋？>
(7) a. I'm going to marry Sonia. Surely, she's married already?
「僕はソニアと結婚するつもりなんだ」「まさか、彼女はすでに結婚しているんじゃないの？」
b. Surely that's Henry over there? I thought he was in Scotland.
「まさか、向こうにいるのはヘンリーじゃないの？スコットランドにいると思っていたのに。」

(Swan 2005[3]: 564)

<②の意味→否定文＋？>
(8) a. Surely, you don't think she's beautiful?
「まさか彼女が美人だと思っているんじゃないでしょうね。」

(小西 1989: 1829)

b. Surely they couldn't have expected you to complete the project so soon (could they)?
「まさか彼らはあなたがそんなに早くそのプロジェクトを完成させるとは思っていたはずがない」

(Hoye 1996: 191)

(7)や(8)にあるsurelyの意味について、次節では語用論的な考察を加えてみたい。

4. surely の語用論的機能

最後に、3.2.で議論した surely の意味について、それがもたらす語用論的機能を説明する。ここでは、(1)で提出した「意外性の条件」を基に、この surely の文に対する話し手の捉え方を次のように提案する。

(10)　Surely → (命題内容 / 話し手にとって思いがけない内容)
話し手の心的態度

(10)は、命題内容に対する話し手の心的態度に surely という副詞が用いられ、二重構造になっていることを表している。また、その命題内容が話し手にとって思いがけない内容であることを表している。本節で示されるすべての例文には、このような話し手の捉え方が関係している。

4.1. surely の後に疑問文が後続する場合

surely の後に疑問文が後続する場合、形式は疑問文であるが、「質問」という言語行為を表しているのではなく、話し手から聞き手に「同意を求める」という言語行為を表していることが考えられる。次の例を見てみよう。

(11) 'Overton is not, I think, many miles from here. Shall we run over there and have an interview with the niece of the dead woman?'
'Surely you will go first to the shop where the crime took place?'
'I prefer to do that later.　I have a reason.'

(Agatha Christie, *The ABC Murders*)

surely によって導かれる文は、疑問符を伴った疑問文の形式ではあるが、聞き手に対して、「質問」という言語行為をしているのではない。言い換えると、「殺人現場に行くのかどうか」を質問しているのではない。ここでは、「殺人現場に行ったほうがいいのではないか」という話し手の提案に対し、その同意を求めるという形式で使用されている。また、聞き手が Yes か No で答えていないことからも、これが純粋な疑問文ではないことがわかる。次の例を見てみよう。

(12)　The conference broke up after a few more suggestions and a little desultory conversation.
'Poirot,' I said as we walked along by the river.　'Surely this crime can be prevented?'
He turned a haggard face to me.
'The sanity of a city full of men against the insanity of one man?　I fear, Hastings-...'

(Agatha Christie, *The ABC Murders*)

この例に関しても、(11)と同じ分析が考えられる。これも聞き手に「犯罪が阻止できるかどうか」を聞いているのではない。ここでも、「この犯罪を阻止できるかのか、もしかしたらできないのではないか」という話し手の意見に対し、その同意を求めるという形式であることがわかる。この例からも、聞き手が直接 Yes か No で答えていないのがわかる。

4.2. surely の後に否定文が後続する場合

surely の後に否定文が後続する場合、形式は疑問文であるが[4]、「質問」という言語行為ではなく、話し手の自問自答や疑念などの心的態度の表出として用いられている。次の例を見てみよう。

(13) but now the mention of the rail way guide (so familiarly known by its abbreviation of A B C,

listing as it did all railway stations in their alphabetical order) sent a quiver of excitement through me. Surely-surely this could not be a second coincidence?

(Agatha Christie, *The ABC Murders*)

(13)の例について、surely の後は、疑問符があり疑問文の形式をとっているが、主語動詞の倒置もない。また、最後の surely の文に対する答えはない。これは、話し手の質問を聞き手に投げかけているのではなく、話し手自身の気持ちを問いただしている表現である。従って、形式上は疑問文であるが聞き手に質問しているのではなく、話し手の心的態度が描写されている文になっている。

5. まとめ

4で示したように、疑問文の文頭に生起する surely は、話し手にとってその命題内容が思いがけない事柄である（あった）ことを表すことがわかった。疑念表出文の中で見られる surely は、形式上は疑問になっているが、これは「質問」という言語行為を表しているのでなく、話し手の心的態度が表出した文であることがわる。加えて、surely は認識的モダリティ(epistemic modality)のみならず、感情的モダリティ(emotive modality)をも表せるということを示唆している。

---

[1] 本稿で扱う文は、疑問符が使用された疑問文の形式となっている。また、否定文においても疑問符が使用された形式にもなっている。つまり、surely が肯定文や否定文を修飾しているが、全体としては疑問符がおかれ、疑問文になっている。また、Thomson & Martinet (1986[4]: 59)や Swan (2005[3]: 563-564)は、副詞 certainly と surely とでは意味が異なるとしている。Swan (2005[3]: 563-564)によると、前者は何かが真であることを単に告げる時に用いられ、後者は人の同意（一致）を求める時に用いられるとしている。次の例を比較されたい。

a. House prices are certainly rising fast at the moment. ('I know this is so.')
b. House prices will surely stop rising soon.(I believe this must be so.')

[2] ③の意味は、一般的には、副詞 certainly とほぼ同じ意味とされている意味である。

[3] 『英語基本形容詞・副詞辞典』(1989: 1826)によると、この意味では、疑問文では用いられないとしている。

[4] 後続する文が否定文に関しては、疑問符で終わっている場合もあれば、感嘆符で終わっている場合もある。本稿では、分析は疑問符で終わっている文に限定する。

参考文献

Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*, Oxford: Oxford University Press.

Declerck, R. 1991b. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo: Kaitakusha

Hoye, L. 1996. *Adverb and Modality in English*, London and New York: Longman.

小泉　保 (編). 2001. 『入門語用論研究』 東京: 研究社.

小西　友七 (編). 1989. 『英語基本形容詞・副詞辞典』 東京: 研究社.

毛利 可信. 1980. 『英語の語用論』 東京: 大修館.

森本 順子. 1994. 『話し手の主観を表す副詞について』 東京: くろしお出版.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.

Searle, J, R. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge: Cambridge University Press.

Swan, M. 2005[3]. *Practical English Usage*, Oxford: Oxford University Press.

Thomson, A, J. and A. V. Martinet. 1986[4]. *A Practical English Grammar*, Oxford: Oxford University Press.

Vanderveken, D. 1990a. *Meaning and Speech Acts Volume 1*, Cambridge: Cambridge University Press.

_____. 1990b. *Meaning and Speech Acts Volume 2*, Cambridge: Cambridge University Press.

渡辺 実(編). 1983. 『副用語の研究』 東京: 明治書院.

辞書

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, 7th edition. (2005) Oxford University Press.

基礎化粧品広告におけるメタファーの特徴と解釈

笠貫葉子
（日本大学）

本稿では基礎化粧品[i]広告に焦点をあて、そこに多用されるメタファーの型を明らかにすると共に、その特徴や解釈のあり方について認知言語学的視点から考察する。まず考察の前提として広告一般の特徴を確認した上で、本稿におけるメタファーの定義を示す。これを踏まえて実際の基礎化粧品広告における表現を分析し、三つのタイプのメタファーを見出すと共に、それらがどのように成り立ち、どのような効果をもたらすのかを検討する。

1．広告の特徴

広告には、求人広告のように「買う」タイプのものもあるが、本稿で扱う基礎化粧品広告は商品を「売る」タイプの広告であるため、ここでは「売る」タイプの広告に絞って特徴を確認する。

注目すべき特徴は、主に三点にまとめられる。第一に、新聞や雑誌などにおいて広告が使用可能なスペースは限られているため、要点を簡潔に伝える力が必要となる。第二に、読者は広告を読むために新聞や雑誌を購入するわけではなく、広告は読者にとって関心の的ではない。ゆえに、そうした読者でさえも目を留めるような「目新しさ」が要される。第三に、広告には商品を「売る」という明確な目的があるため、読者に「買いたい」という気持ちを引き起こす力が必要である。よって、明確なセールスポイントがあれば、それを打ち出すことが重要となる。

以上三点の特徴ゆえに、広告ではメタファーが有効に用いられることとなる。

2．本稿におけるメタファーの定義

本稿では認知言語学的視点から、メタファーを概念レベルのものとして捉える。我々の認知構造そのものがメタファー的であり、言語表現におけるメタファーはその反映として捉える視点である。

この視点から、メタファーは二つの異なる認知領域間の写像であると定義する。理解しようとする対象（目標領域）が抽象的である際、それとは別の、より具体的な認知領域（根源領域）における要素を写像することによって捉える手段である。これには、日常言語においてごく普通に用いられ、それなしには目標領域を表すことが困難とされる「慣習メタファー」と、通常はつながりが見出されないような二つの認知領域を結ぶ「新規メタファー」があり、広告には両者とも見出される。

3．基礎化粧品広告に見出されるメタファー

本節では、実際に基礎化粧品広告で多用される三つの概念メタファー[ii]を提示し、その特徴と解釈について考察する。

3．1．「スキンケアは戦いである」

このメタファーが多用される点については、Tanaka(1994)においても指摘されている。具体例としては以下のようなものが挙げられる。

例：（1）「もっと新しく。―シミを*寄せつけない*肌へ。」（Clinique）
（2）「夏のデリケート肌は*守られる*」（SHISEIDO international）
（3）「紫外線＋汚れた空気へ　メイク下の*ボディガード*！！
― 外側で*跳ねつけ*、内側で*守りぬく*、メイク下の*ボディガードは無敵*。」
（HELENA RUBINSTEIN）

このメタファーは、様々な基礎化粧品の中でも特にマイナス要因の排除を目的とした商品、すなわち美白美容液や日焼け止めクリームなどの広告に多用される。二つの認知領域間の写像は下記のようになる。それぞれ、矢印左が目標領域、右が根源領域の要素である。

・「基礎化粧品」←「兵士」もしくは「兵器」
・「肌」　　←「守る対象」
・「肌トラブル（シミ等）」もしくは「肌トラブルの要因（紫外線等）」←「敵」

ここに見られるように、領域間の写像関係は常に一定ではない。例えば、「基礎化粧品」は「兵士」と捉えられることもあれば、「兵器」と捉えられることもある。しかし、「兵士」でも「兵器」でも、マイナス要因排除の一助となる存在である点は共通しており、メタファーの大枠は保持されていることから、同じ概念メタファーとして解釈できる。

ただし、その効果については差が生じる。無生物である基礎化粧品を「兵士」として捉えるメタファーでは、擬人化による効果が見られるのである。他者に自ら働きかける「人」として捉えることにより、その商品による「働きかけ」、すなわち「効き目」が際立つこととなる。一方、肌トラブルやその要因を「敵」として捉える擬人化は、目に見えない肌トラブル要因の存在をも明確化し、好ましくない働きかけを際立たせるため、早急に対処する必要性を感じさせる効果が生まれる。

3．2．「スキンケアは（人を）育てることである」

このメタファーは前述のメタファーとは対照的に、水分や栄養分などのプラス要因を加えることを目的とした商品である化粧水や栄養クリームなどの広告に多用される。

例：（4）「美肌を*育てる*スキンケアへ」（FANCL）
（5）「朝晩の*ごちそう*に、肌は*元気いっぱい*」（GIVENCHY）
（6）「1日2回、肌が*ひと飲みする*ハリ育成ローション」（HELENA RUBINSTEIN）

このメタファーにおける認知領域間の写像は、下記のようになる。

・「基礎化粧品」←「飲食物」
・「肌」←「（育つ）人」

ただし、肌は「育てられる」存在として受動的に喩えられる場合と「育つ」存在として能動的

に喩えられる場合がある。このうち、後者では肌が能動的に自ら化粧品と関わっていく存在として擬人化されているため、肌が自ら関わりたくなるほどのものとして「商品の良さ」がより一層強調されることになる。

また、より目新しさが感じられ印象的なのも、肌が「育つ」と捉えるメタファーである。実際のスキンケアにおいて肌は受動的な立場であるため、この視点の転換が目新しさを生む効果につながっていると考えられる。したがって、メタファーが生む目新しさは、「どういった根源領域が選択されるか」だけではなく、「主要な要素が、領域でどのように位置付けられるか」によっても左右されると言える。

３．３．「スキンケアは土壌を潤すことである」

このメタファーもプラス要因を加える商品の広告に多用されるが、その中でも「保湿」を目的とした商品の広告に多く見られる。

例：（７）「肌に、*水層をつくる*」(IPSA)
（８）「わたしは肌に、美しい*水脈*をもっている」(ESTEE LAUDER)
（９）「うるおい*水路*（チャネル）が目覚める。みずみずしさが駆けめぐる。」(Dior)

このメタファーの場合、認知領域間の写像は下記のようになる。

・「基礎化粧品」←「雨」
・「肌」←「土壌」

ただし、このメタファーでは根源領域と目標領域との対応が見出し難い要素も用いられている。例えば、目標領域（「スキンケア」）において例文（７）における「水層」に相当するものが何であるか、明確ではない。それでも我々が容易にこのメタファーを解釈し得るのは、その要素が根源領域（「土壌を潤すこと」）において果たす役割が際立っており、その役割自体は目標領域においても矛盾しないためであると考えられる。そして、このように根源領域と目標領域の間で通常の対応関係が見出し難い要素が表されると「目新しさ」が生じるため、広告には効果的なメタファーであると言える。

なお、我々がこの「スキンケアは土壌を潤すことである」というメタファーを理解できるのは、日常的に「人間は植物である」という慣習メタファーを用いている上、「土壌を潤すと、植物の育成にプラスになる」という背景知識があるためだと考えられる。こうした前提ゆえに、「土壌を潤すこと」は「（慣習メタファーで『植物』とされる）『人間』をより良い状態にすること」と結びつくのである。この点で、このメタファーは前項のメタファー（「スキンケアは（人を）育てることである」）と密接に関わると言える。

３．４．三つのメタファーに通じる「肌の力」

基礎化粧品広告には「力」という表現が多用される。

例：（１０）「引き出す、導く、肌の*チカラ*」(FANCL)
（１１）「肌の*生命力*へ」(HELENA RUBINSTEIN)

（１２）「内側からもみなぎる*美肌力*」（LANCOME）

これは、「力」という要素が、既述した三つのメタファー全てに通じる要素であるためと考えられる。「戦い」には「力」が必要であるし、「（人を）育てること」において「育てられる（育つ）」側は「力」を得る。さらに、「土壌を潤すこと」により潤った土壌は、植物を育成させる基盤としての「力」となる。

４．まとめ

本稿では、基礎化粧品広告に見られる主要なメタファーを三つ指摘し、それぞれについて考察を行った結果、基礎化粧品という同一のジャンルであっても商品のセールスポイントに応じてメタファーが使い分けられることを確認した。また、同じ概念メタファーであっても認知領域間の写像は常に一定とは限らず、目標領域における同一要素について根源領域における異なる要素を写像する場合や、同一の写像であっても認知領域の中での位置付け（受動的立場か能動的立場か、等）が異なる場合があることも見出した。先述したように、広告には読者の目を引く「目新しさ」が必要であり、メタファーはその効果を生み出す一助となるが、同じ概念メタファーであっても「目新しさ」の度合いに違いが生じるのは、そうした点によるものと言える。また、根源領域と目標領域の間で対応が見出し難い要素が表されると「目新しさ」が生じることも確認した。さらに、解釈のために慣習メタファーが前提とされる例を示し、「新規メタファー」のみならず「慣習メタファー」も広告において重要な役割を果たしていることを明示した。

注 i) 基礎化粧品とは、肌の状態を整えるための化粧品であり、化粧水や美容液などが相当する。顔を美しく飾るために用いる口紅や頬紅などの化粧品は含まない。

ii) Lakoff and Johnson(1980)における“A IS B”と同様、それぞれの概念メタファーの表示は「A（目標領域）はB（根源領域）である」という形式とする。

参考文献

Cook, G. 1992. *The Discourse of Advertising*. London: Routledge.

Lakoff, G. 1993. “Contemporary Theory of Metaphor.” In A. Ortony ed. *Metaphor and Thought.* 2nd ed., 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

- - -. 1987. “Image Metaphors.” *Metaphor and Symbolic Activity*. Vol. 2. No. 3, 219-22.

- - -. and Turner, M.. 1989. *More than Cool Reason*. Chicago: Chicago University Press.

- - -. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago University Press.

鍋島弘治朗. 2003.「領域を結ぶのは何か」『日本認知言語学会論文集 Vol.3.』 12-22.

Tanaka, K. 1994. *Advertising Language: A Pragmatic Approach to Advertisements in Britain and Japan*. London: Routledge.

英語における法助動詞と助動詞 HAVE の「作用域の反転」現象について

片岡宏仁
関西外国語大学大学院

1. 問題設定

本稿は，英語法助動詞の認識的なモダリティに関わるある現象を考察する．

［**1.1 定義**］認識的なモダリティとは，ある命題が真である可能性ー蓋然性の度合いを表わすタイプの意味のことである．そうした度合いが知識・信念に照らしてなされることから，認識的モダリティまたは命題モダリティとよばれる．例えば日本語では「太郎は来るかもしれない」の「かもしれない」は，「太郎が来る」という命題について，手持ちの知識にてらして真となる可能性があることをあらわしている．また，「太郎が来た」は命題を事実として断定する．これとちがい，例えば「太郎は来ることができる」の「できる」などは，「太郎が来る」という出来事が実現する可能性という根源的モダリティまたは事象モダリティをあらわしており，認識的モダリティは断定である．

［**1.2. 事例と問題点**］本稿がとくに取り上げたいのは，次のような事例である．

(1) /No - I / think I <u>'might</u> <u>have</u> 'walked . out too from all accounts# (='I think it's possible that I would have walked out too) (Coates [1983 : 159])

(2) At that point, he <u>could/might</u> still <u>have</u> won the game. (='At that point, it was still possible that he would win the game.') (Stowell [2004 : 631] ; *orig.* Condoravdi [2002])

(3) In October, Gore still <u>should</u> <u>have</u> won the election. (='In October, it was still likely that Gore would win the election.') (*Ibid.*)

［**1.2.1. 事例の記述**］これらの事例は，いずれも認識的なモダリティをあらわしている．しかし，(1) と (2)-(3) とでは，認識的査定の時が異なる．まず，(1) の *might* は，過去の出来事の命題について，現時点での認識的な可能性をあらわしている．他方で (2)-(3) の *could/might/should* は，いずれも「彼が試合に勝つ」・「ゴアが選挙に当選する」という命題について，ある過去の時点での認識的な可能性や蓋然性を述べている．しかも，仮定法過去により，それらの命題が偽だということ，つまり，「彼」は試合に勝たずゴアは選挙に当選しなかったことが前提とされている．

［**1.2.2. 問題点**］英語法助動詞の認識的モダリティについては，時制の一致をのぞいて，過去の意味にならないということが知られている (*ie.*「認識的モダリティの不可侵性の原理」). 上記 (2)-(3) の事例はこれに対する反例となっている．こうした解釈はいかにして可能となっているのだろうか．

2. Stowell (2004) の議論とその難点

こうした事例について，Stowell による統語論的な解決案を参照しよう．

［**2.1. 統語構造**］議論の前提として，Stowell は，法助動詞の節は根源的な意味の場合と認識的な意味の場合とで統語構造が異なると考える．まず，根源的な意味の場合，法助動詞は時制要素のすぐ下位にあって，法助動詞が移動して時制に結びつくとされる．階層的に時制の下にあるため，法助動詞は時制の影響をうける．これに対して，認識的な意味の場合，時制と法助動詞の位置関係は反対になる．つまり，法助動詞は時制要素の上にあって，時制要素が移動して法助動詞に結びつく．法助動詞は時制よりも階層で上位にあるからその影響をうけない．本稿もこの仮説を採用する．

<u>法助動詞文の統語構造</u>

・根源的解釈の場合：[Tense [Modal [(have) [VP...]]]]

・認識的解釈の場合：[Modal [Tense [(have) [VP ...]]]]

［**2.2. 「作用域の反転」**］Stowell は問題の事例 (2)-(3) には「作用域の反転 scope-reversal」があると言う．その議論は下記のように要約できる：

【A】法助動詞のあらわす認識的査定の時は過去に位置づけられている；【B】法助動詞の形態的過去時制は仮定法のそれであるから，じっさいの意味としては現在をあらわす．つまり，過去をあらわす要素は助動詞 *have* 以外に見当たらない；【C】だとすれば，助動詞 *have* が認識的査定=法助動詞をその作用域に含んでいることになる．【D】しかしながら，統語構造においては，<u>Modal</u> > *have* > VP という階層関係が成り立っていると考えられる；【E】したがって，こうした統語構造の階層関係から（LF で）*have* > <u>Modal</u> > VP という階層構造が導かれていると考えられる；【F】この *have* は「真の」過去時制であり，法助動詞の過去時制形態素を c 統御する．

つまり，助動詞の *have* が認識的な法助動詞の上位にあると考えるわけである．これが Stowell の言う作用域の反転である．

［**2.3. 証拠性／真理様相**］それでは，そのような作用域の反転があるのだとして，どのように説明できるだろうか．ここで Stowell は，「真理様相」と「証拠性」の区別を導入する．Stowell によれば，事例 (2)-(3) の法助動詞は過去の時点からみて未来にある事象について可能性や蓋然性を述べる「真理様相的」なタイプであり，事例 (4) のような査定時からみて同時または過去にある出来事に関する「証拠的」なモダリティとは異なると言う．

(4) He may/might have (already) won the game. (='It is possible that he has (already) won the game.') (Stowell [2004 : 631])

Stowell は，この真理様相と証拠性との区別が問題の作用域現象を解決するカギとなると述べている．証拠的モダリティは助動詞 *have* と法助動詞の作用域反転を許さず，その点で根源的モダリティに近似する，というのがその論拠だ．

［**2.4. 批判**］しかし，それではなぜ認識的な解釈では *have* が法助動詞を作用域に含む階層構造が導き出されるのかが問題となる．そして，Stowell はその点について説明を与えていない．したがって，問題は未解決のままである．

3. 語用論的対案

最初の問題を繰り返そう．想定される統語構造では，認識的な法助動詞は時制や助動詞 have よりも上位にあるため，過去の意味となることはありえないはずだ．ところが，現にそのような事例がある．だとすれば，問題の事例では階層構造が想定されるものとは異なっていなければならない．それでは，そのような構造はどのようにして導かれるのか――このように問いが立てられた．そして，いまのところ根拠と妥当性のある統語的な解決法は見当たらない．そこで対案として提案したいのが，語用論的な解決案である．

さきほどは，法助動詞と *have*（または時制）とが階層の位置関係を入れ替えるという作用域反転がどのようにして生じるかというように問いを立てた．しかしながら，結論から言うと，認識的な査定を過去にしている要因は助動詞 *have* ではないと考えられる．したがって，そもそも法助動詞と *have* とが位置を逆転しなければならない理由など存在しない．つまり，この問いの立て方そ

のものがまちがっていたのだ.

［**3.1.「認識的査定」の概念構造**］まずは,「過去の認識的査定」というときに,「過去」となっているのは具体的に何なのかを考えよう.

［**3.1.1. 概念構造についての仮定を導入**］認識的法助動詞の基本的な概念構造を，こう仮定する.

認識的法助動詞の基本的概念構造

R_{modal} (p, D)：想定の集合 D と節の命題 p とについて，法助動詞の指定する関係 R_{modal} が成り立つ（cf. Papafragou［2000］).

想定の集合 D とは，例えば話し手や聞き手の知識や信念を指す．また，関係 R とは例えば認識的な可能性であれば「両立」という関係であり，「ある命題が認識的に可能である」とはその命題が知識や信念と両立するということである.

［**3.1.2.「過去」となる要因は想定集合**］この基本的な概念構造には，命題 p，関係 R，想定集合 D という３つの要因がある．そして,「過去における認識的査定」というとき，過去となりうるのは想定集合 D のみだ．まず，命題 p のあらわす事態にはそれ固有の時間指示がある．命題の内容が過去だとして，その認識的な査定が現在であるか過去であるかはまた別の問題である．次に，関係 R_{modal} そのものには時間の属性がない．とすれば，想定集合 D が,「過去の」という限定を受ける要因として残る．よって，想定集合 D に時間の属性があると考えられる．こんな例を考えてみよう：

(5) [...] she *believed* [he <u>might</u> have the best informed mind].

(J.Austin. *Pride and Prejudice.*)

過去時制の思考動詞 *believed* の補文に法助動詞 *might* があらわれている．これがあらわすのは *believed* の主語 *she* が有している想定集合に照らした認識的査定であって，現実の話し手本人の想定集合に照らした査定ではない．そして当然，想定集合は過去のものだ.

そこで，法助動詞が呼び起こす想定集合 D に「認識主体」・「時点」という２つの値を認める.「想定集合 D に時点の値がある」というのは，ひらたく言えば，例えばわたしが今日知っていること，昨日知っていたこと，おとつい知っていたこと……というように，想定集合 D に日付がつくようなものである．そして,「昨日の時点では p が真である可能性があった」とは,「昨日の時点での自分の想定集合 D と命題 p は両立する関係にあった」ということにほかならない.

そうすると，思考動詞補文の場合，認識の時点は過去であり，また，認識主体の値が主節主語にひとしくなっている，と記述できる．同様に，事例 (2)-(3) では想定集合 D の時点の値が過去となっている．とすれば，私たちは「問題の事例 (2)-(3) では，どうして想定集合 D に過去時の値が与えられるのか」と問うべきである.

［**3-2. 暫定的解決案**］ここで，問題の事例が反実仮想的なものだという点に注目したい．反実仮想の意味解釈においては，現時点での話し手の想定にとって事実とされていないものが事実として仮定される．つまり，いま話し手が受け入れている想定集合 D とは別物の想定集合 D' が談話に導入されるわけである．したがって，たとえば事例 (3) で，ゴアの勝利に関する認識的査定は現時点での話し手の想定に照らしたものではありえない．それでは問題の事例において認識的査定はどういう想定集合を背景としているかといえば，その候補としてもっとも有力なものは，文頭の時間表現が喚起している「10 月」の時点で話し手に利用可能だった想定集合だ．つまり，事例 (3) を私たちの理論で翻訳するならば,「10月の時点での話し手の想定集合 D と命題 p とは両立の関係にある」ということになる．よって，これを英語でパラフレーズした場合に“it *was* still likely

that..."となるのはごく当然の結果である.

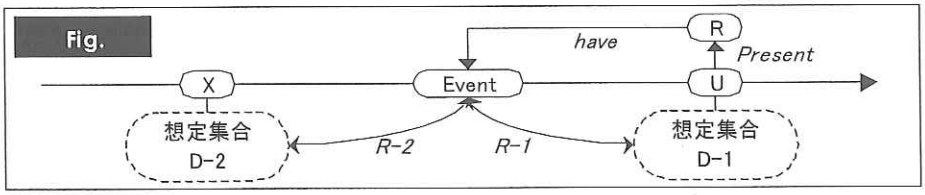
具体的に述べよう. 解釈が導かれるプロセスは次のように記述できる (Fig. 参照). まず, 通常どおりの事例 (1) の場合はこうなる:

【1】助動詞 *have* は動詞のあらわす事象を参照時 R の過去に位置づける;【2】法助動詞の過去形が合図する仮定法は, 想定集合 D が現実の話し手のそれと異なる D-1 であると指定する;【3】このとき, 通常の値として反実仮想的な想定集合 D-1 は現時点での話し手のものと特定される;【4】よって, 過去の出来事についての反実仮想的な認識的査定が話し手によってなされている, という解釈が成立する.

他方,「反転」があるとされた事例 (2)-(3) の場合はこうなる:

【1】助動詞 *have* は動詞のあらわす事象を参照時 R の過去に位置づける;【2】法助動詞の過去形が合図する仮定法は, 想定集合 D が 現実の話し手のそれと異なる D-2 であると指定する;【3'】このとき, 文頭の時間表現によって想定集合 D-2 の時点が「当時」/「10 月」と指定される;【4'】よって, 過去の出来事についての認識的査定が 出来事以前の時点でなされていた, という解釈が成立する.

このように, 認識的査定が過去時のものとなっているのは助動詞 *have* の貢献ではなくて, 仮定法/反実仮想という意味的な制約のもとでの語用論的な解釈の産物だったのだと考えれば, 文の階層構造を表層に近い形に保ったまま, 自然な説明が可能となる.



4. 結語

以上, 本報告は, Stowell のいう「作用域反転」現象についてその説明の不備を指摘し, 語用論的対案を提示した. 対案を要約する. 第一に助動詞 *have* はその階層構造の位置からして VP を作用域とするのであって法助動詞はそこに入らない(*ie.*作用域は反転しない). 第二に認識的査定は「関係 R」・「命題 p」・「想定集合 D」から構成される. 第三に想定集合 D にのみ「認識主体」・「時点」の値が存在する. 第四にこれらの値は (意味論的な制約のもとで) 語用論的にその値を与えられる. 以上により, いうところの「作用域反転」現象は語用論的な観点から解決が可能である.

References

Coates, Jennifer. 1983=1992. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm. (邦訳:『英語法助動詞の意味論』[澤田治美=訳]. 東京:研究社.)

Condoravdi, Cleo. 2002. Temporal interpretation of modals, in Luis D. Casillas Martínez, Brady Z. Clark, & Stefan Kaufmann eds., *The Construction of Meaning*, pp.59-87. Stanford, Calif.: CSLI Publishers.

Papafragou, Anna 2000. *Modality: Issues in the Semantics-Pragmatics Interface*. Elsevier.

Stowell, Tim. 2004. Tense and modals, in J. Guéron & J. Lecarne eds., *The Syntax of Time*, pp. 621-635. Cambridge, Mass.: MIT Press.

なぜ観客は納得するのか ― 映画の誤解修復方法 ―

木津久美子（神戸市外国語大学大学院）g05006@ug.kobe-cufs.ac.jp

1. はじめに

観客は、どのようにして映画のストーリーを理解するのだろうか。映画は、送り手である映画制作者と、受け手である観客との間に成立するコミュニケーションの一形態であるという観点から見れば、映画制作者は、観客と共有する知識を前提にしてストーリーを組み立てており、観客はその知識を頼りにスクリーン上の出来事を解釈するはずである。このことは、映画学の分野においても論じられており、Bordwell & Thompson (2004)は、映画のシーンを表現する映像や音響は、社会生活における知識や映画に関する知識をもとにして、観客の予想や期待に応えるようなかたちで組み合わされていると主張する。しかし、映画学における分析対象は、その映像や音響の組み合わせを可能にする技術的手法に集中しており、それを解釈する際に、観客が頼りとする具体的な知識が何であるのかには触れていない。

一方、言語学の分野において、山口（1998）は、語りを対話との比較によって分析し、「ことばにとってもっとも基本的なコンテクストは対話である。対話から口頭の語りへ、さらに口頭の語りから書かれた語りへと、ことばが用いられるコンテクストが特殊化するに連れて、ことばづかいも特殊化していく」（山口 1998: 228）と結論づけている。ここでいう「ことば」は、あるコンテクストにおける「伝達手段」と解釈することができる。本来、対話という相互行為の場において使われる伝達手段には、言語以外に、イントネーションやジェスチャー、顔の表情などが含まれ、聞き手は、このような視聴覚情報を考慮に入れて言語を解釈する。したがって、言語だけでなく映像や音響をも伝達手段として表現する語り（つまり映画）においても、伝達手段の使われ方は、対話でのことばの使われ方が基本となっており、映画というコンテクストによって変化しているであろうことは想像に難くない。つまり、観客にストーリーを伝えるために、映画制作者が前提とする知識には対話での知識が含まれており、観客は対話での知識を頼りにスクリーン上に映し出される出来事を解釈していくと仮定することができる。

本稿では、サスペンス映画の一種を取り上げて、映画のストーリーの組み立てには、対話でのことばの使い方がもととなっていることを具体的に示す。さらに、対話でのことばの使われ方が、映画というコンテクストの中でどう変化し、その変化には何が要因として関わっているのかを考える。

2. The garden-path film (GPF)

サスペンス映画の中には、『シックス・センス』（1999）に代表されるように、観客に、あるシーンを見せた後、それまでのストーリー全体を解釈し直すことを強いるものがある。観客は、そのシーンの前に得た情報をもとに推論したストーリーを捨て、その後に得た情報を加えて、新たなストーリーを構築しなければならないことになる。いわば、この種の映画は、袋小路文(the garden-path sentence)の聞き手がたどる文単位の解釈プロセスを、言語と映像と音響を使った大掛かりな談話構造に応用しているといえる。そこで、この種の映画を、「ガーデンパス・フィルム」(the garden-path film、以下 GPF)と名付ける（Kizu 2005）。GPF における謎解きは、映画制作者が観客との間にわざと起こした誤解の修復である。この誤解の修復には、対話においてよく使われる誤解の修復方法が利用されている。次に、このことを『シックス・センス』の謎解きシーンを例に挙げて分析していく。

3. GPF の修復方法

まず、『シックス・センス』のあらすじを紹介する。主人公である精神分析医のマルコムは昔の患者に撃たれるが、その後、回復して、幽霊が見えるという少年コールに出会い、その治療にあたることになる。一方、マルコムの妻アンナは、事件以来マルコムに対して冷たい。コールの問題をどうにか解決し、こんどは、アンナと向き

合うために自宅に帰って来たマルコムは、アンナの様子から、実は自分が幽霊であり、昔の患者に撃たれた直後に死んでいたことに気づく。このような筋立ての中で、映画制作者がもくろむのは、まず、「マルコムは生きている人間である」と観客に誤解させ、その後、「実はマルコムは幽霊であった」ということを観客に知らせて納得させるというものである。つまり、観客は、謎解きシーンを見た後、「マルコムは生きている人間である」として解釈してきたストーリーを捨て、新たに得た「マルコムは幽霊である」という情報をもとに、ストーリー全体を解釈し直さなければならない。

この誤解修復には、あらかじめ、観客がストーリーを解釈する視点を、自身も幽霊であることを知らなかったマルコムに完全に同化させておくという操作が行われている。つまり、観客は、マルコムと同じ視点でストーリーを解釈していくことになり、マルコム自身が誤解していたことに気づくことで、観客も誤解に気づくことになる。では、具体的にどのような方法が使われているのだろうか。次の(1)は、『シックス・センス』の謎解きシーンをテクスト化したものである。このシーンは、自宅に帰ってきたマルコムが、居間のソファーで眠っているアンナに話しかけた直後に始まっている。

(1) **(LIVING ROOM)** *Something shiny falls out of Anna's hand, rolls on the ground and comes to a stop. Confusion washes over Malcolm's face* (Close-up). *He looks to Anna's hand...An identical gold wedding ring sits on her finger. He looks at his own hand...His wedding ring is gone.* 〈*Brooding music starts playing.*〉 *Cole's voice starts off-screen.*
COLE (VOICE OVER): I see people.
Malcolm is completely lost. (Close-up)
(FLASHBACK: HOSPITAL ROOM) *Cole confesses in the bed.*
COLE: They don't know they're dead.
(PRESENT: LIVING ROOM) *Malcolm, confused* (Close-up), *totters to his feet.*
MALCOLM (V.O.): How often do you see them?
COLE (V.O.): All the time.
(FLASHBACK: COLE'S HOME) *Malcolm is seated in front of Cole's mother. Cole comes home.*
(FT) **(PRESENT: HALLWAY)** *Malcolm, confused, takes a couple steps back.*
COLE (V.O.): They're everywhere.
Malcolm looks around in confusion...His eyes are drawn to the dining table...Only one place setting is out on the tabletop. He, confused, stares at the table. (Close-up)
COLE (V.O.): They only see what they want to see.
(FLASHBACK: RESTAURANT) *The waitress drops off the check on the table. Anna grabs it before Malcolm and quickly signs it.*
（中略）
(PRESENT: HALL) *Malcolm, upset, remains standing...His eyes come to rest on the door to his basement office.*
(FLASHBACK: HALL) *Malcolm tries to open the door. It's locked.*
(PRESENT: HALL) *Malcolm looks in disbelief at the door blocked by a desk on which a lot of books are piled up. He staggers halfway up the stairs and becomes very still. Malcolm's eyes fill with a storm of emotions* (Close-up). *Anna's breaths are forming tiny clouds in the cold air.* 《*The music reaches the climax. Malcolm's face fills the frame. A violent gun shot echo. The camera zooms out.*》
(FLASHBACK: BEDROOM) *Malcolm is lying on the bed, clutching his stomach. Anna rushes to him.*
(PRESENT: STAIRS) *Malcolm, completely shocked, stands still.*
(FLASHBACK: BEDROOM) *Anna pries Malcolm's hands away to reveal the tiniest tear in his shirt.*
(PRESENT: STAIRS) *Malcolm feels his side.*
(FLASHBACK: BEDROOM) *Anna's eyes catch something dark – moving...A pool of blood is forming under Malcolm. She slowly turns him over on his side...His lower back is stained with blood which pours uncontrollably out of a wound.*
(PRESENT: STAIRS) *Malcolm turns. The wound on his lower back is revealed.*
(FLASHBACK: BEDROOM) *Malcolm gasps out a few words and then becomes silent.*

(*The Sixth Sense*, 1:37:30-1:40:10)

上のシーンは、二つの部分に分析できる。前半部分は、矢印で囲んだ部分であり、ここでは、観客がこのシーンの前までに見たことのあるシーンを、マルコムの視点によって繰り返し（実線部）、何かに気づいたマルコムの表情や態度を強調することによって（波線部）、観客にそのシーンの解釈には誤解があることを明らかにする。まず、自分の指に結婚指輪がないことに気づいたマルコムが、コールの「幽霊が見える」と告白したときのことば

を思い出す。次に、マルコムの回想によって、コールの幽霊を説明するセリフとともに、コールの告白シーンと、マルコムがコールの母親と向かい合っていたシーン、さらに、アンナの冷たい態度を示唆していた一連のシーン — 1 人分の食事、レストランで返事をしないアンナ、鍵が掛かった書斎へのドア — が再現されていく。これらのシーンには、マルコムの驚いた表情やうろたえた態度を示す映像が挿入され、マルコムの不安感を代弁するような音楽（山括弧部）が重ねられる。これまでマルコムと同じ視点でストーリーを解釈してきた観客は、このマルコムの何かに気づいた様子によって、これらの繰り返されたセリフやシーンを間違って解釈していたことに気づく。この前半部分は、いわゆる「どんでん返し」の始まりであり、the final twist（= FT）と名づけておく。

後半部分では、「では何が間違いだったのか」という観客の疑問に答えるように、今まで隠されていた出来事が明かされて（二重線部）、誤解の修復が行われる。まず、書斎へのドアの前には机があったことが明かされる。次に、劇的な音響・映像効果（二重山括弧部）が挿入されたあと、映画の冒頭でマルコムが患者に撃たれた直後に死ぬシーンと、マルコムの背中にはその時の傷があったことが初めて映し出される。これらのシーンを見て、観客は「マルコムが幽霊である」ことを理解し、再現されたシーンを解釈し直す。つまり、コールの言う「幽霊」にはマルコムが含まれていたこと、従って、幽霊が見えるコール以外には、誰にもマルコムは見えていなかったこと、だから、アンナは冷たいのではなかったこと、さらに、見たいものしか見えないマルコムには書斎へのドアの前に置かれた机が見えなかったことをあらためて理解するのである。この観客の再解釈は、マルコムの表情や態度が、当初の混乱した様子から決定的な驚き（点線部）に変わったことによって裏づけられる。

このように、この映画の修復は、まず前半部分（FT）において観客の誤解を明らかにし、次に後半部分（FT 後）でそれを修復するという手順で行われている。では、対話ではどのように誤解が修復されるのだろうか。Schegloff（1987, 1992, 1997, 2000）は、対話でよく使われる修復方法として、(2)のような「第三期修復」（third-position repair）のパターンを分析している。

(2) 対話における誤解の修復方法 ～「第三期修復」

(T1)	A: Which one::s are closed, an' which ones are open.	…	誤解のもととなった発話
(T2)	Z: ((pointing to map)) Most of 'em. This, this,	…	(T1)に対する反応：A に Z の（T1）解釈には誤解があることが明らかになる
(T3)	A: ┌ this, this └ I don't mean on the shelters, I mean on the roads.	…	誤解の修復
	Z: Oh!		

(Schegloff 1987: 204)

この修復方法では、(2)が示すように、話し手 A の発話（第一発話＝T1）を、聞き手 Z が誤解していることが、聞き手 Z の反応（第二発話＝T2）で明らかになり、話し手 A がその誤解を修復する（第三発話＝T3）。つまり、「誤解のもととなった発話→誤解が明らかになる聞き手の反応→誤解を修復する発話」という三段階になっている。『シックス・センス』においても、映画全体は、「誤解のもととなるシーン群→観客の誤解を明らかにするシーン群→観客の誤解を修復するシーン群」という三段階で組み立てられている。FT 前を T1、FT を T2、FT 後を T3 と考えると(3)のように表すことができ、「第三期修復」のパターンとよく似た手順となっていることがわかる。

(3)『シックス・センス』における誤解の修復方法

(T1)	FT 前のシーン	……	誤解のもととなったシーン
(T2)	FT	……	(T1)に対する観客の反応を、観客が視点を同化させてきた登場人物に代行させて、観客のストーリー解釈には誤解があることを明らかにする
(T3)	FT 後のシーン	……	誤解の修復

このことから、『シックス・センス』に代表される GPF の修復方法は、第三期修復のパターンがもととなっていると分析できる。映画制作者は、ストーリーを組み立てる際に、対話の中で身につけたこの知識を直観的に使用

し、一方、観客は、この知識に基づいて謎解きに納得する。ただし、対話という相互行為においては、(2)で示すように、話し手は、聞き手から誤解の反応を得て修復を行うが、映画という一方向のコミュニケーションにおいては、映画制作者は、観客の反応を待って修復することはできない。したがって、T2 も映画内において行わなければならない。そのために、上で触れたように、観客の反応を代行するような登場人物を設定して、観客の視点を操作し、この登場人物が誤解に気づくことによって、観客も誤解に気づくような工夫をしている。このことは、ただ誤解を解くという機能を果たしているだけではなく、この登場人物と一体となった観客は、この登場人物と一緒にストーリー内の出来事を体験し、感情移入をすることができるという娯楽としての機能をも果たしている。

また、(2)の(T3)が示すように、第三期修復のパターンでは、話し手は、聞き手の誤解に対して、何が間違っているのか、何が正しいのかをきちんと伝える傾向にある。これは、対話における発話自体が比較的短く、修復も一箇所で、すぐに行われるからであると考えられる。しかし、映画のストーリーは長く、修復は複数個所に及び、またすぐには行われない。さらに、映画には、約 2 時間という上演時間の制約や、スクリーン上に映し出すという空間的制約がある。このため、(1)でみたように、観客が、ストーリーを再解釈するための情報は必要最小限におさえられる傾向にある。つまり、観客が誤解した全ての情報をもう一度、ひとつひとつ訂正して映し出すわけではなく、誤解の発端となった出来事を明らかにするだけで、ストーリー全体の修復ができるような工夫がされている。しかし、このように必要最小限の情報にとどめることは、むしろ、観客が自ら謎解きを行う楽しみを提供しているといえる。

以上分析してきたように、GPF の誤解修復方法は、対話での方法がもととなっており、それは、対話における聞き手の反応を映画内に組み入れ、修復のための情報は必要最小限におさえられるというものに変化している。その要因として、ｉ）一方向のコミュニケーションであること、ii）長期にわたる複数の誤解修復であること、iii）表現に時空間的制約があること、iii）観客に娯楽を提供することが結論づけられる。

4. まとめ

本稿では、サスペンス映画の一種を取り上げ、映画のストーリーは、対話でのことばの使われ方に基づいて組み立てられており、観客は、そのことを頼りにストーリーを理解していくことを示した。また、基本となった対話での修復方法は、映画というコンテクストにおいて変化していることを示し、その要因を探った。本稿で取り上げた GPF は、「観客をまず誤解させて、結末でその誤解を解く」という明快なコミュニケーションの目的を持つため、映画制作者がどのような観客の反応を期待して、ストーリーを組み立てているかがはっきりとしており、分析しやすいものであった。この結果を発展させ、コミュニケーションの一形態としての映画全体の分析にも生かせることと思う。

参考文献

Bordwell, David and Kristin Thompson. 2004. *Film art: An introduction.* 7th ed. Boston: McGraw-Hill Companies, Inc.
Kizu, Kumiko. 2005. *Constraints on presentation of information in the garden-path film: The mechanism of misunderstanding and repair.* Unpublished MA thesis, Kobe City University of Foreign Studies.
シャマラン, M. ナイト. 豊岡真美訳. 1999.『シナリオ対訳　シックス・センス』東京: 愛育社
Schegloff, Emanuel A.. 1987. "Some sources of misunderstanding in talk-in-interaction." *Linguistics* 25, 201-18.
_____. 1992. "Repair after next turn: the last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation". *American Journal of Sociology*. 97-5, 1295-1345.
_____. 1997. "Third turn repair." In Guy, Gregory R, C. Feagin, D. Schiffrin and J. Baugh (eds.) *Towards a social science of language: papers in honor of William Labov. Vol.2. Social interaction and discourse structures*. Amsterdam: John Benjamins publishing company. 31-40.
_____. 2000. "When 'others' initiate repair". *Applied Linguistics*. 21/2, 205-243.
山口治彦. 1998.『語りのレトリック』 東京: 海鳴社

引用した DVD

The Sixth Sense. Dir. M. Night Shyamalan. 1999. DVD. Pony Canyon Inc. Japan, 2000.

所有動詞の have および獲得動詞の定性効果と既存性

小深田祐子　（筑波大学大学院　e-mail: ykobu@f2.dion.ne.jp）

1. はじめに

定性効果は、there 構文に観察される現象の一つである(cf. Milsark (1974))。(1a)において、不定の a candidate が用いられる場合は、there 構文は容認されるが、定の the candidates が用いられると容認されない。こうした現象は、have が用いられる文においても観察される(cf. Partee (1999))。(1b)において、目的語が不定の a sister である場合は容認されるが、the sisters のような定の目的語が用いられると容認されない。

(1) a. There { is a candidate /* are the candidates} for the job.
　　b. John has {a sister/*the sisters}.

本論は、所有を表す have とそれに関連する動詞の現れる文において、それらの文に観察される定性効果と文の解釈の関係について考察し、この現象にどのような共通性が見られるのかを意味的に探ることを目的とする。

2. have が用いられる文における定性効果と文の解釈の関係

まず、have が用いられる文の解釈を考えてみよう。(2)において、目的語に husband のような関係概念を表す語が用いられる場合、解釈は「メアリーに夫がいる」となり、メアリーと husband が所有関係（具体的には夫婦関係）にあることが表される。また、(3)は、目的語に関係概念を表さないような book という語が表現され、「メアリーが本を所有している」という、メアリーと book の所有関係を表す。

(2) Mary has a husband.
(3) Mary has a book.

つまり、(2)と(3)は、ともに主語と目的語の指示対象が所有関係にあるという解釈が得られる。このような解釈を、本論では、関係読みと呼ぶことにする。関係読みが得られる場合は、目的語は不定である。しかしながら、(4)のように、目的語に定の名詞句が用いられると、関係読みは得られない。

(4) # Mary has the {husband/friend} of her own. (Kobukata (2004:30))

(4)における of her own という句は、関係読みを強制する句である。この句が用いられる文において、目的語に定冠詞 the が伴うと容認されない。つまり、関係読みが得られる場合には、目的語が不定でなければならないことになる。以上のことから、関係読みが得られる場合には定性効果が現れる。

しかしながら、have が用いられる文において、常に定性効果が現れるわけではない。

(5) Mary had a husband as a dance-partner.
(6) Mary has a mirror with her.

(5)は、「メアリーのダンス相手が、自分の夫、もしくは既婚者である」と解釈される。つまり、(2)で得られる関係読みの「メアリーが結婚している」という、メアリーと husband との夫婦関係すなわち所有関係を述べた文ではない。また、(6)においても、(3)で得られるような「メアリーが本を所有している」というメアリーと目的語との間にある所有関係を表す文ではない。(6)は、鏡の所有者が誰であるかを述べた文ではなく、メアリーが単に鏡を所持しているという解釈が得られる。こうした所有関係以外の解釈を、本論では、非関係読みと呼ぶことにす

る。非関係読みが得られる場合は、文における目的語が定であっても問題ない。

(7) Mary had the husband as a dance-partner. (Kobukata (2004:30))
(8) # Mary has the {husband/friend} of her own. (=(4))
(9) John has that car today. (Dixon (1991:308), cf. Costa (1974))

(7)の容認性は、(8)の関係読みが得られる文の場合とは異なる。(8)の容認性は、関係読みと定の目的語がなじまないことを示しており、(7)は、非関係読みと定の目的語が共起することを表す。また、(9)は、「ジョンがあの車を所有している」ということを主張する文ではない。today という時間を表す副詞と共起していることからも分かるように、一時的にジョンがあの車を借りて使っている等の解釈となり、主語と目的語の所有関係を表す文ではない。よって、非関係読みが得られる場合は、定の目的語を用いて表すことが可能であり、定性効果は現れない。

従来は、have が用いられる文には定性効果があるとされる。しかし、以上の事実を踏まえると、have の現れる文に定性効果があるかどうかは、当該の文がどんな解釈を得るかという点に着目しなければ説明できないことになる。定性効果が現れるのは、文の解釈が関係読みの場合であり、非関係読みの場合には定性効果は現れない。

3. 獲得動詞が用いられる文における定性効果と文の解釈の関係

次に、have と意味的に関連した動詞として獲得動詞の現れる文の解釈について考えよう。獲得動詞には、get, select, choose など獲得した結果、所有するという意味を表す動詞が含まれる。

(10) Mary {got/selected} a husband. (Burton (1995:57))

(10)において、獲得動詞の目的語に husband という名詞が用いられた場合、「メアリーは結婚して夫ができた」という解釈となる。つまり、主語メアリーの行う行為の結果、メアリーと目的語の指示対象との間に所有関係、つまり夫婦関係が築かれたということが表される。このように、行為の結果、主語と目的語の指示対象の間に所有関係が築かれた場合の解釈を結果読みと呼ぶことにする。結果読みが得られる場合は、目的語は不定冠詞を伴う。

しかしながら、(11)のように、目的語が定冠詞を伴うと、結果読みの解釈は得られないとされる。

(11) # Mary got the husband. (cf. Moltmann (1995))

つまり、結果読みが得られる場合は、目的語が不定でなければならず、定性効果が現れることになる。

しかし、ここで注意しなければならないのは、定の目的語が用いられた文でも容認される場合があるという点と、その場合の解釈が結果読みとは異なるという点である。

(12) Mary got the husband as a dance partner, and she is still single.

(12)は、get の目的語が定の目的語である。この文は、「メアリーが結婚して夫ができた」ということを表す文ではない。表されているのは、「メアリーがある既婚者をダンスの相手に選んだ」ということである。というのも、but 節内で「メアリーは未婚である」という文を矛盾なく続けることが可能だからである。つまり、メアリーと目的語の husband の指示対象とが夫婦関係、つまり所有関係を築いたということを表す文ではなく、メアリーとは独立して第三者の夫が、彼女のダンス相手であるということを表す文である。こうした解釈を独立読みと呼ぶことにする。さらに注意したいのは、独立読みが得られる文においては、目的語は不定でもよいという点である。

(13) Mary got a husband as a dance-partner, and she is still single. (Kobukata (2004:37))

(13)において、目的語が a husband のような不定冠詞を伴っていても、but 節以降でメアリーが独身であるということを矛盾なく続けることが可能であることから、この文の解釈は独立読みが得られると言える。

従来の分析では、get が用いられる文には定性効果が現れるとされる。しかし、以上の事実を踏まえると、獲得動詞の現れる文に定性効果が現れるかどうかは、当該の文がどんな解釈を得るかを考慮しなければ説明できないことになる。結果読みの解釈が得られる場合は、不定の目的語が要求され、定性効果が現れる。一方、独立読みが得られる場合は、定の目的語が用いられても容認可能であり、定性効果は現れない。

4. 定性効果と既存性の関係

では、定性効果がある解釈と、そうでない解釈とでどんな違いがあるのだろうか。このことを考える上で、中右(1989)の「既存性」という概念が重要となる。中右は、以下のように「既存性」を定義する。

(14)　An entity is pre-existent, and the expression describing that entity forms a pre-established (or inherently anaphoric) domain if and only if it is perceived, with respect to the associated situation, to be present there in advance of the occurrence of that situation.

これを踏まえ、本論では、「既存性」を「ある概念関係が、発話に先立ってあらかじめ確定した関係として理解される場合、その概念関係は既存的である。」と規定する。この点から、得られる解釈同士を比較してみよう。

(15)　Mary has a husband.　(=(2))
(16)　Mary {got/selected} a husband.　(=(10))

(15)は、「メアリーが結婚して夫がいる」という関係読みの解釈が得られる。この場合、目的語の husband で表される夫婦関係（所有関係）は発話時において初めて聞き手に提示される。つまり、この文を発話することで初めて聞き手は、メアリーと目的語の指示対象が夫婦関係（所有関係）にあるということを同定するわけである。この点で、関係読みが得られる場合は、所有関係が非既存的であると言える。また、獲得動詞が用いれる(16)では、「メアリーは結婚して夫ができた」という結果読みの解釈が得られ、(15)の have が用いられた場合と同じく、発話時において、メアリーと目的語の指示対象の間に夫婦関係、つまり所有関係が築かれたことが提示される。つまり、この文を発話することで、メアリーが結婚したということが理解されるのである。よって、結果読みが得られる場合も、所有関係が非既存的であると言える。

それに対して、文の解釈が非関係読み、独立読みとなる場合を考えてみよう。

(17)　Mary had {a/the} husband as a dance-partner.
(18)　Mary got {a/the} husband as a dance partner.

(17)は、「メアリーは既婚者をダンスの相手にした」という非関係読みが得られ、メアリーが結婚していることを主張する文ではない。この場合、不定の目的語に加え、定の目的語も容認される。この解釈が得られる場合、目的語 husband が示す夫婦関係（所有関係）は、発話する時点に先立って、Mary または第三者との間に既に築かれており、前提となる。そして、その前提となる関係を踏まえた上で、メアリーと目的語の指示対象の間に文脈で指定された更なる関係、すなわち、ダンスの相手役としての関係が構築される。つまり、目的語の名詞が表す夫婦関係が誰と構築されているかが文脈上定まっており、さらに別の関係があることが表される。従って、(17)の目的語の表す関係は既存的であると言える。これは、(6)のような目的語が非関係概念名詞 mirror のような場合にも当てはまる。(6)では、「メアリーが鏡を所持している」という解釈であり、メアリーと鏡の所有関係を述べる文ではない。つまり、鏡の所有者が誰かということを述べるのではなく、メアリーと鏡との一時的な関係を表す文である。この場合、鏡の所有者は、既に文脈上定まっており、それを踏まえた上で、所有関係とは別の関係、

すなわち「その鏡を Mary が所持している」、という所持の関係が表される。つまり、所有関係が既存的であると言える。(18)のような獲得動詞が用いられる文において、独立読みが得られる場合も同様である。この解釈が得られる場合は、不定に加えて定の目的語も許される。この文も、「メアリーが結婚した」という所有関係を提示する文ではない。目的語の husband が表す夫婦関係は既に第三者との間に構築されており、前提となる。その上で別の関係、すなわちダンスの相手役という関係が主語の Mary との間に築かれる。つまり、目的語の指示対象が誰と関係しているかということが前提となるという点で、目的語が表す夫婦関係（所有関係）は既存的である。

ここで注意したいのは、定性効果が現れるかどうかは、単に目的語が定か不定かという目的語の定性に着目するだけでは説明できないという点である。(15), (16)では、不定の目的語しか許されず、この不定の目的語が表す所有関係は非既存的である。これに対して、(17), (18)では、定の目的語も許される。確かに、(15), (16)の文と(17), (18)の文における不定の目的語は、目的語の定性という点では同じである。しかし、既存性の観点からみれば、両者は異なる。つまり、定性効果が現れるかどうかは、目的語の定性に着目しているだけでは説明されず、既存性という概念によって初めて切り取られる現象であると言える。以上のことをまとめると、次のようになる。

(19)　have, 獲得動詞が用いられる文に定性効果が現れるのは、関係読みや結果読みが得られる場合、すなわち主語と目的語の指示対象の間の所有関係が非既存的な場合である。

5. 終わりに

これまで、have や get の用いられる文には定性効果が現れるとされてきたが、定性効果が現れるかどうかは、当該の文がどんな解釈を得るかということを考慮しなければ決定できない。そして、定性効果が表れるかどうかの違いは、既存性という意味的概念によって適切に区別される。

謝辞

本論は、日本語用論学会第 8 回大会（於：京都大学）の口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。貴重なコメントをくださいました、東森勲先生、廣瀬幸生先生、加賀信広先生、森芳樹先生、橋本美喜男先生、田村敏広君、廣田太一君には、ここに記して感謝の意を表したい。なお、本文中の誤りは、全て筆者の責任である。

参考文献

Burton, S. C. 1995. *Six Issues to Consider in Choosing a Husband: Possessive Relations in the Lexical Semantic Structure of Verbs*, Ph.D. dissertation, The State University of New Jersey.

Costa, R. M. B. 1974. *A Generative Semantic Study of the Verb* HAVE, Ph. D. dissertation, University of Michigan.

Dixon, R. M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar: On Semantic Principles*, Clarendon Press, Oxford.

Jensen, P. A. and C. Vikner 1996. "The Double Nature of the Verb *have*" In *LAMBDA* 21. Institute for Datalingvistik, Copenhagen Business School.

Kobukata, Y. 2004. "The Definiteness Effect of *Have* and Other Possessive Verbs" *Tsukuba English Studies* 23, 27-42. University of Tsukuba.

小深田 祐子. 2005. 「所有動詞の have および獲得動詞の定性効果について」『関西言語学会第 29 回大会研究発表論文集』 (*KLS* 25), 238-248.

Milsark, G. 1974. *Existential Sentences in English*, Ph. D. dissertation, MIT.

Moltmann, F. 1995. *Intensionality*, ms, UCLA.

中右 実.1989.「既定性概念再考」筑波大学講義ノート.

Partee, B. H.. 1999. "Weak NP's in HAVE Sentences" In J. Gerbrandy, M. Marx, M. de Rijke, and Y. Venema, eds., *JFAK*, CD-Rom, Amsterdam: University of Amsterdam.

依頼の談話に見られる中国語の感謝表現：日本語との対照

谷口龍子
国際基督教大学比較文化研究科博士課程　(ryukota@nifty.com)

1. はじめに

中国語母語話者の発話には、タクシーの運転手に対して、＊「右に曲がってください、ありがとう。」というような感謝表現の使用が見られる。このことから、中国語では聞き手の未来の行為に対して感謝表現が使用されることや、感謝表現が使用される場面に日本語と相違が見られることが推察される。

本稿は、談話完成タスクによるデータと、映画、テレビドラマのシナリオや文字起こしをもとに、中国語のどのような依頼の場面において感謝表現[i]が使用されるのか、またその機能について、日本語と比較し、考察したものである。

2. 先行研究と問題の所在

従来の感謝表現に関する先行研究は、Coulmas(1981)、山梨(1986)、中田(1989)、熊取谷(1993)等、発話行為としての分析が多い。Coulmas（1981）では、日本語の陳謝と感謝の連続性について、英語やドイツ語と対照しながら述べている。中田(1989)ではシナリオのデータをもとに、日本語と英語の陳謝と感謝の表現や行為の対象について分析している。

しかしながら、これらの先行研究は、日本語と英語などヨーロッパ言語との対照研究が多く、筆者の管見では、中国語の感謝表現に関する研究はほとんど見当たらない。また、先行研究では、Searle(1969)、山梨（1986)に挙げられている感謝の適切性条件である命題内容条件（P はxによる過去の行為）を前提にしているが、前述したように、中国語では、未来の行為に対して感謝表現が使用される可能性があり、この命題内容条件に適合しない[ii]。さらに、従来の研究では感謝表現の機能に関する言及は少ない。

したがって、本稿では中国語の感謝表現について、主に次の点から分析を行うことにした。

- 未来の行為に対する感謝表現の形式にはどのようなものがあるか。
- 依頼の下位分類によって、感謝表現の使用の有無が異なるかどうか。
- 話し手と聞き手の関係により、感謝表現はどのような機能として働くか。

3. 依頼の下位分類

1.で述べたように、中国語母語話者は、運転手に行き先を告げるなどの依頼要求に感謝表現を添える場合はあるが、本を借りるなどの依頼では感謝表現は使用しない。したがって、依頼の種類によって感謝表現の使用が異なることを予想し、中道・土井(1995)を参考に、依頼行為を行為遂行の義務性の相違により次のように下位分類した。

「指示」―話し手が当然の資格や権限を持って行為を遂行する立場にあり、聞き手もその行為を行うべき立場にある。例：客がタクシーの運転手に行き先を告げる行為やレストランで客が従業員に注文する行為

「依頼」[iii]―依頼行為を実現するかしないかが聞き手の意向により決められる。例：友人にノートを貸してくれるように頼む。

「依頼」に近い「指示」－聞き手は行為を行うべき立場にあるが、主に話し手の過失により聞き手の負担を大きくさせる行為。例：テーブルに水をこぼし、店員に拭くことを頼む。

4. 分析データ

分析データは、次の二種類である。中国語は台湾地域で使用されるものに限定した。

データＡ：台湾または日本在住の大学生各 50 名ずつを対象に行った談話完成タスクデータ

データＢ：映画・テレビドラマのシナリオや台詞の文字起こし[iv]（感謝表現を含む談話 164 件（中国語）、133 件（日本語））

その他、数名のインフォーマントによるコメントも参考にした。

5. 分析結果と考察

5.1 データＡ

表 1）からわかるように、中国語のデータＡには、依頼表現につづく話し手の感謝表現の使用が随所に見られた。依頼表現に続く感謝表現の言語形式は、「謝謝」のみであった[v]。依頼の下位分類別による使用頻度は、「指示」表現に続く感謝表現の使用が最も多く（項目①21 件、項目④19 件、項目②17 件）、「依頼」に近い「指示」（項目③6 件、項目⑤8 件）や「依頼」（項目⑥8 件、項目⑦9 件、項目⑧6 件、項目⑨8 件）では使用頻度が減少していた。

表 1） データＡに見られた依頼表現につづく感謝表現の総件数（中国語）

項目	下位分類	項目	件数/50	例
①	「指示」	タクシーの運転手に行き先を告げる。	21	「台北車站、謝謝」（台北駅、ありがとう）
②	「指示」	右に曲がる指示	17	「右轉、謝謝」（右に曲がって、ありがとう）
③	「依頼」に近い「指示」	運転手に対して財布を忘れたので、家に戻ってもらう指示をする。	6	「（理由）可以請你戴我回家拿嗎? 謝謝」（家にお金を取りに戻ってもいいか。ありがとう）
④	「指示」	夜市の店でパパイヤミルクを注文する。	19	「一杯木瓜牛奶、謝謝」（一杯のパパイヤミルク、ありがとう）
⑤	「依頼」に近い「指示」	夜店でコーラをこぼし店員に拭くように頼む。	8	「請幫我擦一下、謝謝」（ちょっと、拭いてください。ありがとう）
⑥	「依頼」	親しい友人に授業のノートを借りる。	8	「筆記本、借我、謝謝」（ノート貸して。ありがとう）
⑦	「依頼」	大学の後輩にノートを借りる。	9	「可以借我筆記本? 謝謝啦」（ノート借りてもいい？ありがとう）
⑧	「依頼」	大学の学長に留学のための推薦状を頼む。	6	「可以麻煩你寫推薦信嗎? 謝謝」（推薦状を書いてもらえますか？ありがとう）
⑨	「依頼」	同じ年代の知らない人に携帯電話を借りる。	8	「可不可以借行動電話我一下、謝謝」（携帯を借りることができますか？ありがとう）

一方、日本語の依頼表現につづく感謝表現は0件であった。

5.2.　話し手と聞き手の関係と感謝表現の機能（データB）

依頼談話における感謝表現の件数が中国語には11件見られ、日本語では0件であった。話し手と聞き手の関係により、感謝表現の機能が異なり、次の3種類に分類された。

①　丁寧度を高めるための感謝表現

これは「指示」表現に続いて添えられるもので、丁寧度を高めるために使用されるものと思われる。例1)は、飲食店で従業員にコップを持ってくるように客が頼む場面である。

例 1) “麻煩來一個杯子、謝謝”（「悪いけどコップ持ってきて、ありがとう。」）
——「流星花園」

データAの項目①②④に見られる感謝表現も同様のものと考えられる。

②　「依頼」の談話における聞き手の依頼受諾に対する感謝の表明。

依頼内容が実行される前に聞き手が依頼を受諾した段階で感謝が表明される[vi]。例 2)は、コンサートのチケットを買うために並んでいたところ、現金が足りないことに気づき、お金を下ろしに行く間、順番を取っておいてもらうように後ろの女性に頼む場面である。

例 2) 男“小美女,我錢不夠我去找個提款機。那你幫我佔一下位子,我馬上回來好不好。”（お金を下ろしてくるから順番を取っておいてもらえる？すぐ戻るから）
女“(うなずく)”
男“謝謝,好。等我一下喔”（ありがとう。ちょっと待っていて ）—映画「薫衣草」

日本語の場合、このような場面では、「すみません」などの陳謝表現が使用される。例3)は、映画の撮影に入る前に、宣伝部員が監督に俳優の写真撮影を頼む場面である。

例 3) 宣伝部員「あ、すいません。記者さんたちが、セットで恵子さんの写真撮りたいって言うんですよ。いいですか？今」（省略）
監督　「やっちゃいなさいよ」
宣伝部員「すいません」　——『LAST SCENE』

③　「依頼」の遂行を強制するストラテジーとしての感謝表現の使用

依頼を断りにくくさせるために、聞き手が返答する前に、話し手が感謝表現を発話する場合がある。例 4)は、勤務先のフラワー・ガーデンが売却されることを知り、持ち主の息子に対して、売却しないように父親を説得することを頼む場面である。

例 4)　梁以薫（人名）“記得幫我跟你爸說喔。”(お父さんに言うのを忘れないでね)
経営者の息子　“…”
梁以薫　“謝謝。”（ありがとう）　——映画「薫衣草（ラベンダー）」

この場合、聞き手の息子が自分に好意を持っていることを話し手は知っており、力関係は話し

手のほうが上と言える。依頼に対して聞き手の返答が行われる前に話し手が使用する感謝表現は、①の客と従業員、③の好かれる者と好く者というように、力関係が上の者から下の者へ使用される場合が多く、その場合依頼を強制するストラテジーとして働くと言えよう。

6. おわりに（まとめと今後の課題）

以上のような考察から、次のような結果が得られた。中国語では、日本語と異なり、未来の行為である依頼行為に対し「謝謝」という感謝表現が使用されることがある。「指示」に続く感謝表現は丁寧度を高める役割を持ち、「依頼」に続く感謝表現は、強制のストラテジーとしても使用される。また、聞き手が「依頼」を受諾した段階において話し手が感謝を表明する点でも日本語と異なることがわかった。

今後は、自然談話やロールプレイなどでデータを収集した後に、依頼時に感謝表現を添える意図などについてフォローアップ・インタビューを行う予定である。また、話し手と聞き手の年齢や力関係など社会言語学的要素についても詳しく考察したいと思っている。

謝辞：日本語用論学会第8回大会のワークショップ発表において、京都外国語大学彭飛先生、神奈川大学彭国躍先生、関西外国語大学余維先生、並びに天理大学前田均先生から貴重なコメントをいただきました。ここに御礼申し上げます。

引用文献：「OUT」鄭義信作　『'02年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編
映画「薫衣草（ラベンダー）」、テレビドラマ「流星花園」

主要参考文献

Coulmas, F. 1981. Poison to Your Soul: Thanks and Apologies Contrastively Viewed.In F. Coulmas(ed.), *Conversational Routine*. The Hague: Mouton

三宅和子.1994.「「詫び」以外で使われる詫び表現—その多様化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係—」『日本語教育』82号

中田智子. 1989.「発話行為としての陳謝と感謝」『日本語教育』68号

熊取谷哲夫 .1993.「発話行為対照研究のための統合的アプローチ—日英語の「詫び」を例に—」『日本語教育』79号

中道真木男・土井真美.1995.「日本語教育における依頼の扱い」『日本語学』10月号

Searle,J.R. 1969.*Speech Acts: An essay in the philosophy of language* .Cambridge Univ.Press.

山梨正明.1986.『発話行為』新英文法選書12　大修館書店

---

[i] 本稿では、直接表現のみを考察対象とした。

[ii] 中田(1989)では、英語の依頼表現に使われる感謝表現が6件（400件中）挙げられているが、後述のデータに見られるように中国語のほうがその使用頻度が格段に高いことがわかる。

[iii] 以後、この狭義の依頼を括弧つきの「依頼」とする。

[iv] 映画やシナリオは、シナリオ作家協会の選定など比較的良質とされる作品を選んだ。

[v] 他に「謝謝」に感嘆詞や助詞を加えた「謝謝喔」や「謝謝啦」も見られた。

[vi] 聞き手の依頼受諾に対して話し手が「我先説謝謝你」と言う場合もよくあるというお話を台湾大学の陳明姿先生から伺った。

英語法助動詞の否定と話し手の捉え方
—need not と may not を中心として—

長友俊一郎
（関西外国語大学非常勤講師）

1. はじめに

「義務的モダリティ」を表す need not と may not は、モダリティを否定する（ことがある）点において類似点を持つ (cf. Coates 1983: 46; Palmer 1990[2]: 38-39, 75; 1995: 455-457; De Haan 1997: 60; Duffley 1997: 69-70; Swan 2005[3]: 335; Leech 2004[3]: 93-96)。De Haan (1997: 60)は、英語法助動詞、否定辞、命題を、それぞれ、MOD, NEG, p と表示し、モダリティと否定の作用域の観点から(1)のように形式化している。(1a)の(MOD(NEG(p)))は、モダリティが否定の作用域の外にあり、命題が否定されていることを表している。(1b)と(1c)における(NEG(MOD(p))) は、モダリティが否定の作用域の内にあり、モダリティが否定されていることを表示している。

(1) a. You *mustn't* come tomorrow. (MOD(NEG(p)))
b. You *needn't* come tomorrow. (NEG(MOD(p))
c. You {*may not/can't*} come tomorrow. (NEG(MOD(p)))[1]

(De Haan 1997: 60)

また、「許可」という概念が関与する点においても、両者は共通点を持つ。たとえば、(2a)と(2b)における need not と may not は、

(2) a. It's OK—You *needn't* pay for that phone call.
b. May I borrow the car? No, I'm afraid you *may not*.

(Swan 2005[3]: 318, 343)

それぞれ、電話代を払わない許可を与えることと、車を借りる許可を拒否することを表すと解される (Swan 2005[3]: 318, 342)。

本稿では、「need not 構文」と「may not 構文」を、前提とされる状況に対する話し手の「捉え方」(construal)の観点から分析し、両者の違いを提出するとともに、need と may の用いられる環境の違いや、need not と may not の表出する力の違いについてもあわせて論じてみたい。

2. Akatsuka (1985): 状況に対する話し手の態度

Akatsuka (1985)は、条件文の if 節内の状況に対する話し手の態度として、(3)を提示している (cf. Haiman 1974: 357; Dancygier and Sweetser 1996: 87-88; Dancygier 1998: 32; Declerck and Reed 2001: 235; 澤田 2004: 21-22, etc.)。本稿で言う、「捉え方」は、以下のような、命題に対する話し手の態度のことである。

(3) a. know (exist x): "I know that this is the case."
b. get to know (exist x): "I didn't know this until this moment!"
c. not know (exist x): "I don't know if this is the case."
d. know not (exist x): "I know that this is not the case."

(Akatsuka 1985: 625)

次の例を考えてみよう。

(4) A: I am going to the Winter LSA.
B: If you are going, I'm going, too.

(Akatsuka 1985: 628, 635)

(4)は、B が if 節内の状況に対して、get to know (exist x)という態度をとっている事例である。B にとって、if 節内の状況は、発話の直前に知った「新しく知った情報」(newly-learned information)となっている。なお、ここでの「あなたが行くこと」は、「非現実」(irrealis)の領域に属するものであると考えられている。

この新しく知った情報は、(5)で例示されるように、

(5) [B は(4)の会話の後に彼の妻に電話で報告する]
I'm going to the Winter LSA because Takeda (= Speaker A) is going.

(Akatsuka 1985: 635)

非現実の領域から「現実」(realis)の領域へ移行し、話し手が know (exist x)という態度を表す状況となるとされる。

3. need not 構文と捉え方

need not 構文の場合、話し手が know (exist x)と捉える状況が前提となり得る。次の例を考えてみよう。

(6) The Captain was saying to the Sub-lieutenant, "I want to know everything she can tell us about the Maxwell girl, family, friends, habits, etcetera—everything. You *needn't* translate, I can follow you."

(M. Nabb, *Death in Springtime*) [BNC]（斜体筆者）

ここでの need not 構文は、「海軍中尉が、通常、通訳をする」という前提を受けるものとして解釈することができる。この前提を、話し手が know (exist x)と捉えることは、(7)のように、

(7) You *needn't* translate just for today.

「(いつもは通訳をしてもらっているけれども) 今日に限っては」といった表現が後続可能であることから了解されよう。

また、need not 構文の場合、know (exist x)の x は、「否認」される対立概念に限られるようである。このことは、この構文には、(8)と(9)のように、「よけいなことをしてしまった／してしまっている」というニュアンスのある「need not＋完了不定詞／進行形構文」があることなどから裏づけられる (澤田 2000: 89)。

(8) "I won't stay to be laughed at!" he cried, and was about to run away, when Catherine caught hold of his hand.
…
She looked worriedly at her hands, and her new dress.
"You *needn't* have touched me!" he said, pulling away his hand.

(C. West, *Wuthering Heights*) [BNC]（斜体筆者）

(9) Acknowledging that you are stressed … I have already mentioned that working on a fixed-pace job is more stressful than working on an unpaced job. Machines take no account of human needs, and you *need not* be working on a factory assembly line to feel as though you are. Bosses who work to their own pace with no thought of how long it will take you to do something are a common complaint.

(J. M. Atkinson, *Coping with Stress at Work*) [Wordbanks]（斜体筆者）

さらに、次の例を見られたい。

(10) I {**needn't/don't have to*} queue for my bus. I get on at the terminus.

(Thomson and Martinet 1986[4]: 144)

(10)では、話し手は、「私はバスに乗るのに並ばなくていい」という対立概念の必要のない一般的／習慣的な現状を述べているのであって、「並んでバスを待つ」ということを否認したものではないため、need not の使用は不適格になると考えることができる。

以上から、(11)のようにまとめておきたい。

(11) need not 構文の前提は、話し手にとって know (exist x)と捉えられる状況になり得、x は否認される対立概念となる。

法助動詞の need は、主として、否定文、疑問文などの「非断言的」(non-assertive)な環境でしか用いられない。これは、(11)のように、need not 構文には否認の言語行為が関与し、否認には、当然、否定性が内在するためであると考えられる (澤田 2000: 14)。

4. may not 構文と捉え方

まず、次の事例を考えてみよう。

(12) "May I … may I sit down?"
"No, you *may not*, as you put it, until you tell us what all this is about."
(C. Cookson, *The Wingless Bird*) [BNC]（斜体筆者）

(12)では、直前の発話によって含意される、「座りたい」という、聞き手の願望の内容が前提となっている。つまり、(12)において、前提は get to know (exist x)と捉えられる状況となっているのである。

may not 構文は、前提が know (exist x)と捉えられる場合には用いられないと思われる。事実、前出の(6)において、may not の使用は不適格となる。

(13) *You *may not* translate, I can follow you.

(12)のような場合の get to know (exist x)の x は、通常、否認される願望の内容となるようである。この点に関して、Talmy (2000: 441)は、may not の「力のダイナミクス」(force dynamics)を以下のように論じている。

... the main force factor is an individual's desire to perform the indicated action and the opposing factor is an authority's denied permission.
(主な力の要因は、表された行為を実行するある個人の願望であり、それに対抗する力は権力による否認である。)

一方で、may not 構文には need not 構文とは対照的に、may が「客観的なモダリティ」 (cf. Halliday 1970; 2004[2]; Lyons 1977; Verstraete 2001)を表出し、否認のニュアンスが看取されない事例も観察される。たとえば、(14)の場合、

(14) Adolescents under the age of 18 *may not* work in jobs that require them to drive.
(*COBUILD*[4])

単に、現在の規則を述べており、対立概念／願望の内容の有効性／正当性への否認は遂行されていないことが読み取れる。また、(15)と(16)が示すように、

(15) You {**may not/needn't*} have touched me!
(16) You {**may not/need not*} be working on a factory assembly line to feel as though you are.

「よけいなことをしてしまった／してしまっている」を含意する「may not＋完了不定詞／進行形構文」(may ＝「許可」) はない (cf. Declerck 1991: 373-374)。

このことは、may が「断言的」(assertive)なコンテクストでも用いられることが可能であることを予測すると思われるが、よく知られているように、事実はその通りである。

ここまでの議論に基づいて、(17)の一般化を提出しておきたい。

(17) may not 構文の前提は、get to know (exist x)と捉えられる状況となり、x は否認される願望の内容となる。また、may not 構文によって否認が行われない場合もある。

5. おわりに

本稿では、(i)need not 構文と may not 構文には、前提に対する話し手の捉え方の違いがあること、(ii)may not 構文では、need not 構文と違い、必ずしも否認が行われるとは限らないこと、を論じた。

need not と may not の力の強さを比較した際、前者が後者に比べて強い力を表出するとされる (De Haan 1997: 60)。(11)から示唆されるように、need not は、現実に何かを行っている／行う人物に対して、その行為の実現の不履行を促す力を表す。これに対して、may not は、(17)のように、否認が行われる場合、一時的にある行為を望んでいるのみの人物に対して、当該の行為の実現の不履行を促す力を表す。このように両構文を分析することによって、前者の表す力の方が後者の表す力より強いものになる理由を説明することができるようになると思われるが、十分な議論に関しては、他日を期したい。

---

[1] may not の場合、モダリティが否定の作用域の外にあり、命題が否定されることもある (De Haan 1997: 64)。

参考文献

Akatsuka, N. 1985. "Conditionals and the Epistemic Scale." *Language* 61: 3, 625-639.

Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.

Dancygier, B. 1993. "Interpreting Conditionals: Time, Knowledge, and Causation." *Journal of Pragmatics* 19, 403-434.

Dancygier, B. 1998. *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge, and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dancygier, B. and E. Sweetser. 1996. "Conditionals, Distancing, and Alternative Spaces." In A. E. Goldberg ed. *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, 83-98. Stanford: Center for the Study of Language and Information.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Declerck, R. and S. Reed. 2001. *Conditionals*. Berlin: Mouton de Gruyter.

De Haan, F. 1997. *The Interaction of Modality and Negation: A Typological Study*. New York: Garland.

Duffley, P. 1994. "*Need* and *Dare*: The Black Sheep of the Modal Family." *Lingua* 94, 213-243.

Duffley, P. 1997. "Negation and the Lexical Semantics of the Modal Auxiliaries *MUST* and *MAY* in English." In P. Larrivee ed. *La Structuration Conceptuelle du Langage*, 69-82. Leuven: Peeters.

Haiman, J. 1974. "Concessives, Conditionals, and Verbs of Volition." *Foundations of Language* 11, 341-359.

Halliday, M. A. K. 1970. "Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English." *Foundations of Language* 6, 322-361.

Halliday, M. A. K. 2004[2]. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold.

Lakoff, R. 1972. "Language in Context." *Language* 48, 907-927.

Langacker, R. W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Vol. II). *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Leech, G. 1987[2], 2004[3]. *Meaning and the English Verb*. Tokyo: Hituji Shobo/London: Longman.

Lyons, J. 1977. *Semantics*. (Vol. II). Cambridge: Cambridge University Press.

Palmer, R. F. 1990[2]. *Modality and the English Modals*. London: Longman.

Palmer, R. F. 1995. "Negation and the Modals of Possibility and Necessity." In J Bybee and S. Fleischman eds. *Modality in Grammar and Discourse*, 454-471. Philadelphia: John Benjamins.

Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

澤田治美 2000.「二つの NEED(上/下)」『英語青年』146: 1-2, 45-49, 88-91.

澤田治美 2004. 「仮定法の意味論：法助動詞と仮想世界」『英語語法研究』11, 17-30.

Swan, M. 2005[3]. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: University of Cambridge Press.

Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. (Vol.I). Concept Structuring Systems. MIT Press.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1986[4]. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Verstraete, J. C. 2001. "Subjective and Objective Modality: Interpersonal and Ideational Functions in the English Modal Auxiliary System." *Journal of Pragmatics* 33, 1505-1528.

「同時通訳における訳出の妥当性の基準：定名詞句を手がかりに」

南津佳広（神戸市外国語大学大学院）

１．はじめに

同時通訳を精査していると、定名詞句“NP_1 of NP_2”の訳出をめぐって面白い現象が見られる。後述するように、同時通訳という厳しい時間の制約を考えるならば、字義通りに対応する「NP_2のNP_1」との訳出がまず思い浮かぶかも知れない。だが、実際には通訳者は下記の（１）や（３）にて取り上げているように、原発言とはずれた訳出をしばしば行っている。

（１）

(SL)[1]	...Now, there are some problems with this claim... If you say the heart and soul of America is found in Hollywood, I'm afraid you are not ***the candidate of conservative values*** (applause)...
(TL)[2]	･･･でもこの主張には、ちょっと問題があります。...アメリカの精神と魂がハリウッドにあるというのであれば、これは保守的な価値観を代弁する候補であるとはいえません･･･

[# 1]

（２）想定される訳出候補
　(a) 保守的な価値観の候補
　(b) 保守的な価値観を代弁する候補

（３）

(SL)	...I think, for example, one might wonder, what will happen if the Shiite majority, ***55% of the Iraqis who are Shiite***, decide that they want to have a fundamentalist Islamic state whether or not they have the freedom to do that...
(TL)	･･･もし、シーア派の多数派、55%を占めるシーア派の人たちが、原理主義的なイスラム国家を作りたいと考えたらどうなるでしょうか･･･

[# 2]

（４）想定される訳出候補
　(a) 55%のシーア派のイラク人
　(b) 55%を占めるシーア派の人たち

（１）では通訳者は“the candidate of conservative values”を、通訳者が文脈情報を手がかりに補足して(2b)の「保守的な価値観を代弁する候補」と訳出している。（３）でも“55% of the Iraqis who are Shiite”を、通訳者が文脈情報を手がかりに調整して（4b）の「55%を占めるシーア派の人たち」と訳出している。

本稿では、通訳者が定名詞句を文脈情報を手がかりに補足・調整して訳出している現象を取り上げる。そこで、なぜ通訳者はその訳出を選択したのかという点から、これらの事象を検討する手掛かりとしたい。

２．同時通訳における訳出をめぐって

本稿で扱った同時通訳とは、テレビの２ヶ国語放送の副音声によって放映される通訳を指し、そのなかでも通訳者が事前に原稿などで準備していない、いわば「ぶっつけ本番」で行う同時通訳を取り扱う。そこで、同時通訳のスクリプト作成手順としては音声編集ソフト“Digi on sound”を用いて、小数点第２位の時間のタイミングでSLに対してTLの出だしの位置あわせを行った並列表記のものを作成した。文字の制約から、SLとTLのタイミングを厳密にあわせることはできないが、相対的な時間関係を知ることができる[3]。

さて、通訳の本質は起点言語の内容を訳出環境に見合うように目標言語で再表現することにある（Johns 1998, Lederer 2004, Pöchhacker 1995, Seleskovitch & Lederer 1995, Setton 1999 参照）。さらに同時通訳ではできるかぎり早い段階でそのままに伝えることが求められる。ただし、周知の通り、それは言語間の表面的な置き換え“trans-code”ではなく、原発言者の伝達意図を目標言語で再表現する“re-verbalization”という作業が含まれることに注意しなくてはならない（Lederer 2004, Seleskovitch & Lederer 1995 参照）。

そして、同時通訳者は原発言や自分自身の訳出のモニタリングを行い、たまに修正しながら、センテンスより小さな分節単位で漸増的 incremental に発話処理を進める（Gerver 1976, Setton1999）。分節単位とは複雑な概念であり、本稿の目的からその単位に関する詳細な議論には立ち入らないが、ここでは Lederer（1978; 2004）のいう「概念化できる単位」を手掛かりにする。つまり、entity, relation, property の内部特性のうちのいずれか、もしくはすべてを満たしている心的表示を獲得でき、それが目的言語にて変換可能“translatable”と判断される単位で随時言語変換しているものと解釈する。

本稿にて訳出のスタイルの妥当性を観察するにあたり、定名詞句に的を絞っている目的のひとつはこの「概念化」という中間プロセスを仮定することにある。産出局面の分析を複雑にしている原因に、発話理解の分析とは異なり、分析するための要素が観察可能な発話ではなく、観察不可能な意図などを含めた心的表象であることがあげられる。そのため、「どのように理解していると想定されるか」のように演繹的な分析を行うことはなかなか難しい。さらには、入力の単位が訳出の単位と必ずしも一致しているとは限らないこともある。解釈はできていても、目標言語にて対応する適当な表現が検索・想起できなかったり、時間の制約によってやむを得ず訳出でき

ないこともあるからである。

だが、原発言の定名詞句を手掛かりにすることは、定名詞句そのものが構成化された概念として原発言にて提示されていることを前提にすることができる。したがって、解釈段階でどのような心的表象を構築し、それをもとにした想定される訳出候補はどのようなものかあげられるかなども演繹的に述べることができるのである。

ところで、同時通訳では先述したようにセンテンスより小さい分節単位ごとに変換処理を行う。そのため、Shlesinger（1995）が述べるように言語の組み合わせに関係なく訳出表現は明示的になる傾向が高くなる。Barik（1997）は同時通訳者が明示化に着目して、４つのタイプに分類を行った。しかし、どのようにリアルタイムで処理した結果そのような訳出になったのかの観点が欠けている。一方、Setton（1999）によれば、同時通訳者は聞き手が通訳者と同じような関連性理論のいう「認知効果」を得られるように、通訳者独自の判断で埋め合わせ compensation を「二次的語用論プロセス」にておこなうものと示唆している。問題は、この「二次的語用論プロセス」で、Setton の提示する同時通訳プロセスの「産出局面」で行うものとしているようだが、どのような状況とタイミングで埋め合わせを行うのかが不明である。さらには、通訳者と同じような「認知効果」を聞き手が得られるように訳出すると結論づけるのも尚早であろう。なぜなら、先述したように入力と訳出の単位が一致するのはひとつの可能性にすぎない。また、同時通訳は翻訳とは異なり、起点言語と目標言語を恒常的に比較することは不可能である。そのため、ミクロレベルでの漸増的な処理展開に考慮に入れるなら、それぞれの訳出可能な単位で発話解釈段階にて得られた認知効果を同じようにもたらすことが可能なのかとの疑問が残る。そこで、以下では、これらの問題点を解決すべく、同時通訳データから定名詞句“the NP_1 of NP_2”をとりあげ、訳出のタイミングと訳し方を検討する。

３．定名詞句の訳出

本稿にてとりあげた同時通訳は、NHK-BS にて放映された英日間の「生の」同時通訳３本である。そこから同時通訳データから定名詞句“the NP_1 of NP_2”を抽出し、訳し方にと訳出のタイミングを観察した。南津・西村（2005）では、英日の「生の」同時通訳にあらわれる定名詞句“the NP_1 of NP_2”を対象に、NP_1 と NP_2 の関係をどのよう中井釈を反映しているのかとの点から、訳出のパタンを検討した。その結果、（５）にあげる３つの訳出パタンにまとめた。

（５）(a)「形式的対応型[4]」：“the NP_1 of NP_2”－「NP_2 の NP_1」
　　(b)「意味的対応型」：“the overthrow of Saddam Hussein”－「サダムフセインを打倒する」
　　(c)「語用論的調整型」：“the candidate of conservative values”－「保守的な価値観を代弁する候補」

各パタンの出現頻度を調べた結果、同時通訳データではこの３つの訳出パタンがさまざまな場面で生起しており、顕著な差はないことがわかった。そのため、原発言での定名詞句の統語的な出現位置から、各パタンを付与しているのではないといえる。

次に、通訳者の処理負担の観点からタイムラグを調べた結果、(５a)＞(５b)＞(５c)[5]となったことから、同時通訳者は処理負荷の飽和を防ぐために処理労力のかかるパタンからできるだけはやく訳出している様子が伺える。さらに、タイムラグの最も大きい「形式的対応型」に関しては２つの可能性を示している。ひとつは、処理負荷が低いために周辺の情報の訳出することに注意を向けているかもしれないことである。ふたつ目は、「形式的対応型」、つまり、「NP_2 の NP_1」のパタンの訳出候補を想起しつつ、聞き手に配慮して「意味的対応型」や「語用論的調整型」の訳出候補を検索し、思いつかなかったので結果として「形式的対応型」で折り合いをつけている可能性がある。本稿で取り扱うデータは全てテレビにて放送されるものである。そのため、視聴者の年齢層と知的関心度にも幅があるため、できるだけ視聴者の理解に負担をかけないような平易で明瞭な訳出が求められている。さらには、通訳者と視聴者は空間的に隔離されており、会議などの通訳環境とは異なり、通訳者は視聴者の反応を確かめながら通訳を行うことはできない。したがって、通訳者は余計に聞き手へ配慮しながら通訳しているのである。もし、後者の可能性が正しいとすれば、ある定名詞句“the NP_1 of NP_2”の解釈に対し、３つのパタンからひとつの訳出候補が付与されるだけではなく、「形式的対応型」と「意味的対応型」、そして「形式的対応型」と「語用論的調整型」は競合して想起されることもあるといえよう。

これらのパタンとタイミングの結果を踏まえるなら、図１のようにコストと聴衆への志向の２つの変数を軸にして、訳出のパタンを構造化できる。

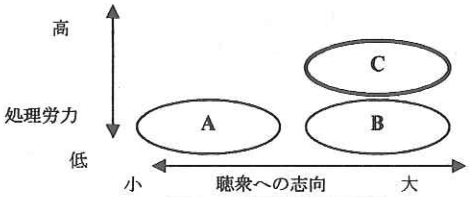


図１．訳出の２要因モデル

これはあくまでも相対的なものだが、南津・西村にあげた３つのパタンが複雑に生起する様子を、２つの要を軸にすることで簡潔にまとめられる。A には「形式的対応型」があてはまり、B には「意味的対応型」があてはまる。そして、C には「語用論的調整型」があてはまる。では、もし複数の訳出候補が想起される場合には、どのようにして競合する候補からひとつに絞り込み、その他のものを却下しているのか。以下では C のカテゴリーを選択する場合に焦点をあてて分析を進める。そして、その際にはどのような基準で判断しているのだろうか。

これまで述べてきた同時通訳の特徴を踏まえるならば、リアルタイムで行っている言語変換を（６）にあげるような同時通訳独自の妥当性の判断基準を仮定できる。

（６）同時通訳における訳出の妥当性の基準
同時通訳者は、処理労力の低い順に想起される訳語候補の中から妥当と判断されるものを訳出する。

問題となるのが妥当性である。限られた処理容量の中で、負荷が飽和になるのを防ぎながらどのように聞き手を意識して訳出しているのか、処理労力と利益の関係から次のように定義できる。

（７）妥当性
(a) 訳出までの全体的な処理労力を低く抑えることができる。
(b) 聴衆の能力と優先事項に見合う見込みがある。

次節では、この仮説に基づき、実際の同時通訳データでの定名詞句の訳出をめぐる分析を進める。

４．分析

まず、（８）をみていただきたい。

（８）（＝１）

(SL)	...Now, there are some problems with this claim... If you say the heart and soul of America is found in Hollywood, I'm afraid you are not ***the candidate of conservative values*** (applause)...
(TL)	･･･でもこの主張には、ちょっと問題があります。...アメリカの精神と魂がハリウッドにあるというのであれば、これは保守的な価値観を代弁する候補であるとはいえません･･･

[# 1]

（８）のデータは、2004 年のアメリカ大統領選における、当時のブッシュ候補による共和党の大統領候補の指名受諾演説を同時通訳付きで放映したものである。原発言の“the candidate of conservative values”に対して，この同時通訳者は「保守的な価値観を代弁する候補」と訳出しているが、「代弁する」に相当するものは原発言にはない。「保守的な価値観の候補」と訳出したら、確かに“the candidate of conservative values”の処理に向けるコスト、訳出候補の想起と産出の両面でも労力はかからない。しかしこの通訳者は「代弁する」を挿入して訳出している。

テレビの視聴者は必ずしもアメリカ事情に明るい人が多いとは限らない。もし、字義通りに「保守的な価値観の候補」と訳出したら、誰を指示しようとしているのかが曖昧となってしまうため、視聴者に負担をかけないためにも“the NP_1 of NP_2”の解釈を特定化して TL を付与したと考えられ、「形式的対応型」は却下される。

では、なぜ「代弁」と補足できたのか。言語的手がかりとして、“the candidate”と“conservative values”の間には、何の“candidate”かについての答えが“conservative values”で与えられる関係が考えられる。しかし，所属政党などを直接表してはいない“conservative values”では“the candidate”の外延を特定することできない。そこで文脈を参照しなくてはならない。まず、ブッシュ候補は直前で対峙する当時の民主党のケリー候補の発言を揶揄して，“My opponent recently announced that he is the conservative と述べており、また、民主党はリベラルな支持者が多く、ハリウッドの民主党の支持者が資金援助を行っていることも有名である。これらを踏まえると、

a. 民主党はリベラルな性格がある.
b. ケリーは民主党の大統領候補指名者である.
∴ c. ケリーは保守的な性格を代表する大統領選指名候補ではない

と解釈して、「代弁する」と付け足したに違いない。こうすることで、ブッシュがケリーを激しく批判している意図を視聴者に充分伝えることができる。

（９）（＝３）

(SL)	...I think, for example, one might wonder, what will happen if the Shiite majority, *55% of the Iraqis who are Shiite*, decide that they want to have a fundamentalist Islamic state whether or not they have the freedom to do that...
(TL)	･･･もし、シーア派の多数派、55%を占めるシーア派の人たちが、原理主義的なイスラム国家を作りたいと考えたらどうなるでしょうか･･･

[# 1]

（９）の同時通訳は、2003 年の３月の対イラク攻撃を経て、イラクや中東地域の戦後の課題について、アメリカの保守系シンクタンク・安全保障センター所長とイギリス王立防衛問題研究所の所長（元海軍提督）らを交えて

の、衛星討論を同時通訳付きで放映したものである。ここでは、原発言の“55% of the Iraqis who are Shiite”に対して、この同時通訳者は「55%を占めるシーア派の人たち」と訳出しているが、（8）と同様に「占める」に相当する原発言はない。想起と産出の両面ともに労力をかけずに形式的に対応させて「55%のイラクのシーア派」と訳出することもできたはずだが、なぜ労力のかかる、「55%を占めるシーア派の人たち」との訳出を行ったのか？

確かに、「55%のイラクのシーア派」との訳出は通訳者の処理労力を低く抑えることができるが、視聴者にとっては、「55%」と「イラクのシーア派」の関係から、(a)イラク人シーア派の中の 55%、(b)イラク人の 55%のシーア派といった複数読みが可能であり曖昧である。また、この通訳者は直前で“the Shiite majority”を受けて「シーア派の多数派」と訳しているために、視聴者は「イラク人シーア派の中の 55%」と誤った解釈する可能性が高くなってしまう。そこで文脈の参照する必要がある。

まず、イラクでは多数派のシーア派が少数派のスンニ派に抑圧されてきた経緯があり、この討論が行われた当時は、連合軍による実質上の占領状態にあったが新政権はまだ樹立されておらず、国際法上は終戦とはなっていなかった。そこで、連合軍はイラクで民主化を進めるにあたり、数の上で有利となる多数派のシーア派をなんとかして味方に取り込んで、新政府を擁立しようとしていた。このことを踏まえると、この通訳者は、聞き手が直前の「シーア派の多数派」を受けて、「イラク人シーア派の中の 55%」と解釈をしないように、あえて「55%を占めるシーア派の人たち」とすることで、通訳者自身が修正していることが伺える。

5．まとめ

本稿では、同時通訳における定名詞句の訳出を対象にして、どのような判断基準で妥当性の評価を行っているのかについて分析を行った。今後の課題は山積しているが、特に（6）、（7）に提示した仮説を正当化するには、その根拠となるデータをさらにふやさなくてはならない。同時通訳データの性質上、対訳関係が原発言を最大限反映しており、通訳者の癖を排除するためにも、特定の通訳者のパフォーマンスを長期的に観察して、さらに良質なデータを揃えなくてはならない。

---

[1] SL：起点言語（source language）

[2] TL：目標（訳出）言語（target language）

[3] ただし、本稿では紙幅の関係上、SL と TL に分けて表記する。

[4] 形式的対応型と意味的対応型の区別は難しい。南津・西村（2005）では、SL の言語形式（表面な形式）に対して TL 語彙を付与しているか、SL の字義通りの解釈に対して TL を付与しているかで区別した。

[5] 南津・西村（2005）をまとめると以下のようになる（タイムラグとは当該の SL を聴取し始めてから、対応する TL を訳し始めるまでの時間差）。

訳出パタン（頻度）	「形式的対応」（39.8%）		「意味的対応」（32.1%）		「語用論的調整」（28.1%）	
タイムラグ	NP_1	NP_2	NP_1	NP_2	NP_1	NP_2
平均（秒）	9.03	7.59	3.23	1.66	2.17	0.83

References

Barik, H. C. 1997. “A Description of Various Types of Omissions, Additions and Errors of Translation Encountered in Simultaneous Interpretation.” In S. Lambert & B. Moser-Marser (eds.) *Bridging the Gap: Empirical Research in Simultaneous Interpretation*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins, 121-138.

Gerver, D. 1976. “Experimental Studies of Simultaneous Interpretation: A Review and Model.” In R.W. Brislin (ed.) *Translation: Applications and Research*. New York: Gardner Press, 165-207.

Herbert, J. 1952. *The Interpreter's Handbook: How to Become a Conference Interpreter*. Geneva: Georg.

Johns, R. 1998. *Conference Interpreting Explained*. Manchester: St Jerome Publishing.

Lederer, M. 1978. “Simultaneous Interpretation: Units of Meaning and Other Factors” In D. Gerver and H. W. Sinaiko (eds.) *Language Interpretation and Communication* New York: Plenum Press, 323-332.

Lederer, M. 2004. *Translation: The Interpretive Model*. Manchester: St Jerome Publishing.

南津佳広・西村友美．2005.「同時通訳におけるリアルタイム訳出の分析：“NP_1 of NP_2”とその訳出をめぐって」船山仲他（編）『同時通訳データに基づく言語理解のミクロ分析』（平成 15-16 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））　研究成果報告書　神戸市外国語大学外国語学部、 17－31。

Minamitsu, Y. 2005. “Acceptability Assessment on Translation of Referring Expression in Simultaneous Interpreting.” *Conference Interpreting and Translation* 7 (2), 29－59.

Minamitsu, Y. and D. Minn. 2006. “Pragmatic criteria for rendering definite NP in Simultaneous Interpreting.” *Conference Papers of 10th Taiwan Symposium on Translator and Interpreter Training: Modelling the process of translation and interpretation*, 277-305.

Seleskovitch, D and M. Lederer. 1995. *A Systematic Approach to Teaching Interpretation*. Translated by Jacolyn Harmer. Washington: The Registry of Interpreters for the Deaf.

Setton, R. 1999. *Simultaneous Interpretation: A Cognitive-Pragmatic Analysis*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Wilson, D. 2003. “Relevance Theory and Lexical Pragmatics.” *Journal of Linguistics/Rivista di Linguistica*, 15(2): 273-291.

「学生を元気にさせる大学」はなぜ変に響くか？

森　　貞（福井工業高等専門学校）
mori@fukui-nct.ac.jp

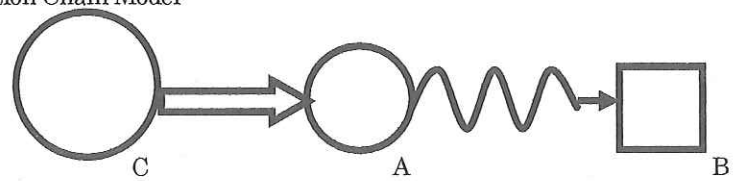
１．はじめに

「学生を元気にさせる大学」という表現を地方新聞の広告記事で初めて目にした時、ある種の違和感を持った。また、その違和感は、この表現を「学生を元気にする大学」に変えることで解消されるはずであるという印象も持つこととなった。本稿では、上記表現に抱いた違和感の原因を探るとともに、「ＡをＢにするＣ」《Ａ＝有情物、Ｂ＝(精神的・肉体的)状態》（あるいは「ＣはＡをＢにする」と「ＡをＢにさせるＣ」（あるいは「ＣはＡをＢにさせる」）の使い分けに関わる要因を解明する。

２．先行研究

「ＡをＢにするＣ」と「ＡをＢにさせるＣ」は意味的に極めて近いと言える（井上和子(1976)、青木伶子(1977)）。

(1) Action Chain Model



上記２つの表現が表す事態は、Action Chain Model では、(1)のような Base を共有するものとして記述される。このことから、両者は交換可能なものとして取り扱えそうであるが、実際にはそうではないという観察がある。

(2) １では、ａのナル文の示す事態を太郎が実現する場合、ｂのスル文よりも、ｃのサセル文の方が適切である(定延 1993:76)。

１．a. 花子が悲しくなる。
　　b. 太郎が花子を悲しくする。
　　c. 太郎が花子を悲しくさせる。

(中略) １ｃの類例としては、次のような文が挙げられる(Sadanobu 1993: 133-120)。

２．a. その気にさせないで。
　　b. 冴子はいっそう顔を赤くさせた。
　　c. 彼がペットを病気にさせた。
　　d. 親父は僕を、自分と同じプロレスラーにさせたかったみたいだね。

（山梨（1995:264））

(2)の例文(特に(1c)(2c))を見ると、ＢがＡにとって〈好ましくない〉状態を表している場合には、スル文よりもサセル文の方が適切であると判断されているように感じられる。

３．仮説提示

前節では、「ＡをＢにするＣ」と「ＡをＢにさせるＣ」は意味的に近似しているということと、Ｂ

がＡにとって〈好ましくない〉状態［Ｂを志向していない状態］を表している場合には後者の使用が適切である可能性が生じる（前者と後者が相補分布をなしているとすれば、ＢがＡにとって〈好ましい〉状態［Ｂを志向している状態］を表している場合には前者の使用が適切である可能性が生じると推論することができる）ことを確認した。

これまでの考察から、「学生を元気にさせる大学」から即座に「学生を元気にする大学」を想起した理由は両者が意味的に近似しているということから説明可能であり、違和感を抱いたのは、Ｂ（元気であること）がA(学生)にとって〈好ましい〉状態を表してからであると考えられる。

ここで、「ＡをＢにするＣ」と「ＡをＢにさせるＣ」の使い分けについて、以下の仮説を提示する。

(3)Ｃの働きかけがなくてもＡがＢの状態を志向していると想定される場合には、「ＡをＢにするＣ」（あるいは「ＣはＡをＢにする」）が適切であり、ＡがＢの状態を志向していないと想定される場合には、「ＡをＢにさせるＣ」（あるいは「ＣはＡをＢにさせる」）が適切である。

４．アンケート分析

(3)の仮説を検証するために、当該表現に関する容認可能性を問うアンケートを実施した。回答者は総数１８３人（内訳：福井工業高等専門学校学生１４３人、福井県立大学学生４０人）であった（下線部は、(a)(b)のどちらがより適切であるかの質問に対する回答数を示している）。

(4) a. 学生を元気にさせる大学
・OK(94) [51%]？(66)[36%]＊(23)[13%]
(4a)>(4b):(66)[36%]－(4a)<(4b):(117)[64%]

b. 学生を元気にする大学
・OK(125)[68%]？(50)[27%]＊(8)[5%]

(5) a .彼は息子を立派にさせた。
・OK(58)[32%]？(51)[28%]＊(73)[40%]
(5a)>(5b):(58)[32%]－(5a)<(5b):(125)[68%]

b. 彼は息子を立派にした。
・OK (110)[60%]？(59)[32%]＊(14)[8%]

(6)a. 彼がペットを病気にさせた。
・OK(104)[57%]？(51)[28%]＊(28)[15%]
(6a)>(6b):(106)[58%]－(6a)<(6b):(77)[42%]

b. 彼がペットを病気にした。
・OK(72)[39%]？(81)[44%]＊(30)[17%]

(7) a. 人を幸福にさせる宝石
・OK(80)[44%]？(66)[36%]＊(37)[20%]
(7a)>(7b):(51)[28%]－(7a)<(7b):(132)[72%]

b. 人を不幸にさせる宝石
・OK(111)[61%]？(52[28%]＊(20)[11%]

(8) a. １５秒で児童を静かにさせる方法
・OK(158)[86%]？(22)[12%]＊(3)[2%]
(8a)>(8b):(144)[79%]－(8a)<(8b):(39)[21%]

b. １５秒で児童を静かにする方法
・OK(62)[34%]？(74)[40%]＊(47)[26%]

(9) a. 相手をやる気にさせる叱り方
・OK(163)[89%]？(18)[10%]＊(2)[1%]
(9a)>(9b): (168)[92%]－(9a)<(9b):(15)[8%]

b. 相手をやる気にする叱り方
・OK (43)[23%]？(86)[47%]＊(54)[30%]

上記のアンケート結果は以下のようにまとめることができる。

(10) ＡがＢの状態を志向していると考えられる場合（(4)(5)(7a)）：
「スル」＞「サセル」（「スル」の方が「サセル」よりも適切と判断される割合が高い）
(11)ＡがＢの状態を志向していないと考えられる場合（(6)(7b)(8)(9)）：
「スル」＜「サセル」（「サセル」の方が「スル」よりも適切と判断される割合が高い）

(10)(11)により(3)の仮説の妥当性はおおむね証明されたと考えられる。

5．補足条件

(3)の仮説は、【C⇒A→B】の事態を「スル文」と「サセル文」のいずれかで記述する際の一応の使い分けの基準を示したものにすぎず、この基準によって、すべての言語事実を説明できるわけではない。例えば、(4a)(5a)では、AはBの状態を志向していると想定されるにもかかわらず、それぞれ、アンケート回答者の51%、32%がOKと判定しているし、(6b)では、AはBの状態を志向していないと想定されるにもかかわらず、アンケート回答者の39%がOKと判定している。

本節では、(3)の反例と思われる言語事実に対して、あらたな条件を加えることで(3)の仮説の妥当性を主張する。

(12) 学生を元気にさせる大学（=(4a)）
(13) 元気のない学生を元気にさせる大学

(12)と(13)を比べると、(12)よりも(13)の方が容認度が高いように感じられる。このことから、AがBの状態を志向していると想定される場合であっても、Aが〈Bでない〉状態であることが明示されている場合（あるいは、文脈から類推される場合）には、「AをBにさせるC」の容認度が高まると考えられる。

(14) a. これは人を幸福にさせる宝石と言われている。
　　b. これは不幸な人を幸福にさせる宝石と言われている。
　　・a>b(28)[15%] a<b(40)[22%] a=b(115)[63%]

(15) 学生を元気にさせる大学（=(4a)）
(16) 学生を元気にさせる音楽

(15)と(16)を比べると、(15)よりも(16)の方が容認度が高いように感じられる。(15)と(16)の違いは、「大学」は「学生」との間に直接的な力動関係が想定できるのに対して、「音楽」は「学生」からのメンタルコンタクトにより関係性を成立させている点である。換言すれば、(15)の「させる」は直接的な働きかけ[学生(A)が元気(B)になるように大学側(C)が自ら働きかけること]を表し、(16)の「させる」は間接的な働きかけ[音楽(C)は学生(A)が元気(B)になるためのきっかけ(手段)にすぎないこと]を表しているという違いである。このことから、AがBの状態を志向していると想定される場合であっても、「させる」が直接的な働きかけを表していないと解釈される場合には、「AをBにさせるC」の容認度が高まると考えられる。働きかけが直接的かどうかは「AをBにさせるC」を「AがCでBになる」（デは道具格）に変換できるかどうかで判断することができる。

(17) ＊学生が大学で元気になる。
(18) 学生が音楽（を聴くこと）で元気になる。

変換不能であれば、働きかけが直接的であり、変換可能であれば、働きかけが間接的であると区別することができる。以下に列挙する「AをBにさせるC」（AはBを志向している）の実例（沖縄タイムスより引用）では「させる」は間接的な働きかけを表していると考えられる。

(19) みんなを夢中にさせるスポーツ(2006/1/27)
　　→みんながスポーツ（を見ること）で夢中になる
(20) 皆を喜ばせ、元気にさせるショー(2004/10/21)
　　→皆がショー（を見ること）で喜び、元気になる

(21) 観客を元気にさせる奇想天外なライブ(2004/4/6)
　　→観客が奇想天外なライブ（に参加すること）で元気になる
(22) 自分を前向きにさせる原動力(2004/1/17)
　　→自分が原動力（を用いること）で前向きになる
(23) みんなを幸せな気持ちにさせる特効薬(2003/8/26)
　　→みんなが特効薬（を使うこと）で幸せな気持ちになる

以上の考察は次のようにまとめることができる。

(24) Cの働きかけがなくてもAがBの状態を志向していると想定される場合には、「AをBにするC」（あるいは「CはAをBにする」）が適切であり、AがBの状態を志向していないと想定される場合には、「AをBにさせるC」（あるいは「CはAをBにさせる」）が適切である。但し、AがBの状態を志向していると想定される場合であっても、Aが〈Bでない〉状態にあると解釈される場合やCからAへの直接的な働きかけが認められない場合には、「AをBにさせるC」（あるいは「CはAをBにさせる」）も容認可能となる。

6．おわりに

本稿では、「学生を元気にさせる大学」という表現を発端として、「AをBにさせるC」と「AをBにするC」の使い分けの基準を探った。しかしながら、実際には、理論と現実データ（頻度）とのずれが見られることも確かである（「幸せな気持ちにする」と「幸せな気持ちにさせる」をインターネットで語彙検索してみると、前者は約804例、後者は約5340例が検出される）。こうした問題も含めて解決すべき問題は山積している。すべて、今後の課題としたい。

主要参考文献

青木伶子 1977「使役－自動詞・他動詞との関わりにおいて－」『成蹊国文』10 成蹊大学日本文学科研究室.
井上和子 1976『変形文法と日本語(下)』大修館書店.
グループ・ジャマシイ 1998 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
黒田成幸 1990 「使役の助動詞の自立性について」『文法と意味の間　国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版.
小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也 2002 『日本語表現・文型事典』朝倉書店.
小泉　保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編 1989 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
定延利之 1991「SASEと間接性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版.
佐藤琢三 2005『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院.
須賀一好・早津恵美子編 1995『動詞の自他』（日本語研究資料集【第1期第8巻】）ひつじ書房.
仁田義雄 2002「日本語の文法カテゴリー」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座　第5巻　文法』明治書院.
早瀬尚子・堀田優子(2005)『認知文法の新展開』（英語学モノグラフシリーズ19）研究社.
早津恵美子 2004「使役表現」尾上圭介編『朝倉日本語講座6　文法Ⅱ』朝倉書店.
村木新次郎 1988「ヴォイス」北原保雄編『講座　日本語と日本語教育　第4巻　日本語の文法・文体(上)』明治書院.
森田良行 1995『日本語の視点～ことばを創る日本人の発想～』創拓社.
山梨正明 1995『認知文法論』ひつじ書房.
鷲尾龍一・三原健一 1997『ヴォイスとアスペクト』研究社.

英語の前置詞の意味拡張の背後にある推論のパターン—文法化、認知語用論的アプローチに基づく分析

山口和之
日本体育大学（kazuyuki@nittai.ac.jp）

本発表の目的は、英語の前置詞の意味変化のパターンを観察することにより、その背後にある聞き手の推論のパターン、制約を明らかにすることにある。

多くの先行研究、特に認知・機能言語学、文法化、場所理論に基づく先行研究に従うと、英語（そして他の言語）の前置詞（もしくはそれに相当する機能語）は、空間的な意味から非空間的な意味へと変化し、多義構造が生じたと想定できる。それでは、なぜこのような意味変化が起こるのであろうか。Bybee et al. (1994: 286) は、意味変化に関して、特に聞き手の推論の重要性を強調する。つまり、特定の意味と共起するニュアンス（含意）が繰り返し生じることにより、その含意が「慣習化」した意味となるわけである。

Bybee et al. (1994: 286) の主張に従い、推論が言語の意味変化において主要な働きをしていると仮定すると、意味変化、ここでは英語の前置詞の意味変化、に特定のパターン（方向性）が見出せれば、それは英語を母語とする人たちの一般的な推論のパターン、もしくは推論を動機づける認知パターンであるといえそうである（もちろん、ここでの主張は、英語前置詞の意味変化に見られる推論パターン以外にも一般的な推論パターンがあることを否定するものではない。）。

先行研究、特に認知言語学で繰り返されてきた主張の1つとしてメタファーがある。つまり、「意味が変化しても元の意味構造は保持される」という主張である（ここでいうメタファーは Heine et al. 1991: 46-47 の定義に従っている。）。

(1) (a) I took a train *for* Tokyo.
　(b) There is a phone call *for* you.
　(c) He fought *for* democracy.
　(d) I went home *for* Christmas.

(1)で示す英語の前置詞 *for* は多義であるにも関わらず、同じ意味構造がすべての *for* の背後にあることが直感的に感じられる。別の言い方をすると、(1a) の空間的な意

味から抽象的な意味へと変化しても、基本的な意味構造は変わらないことが直感的に理解できる。

その一方で、上記の意味変化のパターンとは異なるパターンも多く見られる。

(2) (a) He was irritated still *by* her tone.
(b) She trembled *in* fear.
(c) Bill is shivering *with* cold.
(d) He complimented her *on* her good grades.
(e) She went on trial *for* murder.

(2)の例で注目すべきは、前置詞 *by, in, with, on, for* が、元々の空間的な意味とは異なると想定される、原因・理由の意味を表している点である。原因・理由の意味は、上記以外の英語の前置詞でも表されるし、また Yamaguchi(2004)が示すように、他の多くの言語においても観察される。

Yamaguch (2004)では、68 の言語の意味役割を表す前置詞、後置詞、接辞を観察している。その結果、図 1 で示すように、英語の前置詞に対応する機能語の意味変化に関しては、上記の(1)と(2)にみられる二つの意味変化しかないことを主張している。

図 1 前置詞などの機能語が表す意味役割の全体構造 (Yamaguchi 2004: 149)

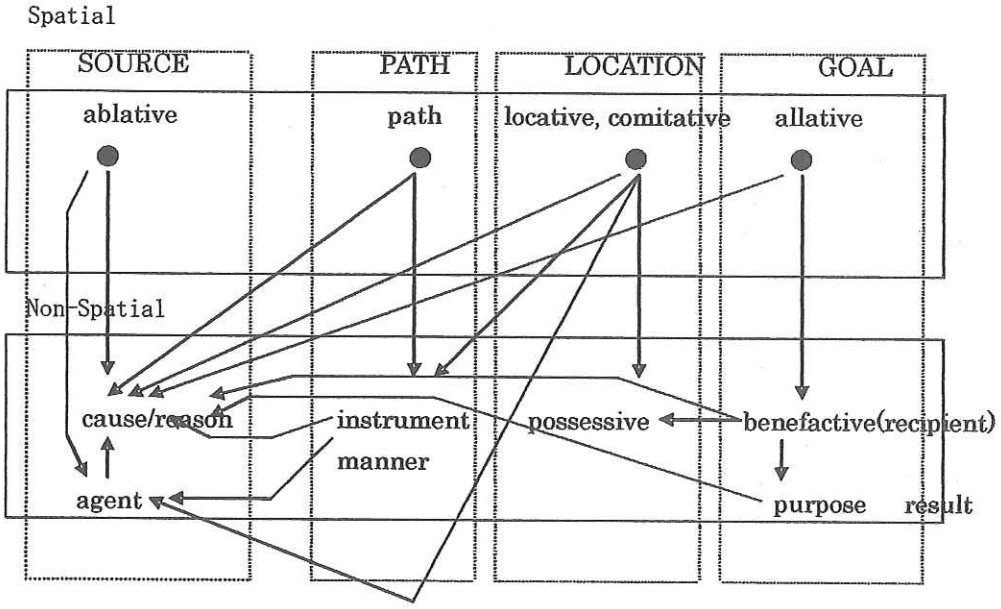


図 1 では、横に広がる長方形の実線で示されている領域は、上が空間・時間的領域、

下が非空間的領域を示し、点線の空間に含まれる意味役割は同一の意味構造を持つと考えられる（Yamaguchi 2004: 149)。また、矢印は時間の経過に伴う意味の変化を示している。Ablative,これは英語の *from* の空間的な意味にあたり、Path は *through*, Locative は *in*, *at* の空間的な意味、Comitative は *with* の随伴の意味、Allative は *to* や *for* の空間的な意味と対応している。この図から、意味の変化には二つのパターンがあることがわかる。1つは点線内での（真下への）意味変化、これは意味が抽象的に変化しても意味構造は変わらないという、メタファーに基づく意味変化を示している。もう一つの意味変化、つまり図1でいうと点線で囲まれた空間内での意味変化ではなく、左へと向かう変化であるが、注目したいのは、意味が左へと変化するが右方向には変化しないという事実である。もう少し具体的に言うと、意味が抽象的に変化していくと、必ず原因・理由の意味へと変化することがわかる。この事実は、上記で示した英語の前置詞の2つの意味変化をうまく説明する。つまり、図1に基づくと、英語を含む自然言語の前置詞や格などの意味変化が生じる場合、元の意味が保持されるか、もし保持されないのならば、必ず原因、理由の意味へと変化していくと主張することができる。

結論であるが、英語の前置詞の意味変化は聞き手の推論によって引き起こされると考えれば、英語の前置詞の意味変化を観察することにより、二つの推論のパターン、制約が働いていることがわかる。1つは、「意味構造の保持」（メタファー）であり、もう一方の制約は「原因・理由の志向性」である。

Selected References

Bybee, Joan L. 1985. *Morphology: A study of the relation between meaning and form.* Amsterdam: Benjamins.

Bybee, Joan L., William Pagliuca, and Rever Perkins. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, aspect, and modality in the language of the world.* Chicago: University of Chicago Press.

Croft, William. 1990. *Typology and universals.* Cambridge: Cambridge University Press.

---. 1991. *Syntactic categories and grammatical relations: The cognitive organization of information.* Chicago: University of Chicago Press.

Dirven, René. 1993. "Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions." *The semantics of prepositions: From mental processing to natural language processing.* Ed. Cornelia Zelinsky-Wibbelt. Berlin: Mouton de Gruyter, 73-98.

---. 1995. "The construal of cause: The case of cause prepositions." *Language and Cognitive Construal of the World.* Ed. J.R.Taylor and R.E.MacLaury Berlin: Mouton de Gruyter,

95-118.

Genetti, Carol. 1986. "The development of subordination from postposition in Bodic languages." *Proceedings of the twelfth annual meeting of the Berkeley Linguistic Society,* 387-400.

Heine, Bernd, and Mechthild Reh. 1984. *Grammaticalization and reanalysis in African languages.* Hamburg: Helmut Buske Verlag.

Heine, Bernd, and Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization.* Cambridge; Cambridge University Press.

Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünnemeyer. 1991. *Grammaticalization: A conceptual framework.* Chicago and London: The University of Chicago Press.

Hopper, Paul. J. and Elizabeth C. Traugott. 1993. *Grammaticalization.* Cambridge: Cambridge University Press.

Matsumoto, Yo. 1988. "From bound grammatical markers to free discourse markers: History of some Japanese connectives." *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society,* 340-351.

Quirk, R., S. Greenbaum, G.Leech, and J. Svartvik. 1972. *A grammar of contemporary English.* London: Longman.

---. 1985. *A Comprehensive grammar of the English language.* London: Longman.

Radden, Gunter. 1985. "Spatial metaphors underlying prepositions of causality." *The ubiquity of metaphor.* Ed. Paprotté, Wolf, and René Dirven. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 177-207.

Stolz, Thomas. 1992. *Sekundäre Flexionsbildung: Eine Polemik zur Zielgerichtetheit im Sprachwandel.* Bochum: Brockmeyer.

---. 1997. "Some instruments are really good companions-some are not. On syncretism and the typology of instruments and comitatives." *Theoretical Linguistics* vol. 23, 12, 113-200.

Svorou, Soteria. 1986. "The experiential basis of the grammar of space: Evidence from the languages of the world." Doctoral dissertation. State Univeristy of New York at Buffalo.

Sweetser, Eve Eliot. 1988. "Grammaticalization and semantic bleaching." *Proceedings of the fourteenth annual meeting of the Berkeley Linguistic Society,* 389-405.

---. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure.* (Cambridge Studies in Linguistics, 54.) Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth C., and Bernd Heine, ed. 1991. *Approach to grammaticalization.* 2 vols. Amsterdam: John Benjamins.

Voegelin, C.F., and F.M.Voegelin. 1978. *Classification and index of the world's languages.* New York. Elsevier.

Yamaguchi, Kazuyuki. 1999a. "How to Explain Polysemy of Case Markers: A Typological Study." Paper Presented at Linguistic Society of America Annual Meeting. Los Angeles: USA.

---. 1999b. "Polysemy of case markers: A typological study." *Proceedings of Mid-America Linguistic Conference 1998.* Lawrence, Kansas: The University of Kansas.

---. 2003. "On the networks of the allative-related functions of languages." *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association. Vol.2.*

---. 2004. "A Typological, Historical, and Functional Study of Adpositions in the Languages of the World." Doctoral dissertation, University of New Mexico.

断りの慣用的表現「せっかくですが」に関する考察

山嵜章裕（京都大学大学院人間・環境学研究科）

横森大輔（京都大学大学院人間・環境学研究科）

1. はじめに

「せっかくですが」「せっかくですけど」「せっかくだけど」等の表現[1]は、日常の言語使用では慣用的に“角がたたないように断る”際の表現としての機能をもつ。先行研究においても、命題を伴って用いられる「せっかく」の一般的な用法（「せっかくP｛が／けど／のに／から／ので｝Q」）に対する、これらの表現の機能上の特異性が指摘されている（渡辺 1980, 小矢野 1997, 2004）。

(1) 「ちょっと行ってみましょう」
やいに合せて友子が誘った。
「折角ですけど明日早いものですから」
（渡辺淳一『花埋み』）

ただし、これらの表現は必ずしも“断り”の機能と直結しているわけではない。

(2) 混んでいたので、せっかくですがビッグサンダーマウンテンは諦めました。
（筆者による作例、以下略）

一方、後続する言語表現がなくこの表現で発話が完結する場合は、ほとんどの全ての文脈で“断り”の発話の力を持つイディオムとなっているようである。

(3) 「いや、面白い娘だ。君を秘書として雇いたいのだ」
「せっかくですが――」
「だめか？」
「はい」
（赤川次郎『女社長に乾杯！』）

通常、省略などにより相対的に言語的要素の少ない表現は情報の不確定性が増し、その表現の意味／機能は曖昧になると考えられるが、(3)のような表現は発話の力が“断り”に限定される。

本研究では、このような表現について「が／けど」類の接続助詞が終助詞的に用いられる際に帯びる語用論的効果に注目し、問題の表現の発話の力を伴う慣用化には、語用論・発話行為論的な要因が強い動機づけとなっているということを主張する。

2. 関連する先行研究

渡辺(1980)、小矢野(1997)は「せっかくだがQ」のような表現を「せっかくPがQ」「せっかくのNPだがQ」などの表現の前件部が省略された「圧縮表現」と呼び、(6)のような圧縮表現には(4)や(5)の表す内容が典型的に含意されていると述べている。

(4) せっかくご提案頂きましたが、辞退します。
(5) せっかくのご提案ですが、辞退します。
(6) せっかくですが、辞退します。　[圧縮表現]

また、圧縮表現で省略されていると考えられる前件Pは相手（聞き手）に関することに限定され（渡辺 1980, 小矢野 2004）、圧縮表現は相手からの依頼や申し出に対する断りの用法がほとんどであると指摘している（小矢野 1997, 2004）。

しかし、(2)が示すように前件が相手（聞き手）というより話し手自身に関わっている場合もあり、このような指摘は過剰な一般化である。また(6)が“断り”の表現として(4)および(5)と同等の発話の力を持つのは後件に「辞退します」という明示的遂行発話文が含まれていることによるのであり、圧縮表現が自明的に担う機能とはいえない。

また、本研究で考察対象とする、後続する

言語表現がなく圧縮表現のみで発話が完結する事例についての言及は、先行研究ではなされていない。

3. 現象の整理

事例の観察として検索エンジン Google で「せっかくですが」をキーワードに Web 検索を行い、後件を伴う例と伴わない例に分けて用例の収集を行った。

(1)や(2)のように「せっかくですが、Q」と後件を伴う用例は、100 例のうち約半数の 49 例が(1)のように“断り”の文脈で用いられていたが、残りの 51 例は(2)のように“断り”以外の文脈で用いられていた。

一方、(3)のように後件に言語表現をしたがえずに「せっかくですが」で発話が完結する用例は 40 例収集したが、その全てが“断り”の文脈で用いられていることがわかった。そのような発話および引用の助詞「と」を受ける動詞を調べたところ、「断る／お断りする／辞退する」など依頼や申し出を“断る”ことを含意する動詞がほとんどであり、中には「丁重に」という修飾語を伴うものもあった。これは、この表現が特定の発話の力を持つイディオムとして慣用化しているということを示唆する。

(7) いつものハヤテなら、「お誘いありがとうございます。せっかくですが…」と丁重に断るのだが
(http://kaoru.daa.jp/damebun/atatakaizatto.html)

形式からは自明ではない“断り”という発話の力が、どのようにこの形式と慣習的に結びついたのか、という点が本論の最大の焦点である。

そこで、問題を以下の側面から捉え説明的解決を試みる。

(i) 「せっかく」が本来的に持つ意味と、発話の際に担いうる機能を検討する。

(ii)「せっかくですが Q」(後件あり) と「せっかくですが」(後件なし) という形式のペアを比較した場合、構成論的にみると助詞「が」の用法の差異、すなわち接続助詞的用法と終助詞的用法という差異が認められる。これを踏まえ、「が／けど」の終助詞的用法の持つ語用論的効果が後者のイディオム性にどのように関連しているか、ということを検討する。

(iii) 申し出や依頼を“断る”という行為が、語用論的にどのような意味を持つのか、ということを検討する。

4. 副詞「せっかく」

「せっかく」は話し手の価値評価を表す副詞であり (渡辺 1980)、「せっかく P {が／けど／のに／から／ので} Q」という表現の前件 P の意味として、渡辺(*ibid.*)は「話し手が“価値あり”と認める事態に限られる」と述べている。

また、「せっかく」と {が／けど} 等逆接の接続助詞の共起による構文が担う意味について、渡辺(1980)と小矢野(1997)は「前件 P からの帰結として期待されるような事態が実現せず、前件 P の価値が消滅する」と説明している。

(8) せっかく駅まで行った {が／けど}、切符は売り切れだった。
“価値あり”と認める事態＝前件 P：駅まで行ったこと
“前件からの帰結として期待されるが、実現しない事態”＝後件 Q：切符が売り切れていたこと

問題の表現「せっかくですが」(後件なし)は、この前件および後件に相当する表現を持たず、情報の量の観点からは渡辺と小矢野の述べる構文的意味のみが形式に残ったものと捉えられる。

また Google で収集した「せっかくですが、Q」と後件を伴う用例を観察すると、「せっかく」が意味的に修飾する (話し手が価値ありと認める) 事態は、いわゆる対話の状況ではすべての例で直前の相手の発話内容など相手 (聞き手) の行為に関連するものであった。この中には、(9)のように“断り”ではない例も観察された。

(9) (Web ブラウザの操作法に関する他人の書き込みに後続して：) すみません、せっかくですが、意味がわからないのです。
(http://sb.xrea.com/archive/index.php/t-2377.html)

逆に、(6)のように話し手が価値ありと認める事態が相手ではなく話し手自身に関することである事例は、いずれも対話というより自己の経験を吐露するような文脈であった。

以上より、「せっかくですが」のように明示的な前件命題を伴わない表現でも、この形式の持つ構文的意味と発話の文脈によりそれが相手の行為に関する発話であるということは適切に理解されるということがいえる。これは、関連性の公理などグライスの会話の格率からも自然に予測できる。

5.「が／けど」類の終助詞的用法

「が／けど」類の接続助詞には、(10a)のように発話の末尾に用いる終助詞的用法があることが多くの研究で指摘されている（森田 1980, 水谷 2001　他)。

(10a) ずいぶん前にビール注文したんだけど。

(10a)のような文は、どのような発話の力を持つかは発話参与者との関係で様々に変わりうるが、いずれも言語的には明示化されない何らかの行為を暗示していることが読み取れる。

(10b) (客がウェイターに対して)
「ずいぶん前にビール注文したんだけど。」
と抗議した／怒った／非難した／呆れた
／??笑った。

(10c) (一緒に来店した友人に対して)
「ずいぶん前にビール注文したんだけど。」
と???抗議した／?怒った／???非難した
／呆れた／笑った。

横森(2005)は接続助詞「けど」の終助詞的用法には、(i)何らかの行為が後続することを示唆し、(ii)その行為は前件で提示される事態の内容とは対立的である、つまり、(iii)発話者が本当に言いたい（したい）ことと対立的な内容を言語化することで前景化し、真の発話意図を背景化する という効果があると述べている。

このような発話の力に関連する効果をもたらす拡張的用法は、「が／けど」類の接続助詞に限る現象ではない。山梨(2000)は、接続表現の慣用化は図・地の認知に基づく命題内容の背景化が動機付けるものと捉え、一般的な現象であると述べている。

(11a) だったら、すれば！
(11b) ≒(そうしたいん)だったら、すれば(いい)！
(山梨 2000:81)

以上より、「せっかくですが」（後件なし）という発話は、「が／けど」の終助詞的用法に動機付けられ次のような意味論的含意／語用論的効果を担うと考えられる。

（意味論的含意）：相手の発言／行為は価値のあるものであるが、その価値は消滅してしまう。
（語用論的効果）：どのようにその価値が消滅するかは背景化する→発話意図を背景化する。

6.“断る”行為とポライトネス

最後に、“断る”という行為が語用論的にどのような意味を持つかということについて考える。

Brown and Levinson(1987)は、面目（face）という概念を用いて発話とポライトネスの関係を論じた。この観点からみると、相手の依頼や申し出を“断る”行為は相手の積極的な面目を脅かす行為（Face Threatening Acts、以下 FTA）であり、FTA の行使が不可避である場合は何らかの方策を講じることが当然求められる。

この方策は具体的には 習慣的な間接表現を用いる、ヘッジ表現を用いる、ほのめかす、比喩を用いる、曖昧にする、等の手段が考えられる。本来的には後件を伴うはずの接続助詞の終助詞的用法には、発話の意図が背景化するという効果があると先に述べたが、発話の文脈によってはこれが FTA 行使の際に略的に用いられると考えられる。Leech(1977)は発話意図の不確定性とポライトネスとの強い関連を示唆している。

「せっかくですが」という表現が対話で用いられる場合、いずれもそれは話し手が“価値あり”と認める相手の行為に関わることである。以上のことを踏まえると、この表現が

後件なしで用いられる場合、それは戦略的に発話意図を背景化していることになり、後続する行為が FTA であることが自然に推論されると考えられる。

このように、話し手にとって価値がありつつもその価値を消滅させることが話し手にとって不可避であり、それが相手にとっての強い FTA になるような一連の行為とは何か。おそらく、日常におけるその最も典型が、「相手の依頼や申し出を断る」という行為なのではないだろうか。そして、後件を伴わない「せっかくですが」という表現を用いる、すなわち“断り”の発話内効力を持つ言語表現を明示化しないことで、この行為による FTA の度合いを低くしているのである[2]。

相手からの受益的行為を評価しつつ(「せっかく」による意味的貢献)、それを受け入れることができないことを非明示的に表明する(「が／けど」の終助詞的用法による意味的貢献)。これが慣用化し、形式から一見予測できないようなポライトネスの機能が定着したのが、“角がたたないように断る”表現「せっかくですが」である、と考えられる。

7．まとめ（理論的含意）

接続表現の慣用化に語用論的要因が強い動機付けとなっている一例を分析した。これは、「が／けど」に限らずいわゆる接続助詞一般が終助詞的に用いられる際に、直接的ではないにせよ、ある種の語用論的効果が付随するということを示唆する。接続助詞などの機能的な文法カテゴリの記述には、いわゆる意味論的観点のみならず語用論・発話行為論的観点から広く捉える必要があるという横森(2005)の主張を支持するものである。

＜注釈＞

1. 本研究は、現段階では議論の粒度から「が」と「けど」はいわゆるバリアントとして捉えるが、究極的には両者の差異も当然記述の対象に含めるべきであると考える。

2. これは、Google 検索で収集したデータにおける次のような観察からも裏づけられる：後件を伴う「せっかくですが」の用例にも“断り”の文脈で用いられている例は見られたが（例：「せっかくですがお断りします」)、後件を伴わない「せっかくですが」を引用する述部にみられた「丁重に（断った)」「やんわりと（断った)」というような修飾語句が、後件を伴う例ではみられなかった。後件を伴わない表現が、相対的にポライトネスの度合いが高いことを示唆する。

＜参考文献＞

Brown, P. and S.C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Use.* Cambridge University Press.

Leech, G.N. 1977. *Language and tact.* Linguistic Agency, University of Trier

小矢野哲夫. 1997.「副詞『せっかく』の用法」,『日本語・日本文化研究』第7号. 大阪外国語大学日本語講座

小矢野哲夫. 2004.「『せっかく』と話し手の心理」,『月刊言語』第33巻第11号, pp.110-111. 大修館書店

水谷信子. 2001.『続日英比較 話しことばの文法』. くろしお出版

宮島達夫・仁田義雄(編). 1995.『日本語類義表現の文法(下)』, くろしお出版

森田良行. 1980.『基礎日本語2』. 角川書店

山梨正明. 2000.『認知言語学原理』. くろしお出版

横森大輔. 2004.「『けど』の終助詞的用法について：聞き手に対する効果の観点から」,日本語用論学会発表

横森大輔. 2005.「逆接表現の拡張用法とその語用論的効果に関する構文文法的考察:「ケド」の終助詞的用法を例に」, 日本語用論学会発表

渡辺　実. 1980.「見越しの評価『せっかく』をめぐって—国語学から言語学へ—」,『月刊言語』第9巻第2号, pp.32-40. 大修館書店

発表者（代表：山嵜）の E-mail アドレス：
a-key-hero@nifty.com

対話における日本語名詞句の連鎖パターンについての認知的考察

吉田悦子
三重大学人文学部
tantan@human.mie-u.ac.jp

1. はじめに

日本語の自然発話において名詞句が連続して生起するパターンは普通に観察される現象である。こうした名詞句の連鎖はいったん代名詞（ゼロ代名詞）化されても再び名詞句が出現して談話の話題として定着するという特徴があり、従来の連辞的な照応関係の法則からは予測することができない。本稿ではこうした日本語名詞句に焦点をあてて、計算言語学の談話理解モデルを援用し、その意味機能を談話構造の階層性と結びつけて説明することを試みる。そして名詞句の機能を背景で支える発話状況と談話記憶に目を向けて、自然発話において話題の継続性を担う指示表現はゼロ代名詞よりはむしろ名詞句が中心であり、その連鎖が談話の整合性と有機的に結びついていることを指摘する。

2. 先行研究

指示表現と談話構造の関係に注目した研究は、近年着実に発展してきている。とりわけ、談話における指示表現の分布と選択に関する研究(Prince 1981, Gundel et al. 1993)や、指示を情報構造、話題の継続性からとらえようとした研究（Givón 1983; Chafe 1987）が後続の研究に与えた影響は大きいが、日英語の指示表現の形式的な差が意味的にはどのように対応するのかについて、その動機付けや体系的な説明は未だ十分解明されているとはいえない。認知意味論の視点から日本語の名詞句が談話において果たす役割に焦点を当てた坂原(2000) は、日本語の裸名詞と英語の定冠詞句、また日英語の指示形容詞句の意味機能における類似性を主張している。また Obana (2003)では、日本語の談話において、話題の継続性に貢献しているのはゼロ代名詞ではなく名詞句であることに注目し、従来の指示をめぐる見解への見直しを議論している。本稿では坂原（2000）の解釈をふまえ、Obana (2003)における主張である名詞句と話題の継続性という点に焦点を当てて、対話的談話においてもこの考察が指示の一般的現象としてあてはまるものかどうかについて検討を加えたい。

3. 方法

今回考察の対象とした日本語のデータは、収録の条件や環境をほぼ同一にして作成された「日本語名称なし地図課題対話コーパス」8 対話分のうち2対話分である。日本語データの概要については、吉田(2002)を参照。分析には、センタリングモデルと Walker(1998, 2000)の主唱する統合型の談話モデルであるキャッシュモデルを援用する。まず、日本語の照応表現をゼロ代名詞とそれ以外のタイプ（裸名詞、指示形容詞句、指示代名詞）に分け、局所焦点のつながりを予測するために話題の中心である Cb(backward looking center)の Cf(forward looking center)ランキングの序列および遷移状態パターンにおける指示表現の分布を調べる。[1]　次に談話構造と指示表現がどのように関連しあっているのかについて、キャッシュモデルの概念のうち、キャッシュ('cache'「短期談話記憶」)とプッシュ('push'「割り込み」)、リターンポップ('return pop'「復帰ポップ」)の3つを導入し、談話単位をこえて談話要素が指示されるプロセスについて考察する。

4. 結果と考察

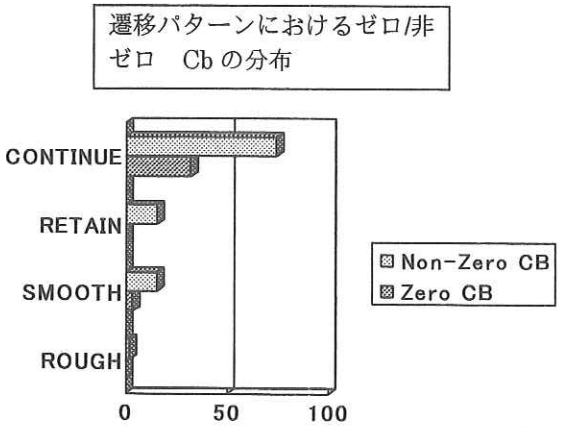
対話的談話において、名詞句の連鎖は話題となる要素の導入、定着、そして次の話題となる要

素への移行という過程を経て形成されていくが、そのパターンは対話者同士の知識や相互作用の方法に大きく左右されることがわかった。たとえば、最初に導入される名詞句は確定した形式というよりは、とりあえず情報提供者が認知できる目標物としての名称が与えられているにすぎない。(< >は発話単位の境界を示す)

G:<さばくみたいなすなちみたいなうえを><まんなかまで><ちょくせんでとおってもらえますか>

「さばくみたいなすなちみたいな」という不完全名詞句は直ちに情報追随者によって裸名詞「さばく」として同定され、両者はこの裸名詞を後続の談話で継続して使用することになる。こうして導入された要素は定着していく過程において、話し手と聞き手の短期記憶に保管される。とりわけ、裸名詞は一時的に固有名詞のように利用されているため、複数の談話単位間においても容易に同定することができると考えられる。[2]

このことから、日本語における指示表現の連鎖パターンの興味深い特徴は、ゼロ代名詞よりはむしろ名詞句（裸名詞やソ系の指示詞を含む）が談話単位を超えて談話の整合性に貢献していると仮定できる。そこで、話題の中心である Cb のうちゼロ代名詞とそれ以外の名詞句タイプのどちらがセンタリングモデルのどの遷移状態パターンに頻出するかを観察することで、指示表現のタイプと整合性とのかかわりについての傾向を探ってみる。[3]（データ番号：da と db）



この結果から、CONTINUE の遷移はゼロ代名詞の形式（Zero Cb）以外の形式（Non-Zero Cb）で実現された Cb が優勢であり、主に裸名詞句と指示詞によって実現されている。もちろん、ゼロ代名詞も CONTINUE の遷移に生起しており、整合性に貢献していることは間違いないが、その連鎖は一時的であり、特定の状況に限られる傾向がある。

10F: たきがありますかさいしょとおってきた	NULL
10G: や[Ø ハ]ないですね	CON　(ゼロ主題)
10F: たきよりもさらににしがわにいくってことですか	CON
10G: たきよりもさらにやいやいやひがしがわでとまっています	CON
10F: あ　ひがしがわでとまっています	
10G: んあはいわかった	
10F: だいたいきたにありますたきって	CON
10G: はい[Ø ハ]きたにありますだいたい	CON　(ゼロ主題)

ここでは、新しい要素の出現とは関係なく、名詞句が話題の中心を担っていることがわかる。そして、Cb である「たき」は存在への問いに答える文脈ではゼロ代名詞（ゼロ主題）が、「たき」の場所について説明する文脈では裸名詞が用いられている。[4] 話題になっている談話要素は同じでも文脈に応じて表現が使い分けられている可能性がある。

さらに、名詞句は談話単位内で継続して使用され、話題の中心を直接担うだけでなく、談話単位を越える連鎖によって話題を引き継ぐことも可能である。一方、ゼロ代名詞は極めて限られた場面での話題の共有しか許さず、しかも中断しやすく、談話単位内でしか生起しない傾向がある。

F:+えその<350>*えと<330>みなみにさがったてん<370>*をまっすぐきたにせんのばしていくと
　たきは
G:　　*はは;あいづち
G:　　*うん
F:ひがしにありますかにしにありますか

ここでは「たき」という談話要素が話題の中心となっており、このあと、話題は別の談話要素へと移行する。しかし、２つの談話単位から成るプッシュ（割り込み）の後で再び話題は「たき」へと戻ってくる。

F:*たきは<250>ひがしにあり*ますか
G:　　*たきは
F:にしにあり<200>ますか
G: [ø（たきは）]ひがしにあります

複数の談話要素が競合する場合、ゼロ代名詞よりも名詞句で同定される傾向があり、談話単位をこえても処理に負担はかからない。センタリングでは談話単位をこえて生起する談話要素は初出と判断され、整合性が一見損なわれるという分析がなされてしまうが、キャッシュモデルを援用すればこの点は解消できる。しかし、キャッシュメモリーの許容量をこえる場合も出てくることから、名詞句の連鎖を可能にしているのは記憶の容量だけではなく、記憶される要素の顕現性(salience)の程度が関係していると考えられる。つまり、顕現性の尺度である Cf ランキングにおいてより高いランクの要素は短期記憶の中にとりこまれやすく、発話状況に応じていつでも取り出し可能になる。さらに指示形容詞句（ソノ名詞句）にも割り込みによっていったんそらされた注意を再び向けさせる働きがあり、要素を同定するだけではなく、話の流れを変化させる役割がある（坂原 2000)。

5. まとめ

談話における話題の継続を担う名詞句の連鎖パターンについて考察した。とくに裸名詞について、ゼロ代名詞との生起パターンの比較に焦点を当て、センタリングモデルを援用することで名詞句を中心とした連鎖パターンが談話の整合性に貢献していることも明らかになった。おそらく、このことは談話の話題となる要素は話し手聞き手双方にとって最もアクセスしやすい状態で維持されていることを反映しており、最小限の労力で指示対象をとらえられるような認知的基盤をもつ言語理解のしくみを具体的に説明することが求められているといえる。そして指示表現の分布状況から、談話における名詞句は遷移パターンのタイプによって異なる役割をもっていることが予測されるが詳細な検討が必要である。さらに指示詞の役割についても今後の課題としたい。

[1] センター（center of attention: 話題の中心）とは Givón (1983)の 'topic' と同様の概念であるが、センタリング理論では３つの連続した発話における３種類のセンターの関係に注目し、談話の整合性に結びつけて説明を試みる談話モデルを提唱する。センタリング理論のルールの解釈で重要なもののひとつは、「１つ前の発話における談話要素の中で、Cf ランキングとよばれる文法上の序列が高い要素ほど現在の発話の話題の中心(Cb)になりやすい傾向がある」というものである。日本語では通常、Cb が主題（省略を含む）の位置にある場合が最もランキングが高いとされている。センタリング理論の詳細については、Grosz et al.(1995)、Walker et al.(1998)を参照。

[2] この点についての考察は Yoshida (2005) を参照。

[3] 遷移状態（transition state）とは Cb の発話ごとの更新のされかたと談話における整合性とのかかわりを示す標示であり、そのパターンは４種類ある。その４種類のパターンは整合性の度合に応じて、整合性の高いとされる順に Continue > Retain > Smooth-Shift > Rough- Shift のように序列化される。また、直前の発話内に Cb となる談話要素をもたない場合には No Cb (NULL) として区別する。

[4] ゼロ代名詞の生起する構文形式を調べると、存在文の一種である所在文として西山(2003)によって分類された構文をとる場合がほとんどである。

参考文献

Chafe, W (1987). 'Cognitive Constraints on Information Flow'. In R.S.Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam: Benjamins. 21-51.

Givon, T. (1983). 'Topic continuity in discourse: An introduction', in Givon and Ute Language Program, T. (ed) *Topic Continuity in Discouse: A Quantitative Cross-Language Study*. London: John Benjamins. 1-41.

Grosz, Barbara, Aravind Joshi, and Scott Weinstein. (1995) Centering: A framework for modelling the local coherence of discourse. *Computational Linguistics*, 21/2, 203-225.

Gundel, J. K., N. Hedberg and R. Zacharski (1993) "Cognitive status and the form of referring expressions in discourse." *Language*, 69, 2: 274-307.

石崎雅人・伝康晴(2001)『談話と対話』東京：東京大学出版会

西山佑司(2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』東京：ひつじ書房

Obana, Yasuko (2003) "Anaphoric choices in Japanese fictional novels: The discourse arrangement of noun phrases, zero and third person pronouns" *Text* 23(3): 405-443.

Prince, E. (1981) 'Toward a taxonomy of given-new information' In P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. 223-56.

坂原茂（2000）「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房 213-249.

田窪行則, 西山佑司, 三藤博, 亀山恵, 片桐恭弘 (1999) 『談話と文脈』(3 章を参照) 東京：岩波書店

Walker, M., M. Iida and S. Cote (1994) "Japanese Discourse and the Process of Centering." *Computational linguistics* 20: 193-231.

Walker M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.) (1998) *Centering Theory in Discourse*. Oxford: Clarendon Press.

Walker, M. A. (1998) "Centering, Anaphora Resolution, and Discourse Structure." In Walker M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.).401-436.

Walker, M.A. (2000) 'Toward a Model of the Interaction of Centering with Global Discourse Structure' Verbum.

吉田悦子(2002)「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成：報告」『人文論叢』第 19 号. 241-249.

Yoshida (2005) 'Discourse Segments and Japanese Referring Expressions: Are These Bare Nouns or Proper Names?' *Proceedings of PACLIC19, the 19th Asia-Pacific Conference on Language, Information, and Computation.* (In CD-ROM)

入 会 案 内

［入会手続きについて］
以下の手続き（１）と（２）をお済ませください。

●手続き（１）

電子メール（または事務局宛の郵便）にて以下の「記入の項目」をご記入の上、

psj-hayashi at kcc dot zaq dot ne dot jp
（桃山学院大学・林　宅男宛）
（スパムメール防止のためにこのような表記となっております。）

へお送り下さい。なお、その際、「会費を払い込んだ」（あるいは「払い込む予定」）かどうかを付け加えていただければ幸いです。メールをいただければ、事務局よりreplyをいたします。なお、今後の会員の住所・所属変更は、必ず事務局宛にメールか郵便でご連絡下さい（あるいは、学会時にお申し出いただいても結構です）。

・記入の項目
１．名前（ふりがな）
２．郵便番号及び住所
３．電話番号／Fax番号
４．所属
５．教員か学生か団体かの別（教員、大学院生、学部生、非常勤講師、一般、団体など）
６．E-mail address

●手続き（２）

年会費（一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円［平成18年３月21日運営委員会決定］）を郵便局に備え付けの郵便振り込み用紙で、以下の口座にお振り込み下さい。

00900-3-130378　　口座名：日本語用論学会

（＊こちらに届く郵便振り込み用紙が、字がかすれて読めない場合がありますので、郵便振り込み用紙のみでの新入会員申し込みではなく、必ず上記手続き（１）と（２）をお済ませくださるようお願い申し上げます。）

＜個人情報の取り扱いに関する御連絡のお願い＞

本学会では、この度、学会の更なる発展と会員相互の連絡交流の促進を計ることを念頭に、会員名簿を作成することになりました。名簿の発行に付きましては、近年、特に個人情報保護の観点から、様々な問題が指摘されていることは御承知の通りです。そこで、本学会でも、これらの情報につきましては、その適正な取扱いの確保と個人の権利や利益の侵害の防止を図る為、その公表には慎重な取り扱いをさせていただく所存であります。つきましては、新しく本学会に入会希望をお届けの際には、

1．氏名
2．住所
3．所属（身分＜教員、学生、非常勤等＞）
4．電話番号
5．ファックス番号
6．メールアドレス

のうち、項目別に、会員名簿上に掲載を不可とするものがありましたら（また代替の情報がある場合はその内容を）事務局にメールでご連絡いただきますようお願いします。

＝記＝

『語用論研究』は毎年12月に刊行、Newsletterは毎年４月末と10月末にお送りしています。会員になられると、『語用論研究』、Newsletter、大会プログラムなどをお送りいたします。なお、2005年度より新たに、毎年の大会で発表された論文をとりまとめた『プロシーディングズ』を大会後に発行することになりました。

日本語用論学会規約

第１章　総則

第１条　本会は「日本語用論学会」（The Pragmatics Society of Japan）と称する。

第２条　本会は語用論ならびに関連諸分野の研究に寄与することを目的とする。

第３条　本会は次の事業を行う。

１．大会その他の研究集会。

２．機関誌の発行。

３．その他必要な事業。

第４条　本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第５条　運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第２章　会員

第６条　本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の３種類とする。

第７条　会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人及び団体とする。

第８条　会員は諸種の会合及び事業の通知を受け、事業に参加することができる。また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第３章　役員

第９条　本会に次の役員を置く。任期は２年とし、再選を妨げない。

会　　長　　１名

副　会　長　　１名

事務局長　　１名

運営委員　　若干名

会計監査委員　　１名

また、顧問を置くことがある。

第10条　運営委員会は、会長、副会長、事務局長および運営委員から構成される。

第11条　会長、副会長、および事務局長は運営委員会で選出され、運営委員は会員より選出される。

第12条　運営委員会は次の任務を遂行する。

１．機関誌および会報誌等の編集・刊行にかかわる事項の決定。

２．大会および研究集会等にかかわる事項の決定。

３．予算案および収支決算案の作成。

4．その他運営委員会が必要と認めた事項。

第13条　運営委員会の中に次の委員会を置く。委員は運営委員会の議を経て会長が委嘱し、兼任することができる。各委員会は会務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。

1．編集委員会

2．大会運営委員会

3．事業委員会

4．広報委員会

第14条　各委員会の業務を調整するために代表連絡会議を開く。代表連絡会議は、会長、副会長、事務局長、編集委員長、大会運営委員長、事業委員長、広報委員長から構成される。

第15条　本会の会則は、会員総会で承認を得るものとする。

第16条　会員の中から会計監査委員を1名選出する。任期は2年とし、1期に限る。

第4章　会議

第17条　定例会員総会は、年1回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第18条　定例運営委員会は、必要に応じて、年1回以上招集される。

第5章　会計

第19条　本会の運営経費は、会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第20条　事務局は、予算案および収支決算書を作成し、運営委員会の議を経て、会員総会で承認を得るものとする。ただし、収支決算書は会計監査委員の監査を受けなければならない。)

第21条　本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章　事務局

第22条　事務局を事務局長もしくは運営委委員の所属する大学に置く。

第7章　事務局および委員会に関する細則

1．事務局は、事務局長、事務局長補佐、会計、会計補佐から構成され、対外折衝、運営委員会・総会の企画・運営、会員名簿の管理、会費の徴収、会計、機関誌・大会予稿集等の販売、会員への連絡など、学会の運営にかかわる諸々の業務を担当する。事務局は、業務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。

2．編集委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、機関誌『語用論研究』の編集と刊行に関わる業務を担当する。
3．大会運営委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、大会企画と大会実行の二つの業務を担当する。大会企画担当の委員は、ワークショップ、研究発表、シンポジウム、講演等、大会全般を企画・提案し、大会予稿集Program and Abstractsを編集・刊行する。大会実行担当の委員は、会長から委嘱された大会開催校委員と協力して、大会の実行にあたる。
4．事業委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、講演会、セミナー等の企画、運営、実行にあたる。
5．広報委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、会報誌・Newsletter、ホームページ等の編集と発行に関わる業務を担当する。

第8章　会長選出に関する細則

1．この細則は、会則第9条と第11条のうち、会長の選出方法と任期について定める。
2．会長は、会員の中から、就任時に65歳以下のものを運営委員の投票によって選出する。投票は郵送による無記名とする。
3．投票の結果、過半数の得票を得た者を会長とする。過半数を得た者がない場合、得票上位者2名についての決選投票を行う。尚、得票数が同数の場合は、最年長者を会長とする。
4．前条によって決定された会長は、改選の前年度の定例総会において承認を得るものとする。
5．会長の任期は2年とし、2期までとする。
6．会長選挙管理委員は、現会長が運営委員会の中から必要数を選出する。

附則：この細則は、平成17年10月5日から実施する。

平成10年12月5日（制定）
平成15年12月6日（改正）
平成17年10月5日（改正）

『大会発表論文集』(Proceedings) 執筆規定

＜第9回大会で発表された方へ＞

日本語用論学会では、2005 年度より新たに、毎年の大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、『プロシーディングズ』を発行することになりました。つきましては、今年度の大会の**「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」**で発表されました皆様には、以下の要領で原稿を発表者全員ご提出戴きますよう御願いします。

1. 執筆規定

1．用紙・枚数：　A4 用紙、横書き。「研究発表」は 8 ページ以内、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」は 4 ページ以内（注、参考文献を含む）。字数は自由。

2．書式：

a．余白は上下 30mm、左右 25mm とする。1 行文字数、行数、段組などは自由（ただし、文字のサイズは極端に小さくしないこと）。

b．原稿の 1 ページ目には、タイトル、氏名、所属(E-mail アドレスは任意)を記し、そのあと 2 行開けて要旨、本文を続ける。

c．「はじめに」または「序論」の節は 0．からではなく、1．から始めること。『語用論研究』の執筆要領と同様。

d．例文の前後は 1 行、各節の前は 1 行開ける。

e．注を付ける場合は、巻末とし、本文と参考文献の間にまとめて入れる。

f．参考文献のフォーマットは『語用論研究』の執筆要領に従うこと（本学会のホームページ http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/　参照）。

3．要旨：

a．日本語または英語の要旨（10 行以内）と【キーワード】：（5 個以内）を添えること。

b．要旨の位置は＜要旨＞ないし＜Abstract＞をページの左上に記し、原稿の 1 ページ目には、タイトル・氏名・所属と要旨、本文の間にそれぞれ上下 2 行ずつアケで記すこと。

＜見分けのイメージ（１ページ目）＞

タイトル○○○

氏名○○

所属○○

＜要旨＞

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【キーワード】：１、　２、　３、

本文

2. その他の注意事項

a．執筆者は、前年度の大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」での報告者に限る。

b．内容は、大会発表に沿ったものとする（但し、必要な修正を施すこと）。

c．使用言語は原則として日本語または英語とする。

d．原稿はそのまま写真印刷するので、鮮明に仕上がるよう文字の大きさの他、濃さにも注意すること。ページ番号は原稿の裏面に鉛筆で記すこと。

e．『プロシーディングズ』に掲載した内容は、さらに発展させて、『語用論研究』に投稿することができる。その場合は、必ず十分な加筆・修正を施すこと。

f．別紙(A4)に次の事項を記入して提出すること：

①「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」のいずれであるか。

②発表論文タイトルと発表者名（日本語）　氏名（ふりがな）

③発表論文タイトルの英語訳と発表者名のローマ字表記。

④連絡先：E-mail アドレス

3. 原稿締切: 2007年3月31日（厳守）

4. 提出方法: （**原稿＋別紙**）ワードによる原稿と別紙のファイルを入れたフロッピーディスクと、プリントアウトしたハードコピー（2部）を下記の住所に送付する。

5. 送付先: 〒573-0195 大阪府枚方市穂谷１－１０－１
関西外国語大学　余維研究室内、TEL(0720)58-0021（代表）
（＜「第9回日本語用論学会大会発表論文集」原稿在中＞と封筒の表に朱書きのこと）

6. 提出原稿: 原稿とフロッピーディスクは原則として返却しない。

編集後記

『日本語用論学会　第8回大会発表論文集』(創刊号)をお届けします。日本語用論学会では、2005年度より、新たに毎年大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、論文集を発行することになりました。今回の論文集では、研究発表20件、ワークショップ発表12件の、合計32件で、第8回大会でのほとんどの発表者が投稿して下さいました。この論文集の発行によって、大会で発表された研究が多くの人に読まれ、語用論研究がますます発展することを願っています。第9回大会後は第2号を発行する予定ですので、どうぞご期待ください。

(編集担当:事業委員・余 維)

日本語用論学会　第8回大会発表論文集　創刊号(2005)
(Proceedings of the 8th Conference of the Pragmatics Society of Japan)

発　行　日　2006年11月3日

代　表　者　澤田治美

編集・発行　日本語用論学会(The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男　研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202

印　　刷　(株)田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
TEL：075-343-0006　FAX：075-341-4476

PSJ

ⓒ日本語用論学会

編集後記

『日本語用論学会　第8回大会発表論文集』(創刊号)をお届けします。日本語用論学会では、2005年度より、新たに毎年大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、論文集を発行することになりました。今回の論文集では、研究発表20件、ワークショップ発表12件の、合計32件で、第8回大会でのほとんどの発表者が投稿して下さいました。この論文集の発行によって、大会で発表された研究が多くの人に読まれ、語用論研究がますます発展することを願っています。第9回大会後は第2号を発行する予定ですので、どうぞご期待ください。

(編集担当:事業委員・余 維)

日本語用論学会　第8回大会発表論文集　創刊号(2005)
(Proceedings of the 8th Conference of the Pragmatics Society of Japan)

発　行　日　2006年11月3日

代　表　者　澤田治美

編集・発行　日本語用論学会(The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男　研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202

印　　刷　(株)田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
TEL：075-343-0006　FAX：075-341-4476

PSJ

©日本語用論学会